沮喪の意味に見てもよい。○十二行 āgama は佛教以外の學派の言ひ傳へ、傳へた書、小乘の教、經などを指すことが瑜伽論で判る。○十三行 saṅvati-、十四行 mahāyāna は、-vṛti-, -nain の誤植。○十五行 śatasāhasrikā'dy-aneka-sūtro'padeśāt をシナ譯は無量經中有百十偈云々と譯したことになるが、Śatasāhasrikā は百千頌般若卽ち十萬頌般若といふ經名で、シナ譯が百千偈と之を譯したのであらう。大般若初分四百卷の經名である。論は、般若が空卽ち法空を說く所を、大乘の特質といふか、中心思想となすとなして、大乘最上のものと見る。

○第十三頌、シナ譯の釋に神通とあつて、prabhāva の譯に當るが、prabhāva は威力と譯す方が普通か。威力は威神力で、神通、神通妙用である。無論、衆生濟度の妙用である。○釋文の最後に iti があるのは、これは頌釋二つが一應問題を終つたのを示す如くである。後にあるのもこれで解せられる如くである。

○第十四頌、六行、pataṭi mahato 'rthādgate iti は、釋に、十二行、pataṭi mahato, 'rthad (iti) とあるから、gata は重大な意味あるものでない。大目的から去つて墮する、と譯したが、gata は時には rūpagata の如く、單なる rūpa と殆ど同一意味で、無いのと異ならないこともあるし、gṛhagata の如く、家に在る、とも、家とも譯されることもある如く、複合詞の後部に在ると、意味が無い如くにも見られる字である。ここでは複合詞をなすのではないが、奪格の意味を弛める如きものか、又は奪格の中に含まれるものか。○此頌は、次の二頌と共に、同詩調で、複雜であるから、シナ譯は二頌に譯し、而も二つに分離せしめた。○agotra は無種性で、此論は猶之を認める。○asanmitra(非法朋、非善友)は惡友である。○燒然の然は現今用ふる燃である。

○第十五頌、○隱密は gahana を譯した。gahana は瑜伽論にも隱密と稠林との譯がある。もと深い厚いなどの意味であるから、透入理解し難い、脫出し難いなどから、名詞として奧深い處、祕密處など、又、一般に、隱密、密林などをいひ、祕密と煩惱とをいふに至つたのであらう。シナ譯の險處は初めの意味を、後の意味から見て譯した如きもの。○隨行は anugama とあるから、それの直譯。隨ひ行くは色々の意味になる。隨順、順など。シナ譯は譬となす。

○第十六頌、頌に yo とのみあるを、釋に yonisas(如理、根本に順じて)と解するが、かかる解釋は此釋全體が頌作者と極めて親近の關係にあるを示すものであらう。口傳、指示などがなくば、yo が yonisas だなどとどうしていへようか。

○第十七頌、怖畏の足處でないこと atrāsapadasthānatva の足處 pada-sthāna は瑜伽論の譯語では依處である。ここには單に pada ともあるが、pada-sthāna と同じに用ひたのであらう。padārtha、句義、の語もここにあつて、之を pada と略して用ひたのかと疑はれる所もあるが、大體は、足處の方であらうから、單に足と譯した。句のみで依處の意味であらう。○驚怖 uttrāsa は恐らく trāsa と同じで、梵語は文字が豐富だから、韻文には韻律の關係で、自由に種々の字を用ふるのであらう。瑜伽論などに怖畏と驚怖とが異なる譯語になつて居る。

○第十八頌、頌中の dhātu を(samudāgata)alayavijñānabhāvanā(阿梨耶識中熏習小種子)と解釋するが、dhātu は種性の意味で、gotra, bija, hetu 等と同じとせられること瑜伽論に見える。bhāvanā は修習、修と譯され、生ぜられたもの、增長したもの、並びに、さうなる過程をもいふ如くで、阿梨耶識と複合して居るから、種子と直ちに呼んだのであらう。熏習をいふとも考へられるかも知れぬが、ここでは種子に當ること、小種子といひ、小界を承けるので明かである。種子は普通熏習の果で、習氣といはれるから、samudāgata と一致する。阿梨耶識というても實は種子の聚りで、實體があるのではないが、此論ではさほど大膽なことはいはない如くである。

○第十九頌、(十六)聞 śruta、Edgrton は śruta を holy word、文を sacred word とのみ譯して居るが、聞は聞とせね

ば、聞思修の三が整はぬことになるから、これ、佛教に詳しくなくて、考の足らない點である。

○第二十頌、八頁七行 pratighāvatīva の -vatī- は -vrtī の誤植。○ pratigha は釋に pratighāta とあるが、妨、礙で、喪失 vyasana と殆ど異ならないであらうから、滅することになるものであらう。パーリに瞋恚に對して dosa (dveṣa)、byāpāda (vyāpada), patigha (pratigha) の三語があるが、第一は消極的に瞋を起す對象を避けること、第二は積極的に却け害すること、第三は怒つて打碎くことに至ること、であらうと思はれる。pratigha は之によつて考へて見た解釋。

○第二十一頌、自性上の惡 prakṛtipraduṣṭa とは所謂性惡で、性惡は、ここでは、それ自身惡であるを指すから、萬人が惡と認めるものである。惡の四種の一に當る。又戒律でいふ遮罪又は制罪と、性罪とを例となすとよい。○師心 svapratyaya は珍らしい語。pratyaya は堅い決心、自信などの意味。師心は自ら自らを師として居る如き意味か。自の見取見であるから。

以上二十一頌を大乘の成立の章となすと、緣起品と成宗品との二章となすとの異見があるのであるが、分章としては二章と見る方がよいであらう。もと二品であつたものを合して一品となすとは、一寸考へられないとすれば、二章となしたのは後のことであらう。

第二章

○第一頌、○ śaraṇa-gamana 又は、-gati (v. 12) は歸依に行く又は赴くであるが、梵語でも、行く、赴くは省くことがあり、シナ、日本でいへば、無い方がよく、あつては却つて奇である。此一頌で大乘の歸依三寶の優れて居るを示す大綱が述べられて居る。○四義の中の第一、sarvatraga を一切遍と譯すのはよいが、第二、abhyupagama を勇猛と譯すのはよくは判らない。abhy-upa-gama は字義では近づくことで、又、許すこと、自ら承認すること、などの意味。これ等には凡て勇氣自決を要するので、かかる點で勇猛など譯したものか。第三、adhigama を得果と譯すのは adhigama は證得であり、果に達したのであるから、よい譯にならう。第四、abhibhūti を不及と譯すのは、もと、優る、打勝つことの意味であるから、勝たれる方から、不及となしたものか。大體原語なくしては、意味が、よくもとの意味を表はさずして、一種新たな概念を與へることになる如き譯出である、とも見られる。然し、頌の譯出は、極めて複雜緻密な韻律のものを、凡て五言四句に譯したのは驚くべき努力で、或は省略して意味を含ましめ、或は裏面の意味を取つて詮はすなど、よく譯したものであると考へられる。○留難と譯したのは duṣkara (難行) か、duṣkara-kārya (難行の爲すべきもの) に當るのであらう。留難は通常は魔などが人の善事を留め、修行の難をなすことをいふ。

○第二頌、大志意は vyavasāya に當るのかと思はれるが、vyavasāya は勤と決心とを意味するから、どうかとも思はれる。此頌の釋は梵漢あまりに不一致である。

○第三頌、これから第十一頌まで、梵文寫本に錯簡があり、誤り入つた斷片は初めは何れの書のものか判らなかつたが、昭和十年東京大學印哲梵文學科卒業の前途有望であつた故河合英男氏が初めて法法性分別論の斷片であることを指摘し、山口益博士が校訂確定し、爾來學者の注意するものである。この錯簡はよほど古くからあつたと見えて、今までには、錯簡のない正しい寫本は見當らない如くである。從つてここを補ふとしてはシナ譯か、チベット譯かを以てする外に方法がない。シナ譯頌文に、一切遍を衆生と乘と智と寂滅との四種の遍となすのは、梵文頌文から見れば、頗る整理して居るやうに見える。從つて、恐らく釋文も此整理に據つて居るのではなからうか。

○第四頌、勝勇猛は願と行と果との三種であるから、これは菩薩の信行の始終の全體で、之を動的に見れば、修行の

動き行くを指すから、其點で果に近づくことであり、勇猛によつて出來得ることである。

○第五頌、此頌は究竟一乘寶性論の梵本に引用せられて居る。

bijaṅ yeṣāṃ agrayānādhimuktir mātā prajñā buddhadharmaprasūtyai |
garbhasthānaṅ dhyānasaukhyaṅ kṛpokta dhātrī putras te 'nujātā muninām ||

其人の無上乘に對する信解が種子であり、般若が佛法を生ずる爲の母であり、禪の樂が胎處であり、悲語が乳母である所の人々は、諸の牟尼の新生の子である。

此頌は大乘法界無差別論にも引用せられ、何れのシナ譯でも五言四句に譯出せられて居る。此頌とシナ譯とを比較すると、一見原頌の譯偈ではない如く思はれる程である。梵文の方を更に見ると、4, 11 dharmādhimuktibījāt pāramitāśreṣṭhamātṛto jātaḥ | dhyānamaye sukhagarbhā karuṇā saṅvardhikā dhātrā || とあつて、全く同一事が簡直に述べられて居る。頌としても此方は前のもの程に複雜でもないから、之を或は參照して、前のものを譯出したのではないかと思はれる程である。此論のシナ譯の頌は譯者の苦心のもので、而も或點では傑出した譯出と稱せられ得るものであらう。○胎藏の藏は明本のみの讀方で、一般には藏である。○發心は發菩提心であるから、同じ意味で、信解をいふ。○聚滿は二資糧の圓滿。

○第六頌、妙相は端嚴微妙相で、三十二相に外ならない。之を轉輪聖王の三十二相以上の勝れたものとなすが、そんなものは無い筈、大乘は加上しては、今までよりもすべて多く又良くいふ習慣であるからかくいふ。事實的にいへば、三十二相などは、人中では、決して端嚴微相などといへたものではない。

○第七頌、光授は麗本の文字、他は凡て先授。一切諸佛が光明を與へるとあるから、光授がよく、先授などは意味をなさない熟字。○受職は受職灌頂に當り、光授はその灌頂にあると見られる。○釋の三者能巧說の下、對佛衆生は麗本宮本によつて衆中とすべきである。會衆 pariṣad を指すに相違ない。

○第八頌、如來の身口意の三密の密の意味がよくは判らない。三密などいへば、佛教者は必ず凡て密教の意味に解するが、密教でない三密を解釋した說もないことはない。大目蓮すら佛の三密の限界を見るを得なかつたともいはれる。然しここは密教的ではない、恐らく如來の衆生濟度に於ける身口意の働が最も優れて居て、他の者にも知られない祕密的であるといふ點を密と呼んだのであらう。

○第九頌、三有の尊重は三有のものから尊重を受ける。○故意受生は願によつて受生すること。○無生忍は一切諸法の無生無滅を親知すること。此場合の忍は忍可、認許で、智の意味、又は智の準備前程。○大法陰の陰は、ここでは、蘊と同じで、集り、skandha とあつたのを五陰の陰で譯したのであらう。この集りを法身と呼ぶことは、小乘の五分法身が戒、定、慧、解脫、解脫知見の五法の集りを指して呼ぶのと同じ用法。故に善聚卽ち集り、法藏(かかる場合の藏は屢〻 ākara である)卽ち源、鑛床といはれる。○熏習聚は種子の聚で、阿梨耶識。○有滅捨の捨は tyāga(パーリ語の cāga)であらう。upekṣā ではなからう。

○第十一頌、○種智は佛の一切種智。○大悲は、正確にいへば、佛の悲に限る。菩薩のを大悲と呼ぶのは唯尊んでいうたこと。○不退は不退轉。○相應はもつて居る、具足結合で、yukta など。○俗諦に對して法性得のものは眞諦。

○第十二頌、最後の mahāryadṛśāṅ dharmaḥ の前の語は mahā-ārya-dṛś で、大とあるから佛を指し、複數屬格となるから、一切諸佛のであらう。梵文は、已に前の句に於て、シナ譯の大聖法を大乘となして居る。

第三章

○種性は gotra の譯。gotra は元來は、字義としては牛(go)を保護する(trai)ことで、一般に、網代木で圍つた牛族を意味し、人間に適用して、家族などを指し、家族の姓、家族、血統などを意味する。通常は姓名の姓で、其姓のものに共通するものを指す。從つて、古くは種姓と譯されたが、姓には同じ血統が流れ、一種同じ習慣性質があり、他の種姓と互に區別するとせられて、種性とも譯される。故に、今ここにいふ如き場合には、種性は人の性質、素質などを指す。卽ち Edgerton などが 1, family (2, mine, of gems or ores, 3, ākara origin, basis, source, cause, seed, 4, kind, class, category) とし、ここの種性をおもに第一とのみ見るのは不足であらう。瑜伽論菩薩地に於ける種性の定義、及び種性を持(ādhāra)、助(upastambha)、因(hetu)、依(niśraya)、階級(upaniṣad)、前導(pūrvaṅgama)、舍宅(nilaya)と同義語の如く列名する點からも、明かに知られる。そして、此種性品以下は菩薩地の品目と全く一致平行して居て、內容も相通ずるもののあることは、已に「瑜伽論研究」中に論究した如くである。品目の一致平行はシルヴン・レヴィ教授の指摘した所で、瑜伽論研究では內容について研究して、兩書は同一著者が菩薩地を著はした後に、莊嚴經論を造つて、著者の立場からの大乘概論を明かにしたものなるを示さんとした。然し、菩薩地は三乘各別の菩薩乘を述べ、莊嚴經論は純粹の菩薩乘を論ずるものである。莊嚴經論は已に獨立の一論として純粹に大乘を論ずるから、大乘佛說論と大乘歸依論とを最初に有し、この種性品からが菩薩地に平行するのである。

○第一頌、存在(satva)は衆生ではなく、釋に astitva となして居る。satva は sattva 卽ち sat-tva であるべきであるが、此論の寫本では、かかる場合、子音を重ねずに、省くのが癖である。寫本の出來た場所の癖か、發音を示すか、

である。sattva を衆生でなくて、勇氣などの意味にも用ふる。○ anuśaṁsa(又は ānuśaṁsa、或は兩字とも -sā)は勝利、勝功德、福利、功德など、菩薩地に譯せられる。賞讚ともあることがある。

○第二頌、界卽ち dhātu は種子と同じ意味、故に又種性とも同じ。Akṣa-rāśi-sūtra はアクシャといふ果實の rāśi 集りといふので、經名。シナ譯は多界經(Bahudhātu-sūtra ?)。アクシャは形は無食子(未詳)の如くで、落ちて地上で聚を爲す、といはれる。聚の中に色々あるから、そこを喩とする。アクシャは rudra-akṣa で、縱貫珠と譯す、金剛子のこと、ドングリと似たりともいふ。數珠に用ふる。此經は唯識關係の論には同じ趣意を示す所に屢〻引用せられる。

○果の差別の下に、菩提の下中優の相違を明瞭に認めて、三乘各別の考を全く捨てては居ない。故に、一乘思想との對立になつて、調和がないが、三乘を遮せずに一乘を說くのが此論の特色。

○第三頌、無餘涅槃に於て終盡となるといふは、灰身滅智卽ち身心都滅である。これは小乘說。

○第四頌、自性の分別の自性を特質 lakṣaṇa で言ひ代へて居る。ラクシャナは定義の意味に用ひられるから、自性と同じになるのである。○本性的と、育成的とは菩薩地には本性住と習所成となし、梵語は prakṛtistha と samudānīta である。本性に存するとは本有を指し、習所成は修習によつてしかなされたもので、修得を指すから、育成增長せるをいふ。此二を所依と能依とに配するが、性種は本有であるから、依止せられるもの、習種はそれに依止して育成するから能依である。種性は因としては存在するが、果としては菩提となるから種性としては存しない。

○第五頌、ここの忍は忍耐の意味で、無生忍の忍の如き忍可の意味でない。忍耐と忍可との二意味があるのである。

○第六頌、決定の中には細かにいへば三種卽ち三乘種性があり、それは緣に逢うても退墮しないし、不定も後世の說では三乘何れにか歸するから三種にならうが、ここではこれ等は、決定の種類と共に考へずに、緣によつては退墮す

る、これ決定して居ないからである。

○第七頌、過患 ādīnava は過失、苦惱などの意味で、通常としては味著又は受味 āsvāda から起る。○患習は abhyāsa の譯で、繰返すこと、數修、習慣、慣例などの意味。串は慣と通じ、習と同じ。串習は瑜伽論の譯字。

○第八頌、長時の後には cirād の譯。cirāt は辭書に長時間の後に、また、長時の間とあるが、釋に cireṇa と用ひ、これも長時の後に、また、長時の間とある。シナ譯に遲入とあるから、何れも長き後に、を取つた。次の、速かに、に對するから、遲く、の譯は良い。○saṁvigna は agitated, moving to and fro などあり、-mānasa は agitated or distracted in mind とあり、シナ譯の悲深に當るが、何れも適切でない。-cetas は -cetas の nom.、イライラした心のもの、の意味で、もと udvega, saṁvega と關係があるから、厭離心を起させるのにイライラした心になつて居るものの意味に見た。

○第九頌、ここの gotra は mine, ākara の意味。○yoga はここでは釋に abhijñā-ādi とある如く、神通又は通慧をいふ。綴字の關係で、二綴の字を用ひたもの。

○第十頌、頌の中の āryamahāsatvārtha- とある複合詞を如何に切り、如何なる順序で讀むかが注意せらるべきである。此ままでは、聖なる大衆生の義と讀めるし、大衆生は菩薩摩訶薩をいふともなし得よう。然し、大衆生は今までにも無かつたから、mahā は satva にかかるのではあるまい。釋には āryasamādhinimittatvāt と、mahāsatvapāripaka-nimittatvāc ca とあるから、ārya は samādhi にかかつて āryasamādhi であり、mahāsatvārtha は mahāsatvāparipaka と見ねばならぬから、mahā-artha 卽ち mahā-paripāka の意味となるであらうが、然し大なるを成熟につけるのも一見奇であるから、大なる衆生につけて、此際は多數の衆生を成熟せしめることの意味に見るべきであらう。すぐ次に多くの衆生を成熟せしめるとある。

○第十一頌、無種性を無般涅槃法、卽ち性質、のもの、として認めて居る。然し、之を二種とし、時邊と畢竟とにす。時邊は tatkāla- に當るから、其期間中のといふ意味、卽ち般涅槃が或期間のもの、或期間は四種の場合、畢竟は絕對的の無因である。これが字義のままかどうか。ここでは字義通りであるから、其限りでは權大乘の域を出でない。第十三頌の註參照。

○第十二頌、甚深は頌には gāmbhīrya、釋に gābhīrya とあるが、同じである。もと gambhīra, gabhīra からの派生語。然し後者は珍らしい。○dīrghadharma は vistīrṇa-mahāyānadharma とあるから、長は廣大の意味。○無知たることは ajñātva であらう。ajñātvā もあるから、ここもそれと見てもよく、梵文も ajñātvaiva と eva と續けてあるから、-tvā と見ても、-tva と見ても差支ないが、然し、-tvā は不變化詞であるから、今は -tva の方がよい。○saṁpraptikṣama を成就に適する、と譯したが、saṁprapatti は普通に無い語である。恐らく、saṁpatti と殆ど同じであらう。○最高の成就は成佛又は涅槃を得ること、nirvāṇa-saṁpatti である。○十行 māhātmya は、通常、偉大性、高貴性、尊嚴性などと譯されようが、佛教語としては我は主宰、自在などの義となすから、大自在と譯した。○シナ譯の極忍は何れを譯したのかよくは判らない。極忍とある文の前後は梵文とは一致しない。この忍は、信に對して居る點からも、忍可の意味で、智を指すに外ならない。

○第十三頌、釋があまり簡單であるから、よくは判らないが、第十二頌と合せ考へても、ここでは、無種性者の全部の成佛は明確に認められて居るとは思はれない。然し、世間は盡きないから、無住處な涅槃に住するとか、如來藏を說くとかで、全體としては皆成佛說であると考へられる。

第四章

○第一頌、發心は citto'tpada で、心の起ること、從つて又心を發すこと、勿論菩提心を發すことで、かく表現して居る所もある。○被甲精進 saṁnāhavīrya の被甲は鎧を著けたことである。○釋に於て、梵文は、四種の大を第一第二と、第三第四との二となし、之に二を所緣とするといふを一となし、合せて三種の功德となすと解せられるが、シナ譯は明かに、第一と第二とを一種に纏め、第三と、第四とで、三功德となして居るし、此三功德は二種を所緣となすものとなすから、少しく一致しない點が存する。

○第二頌、發心の種類を、信解行地の信解のもの、七の地の淸淨意樂のもの、第八地の異熟のもの、佛地の無障のもの、の四種となすが、瑜伽論第三十七卷成熟品に勝解行菩薩、淨意樂菩薩、行正行菩薩、墮決定菩薩、決定行菩薩、到究竟菩薩の六種菩薩を列し、第四十九卷地品に、種性地、勝解行地、淨勝意樂地(初地)、行正行地(從二地至七地)、決定地(第八地)、決定行正行地(第九地)、到究竟地(第十地)を列名する。前者はそれぞれの地に在る菩薩、後者は地名である。註釋によると、種性地でも性種ならば十信の前に在つて師位に入らず、習種性ならば、僧祇位で、勝解行地、淨勝意樂地卽ち淸淨意樂地は初地、行正行地は第二地—第七地、墮決定地は第八地、決定行正行地は第九地、到究竟地は第十地で、佛地に隣りするものである。之によつて見ると、信解行地は地前であり、七の地の淸淨意樂のものといふのは、淸淨意樂の名で初地から第七地の菩薩を指し、異熟のものは第八地等とあるをシナ譯が後三地となすから、第八、第九、第十の三地を指し、無障のものは佛地である。佛地も發心の中に入るのである。

○第三、第四、第五、第六頌、梵本は此四頌を一所に纏めて居るが、シナ譯も之を一所に纏め而も二頌に譯出して居

る。○第三頌二字目 iṣṭho は iṣṭo の誤植。○種智は梵文にはその智卽ち大乘の智とあるのみ。種智は一切種智 sarvākārajñatā, sarvākārajñāna で、佛の智慧。

○第四頌、uttaracchandayāna、釋に、uttarottaracchandayāna とあるを一層高い欲を乘とし、釋のを、次次に高くなる欲を乘としと譯したが、シナ譯は勝欲を以て所乘と爲すと譯す。意味は明確でないが、昇進して高い地に至らんと欲する志欲を乘となして進むをいふか。○戒律儀 śīlasaṁvṛti、釋に śīlasaṁvara とあり、saṁvara は律儀で、戒と殆ど同じ。古くは屢〻護とも藏とも譯される。大護とあるは其例。○妨害は云々の一句も意味不明瞭であるが、所對治を起らしめ或はそれに住することが卽ち妨害になり過患であるといふのかと思はれる。所對治は釋に anyayānacitta、他乘の心とあるのが其解釋であらう。他乘は聲聞乘又は獨覺乘であらう。

○第五頌、第六頌を通じて、四種の發心の決擇に、根、意樂(所依止)、信解(所信)、所緣、乘(所乘)、安住(所住)、妨害(過患)、功德、出離、終り(究竟)の十種が述べられる。

○第七頌、samādānasaṁketikacittotpāda は受世俗發心と譯されるが、瑜伽論七十二卷發心品決擇の十發心の第一の世俗受發心とあると同じであらうと思はれる。これは諸菩薩の未だ菩薩の正性離生に入らざるあらゆるの發心といはれるが、正性離生 samyaktvanyāma は見道をいふ。samādāna は受けること、取ること、從つて受とも所受とも譯される。他から發心させられるをいふ。○十五頁五行 dṛṣṭa iva の iva は eva の誤植。或は dṛṣṭaiva。

○第八頌から第十四頌までが一ヶ所に纏められ、シナ譯は之を適宜四つに分けて居る。○第一義發心は歡喜地に於てであるから、これ初地に於てで、眞の菩薩の發心である。○この三に於て、を補うたのはシナ譯に從つた。

○第九頌は殊勝の因、第十頌は殊勝の差別である。殊勝の差別は六義とせられ、以下の第十四頌までで說明せられる。

此中、第一の生の殊勝は歸依品第二の梵文缺文の第五頌菩薩の善生を說く說が、シナ譯の釋文に存するが、梵文では極めて簡潔に說くのみ。○十の大願についてシナ譯は、十地經に說くが如し、となす、大正十、五三八下、又は大正九、五四五を指すのであらう。第十五―第二十頌、發心の譬喩二十二種を擧げて說明するが、この譬喩はAbhisamayālaṁkāra,1, 20-21 (19-20)に存する。後者は說明は無く、又頌の關係で文字は異なるが、全く同一。頌は次の如し。

bhū-hema-candra-jvalanair nidhi-ratnā 'karā 'ṛṇavaiḥ |
vajrā 'calau 'ṣadhī-mitraiś cintāmaṇy-arka-gītibhiḥ || (20)
nṛpa-gañja-mahāmārga-yāna-prasravaṇodakaiḥ |
ānandokti-nadī-meghair dvāviṁśatividhaḥ sa ca || (21)

○第十五頌に 'parocchrayaḥ を 'paro jñeyaḥ に改訂するが、第十七頌に二回、第十八頌に一回同じ句があるから、又、形も似て居る點もあるから、如何にもさうと思はれるが、シナ譯に增火とあり、ucchrayaが增に當ると見て、改訂を採らずに、寫本のまま見た。

○第十九頌に gandharva があり、シナ譯の泉に當り、Abhisamayālaṁkāra の prasravaṇodaka(流れる水、迸出する水)とあり、ここの釋に udakadharaṇākṣayodbheda とあるから、水、泉であると考へられる。第十八頌にも gandharva があるが、これは音樂神であるから、同一名であつても、全く同じではない。gandharva は apsaras(水神)と夫妻で、又水に住するともせられるから、水と關係する方面もあつて、泉に當る場合もあるのであらうか。vetasagaprabhava となす寫本の文字が cetasaprabhava と改められて居るが、心の生で、發心の意味であらう。(vetasa は葦で、從つて葦の間で生ずるとはならないか。)○十七頁三行 dharmoddāna を法印と譯すは古譯一般のことで、四法印、三法印を指す。

○第二十頌、二十二譬の結論に聖無盡意經を指名するが、これは無盡意菩薩經であらう。聖は無盡意の形容でなくて、むしろ經の尊稱である。古譯には此例は多い。此經は大集經(大十三、一八七中)にも大寶積經(大十一、六四八中)にもある。後者は簡單、前者は詳細。而も阿差末菩薩經の如き古譯もあるが、何れも適當な相當文は發見せられない如くである。從つて、梵文に akṣagata とあるのがよくは判らない。大集經の無盡意菩薩經に、初發心の優れたことを述べて、無盡法門というて居るから、それを借りて、しばらく無盡行(?)となして置いた。

○第二十一頌、十七頁十四行、寫本に -mahāyānasvatobhi- がチベット譯によつて -mahāyānasūtrābhi- と改訂せられたが、シナ譯には大乘意とあつて、經の字は無い。svato 'bhiprāyikārtha- は大乘の自身の、又は、自然の、或は、固有の、意趣義とはならないであらうか。

○第二十五頌、saṁcintyajanma 故意に生れること、saṁcintya は故思、故作意と譯されるが、故意に、又は、思惟しての意味。菩薩は必然的に生れるべき業の條件がないから、生れるには願力に因る。願をここで故意にといふ。saṁcintya が saṁcitya となつて居ることもあるが(第十八章第四十四頌の釋1.8)、もと cint が語根であるから、citya となる道理なく、saṁcintya の誤植であらう。

第五章

○第二頌、paratra は普通は場所をいふが、ここは人を指す。○sāṁketika は pāramārthika と對するから、俗諦的、世俗的の意味。

○第四、五頌、pratihārya は prātihārya の誤植。神變とも示導とも譯す。○ vyākaraṇaiṅ- のダッシュを去るがよい。○ guṇair-のコンマを取つて、一行前の prajñāvimuktiḥ の次に入れる。

○第六頌、釋の mamāyati は猜む、愛撫する、適合させる、專用する、など學者の譯があるが、もと mama を動詞となしたのであるから、吾がものとする、がもとの意味であらう。シナ譯は梵文と合はないから判然しないが、强ひていへば、考へると、染する、に當るか。○善遠去又は極遠去はよくは判らないが、修行が遙かに進んだ意味と見、如來の家に生れるに關するかと考へた。○ abhyupagatasatva- の abhyupagata は菩薩地のシナ譯によつて誓つたの意味に見、利益せんと誓つたと譯した。

○第九頌、頌に yuktasamānatāpadair とあるのが、釋に saṅbaddhasādṛśyavacair とせられて居るから、yukta が saṅbaddha に、samānatā が sādṛśya になつて居ると、分つて、考へられ得る。

○第十一頌、prapatti は pratipatti を、綴字の關係で、代用したのであらう。第三章第十二頌の saṅprapatti 參照。

○subhūta は subhūte の、nadaṅ は nedaṅ の誤植。

第六章

○第一頌、第一義絕對は無二を義となすとして、五の無二相を擧げるが、無二は a-dvaya で、a-dvitīya ではなく、從つて、無の二であつて、二が無いといふ意味ではない。論には離言の法性がよく言はれるが、第一義はそれに外ならない。○ punarviśudhyate は釋には na ca na viśudhyati とあつて、それで非不淨で、他と同じになした。

○第二頌、bhrama-mātra は次の頌に vibhrama-mātra とあり、其釋に bhrānti-mātra とある。何れも唯迷亂、又は迷妄のみ、の意味。綴字の關係や通常の用法などの爲に、色々用ふるのであらう。

○第四頌の釋(十七行)vipaśyanna vidya- は vipaśyann avidya-。○第四頌に pratityabhāvaprabhave とあるは、釋に bhāvānāṅ pratītyasamutpādaṅ とあるから、諸法の緣起と譯したが、bhāva は物で、中論に諸法と譯すのから、それを借りた。pratītya-·prabhāva が緣りて起ること。

○第六—十頌、この五頌は攝大乘論應知入勝相品第三の最後部に、典據として、引用せられ、極めて重要なもの。この五位は第四章第二頌に述べた瑜伽論の階位と對照するとよい。攝大乘論の訓點について、第二頌の最後は、法界の能く二相を離れたると、及び無二なるとを證す、と訂正すべきである(第三頌の苦は若の誤植)。

○第二四頁七行 -niśrita- は niścita の、十二行 dhama- は dharma- の、十四行 -hyabhā は -hyābhā- の何れも誤植。

○第六頌—第十頌は攝大乘論入因果勝相品第四に指名引用せられて居る。此前にも取意引用がある。

第七章

○ prabhāva はここのシナ譯には神通とある。神通とも譯される字は abhijñā も ṛddhi もあるが、ṛddhi を神通、abhijñā を通慧又は神通、prabhāva を威力、或は、威神、と譯したらばどうかと考へる。ここでは prabhāva は abhijñā とせられて居る。

○第一頌、釋の二行、-jñāyaiṅ は -jñā yām。○釋四行、ṛddhiviṣayā- は寫本に ṛddhiviṣṭhayā- とあるを訂したもの。これは通常 ṛddhividhi(-vidhyabhijñā)が用ひられるが、菩薩地梵本に -viṣaya- が用ひられて居る。○五行、saprameは saprabhe-。○ここの六通は cyutopapāda-abhijñā, divyaśrotra-abhijñā, cetoparyāya-abhijñā, pūrvanivāsa-abhijñā,

ṛddhiviṣaya-abhijñā, āsravakṣaya-abhijñā であるが、通常は天眼通 divyacakṣus-abhijñā を入れて、cyutopapāda を省く。然し、菩薩地梵本でも此論の通り。又、後に六通と三明とが擧げられるが、三明を宿命通、天眼通、漏盡通とすれば、天眼通を省いては前後に矛盾があることになるし、三明を宿命、他心、漏盡とすれば、後三を此順序となる。

○第二頌、頌の niṣkalpanājñāna は nirvikalpanājñāna が通常。

○第三頌、天住は六欲天の住處、卽ち布施、持戒、善心の三事、梵住は色無色界の諸天の住處、卽ち慈悲喜捨の四無量心、聖住は三乘の聖者の住處、卽ち空無相無願の三三昧。此三住に佛住といふ諸佛の住處、卽ち無量種々の三昧を加へて四住といふとせられる。

○第四頌、vivarta は成劫(vivarta-kalpa)で、壞劫 saṁvarta-kalpa に對する。この壞を nāśa(滅)となしたのは頌である爲に綴字の關係による。○ vaśi は制御して居るをいふが、vaśitā が術語として自在と譯され制御した狀態を指すから、自在など譯す。○十地經第八地の十自在は命、心、財、業、生、勝解、法、願、神通、智の十。

第八章

○攝頌は saṁgraha-śloka を譯したが、saṁgraha-śloka は恐らく uddāna と殆ど同一意味であらうと思はれる。九字の譯語が、一般からいふと、多少特別な處があるが、シナ譯としては止むを得ないであらう。

○第二頌、最も優れた到究竟は parārdha-niṣṭhā の譯、parārdha は此ままでは向ふ側又は向ふの半分、或は萬載卽ち非常に多い數の名であるが、シナ譯に勝究竟とある勝に當る。故に parārdhya 卽ち最も優れた、最上の、と同じであらうと見た。niṣṭhā は究竟であるが、究竟に達した卽ち niṣṭhāgata と同じであらうと見た。或は、單に向ふ側の究竟とのみ譯すのがよいか。○九種の自成熟については、凡て因と自性と業との三を明し、シナ譯は判然それを示し、第二頌の釋でもさうであるが、梵文はシナ譯ほどには明確でない。然し、何れの因によつて成熟するか、が因、次に自性と業とが述べられて居る。

○第三頌、釋の證淨は avetya-prasāda、Pāli, avecca-ppasāda、不壞淨とも譯す。

○第四頌、釋の正念と正知とによつて、は smṛtisaṁprajanyābhyāṁ の譯。smṛtisaṁprajanya は Pāli, satisampajañña で、正念正知を譯されるのと同じ。

○第六頌、頌中の -pratisaṁkhya- は恐らく韻律の關係であらう。通常は -saṁkhya- で、擇滅無爲の擇である。釋に pratisaṁkhyāna- とあるのは同じ意味。

○第七頌、medhā は菩薩地に聰慧、聰叡、聰敏と譯せられるやうになつて居る。此シナ譯は念と譯す。medhā の字義には、念の意味は無いと思はれるが、自性を說く所に、頌にも釋にも念(smṛti)があるから、それを取つたのであらう。○頌に大覺(mahābuddhi)とあるのは、釋に出世間の般若(lokottaraprajñā)とある。

○第九頌、頌に sudharmatā 卽ち善法性とあるを、釋は saddharma 卽ち妙法又は正法となす。○ ahāryatā をシナ譯は堅と譯す。菩薩地に ahāryatva があつて、不能奪と譯される。ahārya は取去られざる、奪はれざるの意味であるから、堅となしたのであらう。

○第十三頌、pacana に vi-, pari-, pra-, anu-, su-, adhi-, ni-, ut- が附せられて、區別せられて居るが、明確に區別することが六ヶしいので、シナ譯を其まま取つて、順次に捨、普、勝、隨、善、得、常、漸となした。各〻其說明によつて、解すべきであらう。然し、一般的には paripāka が用ひられ、その paripāka の八種の差別となつて居る。

第十八頌、頌に pare とある。para は通常代名詞變化であるが、m. n. の於格は paṛasmin と pere とが用ひられる。今は後者。

第九章

○菩提品は論中最も微妙たりと李百藥の序にいはれて居る。○第一、二、三頌が纏められて居る。第一、二頌は一切種について述べたものであるが、第三頌はそれを解釋した頌であつて、ここの釋文は極めて簡單である。シナ譯は第一頌、第二頌を別々に、一切種智の因圓滿と果圓滿とを述べたものとして、一一解說し、第三頌は譯出して居ない。然し、釋文の趣意は大體解說の中に取入れて居る。從つて、原梵文を譯出の際に改めたのであらうと思はれる。○佛位又は佛たること或は佛たるもの、は buddhatā 又は buddhatva が用ひられて居るが、シナ譯は佛身とも、時には諸佛とも譯す。單に、佛でも差支ない。

○第四、五頌は、シナ譯には佛身の無二相を說くといはれるが、梵文には威力と共なる(sānubhāva)が加はつて居て、寶藏と善穀との譬が說かれる。シナ譯はそれを釋文に述べて居る。

○第六頌は、第三の頌とある如く、前二頌の說明である。最後の頌の句は釋文に分解せられて居るが、これは頌では語が複合して居たり、順序が韻律の爲に交雜して居る爲に、それを分つて順序を整へたのである。

○第七—十一の五頌は佛に對する歸依の無上なることを述べるとあるが、三寶歸依は既に前にもあつた。

○第十一頌のシナ譯は盡於未來際とあるが、梵文は ā lorāt 卽ち世界の盡きるまで、となす。意味上は同一である。此頌は究竟一乘寶性論の無量煩惱所纏品の九喩の後に典據として引用せられる。

○第十二—十七頌で轉依を頌する。轉依は序にある如く、āśraya-parāvṛtti で、所依の轉變である。第十二頌の釋には āśraya-parivṛtti とあるから、轉は parāvṛtti でも parivṛtti でも同じであり、又 parāvṛtta-āśraya, parāvṛtty-āśraya とも書かれるが、韻律の關係で互用となるのである。依るものを變へるといふ意味。單に parivṛtti ともあり、parāvṛtta もあり得る。後の第四十七頌には vyāvṛtti もある。vṛtti, vṛtta が轉の譯のある基をなす。第十四頌には十種が擧げられるが、一一を嚴格に譯出するのは困難である。第十五頌は Uttara-tantra にも引用せられる。第十六頌—第十七頌は攝大乘論智差別勝相品に引用せられるが、少異がある。第十六頌などはよく言はれる趣意を含む。

○第十八頌の tūrya は饒といふ樂器であるが、通常は帝釋天宮に天鼓(dundubhi, devadundubhi)卽ち天上の太鼓である。帝釋天の善法堂に太鼓がかかつて居て、時が來ると、何人も打たないのに、自然に鳴り出す、そこで諸神が集まり、帝釋天が出席して說法をなす、といはれるが、摩尼珠も亦照らす意志が無いのに、必ず光り照らす。此自然任運を常に無功用、無休息の譬となす。

○第二十二頌以下十六頌で無漏法界の甚深を頌する。第二十二頌はシナ譯から見ると、paurvāparya-viśiṣṭāpi は paurvāpareṇa viśiṣṭāpi(前と後とは無區別であつても)でないかと思はれる。シナ譯には、如前、後亦爾で、前後が無區別であるから、之に準ずると、しか考へられる。從つて又釋の paurvāpareṇa viśiṣṭa- は -pareṇāviśiṣṭa(前後によつて無區別であるから)でないか。梵文第十一章第十四頌參照。

○第二十三頌の nairātmyān mārga- は nairātmyātmārtha-(無我の我の義)ではなからうか。釋にある道の語は梵文にも、シナ譯にも無い。此頌は究竟一乘寶性論にも、佛性論にも存する。但し前者の梵文には此部分は缺けて居る。

○第二十四頌は又究竟一乘寶性論第二十三頌の釋に散文として存する。

○第二十五頌の釋に timiramatasya とあるのは、頌にある如く timirasya の方がよいと考へて、-met- を省いて讀んだ。○śasyate は śains の passive 變化。na bhāvaḥ は有ではない。na bhāvaḥ, śasyate は有とはいはれない。

○第二十七頌には梵文とシナ譯とが一致しないものが見られる。其他に於ても、不一致は諸所に存するが、一一はいはない。

○第三十頌の釋の sādharaṇa- は sādhāraṇa-。○次行の -sāmana- は等しいことを指すが、複合詞の中では、如き、等の、と譯してよいであらう。

○第三十二頌の māmayita は mama(私の)の denom, pp. で、私のものと執したの意味。第三十三頌の次の釋に mamatva とあるのと殆ど同一意味であらう。Edgerton の辭典には cherishes のみを出すのは不足。パーリ辭典の解釋の方がよからう。Edgerton は此論は純粹な梵語であるとして、本文を見ず、譯者の註のみを引用するが、本文にも arihat の如きがあり、註にも存するが、全く見逃がして關說しない。

○第三十四頌の釋の aprabhāsane は照らさないことに於て、である。五濁は通常のもの。atyutsadatā は非常に多いこと。

○第三十五頌の pāṃśu はシナ譯の滋灰に當る。pāṃśu-kūla(字義は、塵又は泥の中に集まつた衣)は糞掃衣の糞掃に當るが、糞掃はこれの音譯であるから、音譯からは字義は知られない。滋は濕ふ又は濁るの意味か、滋長、滋涸とある。灰は洗ふに用ふるであらうか。pāṃśu は塵、泥などの意味、kula が集まり、堆聚の意味。然し、滋灰で一種の染料、衣を染めるもの。○āvedha は菩薩地の譯に勢力とせられて居る。BHSD に continuing force, continuative force of life とあるから、繼續して居る勢力。釋にある ādhāna は同じく攝持とあるが、たもち、含むことである。

○第三十六頌は梵文並びにシナ譯の釋から見れば甚深の總括と見えるが、梵文の釋には業甚深の十頌の一となして居る。この業甚深の部が頌に於てもシナ譯は梵文と一致しない。シナ譯は頌の一一に各の趣意を示して居て親切である。頌に vā とあるのは iva の意味。iva を韻律の關係で vā となした。vā は ca, api, iva, eva の代りになり得る。

○第三十七頌、それの藏、と頌にあるを、釋は如來藏となす。如來藏を認めれば皆成佛說になつて、權大乘說と調和しない。此頌は究竟一乘寶性論の無量煩惱所纏品の眞如についての典據として引用せられて居る。

○第三十八頌の序に vibhutva-prabheda とあり、普徧性の分別の意味であるが、シナ譯は諸佛の變化とし、此頌と第三十九頌との釋に prabhāva 卽ち威神をも、シナ譯は變化となす。語根 vi-bhū は擴がり、徧ずる、であり、名詞として vibhava はヴィシュヌ派では最高神が第二の形に變化することの意味に用ひるから、變化の譯もなされ得るであらうし、又 prabhāva を殆ど同じに扱ふから、その現はれに外ならぬと見て同じく變化となすのであらう。然し nirmāṇa を變化と譯すのとは、原語は同一ではない。ここでは特に威神力とは少し區別して威力と譯す。三乘凡てにいふから、普遍性は適當でなく、まだしも威力の方がよからう。

○第四十一頌の千二百の功德は何を指すか未詳。五根に於て一一と釋せられるが、シナ譯の釋に一一の根が一切の境界を互用するとある。五根の互用は第八地以上であるが、千二百となるのが不明。

○第四十一頌から、五根の轉變、意の轉變、義と受との轉變、分別の轉變を第四十四頌までに述べる。シナ譯の釋に、五根については通常であるから何事も述べないが、次の意は意根と譯し、意根とは染汚識を謂ふとし、義卽ち境は五塵、受は五識といひ、次の分別は意識を謂ふとなすが、この、何々を謂ふとある句は梵文の釋には存しない。五根の次に意にしても意根にしてもといへば、これで六根となるのが當然であるが、義は五境、受は五識というて更に分別

は意識といふから、染汚識と分別識とは同一で、ここに六根、六境、六識が考へられて居ることが判る。

○第四十五頌の pratiṣṭhā は安立、建立、安住など譯されるが、シナ譯の釋に、これ器世間を謂ふとある。又、aprati-ṣṭhita-nirvāṇa をシナ譯は不住於涅槃とも不般涅槃とも譯すが、無住處涅槃と譯す術語である。生死にも住せず涅槃にも住せずで無住處であるが、恐らくここは轉依でいふから、生死に住せずは言ふまでもないので、涅槃のみに住しない、般涅槃のみでないといふ方をいふのみであらう。

○第四十九頌の anārabdhvā について、ārabhate に、始める、と、殺害する、との兩意味があり、ārambha に明かに兩意味が記される。ここでは anārabdhvā は何れにも解せられようが、ārabdha を殺しての意味から、捨てずに、と見た。

○第五十頌の kṛcchra は困難、難儀で、菩薩地に何々し難きと譯されて居る。

○第五十一頌の法の輪は dharmyaṅ cakraṅ で、說法のこと。○ vicitra は種々なる、でもよいが、菩薩地に殊勝とも譯される。ここも生の行。janacarī は jātaka の差別で、とある如く、本生の種々行であるから、殊勝がよいと見た。

○處 sthāna は或場合にはとあるその場合場合を指す。

○第五十二頌の saṅskāra は abhisaṅskāra と釋せられる。造作で、殆ど功用、努力と同じ。

○第五十三頌の -viṣadair aṅśa- は -viśadair aṅśu- の誤植と思はれやうが、viśada が viṣada になつて居るのであらう。此書には viṣada もある。第五十五頌の -viṣada- も -viśada- が普通。

○第五十八頌、自性身は svabhāva とも svābhāvika ともあつて、法身 dharmakāya であり、受用身は dharmasaṅ-bhoga とも sāṅbhogika とも sāṅbhogya ともあり、變化身は化身ともなし、nirmāṇa とも nairmāṇika ともあり、凡てに kāya を付けても、また同じ箇所であるから省いても用ひられる。後世でいへば、唯識系統では三身は此名稱、中觀系統其他などでは法身、報身、化身の名が用ひられるのが大體の慣例である。又、法應化の三身となすもある。

○第六十三頌の釋の svātha- は svartha- の誤植。

○第六十四頌 mahāmāyo とあるは、mahopāyo であるに相違ない。釋にも mahopāyatvāt とあるし、シナ譯の頌に示此大方便とある。

○第六十六頌の釋の ta は te の誤植。

○第六十七頌以後に鏡智、平等智、觀智、作事智の四智を擧げる。萩原博士の Mahāvyutpatti 4(3)には、初めに清淨法界、卽ちdharmadhātuviśuddhi を無等等五蘊と題して戒蘊、定蘊、慧蘊、解脫蘊、解脫智見蘊に、更に第六として之を揭げ、次に四智として鏡智等を擧げる。五蘊とあつて、六種を擧げるから、清淨法界は配列場所を誤つて居ることは明かである。從つて、清淨法界を四智の方に入れて、五智と表題を改めるが、通常は四智をいふ。Edgerton は常に五智をいひ、四智をも勿論譯して居るが、譯は正確でなく、敎理に一致しない。シナ譯に此頌の後半を八七六五識、次第轉得故とあるは梵文と一致せず、唯識說の轉識得智をいうて居るのであるが故に、釋に、第八識を轉じて鏡智を得、第七識を轉じて平等智を得、第六識を轉じて觀智を得、前五識を轉じて作事智を得、となすも、梵文にはない。第六十八頌の釋に、此偈は第八識を轉じて鏡智を得ることを顯示す、といひ、第七十頌の釋に、此偈は第七識を轉じて平等智を得ることを顯示す、といひ、第七十二頌の釋に、此偈は第六識を轉じて觀智を得ることを顯示す、といひ、第七十四頌の釋に、此偈は前五識を轉じて作事智を得ることを顯示す、といひ、凡て梵文に無い句であるが、前の八七六五識、次第轉得というたのを八識に配當して示したものである。轉識得智のことは瑜伽論には無いが如く、攝大

乘論には智差別勝相品第十に四智が說かれるが、單に識陰を轉じて四智を得るとなすのみであるし、無性の攝論釋には八事識を轉じて得るとして、八識に四智が配當せられて述べられる。護法の成唯識論に於てこの配當其他が詳しく述べられて居るから、以上のシナ譯の說は卽ち護法說であり、護法說の一部分が初めてシナに傳へられたものであると認められる。これなどが卽ち、論の序に、諸經論に未曾有であるもの、といはれる所である。此論の譯者 Prabhāk-aramitra は那爛陀寺で戒賢に十七地論を聞いて後シナに來て此論を譯したのであることは、其傳記に載せられて居るので判る。卽ち譯者は護法說を戒賢に聞いて、譯出の際、之を譯文中に入れたのであるに相違ない。戒賢が那爛陀寺で護法說を說いて居たことも、之によつて確實に判る。第七識は護法說として、とかくの議論がなされ得るが、此論に、前に、意根とは染汚識、分別とは意識、義は五塵、受は五識で、共に轉依して智となることがいはれて居た。此染汚識は護法說の第七識、分別識は第六識、五識が前五識に當るのであるから、ここに明かに已に第七識がいはれて居るのであり、それが四智の下で明確に判るのである。從つて八識となる說である。此八識が徹底的に別體視するのかどうかは問題であらう。

○第七十六頌の釋の samacittatā は、頌の如く samacittātaḥ であらう。或は samacittataḥ か。

○第七十七頌は攝大乘論智差別勝相品第十に引用せられる。

○第八十二頌の序の -nyanaika- は -nyaika- の誤植。

○第八十六頌の序の protsahane は、これも用ひられるが、恐らく protsāhane がよからう。後者は caus. より來る。

○第八十六頌の釋の ahīnabodhicittam ādāturin の ahīna は arhati ではなからうか。菩提心を取るべし、となる。

第十章

○第一頌、uddāna を綱領と譯した。最初は ādi で、第一綱目としては、梵文では特別の一章となつて居ないから、不適當であるが、實は、最初は成立であると譯すべきであらう。然しシナ譯では、緣起品が最初にあり、チベット譯のものにもあるといはれるから、此方でいへば、名稱は異なつても、緣起品を最初というたとも解せられよう。この綱領は此論の最初から前品までの品目を擧げたもので、ここにあるのが一見奇である。無い方がよく、あつては後にも他の綱領があるべきである。然し十五・一に又存するが、これも十四までのもので、而も菩薩地の引用であり、其他には無いから、梵文は整理せられて居ないことを表はす。シナ譯の方が却つて優つて居る。

○第四頌の中、頌にも釋にも迷亂のが一つ缺けて居る。シナ譯には存する。

○第五頌の頌及び釋の最後はシナ譯では次の第六頌にある。hāryāvyavakīrṇayor は hāryā-vyava- と hāryā-avyava- とも分ち得るが、シナ譯は前者となす。但し有聞とあるは有間の誤寫。

○第十一頌は攝大乘論應知入勝相品第三に引用せられる。

第十一章

○第一頌、以下第四頌までの三藏についての說は攝大乘論世親釋の初部にある三藏の說の典據である。○釋の中、(五四頁二行)'vipratisārādavpratisāreṇa は寫本の 'vipratisārādinemaṇa を訂正したものであるが、出版者は更に譯文に於ては之を 'vipratisārādikramena と改めた。然し、シナ譯には、ここを(由持戒故)不悔、由不悔故(隨次得定)とな

すし、攝大乘論釋眞諦譯は若人持戒無悔、由無悔等能次第得定とし、達摩笈多譯は由持戒故、得不悔等次第得三摩提とし、又、玄奘譯は謂、具尸羅卽無悔等、漸次能得三摩地故となすから、由無悔等は此論と眞諦譯とにのみ存する。此論は、術語の譯字などから見ると、恐らく眞諦譯に據つたと推定せられるから、由不悔は眞諦譯を取つたものであらうと思はれる。從つて、譯文の訂正の方がよいのであらう。

○第六頌、此頌及び釋の初部が寫本に於て缺けて居るので、佛譯者はチベット譯によつて補正をなしたが、龍谷大學の武內紹晃氏が「大谷探檢隊招來の『大乘莊嚴經論』について」がA、B二寫本並びにチベット譯によつて、

ālambanaṁ mato dharmaḥ adhyātmaṁ bāhyakaṁ dvayaṁ |
lābho dvayādvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ ||

dharma ālambanam upadiṣṭaḥ kāyādikaṁ cādhyātmikaṁ bāhyam adhyātmikabāhyaṁ ca |

となした。大體A寫本を主とし、チベット譯にも據つた如くである。但し釋の方に uddiṣṭitaḥ とあるは、deśitaḥ か、uddiṣṭaḥ か、upadiṣṭaḥ か、があつて、色々であるが、今はかりに upadiṣṭaḥ を取つて置いた。又、ここの adhyātmikabāhyaṁ ca の誤植であらうか。後者は釋による。○三十七種類の修の中の四正勤は pratilambha, niṣevana, nirvighāṭana, pratipakṣa で、シナ譯は得、習、斷、對治となすが、通常の四正勤(pradhāna)卽ち四正斷(prahāṇa)とは異なつて居る。此中、nirvighāṭana はもとの版本には vinirdhāvana とあるが、譯するとき、nirvidhāvana の代りに nirvighāṭana と讀めと訂正したもの。nirvidhāvana とあつたとすれば、vinirdhāvana は誤植であつたのであらう。nirvighāṭana の vighāṭana は開く散るといふ意味、nir- がつけば、それの否定になるのであらうが、vidhāvana は散布、消散する意味、nir- のついた字は見出せないにしても普通は打消しになる。よくは判らないから、凡て、今はシナ譯に從ふ。○次の四神足も普通には欲、精進、心、思惟であるから、ここは譯語の相違とも見える。○以下に於ても通常とは一致しないものが見出される。○p. 57, 下から四行、-cārakāra- は -cārākāra- の誤植。

○第二十頌の釋の nāsau na bhāvaḥ は asau nābhāvaḥ であらうか。

○第二十四頌は攝大乘論應知勝相品第二に引用せられる。

○第二十五頌に相當するシナ譯に幻像及取像とあるは、梵文から見れば、幻象及取像となすべく、又第二十六頌のシナ譯に骨像及取骨は前に例した譯で、骨像は bimbasaṁkalikā を譯したものであらう。

○第二十八頌の最初の abhāvāt はシナ譯では bhāvāt の如し、釋はシナ譯に凡夫の所取の如きは如是如是有體故とある。

○第三十三頌の釋の最後の ity eva は ity evaṁ。

○第三十五頌の所の yathā……dvayalakṣaṇaḥ ‖ は前の釋文につづけ、頌としては下の如く、又釋の初部も下の如く讀む。

iti cittaṁ citrābhāsaṁ citrākāraṁ pravartate |
tatrābhāso bhāvābhāvo na tu dharmābhāsaṁ tataḥ ‖ 35 ‖
P.64
tac cittam eva vastutaś citrābhāsaṁ pravartate |

○第四十一頌の釋 -pariśaddhatvāt は -pariśuddhatvāt。

○第四十二頌の釋の tayā と訂したのは、むしろ yayā か、此論にはかかる場合 yad の變化したのを用ふる。又最後の -vattiḥ は vṛttiḥ。

○第四十五頌の釋、寫本に aparaparyāyaḥ とあるを、譯者は aparaḥ paryāyaḥ と改める。然し、第三十九頌の釋に

已に aparaparyāyaḥ とあり、又第四十七頌の釋に aparo vimuktiparyāyaḥ とある。aparaḥ でも apara- でもよいであらう。

○第五十二頌の釋の tadanyathā bhāva- は tadanyathābhāva-。

○第五十三頌と第五十四頌とは攝大乘論智差別勝相品第十に引用せられる。但し順序を前後せしめて居る。

○第六十二頌の釋の niṣyanda- は通常は niṣyanda- であるから、ここは特別か。恐らく誤植。

○第六十三頌の釋の daśanam は deśanam。

○第七十一頌の nārucih は、釋に arucі- と ruci とに分たれる。

○第七十二頌の釋の -dharbha- は -dharma。

○第七十四頌は攝大乘論應知勝相品の十種散動分別と、基づく般若經を共通となして居る。

○第七十六頌の釋の caturbhir barmaiḥ の bar- は dhar-。

○第七十七頌の adhyapavāde- は釋に adhyāropa と apavāda とに分たれる。

第十二章

○第四頌の最後の……は二綴の缺綴であるが、或は單に tathā などか。

○第五頌の viṣada は前にもあつた字。菩薩地に廣、廣大、上妙など譯される。あまり見ない字。ここに無畏と譯されるのは vaiśāradya(無所畏)の元の viśārada と混同があるのであらうか。

○第七頌は大谷探検招來のAB寫本を參照すると、次の如くであらうといふ。

ādīnā madhurā sūktā pratītā vāg jinātmaje |
yathārhānāmiṣā caiva pramitā viṣadā tathā ‖7‖

○第八頌の釋の anucchavikair は ānu- であらうと見た。前者はパーリ語、後者は梵語。

○第九頌の釋、suvyañjanatbāt は suvyañjanatvāt。○第九頌の釋、(六行)kalā rañjikatvāt がシナ譯に缺けて居る。

○(十五行)vijñāpanīyā 'cintya- はシナ譯では思議法とあるから、cintya であつたのを譯したもの、'cin-e' はない。

○第十九頌の釋に引用する一偈は古くからいはれ、攝大乘論にもいはれるもので、譯す人もあり、音譯する人もある。

非實而作實　顚倒中善住　煩惱善染故　得無上菩提(佛陀扇多)
覺不堅爲堅　善住於顚倒　極煩惱所惱　得最上菩提(玄奘)

○同じく釋に sasaṁkliṣṭā とあるは susaṁ- の誤植。

○第十六頌と第十八頌とは攝大乘論應知勝相品第二に引用せられる。但し散文であつて、順序も逆。

第十三章

○第三頌の釋の nairātmya-bhāvaṁ の -bhāvaṁ をチベット譯によつて -dvayaṁ と改訂するが、すぐ前に dvayaṁ があつて、それの解釋として、明かに nairātmya- を加へたのであるから、何れにてもよからう。寫本には nairātmo-ītavā とあつたのは -bhāvaṁ を誤つて而も -vā を殘して居るのであらう。

○第五頌の jñeyāvaraṇajñānāya の -jñānāya は、シナ譯の爲斷智障故から見ると、-hānāya などであつた。

○第七頌の釋の最後 -ālpākiṛṇā- は -ākiṛṇā-。

○第九頌の subhāvānaiva deśitā と修正したのを、更に sūpāyā caiva deśitā と改められた。シナ譯は、ここを善修及善說となすから、之によれば、subhāvanā sudeśitā となるであらう。釋には…kālena kālaṁ bhāvanātayā…とある。

○第十頌の kṣaṇa は aṣṭāv akṣaṇāḥ 八無暇又は八難の否定辭を省いたもの、Edgerton は birth under favorable condition の譯を與ふ。akṣaṇa には inopportune birth, birth under such circumstances that one cannot learn from a Buddha の譯をなすが、前者は譯と見るべく、後者は說明のみ。パーリ辭典は wrong time, bad luck, misfortune など譯す。故に、kṣaṇa は刹那、時の意味となすのである。釋の -daśavāse は deśavāse の誤植。

○第十六頌は攝大乘論應知勝相品第二に引用せられる。

第十四章

○第五頌の pratyātma は -ātmam。

○第六頌の釋の中の sārthatathā は -tayā の誤植。

○第十頌の釋の pragraha-nimitta-manaskāra の pragraha は菩薩地に擧と譯され、觀と同じに用ひられる。止、擧、捨が止、觀、捨とせられる。パーリ辭典には exertion, energy と譯され、Edgerton 之を踏襲する。

○第十六頌は攝大乘論應知勝相品第二に引用せられて居る。

○第十九頌の釋に、頌の中の yāti niruttaraṁ について、niruttaraṁ yānānantaryāt とあり、第二十八頌 anuttaraṁ jñānaṁ とあるを、其釋に anuttaram yānānuttaryeṇa(寫本に yānānantaryeṇa とあるを改めた)となす。yāna は導くこと、行くこと、道、乘である。ānantarya は無間斷、直接續くことである。

○第二十五頌と其釋の prahīno は通常は prahīṇo。

○第三十一頌の niḥpratikarmaṇi は通常は niṣpratikāra。釋に niṣpratikāra- とある。

○第四十四頌の釋の -mārgamyā- は mārgasyā- の誤植。

○第四十八頌の -sukhe は -mukhe。

第十五章

○最初にある uddāna は菩薩地の力種性品第八の初めにあるものと同じ。ここでは第一頌とせられるが、此論としては引用である。第一行の最後の -deśanā とあるのが、ここでは -deśane となつて居るし、更に第三行に upāyasahitaṁ kāyavāṅmanaskarma paścimaṁ があるのを、ここには除いて居る。菩薩地のシナ譯には

勝解多、求法、說法、修法行、正教授教誡　方便攝三業

とあつて、第三行も譯されて居る。

○第四頌の -yānādvividhāj は、-yānāddvividhāj であらう。子音を重ねない慣例に從つたもの。又、釋の -pādāya は -pādayād。

第十六章

○シナ譯に度攝品とあるは六度と四攝行(卽ち四攝法)とを述べて居るからで、四攝行は最後の八頌。

○第一頌は攝大乘論入因果勝相品第四の最後に引用せられる。此論は以下に述べることの目次の如くになすが、攝大

乘論は六度を述べた結論の如く、總括として揭げる。攝大乘論の說は本論に基づくことが判る。但し、位の義が多く、又四攝行を述べない。

○第四頌の釋の yathākrama は -kramaṁ。

○第十五頌の -paramātha- は -paramārtha- ○六度の語源とは、例せば dāridryasyā 'panayati-iti dānaṁ の如く dā と na とに分解して釋する。他の五も凡て此の如くである。

○第十六頌の釋に、vālukā は vālikā ともせられる。○同じ釋の中 p. 103. l. 16 の tayā は前の同樣の文から見て、tathā(同じく)であらう。○同頁下より七行 -bhāvanāmaya-puṇya は -mayasya-puṇya か。

○第十八頌の eva は evaṁ。○釋の hatuḥ は hetuḥ。

○第三十頌釋の tadvipakṣalābha- の -lābha- は恐らく -lobha-。

○第四十八頌の第二と第四との句及び釋の大半は武內紹晃氏の訂正を採る。

○第四十九頌の hyaduṣkara-suduṣ- は -duṣkaraṁ sudus- であらう。

○第七十二頌以下の四攝法の愛語は priyākhyāna の外に priyavāditā とも priyavacana ともある。同事は samānārthatā であるから同利ともなす。samānasukhaduḥthatā となすもある。

○第七十五頌の最後は恐らく -nādyapi, 又は -nādinā。釋の prathame は prathamaṁ ?

○第七十九偈の釋の prayoga は prayogaṁ。

第十七章

○シナ譯第一頌は梵本の第五頌に當り、梵本第一、二、三、四頌はシナ譯第一、二頌に當る。內容は少異。

○第六頌の cava は caiva。

○第十一頌の釋 dharmālambanāśca は -ālambanā nālambanāśca。

○第十九頌の釋の nispandena は niṣyandena。

○第二十四頌の釋の niṣpandaphalaṁ は niṣyanda- どういふものか。niṣyanda は殆ど全部不正、niṣpanda。

○第二十五頌の śāstrā は釋から見れば śāstā。

○第四十三頌の 'niravadyo は niravadyo-。

○第五十一頌の釋 -saṁbhārasyānyasyākarṣaṇāt がシナ譯に合する。

第十八章

○第二頌は補うたものであるからか、(1 bis)と番號を附する。譯文では(1')とし、以下は元のまま。

○第十頌の釋 nispanda- は niṣyanda- の誤、五果の一は等流果で、等流は niṣyanda で、niṣpanda ではない。

○第三十四頌の -rthastha は恐らく -rthasya、或は元のままでもよからうか。

○第三十九頌の釋(p. 140, l. 1)の -dṛya- と見えるものは -dvaya-。

○第四十四頌の釋(l. 8)saṁcitya- は saṁcintya-。

○第六十一頌の paṣṭha- は pṛṣṭha°. 通常、後得智は無分別智ではなく、世間的分別智である。
○第八十二頌の釋(p. 150, l. 1)に āgamena ca の次に、シナ譯から見れば、yuktyā ca を脱するが如し。manaskāreṇa ……がそれに當るから。○同(p. 150, l. 19) prasahyate は prasajyate°.
○第八十三頌の釋(p. 150, l. 27)-edamimi は -edamiti°
○第八十六頌の cayāyartha- は cayāpārtha (cf. p. 152, l. 12)°. ○p. 154, l. 4 ghaṇṭhā- は ghaṇṭā°.
○第九十五の釋(p. 156, l. 19) kāṣṭādi は kāṣṭhādi°
○第百三頌 a の anūtpādyā は anutpādyā°.

第十九章

○第二十九頌 vinā rūpyaṁ は vinārūpyaṁ であることは、シナ譯から判る(vinā-ārūpyaṁ)。
○第四十七頌は攝大乘論應知入勝相第三に引用せられる。
○第五十頌は攝大乘論應知入勝相品第三の一頌に否定辭を附して引用せられる。
○第五十三、四偈は攝大乘論學果寂滅勝相品第九に引續いて引用せられる。

第二十章—第二十一章

○第十頌の業の失壞は釋によれば(karmānāie)不失壞の誤。
○第二十一頌の次の釋の anulomaḥ の次に pratilomaḥ を入れるべきである。漢藏共に順の外に逆がある。梵文の脱落である。
○第三十七頌 a の釋に -payanta- は -paryanta°.
○第四十三—六十一頌は攝大乘論智差別勝相品第十に引用せられる。但し眞諦譯には多少の相異が見られる。
○第六十頌の釋の佛相の六種は究竟一乘寶性論の身轉清淨成菩提分第八の無垢眞如の八句義の基となつたもので、趣意は同一である。
○最後の mahāyānasūtrālaṁkāreṣu vyavadāna- の -ṣu は實は suvyavadāna- の如く、次の字につくべきもので、シナ譯に極清淨とある極に當る。出版者は Sic ms. となして、改めないが、此ままでは讀めないし、各章の終りの何れにも單に -kāre とあつて、-kāreṣu とはなされて居ない、又複數になる所以はなく、佛譯には現はされて居ない。かかる實例が一三・二九頌に dvayaparipācanaśodhane suyuktaḥ とあるのが、釋に於て -pariśodhaneṣu yukta iti となつて、誤つて居る。チベット譯では、正しく頌の通りになつて居る。-ṣu を kāre- につければ、-ṣu となるのが規則通りである。然し、さうなるべき道理はない。極清淨時とシナ譯にあるのは菩薩名とも思へない。梵文の如く極清淨時の大菩薩というて彌勒菩薩を指すのであらう。シナ譯は大菩薩を省くから菩薩名でなく、時のことをいふと解せられる。釋尊は濁世に出現し、彌勒尊は清淨時に出世するといはれるのが通常。

無上義，應知）　因の故に，智の故に，田の故に，又依止の故に，施は最上であると考へられる

hetuparigraha(92)　因を取ること

hetupratyaya(130 因緣)　〃

hetubhāvena(11 因體)　因たるものとしては，因性によりて

hetuvidyā(70 因明)　〃(因はここでは推論，又は媒概念を指す)論證學，論理學

hetuhīna(12 無因)　因の缺けたる

hetūpalabdhituṣṭiś ca niśrayatadanusmṛtiḥ(71 知因及念依？)　そして因の可得の滿足と所依とそれの隨念と，因の可得に滿足すると所依とそれを隨念すると

hetvadhipatisamanantrapratyaya(131)　因緣と增上緣と等無間緣との緣

hetutva(2 因)　因たること

heya(58 hā)　捨てらるべき

hy aduṣkarasuduṣkaraṁ vīryaṁ(111)　實に精進は難行ではなく又極難行でない，實に精進は難行極難行ならざるもの

hrāsa(153 減息)　減

hrīguṇasaṁniviṣṭa(172 起慚)　慚の功德に透入されたもの

hrībhāvanā(135 修習於羞慚)　慚の修習

hrībhūṣita(134 以慙莊嚴)　慚によつて莊嚴せられたる，…飾られたる

hrīmat(134)　有慚者

hrīviraha(134)　慚を捨てたる，慚を離れた，慚を缺いた

hrīvihita(134 行慙)　慚によつて作された

hlāda(89 無畏)　悅び

svayam eva(130 自然)　〃に
svayambhū(155 自然起)　自然有
svara(80)　音，聲，響
svarasa(92 任運)　自然，自然の味
svarasa(17 自然，任運)　自然
svarasavāhitā(92 任運成自性)　自然に運ばれるもの
svarasavāhitva(17 無生法忍道自然而流)　自然に流れるもの
svargagata(26)　天上界に在るもの
svargārtha(108 求)　天に生れるの爲
svargaloka(105 天)　天界，天上界
svargopaga(83 生善道)　天に行く者，天に近づく者
svargopapādana(26)　天上の生
svarthatva(80 善義)　〃，善義たること
svalakṣaṇa(65)　自相，自の特質
svalakṣaṇavikalpa(76 自相分別)　〃
svalpāvabodha(45 解少)　極小の覺悟を有し
svavaśa(27)　自の自在
svaśānty āsyapuṭa(77)　自己の寂靜の口の孔
svasukheṣu asakta(172 捨樂)　自己の樂に執著しないもの
svasthacitta(34, 35 得定)　健全な，心が健全なもの，定心，自己に住する心
svastharūpa(113)　自然の形相
svahitaparamaśita(87)　自利が最上清涼
svākhyātatā(8 說)　よく說かれたもの
svākhyātadurākhyātāvadhāraṇatas(136 知此是善語此是惡語)　善說と惡說とを決定するから
svājñārtham(sva-ājñā-artham＝svayam ājñārtham 70 求自解)　自己の智の爲に，自の知解の爲に
svātman(89 自心)　自身
svātmani pāramitānāṁ gotraṁ paśyan hetūpalabdhituṣṭyā pāramitādhātupustiṁ karoti(71 我今自見波羅蜜性，知可增長)　自身の中に波羅蜜の種性を見るから，因の可得に滿足するによつて，波羅蜜の界の長養を作す，…波羅蜜の種性(卽ち界)を長養する
svātmatas(50 自力)　自己からのもの
svādu(2)　甘い
svādurasa(2)　甘い味
svādhyāyataḥ(136 習誦，誦)　諷誦から，研究から
svābhāvika(45 自性身)　〃
svābhāvikaḥ sāṁbhogiko nairmāṇikaś ca(188 一自性身，二受用身，三化身)　〃
svāmitva(155)　主人たるもの，主人
svāmībhavan(157 bhū 以人是主者)　主人のあることは
svāyatana(181)　自處
svārtha(4)　自の爲，自利
svārthaniṣṭhām adhikṛtya(35)　これ自利の究竟に關してである
svārthapratipatti(9—10 自利行)　〃
svārthasamyakprayukta(97)　自利の正精進，自利の正加行
svārthādhikārāc ca svaparārthādhikaraṇatvāc ca(115 爲自利故，爲他利故)　自利のみを主とするからと，自と他との利を主とするからと，である
svārthin(52 自利人)　自利を有するもの，自利を作す(又は，願ふ)もの
svālambana(86 善緣)　善所緣
svenātmanānutpatteḥ(67)　自の我によつて不生の故に，自體不生の故に，それ自身不生の故に

svena lakṣanenābhāvāt(95 彼相無體故)　自の相によりて非有であるから，自の特質によつて無なるが故に，

H

hata(180 han)　無くした，取去られた，擾された
hatamāna(175 慢斷)　斷たれた慢のもの，慢の斷ぜられたもの
hanti(123 han)　害する，殺す
hantuṁ kleśagaṇaṁ svato 'pi parataḥ (108 爲殺自他煩惱賊？)　自己からも他からも煩惱の聚を滅殺せんが爲に，殺すべく
hastāmoṣa(111 以手觸物)　手で觸ること
hastitva(59)　象たるもの，象性，象
hastyaśvasuvarṇa(59 幻像，象の誤寫，金)　象，馬，金
hānabhāgīya(165 退分)　〃
hāni(8 退，減，減息)　〃，減退
hānir abhyudayaḥ(37 有增減)　減し又生ずる，減と生と
hānivivṛddhi(114 增減)　退減と增長
hāpayati(102 hā 減)　捨てる
hāpayanti(163 hā 令斷)　斷ぜしめる
hāyiṇ(94＝prahātavya 所滅)　〃の，滅せらるべき
hārya(11 退墮，可奪)　〃，奪はれる，取去らるべき
hitakara(88 欲利益)　利益を作すこと
hitakaritva(88 利群生意)　利益を作すこと
hitakāmyā(148)　利益を願ふによりて
hitāvaha(130 利彼)　利益を持來す，利益を引く
hitāśayeneha(31)　此世に於て利益せんとの意樂を以て
hīna(50 hā 有少，下)　下劣な，劣つたもの
hīnakuśalamūla(12—13 善根不具足)　善根の缺けたるもの，下劣な善根のもの
hīnapūrṇāśrayo dvidhā sajalpo 'pajalpa (or ajalpa)eva(56)　缺けたると充ちたるとの所依の二種で，言と共なると無言のものと
hīnabhūmika(122 下地)　〃のもの，劣地のもの
hīnamadhyaviśiṣṭa(10 下中上)　下劣と中と優れたと
hīnayāna(60 小滅，小心，小乘寂滅，下乘)　小乘
hīnayānaprayukta(124)　小乘に於て精勤するもの
hīnayānaspṛhaṇāt(107 求小乘故)　小乘を熱望するから
hīnaviśiṣṭataḥ(151 劣起亦勝起)　劣性と勝性とから
hīnādhimukti(7 小信，狹劣信解)　少なる信解
hīnānavadyaviṣaya(132 以小無障衆生爲可羞境)　劣にして而も無非難な境を有し
hīnāśaya(122 下心)　劣意樂の
hīnotkarṣasthānād(101 下上)　下上の處から
hīyate(93 hā 遠離，退)　捨てられる，退く，減退する
hīyamāna(74 hā 退屈)　減退しつつ
hṛdayasaṁstuṣṭikarin(80 心喜)　心の知足を作すもの，心を滿足せしめること
heṭhā(124 障)　障礙，惱
heṭhāpaha(124 障斷)　惱を除くこと，障を斷ずること
hetuto jñānataḥ kṣetrān niśrayāc ca paraṁ mataṁ(111 因，智，田，依止…

と

sthitiś cetasa adhyātmaṁ(106 心住)
心が內に住すること

sthitivikrīḍita(143 krīḍ 遊戯) 住遊戯

sthitiviśeṣabhāgiya(122 住分及勝分)
〃，住と殊勝との分

sthairya(51 堅固) 〃

snigdha(79 潤澤) 滑らかな，柔かい，美はしい，喜ばしい

sneha(136) 愛，親愛

snehānugrahajanita(128 愛生及攝生)
親愛と攝受とによつて生じたる

spṛśati(93 spṛś 證) 觸れる，身觸する，徹證する

spṛṣṭaṁ(127 spṛś 證時) 觸れて，觸れると，證したときには

spṛhaṇa(107 求) 〃，熱望

spṛhaṇīyatva(80 深願仰) 欲望を起さしめる，願はれる

spṛhavat(172 有欲) 熱望を有する，喜欲を有する

sphaṭika(26 水精) 〃

sphaṭikavaiduryādimayabuddhakṣetra
(26 水精瑠璃等淸淨世界) 水精琉璃等より成る佛國土(-vaiḍu-)

sphuṭa(78 sphuṭ 無不盡) 開いた，明瞭な

sphuraṇa(10 遍) 滿たすこと，輝かすこと，現はれること

sphurati (9 sphur 遍) 滿たす，輝かす，動かす

smṛter mahābuddhyudaye (29 能起大般若，能生出世般若) 念が大覺を生ずるに於て

smṛtipradhāna(172 持念) 念を主とするもの

smṛtipravṛtta(24) 念の働き

smṛtivīryapratiṣṭhita(106 念進) 念と精進とが確立した

smṛtisaṁprajanya(28 念猗又は倚) 正念と正知と(猗は輕安)

smṛtisaṁpramoṣe tadaniścaraṇatvāt(80 憶不忘故？) 忘念に於てもそれを發言しないから(シナ譯とは一致しない，saṁpramoṣa は忘失で，不忘でない)

smṛtyupasthāna(140 念處) 四〃

syāt(150, l, 19) 恐らく

sraṁsayati(103 sraṁs 有間斷) 止める，絕つ

srāvaṇa(30 治) 流れしめること(ウミを)，切開

sva(5 自) 自己の

svaka(5 自) 自己のもの

svakā guṇāḥ(18) 自己の諸功德

svakārthatā(19) 自利，自己の利たること

svakārthatā kā katamā parārthatā(19二利何差別) 何が自利であり，何れが利他であるか

svakī(77) 自己の

svacittasya ca rakṣaṇā(182) 自心の守護

svacittāt(119 由自意) 自の心から

svacittapūjā(119 自意供養如來) 自心供養

svacittavaśavartī(170) 自心の自在轉，自心の自在を得たる，自心を自在制御せる

svajīvita(126 身命) 自の身命

svato adhi vā śreṣṭhareṣṭāṁ pare(19 愛則於彼勝) 自己よりも或は他が更に一層優れて愛らしいことを見出して(adhi + abl. よりも)

svato 'dhikatarāt sadā parasnehāt (111 愛他過自愛) 常に自己を愛するよりも一層過ぎた他人に對する愛から

svatatva(76 眞實) 自の眞實

svatantra(59 自在) 自在の，獨立的

svadeha(16 身) 自の身體

svadhātutas(63 自界) 〃から

svadhisthāna(86 善護) 善い住處

svaparajana(52) 自己と他人と

svaparaduḥkhaprahāṇakāmatāsāmānyāt
(94 於自他相續，欲作斷苦無差別故)
自と他との苦を斷ずる欲性が共通であるから

svaparavividhabandhanātibaddha(19)
自も他も種々なる繫縛によつて深く縛せられたる

svaparahitasukhakriyāphalatva(13自他利爲果) 自他の利益安樂の所作を果とすること

svaparānugraha(71 攝自他二利) 自他の攝受

svaparārthapratipatti(9 自利行利他行)
自利と利他との行

svaparārthakriyā adhikāraḥ(136 知自利利他) 處理とは自と他との利益を爲すことである

svaparārthāptir uttamā(51 自利與利他)
自他の利益の最上の到達

svaparigraheṣu bhogeṣv asakta(172捨欲)
自己の所有する諸の受用に執著しないもの

svaprakṛtyā ca gotreṇa(29) 自の本性によつて卽ち種性によりて，又自の本性たる種性によりて

svapraṇihitatvacittakaraṇa(89 能調伏未調伏心) 自ら決定した心となすもの，心を自ら決定したものとなす

svapratyaya(8 師心) 自の信知

svaprabhāsanidarśana(37) 自の光の現はれ

svabījād ālayavijñānataḥ(63 自阿梨耶識種子) 自の種子から卽ちアーラヤ識から

svabhājanabheda(49) 自己の器の各別，自己の各別の器

svabhāva(44 自性) 〃，自性身

svabhāvaka(88) 自性のもの？ 自性生のもの？ 自己より生じたもの？

svabhāvakalpana(181 自性分別) 〃

svabhāvada(124 自流？) 自性を與ふもの

svabhāvaprajñaptiparyeṣaṇā(168 自性求)
自性假說の尋求

svabhāvavailakṣaṇyaṁ vṛttivailakṣaṇyaṁ(154 一自性不相似，二時分不相似) 自性上の異相と働きの異相とである

svabhāvārthaviśeṣa(8 自性勝) 自性義の區別

svaṁ dānaṁ kāruṇikaḥ śāstīva(129 悲者敎自施) 悲者は自らに施を敎へるかの如くである

svam āśrayaṁ(98 自身) 自己の所依，自己の身體

svayam(22 自然) それ自身で，自ら，自らについて

svayaṁdṛṣṭiparāmarṣaka (8 自見取，自心取) 自身の見を固執するもの，自見を取るもの，自見に耽るもの

svayaṁ paramajñānavaśitvaprāptyā(27)
自ら最上の智自在に到達したことによつて，自ら最上の智自在の到達によりて

svayaṁ yat pratibhānaṁ(139 能知自能說法故) それは自然に辯才なるものである

svayaṁrata(31 自樂) 自ら樂しみ

svayaṁratatā(31 自愛樂) 自ら樂しんだこと，自ら喜ぶこと，自愛喜

suvākkaraṇasaṁpat(165 口善說)　善說の具足
suvijña(90 極智)　善く識り
suvidhicaraṇa(42)　よく正規に合する行，善規に合する行
suvidhijñatā(84)　善く儀規に應じた知を具すること，善く儀軌方法を知れること
suviniścita(32 ci 知)　よく決定したる
suvinīta(32 nī 斷)　よく制斷したる，よく制したる
suvinītasaṁśaya(32 能斷一切疑)　よく疑を制斷したる
suvipula(13)　極廣大な
suvipulair sarvahāniprakāraiḥ (35 極廣斷)　極廣大なる一切の滅の種類によりて
suvimokṣāya saṁkleśāt prajñājīvasudeśanaḥ(106善脫及命說)　雜染から善解脫する爲に，慧命と善說示と
suviśuddha(25 極淨)　極淸淨なる
suviśuddhiṁ nigacchati(94)　極純淨に達する
suvihita(34 dhā)　よく配置せられた，よく供給せられた，よく爲された
suvyañjanatva(80 善字)　〃，〃たること
suvyavadāta(189 dai 極淸淨)　極淸淨なる
suvyavasthāpita(24 善成立)　よく確立せられたる，よく決定せられたる
suvyavasthita(31 sthā)　よく決心した，よく定めた，よく指定した
suśikṣita(163)　よく學したる
susamāhitātma(172 善定)　よく自己を三昧に入れたもの，自我がよく三昧に入つたもの
susaṁpūrṇaśarīra(35 善滿身)　よく圓滿せられた身を有し，其身がよく圓滿したもの
susaṁbhāra(86 善聚)　善資糧
susaṁbhṛtajñānapuṇyasaṁbhāre (15 善集福智聚)　良く集められた智慧と福德との資糧に於て，智慧と福德との資糧の良く集められたことに於て
susaṁbhṛtasaṁbhāratā (86 善聚福智具足)　善く集聚せられた資糧たること，資糧が善く集聚せられたこと
susaṁvṛta(17 vṛ 善護)　よく護られたる
susaṁvṛti(28 善護)　よく護ること
susahāyaka(86 善伴)　善い助伴
susthita(123 sthā)　善く住した
sūkta(78 善巧)　善說せられた
sūktaduruktayor(29 善惡說)　善說又は惡說せられたことに於て，善說せられたこと又は惡說せられたことに於て
sūktaprakṛtiguṇayukta(2)　善說によつて本性上の勝德を具するもの
sūkṣma(9 細)　微細
sūkṣmasyāvaraṇasya bhūmīṣu gatasyotpāṭanād buddhatā(33)　諸地に存する微細の障を破り去つたから佛たるものが
sūkṣmamānā saptasu (75 少慢求謂初七地)　微慢は七に於てある(初地より七地まで)
sūcana(54)　貫穿，指示
sūtrādidharmanānātvamānasya vibhūtatvāt(178 於諸經法破起差別慢故)　經等の法に於て種々異つた慢が伏滅したが故に
sūtrānta(6 經)　〃，經典
sūtrālaṁkāra(2)　經の莊嚴，經を莊嚴すること
sūtrokta(53)　經に說かれたもの

sūtroddānagāthānipātayāvadudgṛhātayāvaddeśitālambanaḥ(57 修多羅憂陀那伽陀阿波陀那，一受二持三讀四思五說故)　經と綱領と頌と章と，乃至，受せられ，乃至(持せられ，讀まれ，思せられ)說かれた所緣
sūpāya(86 subhāvanā？ 善修)　善方便，善修習？
sūpāsitasaṁbuddhe(15 親近正徧知)　よく親近せられた正覺佛に於て
sūryaikamuktābhai raśmibhir bhibhāsyate jagat(39 日光照，無限亦一時)　太陽に一回放たれた光の光線によつて世間が照される
seka(126 潤)　水灌ぐこと
sevā(72 親近)　〃
sodyama(119 有勇)　勤勇有る
sodvega(12 悲深？)　厭離心を起さんとの熱心の爲に心の激せる
sodvega＝saṁvignacetas(12 悲深？)　厭離心を有し＝其心が厭離せしめん爲に動搖せるもの，哀れむ心のもの
saukhya＝sukha(184 樂)　〃，安樂
saukhyatas(126) 以樂)　安樂から，樂から
saukhyavihāra＝sukhavihāra (41 住…無上樂，無上樂住)　樂住
saukhyārthini(121)　安樂を求めるものに於て
saugatī(77)　善逝の，佛の
saumanasya(51 大喜，慶悅)　〃，心の滿足，愉快，快適
saumukhyasya ca darśanā(165 誕喜)　及び喜の外觀
skandha(125 蘊)　幹
skandhātmatvaprasaṅgāt(154)　蘊が卽ち我であるといふ過失の故に
skandhāyatanadhātvāhārapratīyasamutpādādayaḥ(54 陰界入緣生諦食等)　五蘊と，十二處と，十八界と，四食と，十二緣起と等である
skhalita(187 身失)　〃，誤失
skhaliteṣu nirīkṣaṇā(167 自省)　誤失に於て顧みること
stuti(78 稱讚)　〃
stutyasaṁkliṣṭatva(80)　賞讚に雜染せられないこと
strīpuruṣa(55 男女)　女又は男
sthātṛ(52)　住定者，住者
sthānīya(30)　代表する，當る
sthāpana(27 安置)　住せしめること
sthāpanā bhājanatve ca śileṣv eva ca ropaṇam(161 令器及令禁)　器たることに立たしめること，及び戒に於て實に增進せしめること
sthāpayati(92 sthā 安住)　安住せしめる，住せしめる
sthāpayanti(161)　立たしめる
sthāpitaṁ niṁittaṁ(169 安相)　立たしめられた相
sthāmavat(115 現起)　勢力を有する
sthālīya(？183)　壺，瓶
-sthālīya(183)　(判らない語，sthalīya か)
sthitaṁ svayaṁ(169 自然住)　自然に住したもの，自ら住せるもの
sthitasyāsaṁbhavād ante ādyanāśāvikārataḥ (151 住過及去過，無住無無死？)　住の不可能の故に，最後に於て最初が滅盡し變異するから
sthitacitta(57 住心)　〃，心の住せるもの
sthitacittasya lokottarasaṁpattisaṁpratyayākārābhāvana(57 住心者爲成就出世間故起信…種)　心の住せるものの出世間の成就に對する敬信の行相の修習
sthitātmā(117 不動)　我の固定せるこ

依止と共なる
sāśrayāś cittacaittās tu badhyate 'tra sabījakāḥ(169 依止，及心法，亦種爲彼縛)　然し，種子を有するもの，依止を有する心心法は此點について縛する
sāhāyya(162 佐助)　助伴，助け，援助
sāhāyyakriyāsv akheda(99 助彼所作令不退)　助けの所作に於て疲倦しないこと
siṁha(27 師子)　獅子
siṁhasvaravega(80 師子聲)　如師子音，如師子音力，獅子の音聲の勢力ある
siddha(3 sidh)　成立したる，成立して居る
siddhā hi dharmatā na punar cintyā(168 此法已成故如)　何となれば，法爾は已に完成せるもので，更に思議すべきものでないから
siddhayoganiyojaka(163)　成就せる勤修に促進せしめるもの
siddhi(3 成就，成立)　成立して居る，成立，成功
sukathika(84 巧便說諸法)　善く說くもの，善く說話するもの
sukathikatva(84 善說法)　〃，善說法者
sukathita(42 kath 善說)　善說したるもの，善說せられたる
sukāra(143)　容易な
sukuśala(110 極善)　熟達する，極善であり
sukṛta(2 kṛ)　善く作られたる，善く調理せられたる
sukhair na ca hato duḥkhair na vā vartate(180 不漂，不爲人天勝樂醉其心故，不廻，不爲不成就苦及難行苦，退其心故？)　樂によつて擾されず，或は苦によつても動かない
sukhayati(128 sukh)　樂ならしめる
sukhayāmi(128 nom, verb 樂起)　私は樂になる
sukhalola(122 貪著樂味)　樂を求めること，樂に貪著すること
sukhallika(165 墮善)　樂に耽る(-llika は未詳，辭書文典にも說明が無い，語根 lā, lī より來るか)
sukhavihāra(25 樂住)　〃
sukhasaṁyoga(184)　樂との結付き
sukhasaṁyogākāra(121 起與樂行)　樂と合する行相
sukhasaṁsparśatva(80 得樂觸)　樂觸のもの
sukhasaumanasyabahula(105 得喜樂)　多く樂と喜とのあるもの
sukhahitaiṣin(163)　安樂と利益とを求めるもの
sukhāvati(83)　極樂國
sukhāvaha(121 與樂)　樂を持來すこと
sukhāviyogākāra(121 於有喜衆生聚起不離行)　樂と離れざる行相
sukhitādiṣu(125 於樂受等)　樂ある等に於ても
sukhopapattaye(106 樂生)　樂が生ずる爲に
sugatigati＝sugatigamana(33 善趣)　善趣に行くこと
sugatigamana(104)　善趣に赴くこと
sugatisthitidāyaka(104 善道及持等)　善趣と心住とを與へること
sugupto'pi(134)　善く覆はれて居ても
sugrāhya(81 grah)　善く解せられたる
suceṣṭita(162 ceṣṭ 善行)　〃
sute bāle(89 愛子)　幼き子に對して，幼子に於ける
suteṣu(31)　子等に對して
sutatvabodhaiḥ(174 實覺)　よく眞實を覺するによりて
sutatva(17 眞實)　正しい眞實
sudāna(113)　善施
suduḥkhasītādyadhivāsanā(29 極苦能安忍)　極苦な寒冷等を忍ぶこと，極苦と寒冷等とを忍ぶこと
suduṣkara(111)　極難行
sudūraga(20 遠去)　〃
sudeśana(20 善說)　よく敎授すること
sudeśanā 'nuśāsanyādeśanāprātihāryābhyām(20 善說由隨敎及記心故)　善敎授敎誡と記心との神變によつてである(pra- は prā-)
sudeśika(185 善說)　善く敎へるものよ
sudeśita(7 diś)　よく敎へられたる
sudharma(24 善法)　〃
sudharmatāyuktivicāraṇāśaya(29 深觀妙法理)　妙法性の如理を伺察せんとの意樂，妙法性の伺察の意樂
sudhīra(27)　善賢者，極賢者
sunigdhaparāśraye jane(31)　最上の親情に依る人々に於て
sunirukta(79 開示)　よく語源的に解釋せられた，よく分解せられた，よく解釋せられた
suniruktābhidhānaṁ parasaṁpratyayaś ca(136 善音令他信受)　よく釋義して言詮し，他をして信ぜしめること
sunirmala(111)　極無垢な
suniryāṇaprayoga(86 善出)　善出離加行
sunihīnadhātu(7 小界)　極劣な種性，極劣な界
supācana(30 善成熟)　〃
supratividdha(136 vyadh 通得)　よく通達した
subodhaṁ padārthaṁ(108)　句の義は容易に知られる

subhāṣita(2)　善說せられたる
subhāṣitadurbhāṣitārthasupraviṣṭatā(29 說善惡二義？)　善說せられた又は惡說せられた義によく悟入したこと
subhāṣitasulapita(99 以善說法)　善話善說によりて，よく語られよく話されたことによりて
subhūti(22 須菩提)　〃
subhūmi(86 善地)　〃，善い土地
subhojya(2 bhuj 美膳)　美食
subhaiṣajya(89)　良醫，良藥劑師
sumati(84 慧善)　善思あり
sumahat(34)　極大の
sumitratāditraya(28 近友)　善友等の三
sumitrāditrayaṁ satpuruṣasaṁsevā saddharmaśravaṇaṁ yoniśomanasikāraś ca(28 親近善友聽聞正法，如法思惟)　善友等の三とは善士に親近することと，正法を聞くことと，如理に作意することとである
sumukha(163 舒顏)　〃，良い顏を有する，にこにこ顏をする
sumūla(13)　善き根
sumedhatā(29)　善聰慧
sumeruvat(136 須彌)　須彌山の如く
suyukta(81 yuj 相應)　よく相應せる，よく精勤した
suyoga(86 善寂)　善い相應
suratajātiya(163)　勝喜の類の
suratnagotravat(12 種性寶性，妙寶性)　善寶玉の鑛石の如く
sulapita(99 lap 善說)　善說した，善說すること，よく語ること
sulābha(86 易求)　善所得
sulekha(2 文字)　善き文書
suvarṇa(2 金)　黃金
suvarṇagotravat(12)　金の鑛石の如く
suvasana(134)　良き衣

savilekhalabhahīna(123 有悔亦失利)　後悔あると利の無きと
savivartanāśa(25 成壞事)　成壞を有する
savivāsa(75 有障)　排斥ある
sasaṁbādhagrhasthāśraya(56)　逼迫を有する在家者の所依となるもの
sasaṁbādhāśraya(56 依止)　逼迫を有する所依
sasaṁbhārasaparivāragrahaṇāt(100)　資糧を有するものと眷屬を有するものとを攝するからである
sasatva(25)　衆生を有する
sasādhana(135)　能立と共に，能成立と共に
sasya(16)　穀類
sahagata(16 相應)　俱行する
sahacārin(85 次第無間起)　俱行する所の，同行の
sahadhārmikacaryā(104 善行)　同法者の行(Edgerton はこの同法者の譯について色々論ずるが，法の字の理解の不足による氏の臆測誤解，他說を排するのは氏の場合には無理)
sahadhārmikair jinasutair vinindyate (133)　同法者によつて，また勝者の子によつて非難される
saha buddhyā(83)　菩提と共に，菩提と俱なる
sahasaṁmūrchana(151)　增長を伴ふもの
sahātmanaḥ pāramitāsātatyakaraṇādhimokṣārthaṁ(74)　自己と共に波羅蜜を常に行じて信解を得る爲に
sahāya(132 伴類)　助伴
sahāvidyā(63 共無明)　無明と共なるもの
sahodaya(17)　起ると共に
sahana(29 耐)　堪忍，耐忍
sahasra(9)　千
sahāyaiḥ parivārita(7 伴)　同伴に圍繞せられたる
sahita(1 =saṁhita, dhā, 相應)　〃せる，適切な
sahita(40 dhā)　伴うた，結合した，助伴，關係した，連絡した
sahita(80 有益)　〃，利益，結合ある，伴うた，關係ある，關係せる
sa hi na tathābhāvo yathā kalpyate svena lakṣaṇena bhāvaḥ(95 此相如分別性無體故)　何となれば，それは妄分別せられる如き此の如き有ではなく，自身の相(特質)によりて有であるからである
sahiṣṇutā(11 耐忍)　耐へること，忍ぶこと
sa hy aviparyayas tatvād vastvābhogaḥ (118 由如法不倒故？)　何となれば，彼は顚倒せずして眞實から事物に功用するが故に
sā antena dvayena saṁgrhītā(100)　その學は後の二によつて攝せられる
sā punaḥ pañcopādānaskandhāḥ kleśadauṣṭhulyaprabhāvitatvāt(23 非無緣者，煩惱習氣所起，緣五受陰故)　又それは五取蘊である，煩惱と麁重との所顯たるものであるから
sā hi sarvasatvārthakriyāhetutvāt mahārthā(95)　何となれば，その大義は一切の衆生に對する利益を作す因たるが故であるから
sā hy abhāvatā ca sarvadharmāṇāṁ parikalpitā(65)　そしてそれは實に一切諸法の妄分別たるその非有である
sākalya(48 一切)　完全であるもの
sākṣātkriyā(148 作證)　〃，直觀，實現
sāṁketika(9 世俗)　施設，俗諦，慣用の
sāṁketika(14 世俗)　世俗の，施設の
sāgara(90 海)　大海
sātasahagata(106 樂俱)　樂俱行の
sātatya(92 恆修)　〃，常恆
sātatyasatkṛtyaprayoga(50 恆行及恭敬行)　常恆の尊崇をなす加行
sātatye(89 -tya)　繼續して
sātatye samādhānācyutāv api(166)　又，常住の三昧の不退に於て
sātatyena(91 無間)　常恆に
sātatyasatkṛtyadharmadeśānāt (120 於一切時恭敬說故)　常恆に恭敬して法を說くからである
sādhaka(88)　能成立，證明するもの
sādhana(140 成就，成)　成ずること，成就，能立
sādhayati(37 sadh 得成)　證明する，能立する
sādharmya(12)　相似の，同法の
sādhāraṇakarmakatva(45 同一所作)　共通の業をなすこと
sādhāraṇakarmatā(39)　共同の業をなすこと
sādhāraṇaphalecchā ca yathābodhādhimucyanā(71 共果與信解？)　また共果の欲と覺の如きの信解と
sādhikaraṇa(123 治罰)　諍論有る
sādhiṣṭhāna(151)　依止を有するもの
sādhumati(66 善慧)　〃
sādhumatī(182 善慧)　〃地
sādhya(2 sādh 令信向)　成立せらるべき，所成立
sānurakṣa(130 自量)　保護を有する
sābhilāpa(138 可言)　〃，有言說の
sāmarthya(157)　堪能，可能，能力，可能性，功能

sāṁparāyikaṁ dṛṣṭadharmasāṁparāyikam avadyaṁ prasavati(123)　後世，又は未來，と現在未來との罪を生ずる
sāṁbhogika(104 受用身)　〃
sāṁbhogyakāya= sāṁbhogikakāya(45 食身)　受用身
sāṁbhogikakāya=sāṁbhogyakāya(45 食身)　受用身
sābhisaṁskāra(92)　爲作と共なる，有作の，有行の(有行般涅槃の有行)
sāmānyalakṣaṇa(109 平等相)　總相，共通相
sāmīcīpratipanna(84)　和敬行者，和合行者
sāṁvṛta(5 vṛ 緣俗)　俗諦的な
sārabuddhi(82)　堅固の覺
sārthakya(77)　有義なる
sārthatayā(91)　義を有することによりて
sārtha(41 義)　境と共なる(境は五塵卽ち五境)
sārthavāha(174 導師)　隊商主
sārthodgrahaparāvṛttau(41 如是義受轉)　境と共なる受の轉依に於て
sārdhaṁvihārin(164 弟子)　〃，同住者
sāloka(180 明信)　光明を有するもの
sāvadya(8 罪，離慚羞？)　罪，罪有る
sāvadyaparibhogapratiṣedhataḥ kāmasukhallikānuyogāntasya (53 爲離樂行邊遮有過受用)　欲樂に耽著する一邊に對して，罪ある受用を遮するから
sāvaraṇa(50 有障)　障を有する
sāvidyāklesavṛttayaḥ(63 癡共諸惑起)　無明と共なるものと煩惱とによりての生起がある
sāśraya(168 依止)　依止を有するもの，

羅蜜と結合せる經を信解せる者のそれ

sarvaprakāra(47)　一切の種類の，一切種の

sarvaprada(110 普施)　一切に施すこと

sarvabodhisatvaikakāryatvapraveśataś ca(119 一切諸大菩薩和合一果，入一切果故)　一切の菩薩が同一果に入るが故に

sarvabhājanalokasaṁpattayaḥ(17)　一切の器世間の成就

sarvamārapratyarthikavijayapūrvaṁgamatva(80 破魔初)　一切の魔の敵對に打勝つに先立つこと

sarvayānāpadeṣṭāraḥ(163)　一切の乘を指示する人々

sarvayānopadeśagatatvat sarvagatā vṛttiḥ(36 遍授轉，謂轉依已恆以一切乘而敎授故)　一切の乘を敎へることに至つたから遍行の轉である

sarvarakṣāpayāna(35)　一切の守護を離れたること

sarvalokaśreṣṭhātmabhāvatā karmāvinivartanīyabhūmau(29 得一切世間勝諸地，不退，是名悲業)　業は不退轉地に於ける一切世間の最勝の身たること

sarvalaukikārthadṛṣṭāntadharmapariṇāmikatva(81 世間法義皆譬喩令解)　一切の世間的の義を譬喩法によつて移變すること

sarvavikalpaprapañcāsamudācāra(188 一切法中所有分別皆不行)　一切の妄分別戯論の不現行

sarvavyasanasaṁpattivyāvṛttyabhyudaye(35)　一切の不幸又は幸福の除却又は昇進に關して，…對して

sarvasatvadvayādhānasarvathā 'kṣayatā phalaṁ(44 利樂化衆生，此果亦無盡)　果は一切の衆生に二を與へるも二が全く無盡なことである

sarvasatvasaṁtānikena(95)　一切衆生の相續に屬するものによりて，…相續にあるものによりて

sarvasatvasādhāraṇa(103 與一切衆生共之)　一切衆生に共通なこと

sarvasatvārthakriyātadadhīnatva(7)　一切衆生の利益を作すことのそれに依止して居ること，一切衆生の利益を作すことがそれに依止して居ること

sarvasatvendriyasaṁtoṣaṇī(80 衆生根喜)　一切衆生の根の滿足するもの，一切衆生の根を滿足せしめる

sarvasamayaṁ(42)　一切時に

sarvasaṁskāreṣu ca nityasukhāsadgrāha(73 非常爲常，…非樂爲樂非有取)　一切諸行に對して常住安樂なりとなす二の無の執

sarvasiddhipūrvaṁgamamaṅgatva(80 初得吉祥，一切事成)　一切の成就に先き立つて吉祥があること

sarvasvaparityāgāt(110 以一切物施一切故)　一切の自己のものを施捨するから

sarvasvarapūraṇī(80 滿足)　圓滿一切音聲，一切の聲を圓滿するもの

sarvākārabodhyupagamatvāt(188)　一切種の菩提に至るが故に

sarvākāralakṣaṇa(80 一切種相)　一切の種類，特相(文法上の種類や定義特質などであらう)

sarvākārajñatā(33 一切種智，種智)　〃，一切種智位，一切種智たること，一切種智

sarvākāravaropeta(81 一切種成就)　具足一切種妙，一切種の優れたものを具足した

sarvācintyasthānanirvicikitsatā (28 一切不思議處究竟無疑)　一切の不可思惟處に對して疑の無いこと

sarvātmaka(56)　總てを含める

sarvādhigama(21)　一切の證得

sarvāniṣṭoparipātair akṣobhyatvāt(16 諸來違逆心不動故)　一切の非可愛事が落ちかかつても不動であるから

sarvāpakāra(108)　一切の作害，一切の不饒益

sarvārtha(93 一切義)　〃

sarvārthakartā(95)　一切の利益の作者，一切義の作者

sarvārthapratibhāsatva(93 諸義悉是光)　一切の義の顯現たること

sarvārthavṛttau sarveṣāṁ guṇadvādaśaśatodaye(41 諸義遍所作，功德千二百)　一切の五根の一切の五境に對する働きに關して(働きに於て)，又千二百の功德の生ずるに關して(生ずるに於て)

sarvārthasiddhyai(168 二利爲大業？)　一切の利益を成就する爲に

sarvāryapudgalayātānuyātatvāt(16—17 大聖先行餘隨行故)　一切の聖人が行つた所に後のものが隨ひ行くから

sarvāvaraṇanirmala(33)　一切の障からの無垢，一切障の無垢

sarvāvasthaṁ(16 一切時中)　一切の位に在つて

sarvāstidāna(113 捨一切)　一切の所有物を施すこと

sarvāstiparityāga(129)　一切の所有物を捨すること

sarvecchāparipūraka(100 滿願)　一切の所欲を滿たすもの

sarvaikakāryatvaniveśataś ca(119 和合)　又，一切が同一果に入ることから

sarvopakaraṇanirantaravighatī(103 乏一切資生)　一切の器具の不斷に缺乏しつつ

sarvatas(44 一切種)　一切から，一切處に於て，普ねく，全く，完全に

sarvatas tathatājñānabhāvanā samudāgamaḥ(44)　修證は眞如の智慧の一切からの修習である

sarvato 'pramāṇaṁ dharmāvabhāsaṁ saṁjānīte(181)　遍知一切種不作分段故？)　一切から無量の法光明を知る

sarvatraga(8 一切遍)　一切處に遍ずる，一切處に至る，普遍の

sarvatragasaprabhedeṣu(25)　一切處に遍ずる差別を有するについて

sarvatrārtha(9 一切遍義)　一切に遍ずるといふ義

sarvatva(11 普攝)　一切性，一切

sarvathā(44 恆)　全く，一切の方面で

sarvathā hitasukhadvayādhānākṣayatā(44 於一切時與一切衆生利樂二果恆無盡故)　凡ての方面に於て利益と安樂との二を與へることの無盡なこと(ādhāna 置く，與へる)

sarvadā(163)　一切時に

sarvadodyamavantaḥ(163)　一切時に勤勉を有するもの

savāsanakleśaviśuddhitaḥ(65 由漏習俱盡故)　習氣と共なる煩惱の清淨の故に，習氣を有する煩惱から清淨なるが故に

savitarkaḥ savicāraḥ(91 有覺有觀)　〃，有尋有伺

savitarkasavicāra(57 有覺有觀)　有尋有伺

savilekha(123 有悔)　後悔有ること，vilekha は搔くこと，傷くこと，困惑，困惱，後悔

三菩提を明晰にすること，三菩提を清淨にすること

saṁbhāra(4 聚)　資糧，準備のもの，材料

saṁbhāradvayapūraye(118 爲滿於二聚)　二資糧を滿たす爲に

saṁbhāraparipāka(71 聚滿)　資糧の成熟

saṁbhāramārga(6)　資糧道

saṁbhinnapralāpa(110 綺語)　〃，雜穢語

saṁbhinnālambana(56 別緣)　別れた所緣，別々の所緣

saṁbhṛta(50 bhṛ 有聚)　〃　聚集せられた，(二資糧が)集められた

saṁbhṛtasaṁbhāra(90 聚集福德已)　資糧を既に集め終つたもの

saṁbhṛtasaṁbhārasya(56 由福智二聚圓滿故)　資糧を積集せるものの，其資糧の已に積集せられた人の

saṁbhṛtān mocayanty āśu(163 令脫)　聚集せられたが故に速かに解脫せしめる，聚集せられたから速かに解脫せしめる

saṁbhṛti(139 聚)　資糧

saṁbhṛtya(23 bhṛ)　聚めて

saṁbhoga(16)　受用

saṁbhogabuddhatā, -tva(46, 47)　受用佛，受用佛たるもの

saṁbhogabuddhatājñānapratibimbodayāt(46 餘身及餘智，像現從此起)　受用佛と智との像がそれから起るから

saṁmarṣaṇa(99 忍懋)　惱害を忍ぶこと

saṁmānayati(25 man)　恭敬する，供養する

saṁmānahāni(133)　尊敬を失ふこと，尊崇を失ふこと

saṁmukha(166 現前)　現前のもの

saṁmukhaṁ(118 現前)　〃現前に

saṁmukhībhāvataḥ(184)　現在前するが故に

saṁmūḍha(58 muh 不識)　愚にせられた，愚癡に掩はれた，不識の，愚癡な

saṁmūḍhabuddhi(58)　覺の愚にせられたもの，覺の愚癡に掩はれたもの

sammūrchana(151 增長)　〃

samyak(4)　正しい，正

samyaktvadeśanā(170 應說)　正しきことを敎示すること

samyakpratipattitathatā(168 正行如)　正行眞如

samyakprayoga(74)　正加行

samyakpravicayo jñeyaḥ samādhānapratiṣṭhitaḥ(106 正擇與定持)　所知は正簡擇，三昧に入つて立つこと

samyakpraśaṁsā(97)　正稱讚

samyakprahāṇa(141 四正勤)　〃(samyakprahāṇa ともあるが，prahāṇa は俗語の影響のあるもので，pradhāna が雅語にて正しい形，pradhāna は勤，prahāṇa は斷，シナ譯は何れをも用ふるが，原梵文に兩字が用ひられて居るからである，パーリにも padhāna も pahāna も用ひられる．然し斷 prahāṇa, pahāna たる所以は，古くは，存しない，誤つた混同の結果である)

samyaksaṁbodhi(4 大菩提)　正等覺

samyaksvārthaprayukta(97)　正しい自利に精勤する

samyag iti na mithyā(106 離邪業？)　正とは邪でないことである

samyagdṛṣṭi(7 正智)　正見

samyagniryāṇavaktāraḥ(163 開出要)

諸の正しき出離を語るもの

saras(153)　湖

sarita(80 sṛ 常流)　廣普，流れた，常に流れる

sarvāsāṁ vīryasahāyatvāt(100 由一切三學精進爲伴故)　一切の波羅蜜に精進が伴はれるものであるからである

sarveṣāṁ uparisthita(181)　一切の上位に立つたる

sarvakarmāntavikṣepāṇām apravṛtteḥ(100 一切業亂不能轉故)　一切の業の散亂を行はないから，…散亂を起さないから

sarvakleśagaṇa(34)　一切煩惱群

sarvakleśajñeyāvaraṇavyādhipraśamanāt(16 惑智二病此能破故)　一切の煩惱と所知との障の病を滅するから，煩惱と所知との一切の障といふ病を治癒するから

sarvakleśānuśayavāsanāvisaṁyuktatva(80 諸惑習氣不相應)　一切の煩惱隨眠の習氣の離繫たること，一切の煩惱隨眠の習氣を離れたること

sarvaga＝sarvagata(36 遍)　遍ずる(78 遍敎授)　一切に至る，遍き

sarvagātmika(36)　遍行性

sarvaguṇaratnānāṁ tataḥ prabhāvāt(16 功德法寶從彼生故)　一切の功德の寶がそれから生ずるから

sarvajanatā(108)　一切の人々が

sarvajñajñānamārga(6 一切智道)　一切知の智の道，一切知者の智道

savajñatā(53 一切種智)　一切智

sarvajñatva(70 種智，一切種智)　一切智たるもの，一切智

sarvajñeyagocara(5 解一切)　一切の所知を境とするもの，其境が一切の所知であるもの

sarvajñeyasarvākārabodhāt(175 覺一切境一切種故)　一切の所知の一切の行相の覺の故に

sarvatīrthyakumatidṛṣṭivighātabalagunayuktatva(80 具足功德，破諸外道惡邪見)　一切の外道の惡慧と邪見とを破する力と功德とを具して居ること

sarvaduścarita(34)　一切の惡行

sarvadehin(141)　一切の有身者，一切の人々

sarvadharmāś ca buddhatvaṁ(34)　そして佛たるものは一切諸法である

sarvadharmadvayāvāratathatāśuddhilakṣaṇa(44 二障已永除，法如得清淨)　一切諸法の眞如二障からの清淨なことが特質である，二障から一切法の眞如は清淨なるを特質とするもの

sarvadharmaniḥsvabhāvatva(5 一切法無自性)　一切諸法無自性たること

sarvadharmaviśiṣṭatvāt(36 一切法中而得自在故)　一切諸法中の殊勝であるから

sarvadharmavyapeta(34 離法)　一切法を離れたる

sarvadharmasamatā(139 平等)　一切諸法の平等性

sarvanirvikalpajñānāśrayatva(3)　一切の無分別智に依止することによりて

sarvaparapravādibhir anācchedyatva(80 一切外道無能斷)　一切の外論者によつて斷破せられないこと

sarvaparṣadanuravita(80 遍一切聲)　響普入衆會，一切の會衆に響くもの

sarvapāramitāpratisaṁyuktaṁ sūtrāntam adhimucyamanasya(102 於諸波羅蜜相應敎，而生信心故)　一切の波

こと
samucchinnakuśalamūla(12 普斷諸善法) 其善根の全く斷ぜられたもの，全く斷ぜられた善根のもの
samucchedana(98 斷) 〃ずること
samutthāna(54 起，集起＝utthāna) 等起
samutthānam āpattīnām ajñānāt pramādāt kleśaprācuryād anādarāc ca(55 起者罪緣起，此有四種，一無知，二放逸，三煩惱疾利，四無恭敬心) 等起とは諸の罪についての無知から，放逸から，煩惱夥多から，尊重することの無からである
samutthitatva(98 sthā 聚集) 等起したこと
samutpāṭana(144) 破，滅
samutpādya(16 pad 發心) 起されて
samudāgata(7 gam 熏習) 起つたる
samudāgama(20 修) 證得，修證
samudāgamatas(168 果) 證得から
samudāgamatva(14) 證得，得ること，達すること
samudāgamamahatva(171) 證得の大性，至得の大性
samudācārasyāpy abhāvāt(178) 現行すらも無なるが故に
samudācarayoga(69) 現行の精勤
samudācārataḥ(118) 現行から
samudānayet(104) 修證するであらう
samudānīta(11 nī 習種) 習所成，生起したる，育つたる，完成したる
samudāhṛta(44 hṛ 所說) いはれた，說かれた
samudīkṣate(98 īkṣ) 見る
samudghāta, -tana(107, 108 ghaṭ 斷) 斷じた，斷じたこと，斷，終
samudghātita(？12 ghata, han 普斷) 滅盡した，除かれた，開かれた
samudghātitaśukladharma(12 普斷諸白法) 白法を全く滅盡したる，其白法が滅盡せられたるもの
samudbhava(18 bhū 起) 生ずること，起，生
samudra(44 亘海) 大海，海
samudraparyantamahāpṛthivīgamana(114 大地闊邊馬速窮) 海を限りとする大地中に行くこと
samupasthita(18 sthā) 起つたる
samupeta(128 i 習) 引受けた，近づいた，具した
samupaiti(26 i 現) 〃，興す，得る，至る
samūla(24) 根本心と共なる，根本心を有する，有根の
samṛddhi(16 成就) 增長，成熟
sametya(104 i) 行きても
samoha(111 癡) 癡と共なる，癡を有する
samohaṁ sarveṣāṁ ythāyogakliṣṭāklisṭena mohena(111 癡者彼三人禪，如其所應，有染癡，無染癡故) 癡と共なるものは一切のものの其所應の如き染汚と無染汚との癡によつていふ
saṁpakva(175 已熟) 已成熟の
saṁpat(98) 成就
saṁpat(80 pad) 成就，爲し遂げること，爲し終ること，…を具する，具足
saṁpatti(35 勝位) 幸福，成就
saṁpattikāla(18 成，成就時) 成功の時
saṁpattiniyatipāta(166 財成決定) 成就の決定墮
saṁpattisukheṣv asaktatā(181) 成就の樂に對しての無著
saṁpadyate(131 pad 令得增長) 完全になる，得る，行ずる

saṁpanna(12 pad 成就) 〃せる，具足の
saṁpannacintāmayajñānāśrayatva(80 成就思因智依止) 完全な思所成智の所依止のもの
saṁpannadeśanā(78 說成就) 成就せる敎，完全な敎
saṁpannaśrutamayajñānāśrayatva(80 成就聞因智依止) 完全なる聞所成智の所依止たるもの
saṁparivarjanīya(76 vṛj) 避けらるべき
saṁpādaka(80 成就) 生ぜしめる，完成する
saṁparkagata(134) 集合の中に在る，交際に在る
saṁpādana(19 成) 成就すること，成就せしめること
saṁpādayeyam(72 pad 求成就) 私は完成するであらう
saṁpiṇḍita(24 piṇḍ 總聚) 〃，密合せる，集合せる，丸め積んだる
saṁpiṇḍitadharmālambana(24作總聚緣) 總聚法を所緣となす
saṁpūrṇa(90 pṝ 集滿) 滿ちた，滿たしたる
saṁpūrṇakāya(178 滿法身) 圓滿身
saṁpūrṇadharmakāya(178 滿法身) 圓滿せられた法身，法身を圓滿したもの
saṁpūrṇabhoga(113) 財の充滿せる，充滿せる財を有する
saṁprakāśita(64 kāś 開示現) 開演せられた
saṁprakhyāna(57 正憶) 〃，明晰，淸淨にすること，混亂しないこと(Edgerton, Dic. に asaṁmoṣa と同じとある，然らば，混亂なきこと，無忘失であつて，正憶となる)
saṁprakhyānanimitta(58 境光？) 明晰の相
saṁprajanya(143 正智) 正知，(23 猗又は倚)正知
saṁpratikhyāna(141 相似？) 顯現，所顯現
saṁpratīccha(72 領受) 〃，受領
saṁpratīcchana＝sampratīcchā(72 領受) 〃，受領
saṁpratyaya(57 信心，信，知) 敬信，深信，信賴，信，確信
saṁprapattaye(28) 歸向の爲の
saṁprapattikṣama(13) 成就に適する，成就に堪へる
saṁprayukta(56 yuj) 相應したる，相應
saṁpravatsyati(18 vas 作) 住するであらう
saṁpravarjana(29 離) 捨てること
saṁpravartate(20 vṛt) 行ふ
saṁpravartante(63 vṛt) 起る
saṁprasthita(124 sthā) 發趣せる，出で立てる
saṁbaddha(45 bandh 合) 結合したる
saṁbaddhasādṛśyavacanair(21 若事相應及以相似) 適合し相似せる言語を以て，結合關係し相似せる言語によりて
saṁbandha(56 迫迮) 逼迫
saṁbandhanīyaṁ(92) 續くべきである，結付くべきである
saṁbandhavaśa(152 依止自在) 結合の自在力
saṁbuddha(15 budh 正徧知) 〃 者，正覺佛
saṁbodha(157 三菩提) 〃
saṁbodhi(4 大菩提) 等覺，正覺
saṁbodhisaṁprakhyāna(57 於菩提正憶)

samatā＝samatājñāna(46 平等智)　〃，平等性智
samatā sarvasattveṣu dṛṣṭaś cāpi mahātmikā｜(p. 74離墮衆生邊,大義,及轉施, paraguṇapratikāras trayāśāstir nirantaraḥ ‖v.69‖ 究竟，與無間，如是復五種)　一切の衆生に對しての平等性，及び又大自在の見，最上功德の報恩，三の希願，無間がある
samatāpravṛttyabhisaṁskaraṇa(74)　平等性の働きを作すこと
samatāśaya(125 平等)　平等意樂
samatekṣaṇāmanaskāra(74)　平等性觀察作意
samanantarapratyaya(131 次第緣)　〃，等無間緣
samanaskāra(92)　有作意，作意を有するもの
samanukampaka(86 憐愍)　〃な，同情ある
samanupaśyat(71 paś)　見るから，見つつ
samanuśāsti(129 教授)　〃
samantaka(57)　普ねき
samantataḥ(24 徧)　普ねく
samanantarāyām(119 無間)　無間の趣に於ける，直後の趣に於ける
samantas(92)　普ねく
samatāgamana(65 證平等？)　平等性への到達
samantāt(43)　普ねく
samanvaya(30)　具足
samanvāgatatva(29 gam)　具足したること
samanvāgama(44 gam)　具足
samanvita(44 i 具足)　〃したる，具足して居る，相應したる，結合したる
samapravṛtti(3 同行，一時同行)　同一時の存在，同一時に存すること
samaprāpta(91 正住？)　平等に達せる
samaya(189 時)　〃，宗
samartha(20)　堪任，可能，資格ある
samavaghāta(55 開許)　遮廢，廢放
samavadhāna(83 恆值佛)　值遇，合，俱會
samavadhānāt(99 令定)　三昧に入るから（通常は值遇，俱會，佛に會ふの意味であるが，合するの意味で，ここでは心が三昧に入ることをいふ)
samavahitapratyayatva(50 無障？)　會うた緣があること，緣が會うたこと
samasta(55 合)　合せられた，合したる，合して
samastam(99 具)　總じて，總說すれば，略して，要を取つて
samastānāṁ vyañjanānāṁ(91)　總の諸の文の
samahitakāma(110 平等利益作)　平等の利益の欲がある，平等に利益する欲
samākhyāta(100 khyā 說)　說かれた，いはれた
samāgacchati(187 gam)　遇ふ
samācāra(11 大行)　實行，行，行事
samātta(100 dā)　受持した
samādatte(100 dā)　受けた時に，受戒した時
samādāna(14 受，99 受持)　〃，受けること，誓
samādānaśīla(107 戒)　受戒
samādānasāṁketika(14 受世俗)　〃
samādāpana(116 待勸，建立)　勸發，勸めること，勸發せられること
samādāpanā kartavyā bhavati(19)　作すべきことが勸發である

samādāpayati(32 dā)　勸導する，勸發する
samādāya(116 dā)　纏めて(？)(シナ譯の建立が之に當ると思はれる，建立は又 samādāpana(勸發)をも譯す，然らば samādāya は samādāpana の gerund と同じと見るか，？，企てて？
samādhāna(96 定)　samādhi と同じで，三昧，定，三昧に入ること(samādhāna の一般の意味は回答で，反駁に答へること)
samādher udakasthānīyatvād acchatayā (62 定則如水…由彼澄淨…)　三昧は清淨なることによりて水に當るものであるから
samādhigocara(58 定所行處)　〃，三昧の境又は對象
samādhijñānavaśitām anuprāpta(185 定智得自在)　三昧と智との自在に達したものよ
samādhitraya(148 三三昧)　〃
samādhin(52 外，定人)　三昧を有するもの
samādhiniśritya bhāvanāt(24 依定心而思惟故)　三昧に依止して修習するが故に
samādhipramukha(106)　三昧を上首となすもの
samādhiyoga(51 定相應)　三昧と相應せること，三昧との結合
samādhivikrīḍita(26 遊戲諸定)　三昧遊戲，三昧に遊戲せる(戲戲は同)
samādhisaṁniśrita(56 依定)　三昧に依止したるもの
samādhyaparihāṇi(166)　三昧の不捨
-samāna(39)　の如き，に等しき
samāandhimuktidhātuka(7 相似信界)　等しい信解界を有する，等しい信解種性(種子)を有する
samānuyātena samantaḥ(24 平等遍行)　遍ねく平等に隨行するによりて
samāpatti(106 禪定)　等至
samāpadyante(170 pad)　入る，至る
samāpādita(77 pad)　導かれた
samāpti(96)　終
samāpnute(133 āp)　得る，達する
samāpyāyita(96 pyai)　元氣のよい，元氣のある
samāpyāyitacetas(96 pyai 資養)　元氣のある心，その心の資養せられたもの
samāra(26)　魔と共なる，魔を有する
samārūḍha(124 ruh 住)　上つた
samāropa(60 立)　增益(無を有と執著すること)
samāropāpavādāntapratiṣedhārtham(60 有邊爲遮立，無邊爲遮謗)　增益と損減との邊を遮せんが爲である
samārthatā(116 同利)　〃，同事
samāvara(105 行善行？)　守護，掩ふこと，妨げること
samāviṣṭa(47 viś)　入つたる，透入したる＝niviṣṭa
samāśaya(162 等心)　等しき意樂
samāśāsti(90 求)　希求
samāśāṣṭi(109 求)　願ふこと
samāśrita(32 śri 依止)　依止したる，依止して
samāsena(11 略說，略)　略說すれば
samāsasaṁgraha(176)　略攝，總攝
samāsatas(12 略)　略說すれば
samāhita(93 dhā 得定心)　三昧に入れる(此の如くになつて三昧に入れる彼菩薩は)
samāhitena cetasā manojalpair(56) 三昧に入れる心の意言によつて
samīpanayana(128 將導)　近くに導く

sadṛśin(52 譬)　如し
sadṛṣṭikaṁ yaccittaṁ(64 共及心及見)　すべて見と共なる心なるもの
sadevamānuṣāsuraloka(22 一切世間天人阿修羅)　天人阿修羅と共なる世界
sadaikāryā vartante lokam ālokanti ca(39)　常に同一所作が起り，そして世界を照らすが如く
sadoṣa(8)　有過悪
sadautsukyaṁ…ghanaṁ(72)　常に純なる愛勤がある
saddharma(3)　正法，妙法
saddharme yuktivicāraṇākṛta āśayaḥ(30 妙法道理作心觀察)　妙法に於ける如理の伺察を起す作意，妙法に於ける如理の伺察に起された作意
saddharme vetti ca satvān pravinetuṁ (35 妙法化衆生)　そして妙法に於て諸の衆生を化することを知る，そして正法に於て諸の衆生を如何に調伏すべきかを知る
saddharmaparigrahaṇatayā(78 攝治正法)　正法を攝受することによりて，正法攝受によりて
saddharmasaṁbhoga(171 受用正法)　正法の受用
saddharmālambanatā(86 妙法爲緣)　正法を所緣となすこと
sadyas(114)　直ちに，同日に，最近に
sadyaḥphala(147)　直接の果
sanidarśana(54 可見)　有見
sanidānasthitimuktyā(99 有因及心住，解脫)　有因と心住と解脫とによりて
sanimittika(142 有相)　〃，相を有するもの
santas tathābhāvād abhūtaparikalpatvena, asantas tathā 'bhāvāt grāhyagrāhakatvena(61 如是體說有者，由虛妄分別故，說非有者，由能取所取＝體與非體無別故)　有は此の如く非有であるから，これ非實の妄分別たるに由つてである，無も此の如く非有であるから，これ所取能取たるによつてである
sanmitra(6 法朋)　善友，善知識
sanmitreṣūpanikṣipati(162 付善友)　善友に委ねる
saparyāya(135)　異名と共に
sapta triṁśac ca ākāra bhavanāgatāḥ(56)　また三十七の種類の修習にあるもの
saptaratnaparipūrṇa(102)　七寶を以て滿たせる
saptasaṁbodhyaṅga(57 七覺分)　〃，七菩提分
saptasu bhūmiṣu(75)　七地に於てある(これ初地より七地までをいふ)
saphala(168)　果と共なる，果を有する
saphalaṁ dānaṁ dattaṁ tan me satveṣu tatsukhasukhena(129 施及於施果，普施於一切)　果を有するその施が，私によつて，諸の衆生に對して，其樂を樂として，施された
sabījaka(169 種)　種子を有するもの，種子と共なるもの
sabījābījabhāvena(151 種起無種起)　有種子性と無種子性とによりて
sabrahmacārin(123 梵行人)　同梵行者
sa bhagavāṁs tathāgata iti vistareṇa kāraṇaṁ(28 婆伽婆如是廣說，是名信因)　因は彼は世尊である，如來であると廣說するによつてである
sabhāgaśīladṛṣṭisahāyakatva(86 同戒同見爲伴侶)　戒と見とを共通にする助伴たること
saṁtati / saṁtāna (126 續，相續)　相續
saṁtatipariṇāmaviśeṣāt(152)　相續の或種の轉變があるから

saṁtatyā(140)　常に，相續して
saṁtarpaṇa(16)　滿足
saṁtāna(34)　相續(身をも，心をも，身心をも指す)
saṁtānasaṁkleśaviśuddhibhede nirmāṇa(178 斷相續異慢)　相續の雜染清淨の差別に於ける無慢
saṁtāpana(63)　熱せられること
saṁtiṣṭhate(24 sthā 住)　住する，安住する
saṁtuṣṭi(85 歡喜)　知足，滿足
saṁtuṣṭiprātipakṣika(57 對治知足)　知足を對治するもの
saṁtyajati(123 tyaj 捨)　捨てる
saṁtrāsakatva(80 怖)　怖畏するもの，怖れるもの
saṁtrāsayati(127 tras 生怯怖？)　怖畏せしめる
saṁdarśana(17 解了)　見ること，解明すること，(37 示現，出)現ずること
saṁdarśanakarma(25 他業)　示現の業
saṁdarśita(61 dṛś 示現)　示現せられた
saṁdṛśyate(4 顯示)　現はれる
saṁdṛśyante(115 dṛś 顯示)　示される
saṁdehagata(8)　疑の去つた
saṁdehajaha(78 斷疑)　疑を捨てたこと，疑を離れたこと
saṁdoṣa(21 惡業)　過失，汚れ
saṁdhāya(70)　意趣して，關して
saṁdhāraṇa(69 攝住)　攝持，支へ持つこと
saṁnati(98 退轉，退屈)　〃，疲勞，疲倦
saṁnāha(72 被鉀)　被甲，鎧を著けること
saṁnāhayogātmaka(108 弘誓爲自性，加行爲自性)　被甲と精勤とを本質となす，被甲と精勤とより成る
saṁnāhavīrya(13 弘誓，弘誓精進)　被甲精進
saṁnipatya(55 pat 集)　集めて
saṁnibha(16 如)　〃，相似の，如き
saṁniyojana(32)　安處せしめること，指定すること
saṁniyojayati(31 yuj)　任せる，指定する，結付ける
saṁniviṣṭa(183 viś)　入込んだ，侵入した
saṁniveśatathatā(168 依止如)　安住眞如
saṁniveśana(31 安立)　〃，導き入らしめる，住すること
saṁniśraya(102 依止)　〃
saṁniśrita(102 śri 依止)　依止したる
saṁniśrayabhūta(71 爲依止)　依止となつた
sama(3)　等しく，同時に
samaṁ hitakāmaḥ(110 作平等利益)　平等に利益を作す欲を有するもの
samakālaṁ(3 同)　同時に，同一時に
samakṣaparokṣa(118)　可見と不可見
samakṣavṛtti(23)　現見の働
samagra(55 和合)　〃せる，調和せる，一切の，凡ての，全體の，各の
samagreṇa saṁgheṇa śikṣāpadasya pratiprasrambhaṇāt(55 謂，僧和合與學者捨)　和合せる僧伽によつて學處を廢止するから
samacitta(110 平等)　平等心
samacittāt sarvasatveṣv ātmaparasamatayā(47)　平等心であることからとは，一切衆生に對して自と他とが平等なることによつてである
samacittopālambhāt(15 平等故)　平等心を得るから
samatā(57 平等)　〃

の生

saṁchādya(170 chad 覆)　覆うて

saṁjāta(27 jan)　生じた

saṁjātapakṣaḥ śakunir yathaiva(27)　恰も翼の生じた鳥の如し

saṁjñita(143 jñā 名)　名づけられた

saṁjānite(181 jñā 知)　知る

sacet(151 若)　若し…ならば

sacchidratva(165 毀禁)　缺誤を有すること

sajalpa(56)　言と共なる，言を有するもの，意言を有するもの

sat(22 有)　〃，存すること

saty uttarakaraṇiye(86)　更に爲すべきことのあるときには，後に爲すべきことのあるときには

sataḥ(118 sat)　善人に

satāṁ(2 sat)　諸の賢者に

satatvaṁ(109)　眞實と共に，眞實と共なる

satatvaṁ paramārthasaṁgṛhītaṁ sāmānyalakṣaṇaṁ pudgaladharmanairātmyaṁ(109 第一義諦平等相人法二無我智)　眞實と共にとは第一義諦に攝せられたる總相で，人法の無我性である

satata(23)　常住の

satatam(77 恆)　常に

satataṁ dharmakāyavṛddhiś ca(30 增長法身)　また常に法身の長養である

satatam asaktabhogabuddhi(117 不著)　常に財に執著しない覺

satataśravaṇodgrahaṇadhāraṇa (15 如法常聞受持)　常に引續いて聽聞し受持し保つこと

satatasamita(44)　常恆な

satatānubaddha(23)　常に相續して

satkāya(34 身見)　有身見，身見

satkāyam atītya(114)　身見を超過して

satkāye(111 自見)　自身に於て，存在して居る身に於て(satkāyadṛṣṭi と同じやうにも思はれるが，又シナ譯もただ自見となして自身見を指すかと思はれるが，恐らく現に存する身を指すのみであらう)

satkāralabha(120 敬養)　恭敬と利養＝labhasatkāra, 利養と恭敬

satkāralābheṣu gatasprho 'sau prapattaye pariṇāmayec ca(120 爲離於貪著，爲求隨順行？)　恭敬利養を得るに於て貪著を離れ，實行の爲に，彼はそれを廻向すべし

satkṛtya(91 尊重)　供敬して

satkṛtyaprayogatā(86 恭敬修)　恭敬して加行すること

satkṛtya pācanā(30 心恭敬故)　恭敬しての成熟

satpuruṣa(86 丈夫)　善士，善人，正士

satpuruṣakarmakaraṇatayā(78 作大丈夫業)　善人の業を爲すことによりて

satpuruṣāyāśraya(86)　善士に依止すること

satpauruṣya(185 丈夫)　善士

satyajñāna(137 以實諦知)　諦の智

satyadarśana(55 見諦)　〃，諦を見ること(これ見道である)

satyadarśanena kṣudrānukṣudrāpattyabhāve dharmatāpratilambhāt(55 謂，見諦時細罪無體，由證法空法爾所得)　諦を見ることによりて小隨小の犯罪の無に於て法爾の所得があるから

satyābhisamayakāla(160)　諦現觀時，諦を現觀する時

satva(14, 物)　衆生(此論はすべて sattva の子音の一を省く，他の場合にも爾り)，字義は存するもの，物

satva(135 勇)　〃，力，勢力，智

satva＝astitva(10 有)　有ること，存在

satvān ameyān paripācanāya kṣetrasya śuddhasya ca sādhanāya(120 成生及淨土)　不可量の諸の衆生を成熟せしめる爲に，又清淨なる國土の能成立の爲に

satvānāṁ tatsakalārthasaṁpādakatvāt (80 一切衆生利成就故)　諸の衆生にその完全な利益を生ぜしめるから

satvakṛtyārtham udyukta(163)　衆生の所作の爲に努力したる

satvagaṇa(117 衆生)　衆生群

satvanikāya(20 衆生，衆生聚)　〃，衆生の類，群

satvaparigraheṇa karuṇayā satvānām aparityāgāt(109)　衆生に攝受せられるによりて，悲によつて諸の衆生を捨てないから

satvapācana(12)　衆生を成熟せしめること

satvaparipācanakarma(40 成熟衆生業)　衆生を成熟せしめる業

satvamātṛkalpā(162 如慈母)　衆生の母の如くである

satvavipācaka(100 成生)　衆生の成熟

satvasvabuddhadharmaparipāka (71 成就自他佛法)　衆生の自の佛法の成熟

satvahita(18)　衆生の利益

satvahitādhānamahārtha(9)　衆生の利益を支持する大義

satvahetoḥ(87 爲物)　衆生の爲に

satvānutsarge(100 於諸衆生不捨)　衆生を捨てざるに於て

satvāpakārākopa(89 衆生加損未曾瞋惱)　衆生の不饒益を怒らないこと

satvārthakriyāśīla(108 攝衆生戒)　〃，衆生の利益を爲す戒(三聚淨戒の第三)

satvārthacaraṇāśaṁsana(74 利益衆生究竟？)　衆生の利益を行ずる願

satvāvisṛjanavardhana (-ne) (100 不捨亦增進)　衆生を捨てないと增進とに於て

sadasat(11 有非有)　〃，有と非有

sadasattārtha(65)　有と非有との義

sadasattārthe pratyakṣaṁ vikalpavibhu cocyate(169 有非有現見，想作自在成)　有非有の義に於て現量得であり，そして妄分別に對して自在であるといはれる

sadasatvenārthadarśanaṁ(65)　有と非有とによりて義を見ること

sadasanta(61 有非有)　有と無と

sadā tadaprāpya paraiti duḥkhatāṁ(21)　それを得なければ常に苦に赴く

sadā prakṛtyādhyavihiṁsakaḥ(31 常與性及滿？)　常に，本性により，增上不殺生なるもの

sadākālaṁ(4 恆時)　〃，常時に

sadānuga(56 相續恆)　常に隨行したる

sadā pāramitāyoganiryāṇa(14 修度，以習諸度爲出離)　常に波羅蜜の精勤するを出離となす

sadābhūyasthitasmṛtitvāt(186)　常に益〻多く念が住して居るが故である

sadāsatvahitāśaya(14 利物，以利物爲依止？)　常に衆生を利益するを意樂となすもの

sadṛśa(16 如)　相似し

sadṛśasaṁtatiprabandhavṛttyā hi kṣaṇikatvam eṣāṁ na prajñāyate(154 相續刹那隨轉，此不可知)　相似の相續の結合が存するによりて(又は，結合の働きによりて)これ等のものの刹那滅たることが知られないのである

を捨てないこと
saṁsṛti(139)　輪廻
saṁseva(28)　親近，奉仕すること
saṁskāraduḥkhatā(21 行苦)　〃，〃たるもの
saṁsthāna(12 形)　形色
saṁsthānasaṁpanna(12 形成就)　形色具足
saṁsthāpayati(92 sthā 攝住)　〃せしめる，共に住せしめる
sakala(99)　全體の，(130 盡)完全な
sakalārtha(174)　全部の境
sakāśam(185)　近くに
sakṛt(6 但)　唯一度の
sakṛtpatiṣedhamātrakṛtam(6 但應言空？)　唯一度の否定のみのなされたことが，唯一度の阻止のみがなされたことが
sakṛtya(92 恭敬)　〃
sakṛdeva(150)　直ちに
sakṛnnityapravṛttitaḥ(155)　一時に常に起るが故に
sakṛpa(89 悲多)　悲愍ある
sakta(107 sañj 著)　執著，執著した
sakti(107 著)　執著
saktir naiva ca nirvṛtau prajanitā(109)　そして寂靜に於ても執著は全く生じない
saktivigata(122)　著を離れたる
sakhila(80 善友？)　具足，缺陷ある(akhila と寫本にあつたのを出版者が改める，akhila とは反對)
saṁkampayat(26 動)　震動せしめつつ，震動せしめるから
saṁkalanacitta(91 總聚心)　〃，集合心
saṁkalayet(90 kal 聚)　集積するであらう
saṁkalikā(61 骨)　骨骼
saṁkalpaiḥ(72)　思惟によつて
saṁkucitaka(52 藏六)　閉ぢたる
saṁketa(104 受)　表示(身振り，即ち gesture, 承諾，言語などをいふから，ここでは受戒の時，以後持戒するといふ承諾又は誓ひの意志表示で，それが身，口などに表はされるを指すのであらう，故に saṁketa は身口の方の表はれ，dharmatā は心の方でいふのであらう，saṁketa と dharmatā とでは律儀が別であるのは身口と心とで別となるのであらう)
saṁketadharmatālabdha (104 受得及法性)　表示と法性との得
saṁketalabdhaṁ prātimokṣasaṁvarasaṁgṛhītaṁ(105 受得者攝波羅提木叉護)　表示の得は波羅提木叉と律儀とに攝せられる
saṁketika(19 世俗)　世俗的の，俗諦的の
saṁketikacittotpādalābhe(19 世俗發心時)　世俗的の發心を得て，…得るに於て
saṁkrānti(152)　赴くこと
saṁkliśyate(182 kliś 惱)　苦しめられる
saṁkliṣṭa(62 染)　雜染せられた，雜染の，(143 垂臨？)强ひられた，迫られた，傷けられた
saṁkleśa(22 雜染，染法)　〃，雜染法
saṁkleśān nivṛttito nivṛttiḥ(36 不生轉，謂轉依已，一切染汚法畢竟不起故)　雜染から止轉であるが故に止轉である
saṁkleśanirdeśe(87)　雜染の細說に於て，雜染の釋に於て
saṁkleśapakṣanirodha(65 染分滅？)　染汚品の滅，染分滅

saṁkleśaparājaya(62)　雜染の負
saṁkleśaprahāṇe vyavadānādhipatyāt (62 對治染法得增上故)　雜染の斷滅に於て清淨が增上するが故に，雜染法が滅したときに清淨法が增上するから
saṁkleśaprātipakṣika(105 念增及對治)　染汚の能對治なるもの
saṁkleśavyavadāna(63 染汚及清淨)　雜染と清淨
saṁkleśavyavadānapakṣayor nirodhotpāde tadavasthatvāt(22 淨染二分起時滅時法界正如是住故)　雜染と清淨との二品が滅するに於ても生ずるに於てもそれは住して居るからである
saṁkleśavyavadānasaṁdeśanatayā(78 顯示染淨)　雜染と清淨とを顯はすことによりて
saṁkleśahetāv avṛtti(36 染汚諸因不能轉，此依彼依轉故)　雜染の因に於ては不轉である
saṁkṣaya(22 盡)　滅盡
saṁkṣipet(92 kṣip)　集中すべし，制するであらう
saṁkṣipya(91 kṣip 聚)　纏めて
saṁkṣubdhakṛpā(130 瞋)　憤激に對する悲愍
saṁkṣepataḥ(34 略)　要約して
saṁkhyā kartuṁ(143)　數へるべく，計算がなさるべく
saṁkhyām upalakṣayate(58 於數悉通達)　數を伺察する，數を近觀する
saṁkhyāvato dharmasya samalakṣaṇagrahaṇam(91)　數を有する法の平等相を捉へること
saṁkhyopalakṣaṇa(58 解數)　數の近觀，數の伺察
saṁgṛhīta(4 grah)　攝せられたる，含まれたる
saṁgraha(8 攝)　〃
saṁgrahaṇa(91)　攝取，集め取ること
saṁgrahadvayatas(116)　二攝から
saṁgrahavastu(116 四攝法)　四攝事
saṁgrahavastuprayoga(72 爲攝物方便)　四攝事の加行(四攝事は布施，愛語，利行，同事，物は衆生のこと)
saṁgrahaśloka(27)　攝頌
saṁgrahatas(53 攝)　〃するからである，攝の故である
saṁgha(55 僧)　〃，僧伽，衆
saṁcitya(33 ci)　集めて，積みて
saṁcitya(177, 178 saṁcinty の誤植)　故意に，普通は saṁcintya(cint) で，citya では規則的には cit を語根とする，故意にではない
saṁcintya(62 cint 故意)　〃の誤植
saṁcintyajanma(18)　故意の生，故意に生れること
saṁcintyabhavopapatti(141 故意受生)　故意に有に生ずること，故意の有生，考へてわざわざ生ずること
saṁcintyabhavopapattau cakravartyādibhūtasya viśiṣṭakāyavedanādisaṁpattau tad asaṁkleśataḥ(141, -citya- とあるは -cintya-，故意受生成就轉輪王等最勝身受心法亦不染故)　故意に有に生ずるに於て轉輪王等となつた殊勝の身受等の成就にもそれが染汚せられないから
saṁcintyabhavopapattiparigrahe 'saṁkliṣṭasarvakriyāprayogatvāt (62 菩薩故意受生，不染一切所作事故)　故意に有に生を取ることに於て，雜染の無い一切の所作に加行するから，故意の有生を取るに無雜染の一切所作の加行をなすから
saṁcintyopapatti(18 作意生處)　故意

śreṣṭhair dhyānasukhairvihṛtya(109) 最上の禪樂によつて住しても
śrotas＝srotas(16 流) 川，流
śrotas(97)＝srotas 流れ
śrotṛ(171 聽法者) 聽者
śrotra(25) 耳
śruta(7 śru 正聞) 〃，聞いた
śrutaṁ cāgraṁ(143 聞) 又最上の聞と
śrutacintitabhāvitacirakṛtacirabhāṣitānām asaṁmoṣatā(29) 聞思修を久しく爲し久しく語つたことを忘れないこと，久しく爲し，久しく語つた，聞いたこと思惟したこと修習したことを忘れないこと
śrutacintābhāvanāmaya(56) 聞所成，思所成，修所成の
śrutacintābhāvanāmayī(140 聞思修) 聞思修所成の
śrutacintāmayī dharmakāyarahitatvāt(75 聞思慧，無法身故) 聞思所成である，法身を缺くが故に
śrutacintālpatuṣṭatā(51 聞喜及思喜) 聞と思とに於て少しく滿足すること
śrutatuṣṭiprahāṇāya(85 聞法不應喜) 聞くのみで知足するを捨てんが爲に
śrutapara(180) 所聞を最上とする
śrutaparyavāpti(105 多聞？) 所聞の理解
śrutamayī(50) 聞所成のもの
śrutamātrakād(77 但聞) 唯聞のみのものから
śrutamātrasaṁtuṣṭi(85 但聞而生歡喜) 聞くのみでの知足
śrutaśravāt(120) 所聞を聞くが故に
śrutātṛptimahāvīryaduḥkhe (136 於聞進苦故) 聞に知足しないと大精進と苦とに於てである
śrutādhimuktipuṣṭyā(75 以正聞增長信) 聞による信解增長によつて，法を聞いたことによる信解の增長によつて
śrutābhyāsa(147 聞習) 聞の數習，聞の繰返し，繰返し聞くこと
śrutārthātṛpti(167 樂法) 所聞の義に知足しないこと
śrutka(62 響) 〃，谷響
ślākṣṇyāt(79 柔輭) 穩やかなことから
śliṣṭa(45 śliṣ 相合) 相合したる，合したる
ślisṭha(1 śliṣ) 相合された，結合せる
śloka(2 偈) 頌
ślokabandha(154) 頌の關係，頌の順序
ślokabandhānurodhād varṇādīnāṁ pūrvam abhidhānaṁ paścāt tejasaḥ (154 由隨同義故火聲在後說) 頌の關係に隨ふから色等を前に述べ，後に火について說く
ślokavattvānurodhāt(118) 頌の規則を有するので餘儀なくせられたからである
śvan(52 狗) 犬

Ṣ

ṣaṭkṛtvaṁ(187 六時) 六度に
ṣaḍaṅga(104 六支) 〃
ṣaḍdhā(27) 六種の
ṣaḍvidhārthasya(153) 六種の境の
ṣaṣṭyaṅgī(79) 六十支を具し，六十支より成り
ṣaṣṭyākārā vāg(79 六十種聲語) 〃
〃 -opetā 〃 (〃具足六十種聲) 六十種を具せる聲音

S

saṁyukta(54 yuj 勤方便) 精勤したる

saṁyuta(104 yu 具足) 〃，結合せる，縛せられた，結付いた
saṁyogavigama(184 離) 結使を滅すること，結使を離れたこと
saṁyojana(31) 結合
saṁrakṣaṇa(57) 守護，護，守護する行爲
saṁrādhayet(120 rādh 令喜) 喜ばす，慶賀する，祝する
saṁlikhitavṛtta(57) 儉約の生活，僅かな支への生活，削消せられた生活
saṁlikhitavṛttisamudācāra(57) 儉約の生活の現行，僅かな支への生活の現行
saṁvaraśīla(108 律儀戒) 〃，攝〃(三聚淨戒の第一)
saṁvarastha(104) 律儀に住するもの
saṁvarta(26) 世界の壞劫の壞
saṁvartate(169 vṛt) 生ずる，起る，導く
-saṁvartanīya(8) 導くべき
saṁvardhakatva(33 令得圓滿) 增長せしめること
saṁvardhana(32 令…善法增) 增長せしめること
saṁvardhayati(162 vṛdh 長養) 成長せしめる
saṁvardhikā dhātrī(15 長養爲生母？) 養育の乳母
saṁvāsa(134) 共住
saṁvigna(12 vij) 動搖した，激した，混亂した
saṁvṛti(14 護，戒) 律儀，此字は saṁvṛti-satya の時は俗諦，もと vṛ といふ語根から出で，vṛ は隱す，覆ふ意味，依つて俗諦を隱覆諦，覆俗諦ともいひ，又護るの意味にも取つて護と譯し藏とも譯す，戒と並べては saṁvara となつた方を取り，律儀と譯す，これをも護，藏と譯す譯人もある．意味上，此論に戒律儀を菩薩戒となして居る所もある
saṁvṛti(160) 俗，俗諦
saṁvṛtisatya(5 世諦) 世俗諦，俗諦
saṁvṛtiṣatyaviṣaya(5 緣世諦) 世俗諦を境とするもの，其境が世俗であるもの
saṁvṛtisatyatā(59 世諦) 世俗諦たること，世俗諦，性，俗諦
saṁśayaccheda(81 斷疑) 〃
saṁśayacchedanecchāparipūraṇa(101) 疑を斷ずることの願ひを滿たすこと
saṁśayacchedikatva(80 善斷疑) 疑を斷ずるものなること
saṁśayita(53 saṁśaya 起疑) 疑うたる
saṁśayitānāṁ saṁśayacchedo bhavati (171 未斷疑者令得斷疑) 諸の疑あるものが疑を斷じたものとなる
saṁśuddhi(92) 淸淨
saṁśrava(135 聞) 聞くこと
saṁśrāvaṇa(26) 聞かしめること，告げること
saṁsaraṇa(9 生死＝saṁsāra) 輪廻
saṁsaratāṁ(134 sṛ 生死) 諸の輪廻することの，諸の輪廻するものの
saṁsāragata(124) 輪廻の中に在る
saṁsāraduḥkhair akheda(166 諸苦常不退？) 輪廻の苦を以て疲倦しないこと
saṁsāranirvāṇāpratiṣṭhitatvāt saṁskṛtāsaṁskṛtatvenādvayā vṛttiḥ(36) 生死涅槃に不住の故に，有爲と無爲とによつて不二の轉である
saṁsārātyāga(135 不捨於生死) 輪廻

śīlasaṁvṛti (14 大護？)　戒律儀
śīle saṁniveśanāt (31 安立戒品)　持戒の中に導き入らしめるから
śuklagaṇasya madhye (114)　白法の群の中で
śuklajanma (125 勝生)　白生
śukladharma (12 白法)　〃，善法
śukladharmapravaraguṇayuta (35 白法圓滿)　最も優れた功德ある白法と結合せる
śukladharmamayaṁ tac ca na ca tais tan nirūpyate (34 白法爲佛身)　そしてそれは白法所成である，然しそれ等によつてそれは說かれない
śuklanavacandrasadṛśa (16 如月)　白い新月に相似し
śuklasasya (34)　白い穀(意味未詳)
śuklasasyaprasavasumahat (34)　白い穀を生ずる極大なる因
śuklā dharmāḥ (107 白淨法)　〃，白法
śuci (67 淨)　〃
śuddha (79 清淨)　〃な
śuddhapada (130 淨句)　清淨な特質を有するもの，清淨句
śuddhasatvānuvṛttitaḥ (149 隨淨及隨生)　清淨と衆生とに隨起するが故に
śuddhādhyāśayika (14 淨依)　清淨なる增上意樂のもの
śuddhiṁ prabalām upetāḥ (114)　力强い清淨を具足する
śuddhir āśayasya (15 淨依)　意樂の清淨
śuddhiviśana (44 攝衆善)　清淨の入ること
śuddher iti śuddhāśayabhūmeḥ (93)　清淨にとは清淨意樂地に入らない前にといふこと
śubha (11 善)　〃，淨
śubhakarmakārin (23 修善業)　淨業を爲すもの
śubhajanma (126 勝生)　善生
śubhatraya (33)　三の善，三の乘
śubhadaurbalyam ayoniśomanaskriyā (51 善贏及邪憶)　善の無力と非如理作意と
śubhadvayena dvayadhātupuṣṭatā (29 二聚界圓滿)　二の善によつて二の界の長養すること
śubhaparamasukhākṣayākaratva (49)　淨なる最上安樂の無盡藏なること
śubhamati (49)　淨意のもの
śubhamanaskāra (75)　善作意
śubhamayasatatapravardhitātmā (30)　自己が善より成つて常に增長するもの，善所成で增長せられたもの
śubhavṛttāv ihaiva ca nirvāṇecchā (176 善根？)　及び，此世にありて善行に於て涅槃の欲求
śubhavṛddhyanuśaṁsa (14 以增善爲功德)　善の增長を功德となす，善增長の功德
śubhasasyanimittatvāt labdhameghopamaṁ (34)　善といふ穀の因であるから雲の喩が得られた
śubhācaya (30 所有善根聚)　善の積集
śubhābhirāmatā (28 樂修諸善法)　善を愛樂すること
śubhābhyāsāt (14)　善の修習から
śubhāśubha (24)　善惡，淨不淨
śubhī (17 善)　〃
śubhī kṛpāluś ca vivardhanadvayaṁ (17 善增悲增故)　善と悲愍との二が增し
śubhe paripācanapratipatti (20 善成熟彼)　善に於て成熟せしめる行
śūnyajña (94 解空)　空を知る者
śūnyatāyām asya cittaṁ na praskandati na prasīdati na saṁtiṣṭhate nādhimucyate (158 於空不欲不信不住)

空性に於てその心を傾けず，信ぜず，住せず，信解せず
śūnyatāyām viśuddhāyām nairātmyātmārthalābhataḥ (37)　純淸淨なる空に於て無我の我の義を得たから
śūnyatāsvabhāvatvāt (95 自體空自體故)　空性を自性となすが故に
śṛṅga (4)　角
śeṣasu (75 八，九，十地)　殘餘に於てある(第八，九，十地を指す)
śaikṣa (70 未得阿羅漢果人)　〃，有學，學すべきものを有する人
śaikṣasya (79)　nipaka を見よ
śaikṣāḥ śilpaṁ (162)　工巧が學すべきものである(？)，工巧は有學者のものである(？)
śaitya (101 涼)　淸涼
śodhayat (92 śudh)　淸淨にしつつ
śobha (26)　華美なる
śobhati (134 śubh)　輝く
śobhate (19 śubh 勝)　宜し，美はし
śobhaneṣu janmasu (125 勝生)　美なる生に對する
śobhākara (76 莊嚴)　莊飾
śobhākaratva (76)　莊飾をなすこと
śoṣa (145 涸，乾涸)　〃，乾燥
śoṣavṛddheḥ (153 由滋及由涸)　乾燥と增長との故に
śyāmatā (150 黑)　〃色
śraddadhāno hy ativa vīryam ārabhati (105)　何となれば，信ずるものは烈しく精進を企てるから，始めるから
śraddadhānasyārthino vyāyāmāt praśrabdhir anugrāhakaḥ (143)　信仰するを求めるものには勤修があるから，隨攝は輕安である(シナ譯に由信起欲，由欲起勤，如是次第故，以猶一行成立隨攝方便とあるを見ると，梵文は註解的の文の不完全なものが殘留したものであつて，此梵文が完全して居ないものの殘りであらう)
śraddhā (63 信)　〃，信心，信仰
śraddhācchandapratiṣṭhitaḥ (105 有信有欲故)　信と樂欲とに立つから
śraddhānusāryādipudgala (159 隨信行等人)　隨信等の人
śrāddhāmānuṣasaṁghāc chāstrā copekṣyate tasmāt (133)　故に，信のある非人の衆から，また師によつて，顧みられない
śramaśata (33)　百の勞苦
śrayate (23 śri, 55 依)　依る，執する，固執する，執著する
śravaṇādyamoṣatā (29)　聞等の失はれないこと，聞等の奪はれないこと(moṣa は不忘念の忘となせど，實は mṛṣa が忘，moṣa は奪ふこと竊むことである)
śravaṇāya (92)　聞く爲に
śravaṇīya (80 樂聞)　聞くに堪へる，聞かるべきもの，稱讚に價する
śrāmaṇyaphalārthaṁ (91)　沙門果を得る爲に
śrāvakānāṁ vibhutvena laukikasyābhibhūyate (40)　諸の聲聞の威力によりては世間的のもの(威力)は打勝たられる
śrāvakabodhi (169 聲聞菩提)　〃
śrāvakayāna (3)　聲聞乘
śrāvakānimittād (169)　聲聞の無相から
śrīmālāsūtra (70 勝鬘經)　〃，勝鬘師子吼大方便方廣經
śreṣṭha (130 勝)　最勝な
śreṣṭhātmabhāva (29 勝諸地？)　最勝の身

śaktilābha (72)　功力を得ること，勢力を得ること
śakyam hi nāma tamasā vidyamānam adraṣṭuṁ syān na tv avidyamānaṁ draṣṭum iti (23)　何となれば，實に闇によつては，存するものを見ざるを得べきも，然し存せざるものを見るを得ないからである
śakyate (1 śak 能)　能ふ，得る
śakyaprāptitāṁ viditvā (82)　可能に到達したことを知りて (śakya の意味がよくは判らない，制御克服せらるべきもの，又は，文字文章の直接字面の意味などをいふのか)
śakra (73)　帝釋天の個人名で，釋と音譯する，釋提桓因の釋
śataguṇam (19 百倍)　〃
śataśas (112 百種)　百倍も
śatasāhasrikā (5 百千偈)　百千 (頌經)，(大般若經第一分であらう)
śatruvaśaga (124 怨勝)　敵の勢力下に入つた
śatrusaṁjñākaraṇa (73 作怨家想)　敵の想を作すこと
śabdavidyā (70 聲明)　〃 (聲はここでは言語，文としての言語) 文典學，文法學
śama (17 寂，寂滅)　〃，(137 息) 止息，寂靜
śama (142)　śamatha と同じ，寂靜，止
śamajanma (23 生死與涅槃)　寂靜と生死
śamathajñāna (90 寂靜智，奢摩他智) 止の智
śamathajñānavaipulyagamanāya (90) 止の智の方廣に赴かんが爲に
śamathanimitta (92 攝相)　〃，止相
śamathapakṣa (93 奢摩他分)　〃，止分，止品
śamathapragrahopekṣānimittaiḥ saha bhāvyate (142 由止擧捨三相合修故) 止，勤，捨の相と共に修習せられる
śamathamārga (91 止道)　止の道，奢摩他の道
śamathavipaśyanākhyaṁ yogaṁ bhāvayati (142)　止觀と名づけられる瑜伽を修習する
śamathavipaśyanāyogabhāvanābhilāṣa (73 止觀雙修？)　止と觀との瑜伽修習の欲
śamathādinimittānāṁ kālena kālaṁ bhāvanātā (86 止觀諸相應時修)　止等の諸相を常に修習すること
śamaṁ gamiṣyanti (17 趣寂，趣向寂滅) 寂靜に行くであらう
śamana (53 寂)　寂靜
śamaprāpta (142)　寂靜，卽ち止，に達したる
śamabhavaguṇadoṣaprerita (87 捨有？) 寂靜と有との功德と過失とに激せられたる
śamabhāvānta (104 滅有邊)　寂靜有邊
śamamātrābhimāna (51)　寂靜 (卽ち止) のみなるに增上慢なこと
śamayamanodyamapāragaḥ sthitātmā (17 及寂靜，能耐將意勇，不動) 寂靜と制御と努力と彼岸に行つたことと我の固定せることと
śamayet (91 śam 攝持？　抑，折伏) 靜めるであらう，靜むべし
śamābhirāma (34 樂滅)　寂靜愛樂，寂靜を愛樂戀著すること
śaraṇa (8 歸依)　〃
śaraṇagati (9 歸依)　歸依に赴くこと，歸依
śaraṇagamana (8 歸依)　〃
śaraṇagamanastha (9)　歸依の中に存する

śaraṇa-pragata, -gata (8 gam 歸)　歸依，歸依に趣いた，歸依した
śaraṇapratipattiviśeṣa (9)　歸依に因る行の區別，歸依に因る勝れた行
śaraṇaviśeṣa (8 勝歸依)　勝れた歸依
śarīram evotsṛjato na duḥkhyate yadā manaḥ (113 捨身尙不苦)　身體をすら捨てる者の意が苦しめられない時に
śalabha (136 蟲)　〃，蝗
śastra (98 兵仗)　劍
śasyate (38 śaṁs)　語られる，稱讚される
śākhā (125 枝)　〃
śāntaṁ nirvāṇam (149 涅槃寂靜)　涅槃は寂靜である
śāntamati (79 寂靜慧)　〃
śāntavakkāyatā (165 身靜口善說)　寂靜なる口と身
śānti (38 息，息苦)　消，靜まること，寂靜
śāmyate (37 śam 滅盡)　消える，靜まる
śāmyanti (35 śam)　治癒する，全快する，靜まる
śāsana (3 法)　敎
śāsanābhyupagamana (20 向已能令信受正敎)　敎を信受すること，敎を認容すること
śāstā (123 師捨？)　罰する人，師，大師 (v. 25 śāstrā とある，これは śāstṛ の inst.，釋には śāstā とある，śāstrā は誤植と見る)
śāstṛ (55 大師)　〃
śāstrajñatā (136 知法)　論，又は論典，を知ること，知論
śāstratas (155 聖說)　聖典から
śāstri (28)　正師に對する，大師に於ける
śikṣayati (163)　學せしめる
śikṣā (99 學足，學處)　〃，學
śikṣātraya (100 三學)　〃
śikṣātrayadeśanā (54 說三學)　三學の敎示
śikṣādattaka (55 與學)　〃，學處に隨つて罰を與へられた者
śikṣāvipatti (162 訶犯)　學處の犯
śikṣāsamādāna (167 學戒)　學處を受けること
śilpaṁ śikṣayati (162 敎工巧)　工巧を學ばしめる
śilpakarmasthānanirmāṇa (26 工業處自在化)　工巧業處の變化
śilpakarmasthānavidyā (70 巧明)　工巧業處明 (śilpa は工藝技術等，karma は職業，sthāna は事件，事柄，問題などを指す，上の四明を除いた他の凡ての殆どを指すであらう)
śilpakarmasthānavidyā (136 巧明)　巧業處明
śithilagati (19 懈怠，睒緩)　緩慢な行動
śirasi (19)　頭の上に，頭に於て
śiṣṭa (7 śiṣ 餘)　殘りたる，殘りの
śiṣya (163 弟子)　〃，徒
śīlapāramitākṣaṇa (103 於一刹那但修一戒)　戒波羅蜜の一刹那，戒を行ふ一刹那
śīlaṁ samādatte śīlavān (101 受持戒行戒已)　戒を受けたことに於て持戒者となる
śīlavato'vipratisārādikrameṇa samādhilābhāt (54 由持戒故不悔，不悔故隨次得定)　持戒のものには後悔が無い等の順序によつて三昧が得られる
śīlasaṁvaranimittam (160)　戒律儀の爲に

vṛddhi (145 溢，進，滋，滋長，增，增盛)
〃，増長，増大
vṛddhiṁ gachati (77 gam 増長)　〃する (gacchatiならむ)
vṛddhiṁ hāniṁ ca kāṅkṣanti (164)
増と減とを希ふ
vṛddhiḥ śoṣaś copalabhyate (153)　増すことと涸くこととが認められる
vṛddhiga (77 増長)　〃する，〃に至る
vṛddhigamana (16 漸漸増，100 令増上)
増長に至ること
vṛddhidūraṁgamatva (92)　増長の遠行すること
vetti (92 vid 知)　知る
vedaka (23)　感受するもの，受者
vedako 'nubhavena duḥkhasya (23)
感受するものは苦の領納によりて
vedanām ālambya (131 緣三受)　受を所緣として
veditavyam (8 vid 應知)　知るべきである，知らるべきである，知るべし
vaikalyatas (4 非全)　闕乏せるが故に
vaidurya (26 瑠璃)　〃，琉璃(d は ḍ?)
vaidya (89 醫)　〃，醫師
vaipākika (14 報得)　異熟のもの
vaipākya (14 報得)　異熟のもの
vaipulya (90 廣大乘)　方廣
vaipulyasaṁgraha (83)　方廣を攝すること，大乘教を含むこと
vaibhutvikī (75 諸神通)　徧主たるの
vaimalya (181)　垢が無い，離垢の
vaiyarthya (48 虛)　無用
vaira (105 憎)　怨讎
vairabahula (105 少憎嫉)　多くの怨を有するもの
vairāgya (160 離欲)　欲を離れたこと
vairāgyalābhataḥ (125 由得離欲)　離欲を得たるが故に
vailakṣaṇya (154 不相似)　〃，異相
vaiśvāsika (89 信人？)　信用あるもの
vyakti (59)　顯現
vyaktim āpadyate (150 至明了)　明瞭になる
vyañjana (1 字，文)　文は文章ではなく，綴卽ち假名の一字一字，ローマ字の綴などをいふ
vyañjana (55 根)　〃，表相，男女根の根
vyañjanānām aparimāṇavṛtti (58)　諸の文の非量の作用
vyañjanasaṁpat (79 字成就)　文字の成就
vyañjanālambana (57 字緣)　文所緣
vyatikrama (32)　犯戒
vyatikramasaṁpat (80 犯戒人)　犯し遂げたこと，犯し終つたもの，犯戒を具するもの
vyapeta (34 i 離)　離れた
vyaya (43 盡)　消滅，滅盡
vyavadāna (22 清淨)　〃
vyavadāyante (158 dai 得清淨)　清淨にする
vyasana (8)　喪失，滅亡，不幸，失敗，罪，不成功
vyasanacitta (88 苦心)　執著心，貪心，煩惱心
vyasanasthāna (162 習惡事)　不幸處
vyavasāya (9 大志意，57 勤)　〃，決心，決定，努力
vyavasiti (7)　決定心
vyastānāṁ (91)　別の，各別の，特殊の，個々の
vyavasthā (2)　決定
vyavasthāna (25)　定められたこと，所建立，建立，安住，固住
vyavasthānāvikalpena jñānena sahacāriṇā (86 無分別，建立，次第無間起)

俱行する建立と無分別との智によつて
vyavasthāpana (114 sthā 建立)　建立せしめられること
vyavasthāpitadharma (58 所立法)　確立せしめられた法，安立せしめられた法
vyavasthāpyate (91 sthā)　安立せしめられる，建立せしめられる
vyavasthiti (167 立)　建立
vyākaraṇa (3 記，74 授記位)　記別，記，授記
vyākaraṇa (80 毗伽羅論)　文典，文法學，授記，記別も此字であるが，ここは文典であらう
vyākaraṇābhiṣiktatā (20 得記幷受職)
授記と灌頂
vyākṛta (3 kṛ 記)　豫言せられたる
vyādhi (16 病)　〃
vyādhiśamana (136 除他疾)　病氣治療，病氣を鎭めること
vyāpana (182)　遍滿
vyāpāda (123 瞋)　〃，瞋恚
vyāpara (158)　働き
vyāpāragāmitā (161 助善)　作すに至ること，功用に至ること，働くに至ること
vyāpāracāra (21)　ことを作す動作
vyāpti (182 遍)　遍ずること，遍滿
vyābādha (123 呵責)　〃，害
vyāmiśra (38)　混ずる，混じて居る，種々る種類の，多くの
vyāmiśraraśmyekakāryasyopamatayā (39)　混合せる光線の一所作をなすの譬を以て
vyāyacchate (57 yam 勤)　心亂れる，爭ふ，努力する，(142 勤) 勤修する
vyāyāma (143 勤)　〃，勤修
vyāvartiṣyate (18 vṛt 退)　退轉するであらう
vyāvasāyika (142 起作)　〃，決定
vyāvṛtti (35 退心，廻)　除，退けること，退轉，(42 轉) 轉依
vyutthāna (54 淨) 還淨 (73)　超出，出離，出過，脫出
vyutthānam āśayato na daṇḍakarmataḥ
(55 淨者罪還淨，由善心，不由治罰)
還淨とは意樂からであつて，治罰からではない
vyutthānopaya (98 護方便)　出離方便
vyutthāpana (35)　立ち上がらすこと，捨てしめること，打勝たしめること
vyutthita (92 sthā 起)　强く刺戟せられた
vyutpatti (171 學)　啓發
vyutpādana (116)　起ること，起つた
vyutpādayanti (162 pad 教習)　解釋する，語源的に解釋する，詳論に論ずる
vyutpādya (2 pad 令受教開示)　理解せらるべき，說明せらるべき
vyudāsa (105 遮)　排除
vyupaśamayati (92 śam 息住)　〃せしめる，滅住せしめる，寂靜にする
vyeti (22 i 滅)　〃
vrajat (42 vraj)　進みつつ，行きつつ
vrajati (53 vraj 得)　達する，行く，進む
vraṇa (30 瘡)　〃

Ś

śaṁsanti (162 śaṁs 讚)　賞する
śakuni (27)　鳥
śakti (72)　功力，勢力，力能
śakto bhavaty eva ca satvapāke (27 成熟衆生)　衆生を成熟するに於て能力がある，衆生を成熟するを得

殊勝

viśiṣṭatara (19)　一層優れたる

viśiṣṭatarām iṣṭatām labdhvā (19)　一層優れた愛らしいことを見出して，…得て

viśiṣṭatarayāna (85)　一層殊勝な乘，一層優れた乘

viśiṣyate (20 śiṣ 勝)　優れて居る，區別される

viśiṣyate (135 śiṣ 殊勝)　勝る，區別される

viśuddhi (58 清淨)　〃

viśuddhitathatā (168 清淨如)　清淨眞如

viśuddhipāraga (98 得度淨業海)　純淨の彼岸に至つたもの

viśuddhibhājanatva (92 器體成淨故)　純淨な器たること

viśudhyate (22 śudh 淨)　清淨にされる

viśeṣa (52)　異

viśeṣa (65＝viśiṣṭa)　殊勝

viśeṣe (68 差別)　差別に於て，差異に關して

viśeṣeṇa hetuna (174)　殊勝な因によりて (hetuna は hetunā の m. c.)

viśeṣakalpanaṁ vikalpo veditavyaḥ (181)　妄分別は差別の分別であると知るべし

viśeṣagatva (29)　殊勝に至ること

viśeṣagamana (51 進位，進地，勝進)　勝進，殊勝に至ること

viśeṣagamanāya (50 由不能勝進)　勝異に到る爲に

viśeṣagamanārthaṁ (91)　殊勝に至らんが爲に

viśeṣagāmitva (29)　殊勝に至ること

viśeṣagāmitvaśubhābhirāmatā (29 善根恆樂進)　殊勝に達することと善を愛樂することと，殊勝に至ると善を愛樂すると

viśeṣaprajñaptiparyeṣanā (168 差別求)　差別假說の尋求

viśeṣabhāgīyadharma (165 進分)　進分法

viśeṣabhogasaktiparivartena (108 有差別者，翻擅波羅蜜離貪財著)　特殊の財の執著の代りに (シナ譯は viśeṣa を以下と別けて獨立の語として譯したのであらう，又は原文が獨立の語となつて居たか)

viśeṣalābha (29)　殊勝の得達，殊勝を得ること

viśeṣavikalpa (76 別相分別)　差別妄分別

viśeṣādhigama (30)　殊勝の證得

viśeṣādhigamāśayo hy adhyāśayaḥ (16)　何となれば增上意樂は殊勝に至る意樂であるからである

viśeṣataḥ (49)　特に

viśeṣaṇa (8)　區別，優ること

viśodhana (25 令他清淨)　清淨にすること

viśodhanā (116 令解)　清淨になること

viśodhya (58 śudh 應淨)　清淨にせられる，清淨にすべき

viśraya (101 śṛ)　依りて

viṣa (98 毒物)　〃，毒

viṣada (＝viśada 78 無畏，126 明瞭)　分明，廣博，淨白

viṣaya (5)　境，對象，境界

viṣaye rati (72)　境に於ての愛樂，境に於ての愛喜

viṣayeṣv asaktimārga (100 不著)　諸の境に於ける不執著の道，諸の境に對する無執著の道

viṣayanimittakleśaparidāhābhāvāt (101 由…於境界相中煩惱熱息故)　境を因とする煩惱の燃燒が無いから

viṣayaparatantrakaruṇā (130 緣著？)　境を依他とするに對する悲

viṣayasumahatas (35)　極大なる境から

viṣaśastramadya (130 毒物兵仗酒)　〃

viṣkambhana (99 折伏)　〃，制伏

viṣpaṣṭa (80 spaś, vispaṣṭa とも，不隱覆)　甚だ分明な

visaṁyukta (80 不相應)　離れたる，離繫せる

visaṁyukta (93)　離繫したる，結合しない

visaṁyoga (94 不和合)　〃

visaṁyogaphala (123 相離果)　離繫果

visadṛśotpattau (150)　不相似が起つたときには，不相似の生に於ては

visara (43 sṛ)　出ること，放つこと，擴がること

visāra (143 sṛ 離)　〃，散

visāralajja (173 亂)　散亂の羞

visarga (77)　施捨

visarjaka (184 釋)　却けるもの

visṛjeyaṁ (129 sṛj 施)　施すであらう，捨するであらう

vistara (1)　廣說，詳說，以下に詳說があるといふ意味であつて，それを省略するを示す語

vistaraḥ (22)　云々，廣說

vistareṇa (21 廣)　詳しく

vistīrṇa (53 stṛ *or* stṝ 廣大)　詳細な，廣大な，大なる，數多い

vispaṣṭa (79 spaś 分明)　甚だ明かな，解し易い

vispaṣṭā suniruktākṣaratvāt (79 開示字句分明故)　分明で文字がよく分解せられたから

viharati (25 hṛ)　住する，一般には，動く，行く，分つ，など

vihāni (133 退失，斷)　〃，失ふこと，斷，捨

vihāya (95 hā 滅)　捨てられて，捨てて

vihārabhūmi (177)　住地

vihiṁsā (123 惱)　害

vihita (24 dhā 善成)　決定せる，成立せる，決定されたる，成立されたる

vihīna (126 hā 無)　缺けたる，無き

vihṛta (122 hṛ)　引かれた，往いた

viheṭhanamarṣaṇa (99 忍彼惱)　惱害を忍ぶこと

vītarāga (69 i 已離欲)　〃，離貪，離れたる

vītarāga…kāmebhyaḥ (69 已離欲欲界)　欲から離欲せるもの，欲から離れたもの

vīryam ātmanaḥ, maninām (48)　自己の精進を考へるもの等の

vīryārambha (160 長勤)　精進の發勤，精進を始めること

vīryārambho mahān (161 起善利)　精進の大發勤

vṛkṣapratibimbaka (125 如樹)　樹の如きこと，樹の像 (-pratibimbaka は鏡像であるが，ここの意味では，如きこと，譬喩にならう)

vṛkṣavāditra (77)　樹木と樂器

vṛṇuyāt (52 vṛ)　選ぶべし，選べ

vṛti (35 障)　二障 (āvaraṇa, āvṛti と同じ，metre の爲に用ひたもの)

vṛtta (173)　韻律，metre

vṛtti (27 住神通具，104 品類，149 流)　働き，存すること

vṛttyā (45 位)　働きによつて

vṛtticetanā (74 定作)　働く心

vṛttibheda (159 行差別)　〃，働きの別

vṛttyupalakṣaṇa (58 解具)　作用を伺察すること

vṛttiitā (32)　實行たるもの，實行

vṛddha (151 老)　老年

を成就すること，衆生の廣大な利益を成就すること
vipulātmaka (56 大)　廣大より成る，廣大の性の
vipulāśayena (102 廣大心)　廣大意樂によりて
vipratipatti (135 不退？，違逆，163 打罵)　違逆，反對，矛盾，誤，邪行
vipratipanna (3 pad 疑網)　謬見の
vipravādana (186 誑，誑惑)　詭詐
vibandha (115 障礙)　〃
vibandhana (98 障礙)　〃，妨げ
vibudddha (2 budh 正敷)　開花せる，目覺めた，覺者
vibuddhottama (62)　最上の覺者
vibodha (17 解了)　覺知すること，覺
vibhaktārtha (2)　其義が分別せられた
vibhavadbhiḥ kāraṇair veditavyā (152)　無有の因によつて知るべし，滅の原因によつて知るべし
vibhāga (55 廣分別，別說)　分別 (uddeśa 總說に對する nirdeśa 細說と同じ)
vibhājayati (81 bhaj 分別)　〃する
vibhājya (3 bhaj)　分別さるべき，分別すべき
vibhāvaka (90)　明かにする，現はれしめるもの
vibhāvana (42)　顯はれ
vibhāvanā (1)　明かにすること
vibhāvayat (169 觀察)　明かにしつつ，明かに見つつ，認めつつ，認めるから
vibhāvayitum (1 bhū 開曉)　明かにせしむべき，明かにせらるべき
vibhinnālambana (56 種々緣)　各別の所緣
vibhu (169 自在)　〃，普遍，全能
vibhutā＝vibhutva (40 化)　威力
vibhutva (40 變化)　威力，全能，普遍
vibhutvatas (77 通力)　威力から
vibhutvānucare jñāne nirvikalpe sunirmale (40 極淨無分別，恆隨變行)　威力に隨行する極無垢の無分別の智慧に關して (智慧に於て)
vibhūti＝vibhutva (47)　威力
vibhūti (83 極妙樂事？)　威力
vibhūṣaṇa (17 嚴)　嚴飾
vibhramātra (23)　唯迷亂のみなるもの
vibhramamātram āśritaḥ paraiti duḥkhaprakṛtiṁ satatāṁ (23)　依我見，不見苦自性)　唯迷亂のみのものに依止したものは常住の苦の自性に達する
vimadhyama (33)　中庸の
vimalacandraprabha (83 無垢月光佛)　〃
vimalavipulabodhi (87 廣淨菩提)　無垢廣大な菩提
vimāna (26 宮殿，天宮)　〃，〃
vimānayati (173 man)　尊敬しない，輕蔑して扱ふ
vimānalajja (173 不遂？)　尊敬の無い羞
vimuktijñāna (7 解脫智)　〃
vimuktijñānadarśana (57 解脫智)　解脫知見
vimuktiprītisukhasaṁvedanāt (162 令解脫喜樂)　解脫の喜樂を感受するから
vimuktimātra (4 欲解脫)　唯解脫のみの
vimuktisāmānyajñānaviśeṣakarma (40 解脫智業)　解脫と共通の智慧と特殊との業
vimukha (129 厭)　厭ふ，面をそむける，無關心な
vimukha (148 厭背生，厭背)　〃，厭捨，面を背けること
vimukhaṁ (118 不現前)　〃，背面に，面をそむけて
vimokṣābhibhvāyatanakṛtsnāyatana (184)　八解脫と八勝處と十徧處と
vimocaka (188 解脫)　解脫せしめるもの
vimocayati (53 muc 解脫)　解脫せしめる
viyoga (35 離，121 拔苦)　離，分離
virajo vigatamalaṁ dharmeṣu dharmacakṣur utpādayanti (171 於諸法遠塵離垢得法眼淨)　諸法に對して離塵塵垢の法眼を起す
virajo vigatamalam ity uktaṁ bhavati (94 名遠塵離垢得法眼淨)　離塵無垢といはれて居るのである
viratiśīlaguṇa (110)　遠離の戒の功德
virahita (26 rah)　缺無の，無い
virāga (4 離)　離欲，離 (欲は無くも可)
viruddha (4 rudh)　矛盾せる，相違せる
virūḍhi (95 著？)　增長，発現
virodhāt (4 非不違)　矛盾するが故に
vilakṣaṇa (22 無相)　異なつたもの，特質を離れたもの
vilakṣaṇatvāt (154 不相似)　異相の故，異なるから
vilambana (107 慢緩)　弛緩
vilomayati (4 loma 違)　逆ふ
vivaraka (52)　深み
vivarjana (130)　避けること
vivarjita (165 vṛj 遠離)　捨てた，離れた，缺いた
vivarṇayati (83 varṇ, vṛṇ 毀訾)　非難する
vivarta (25 vṛt 成)　〃，世界の成立する成劫の成
vivartakāle (153 劫生時)　成劫の時に於て
vivardhana (17 增，100 增長)　增，增長
vivardhamāna (22 vṛdh)　增長しつつ
vivardhayat (90 vṛdh 令增上)　增長せしめつつ
vivardhayante (32 vṛdh 滿)　增長せしめる
vivardhayat (92 vṛdh 令進)　增長せしめつつ
vivāda (54)　抗論
viviktaṁ kāmair (146 離欲)　欲を離れたるを，欲を離れるを
vividhaguṇagaṇa (22)　種々なる功德群
vividhabhayagata (35 種々畏)　種々の怖畏に在るもの，陷れるもの，行けるもの
vividhaśubhavikalpa (87)　種々なる善の妄分別
vivṛṇoti (81 vṛ 開示)　〃，說明する
vivṛta (33 vṛ 開)　開說せられた，開かれた
vivṛtā ratnapeṭeva (33 譬如大篋開)　恰かも寶篋の開かれたるが如く
vivṛddhim upayānti (128 yā 增長)　增長に至る，增長する
vivekatā (30 離)　〃
vivekotkṛṣṭatā (30)　優れたる離
vivekatodagraśubhābhirāmatā (30 離惡及修善)　高踏な離と善の愛樂
viśada (43, 79 無盡)　明瞭，明澄な，分明な，(多くの出版本に viṣada とあり，又 v. 55 (p. 44) にもかくあるが，恐らく，ṣ は ś の轉換，viśada の方が可，alpa の反對のこともある)
viśana (44)　入ること
viśiṣṭa (2 śiṣ 勝)　優れたる，勝れたる，

vidyābodhāt(174)　知の覺の故に，明の覺の故に
vidyāsthāna(70 明處)　〃，學科
vidha(1 義)　種，種類
vidhamayya(96 dham, dhmā 除)　〃，破して
vidhāna(184)　規定すること，作すこと，完成すること，與へること
vidhāya(27 dhā 安)　安じて，置きて
vidhi(1 方便)　方法，儀軌，通則
vidhivat(88)　規則通り，適當に
vidhivatprahita(114 hi)　適當に進められたる
vidhīyate(59 說，88 dhā)　規定される，考へられる，許される，と思はれる，と見做される
vidheyatā(116 受法)　命ぜられること，支配されること，從ふこと
vinaya(53, 毗尼)　律，調伏(vinaya が俗語で vine となる，これが毗尼と音寫せられる，尼はネーの音譯)
vinayati(33 nī)　調伏する
vinayatva(54 毗尼)　律，律たるもの
vinayana(33)　除，制伏，調伏
vinayana *or* -nā(74)　調伏，斷，敎化
vinayanti(165 nī 除)　調伏する
vinaye(4 毗尼，滅)　律に於て，調伏に於て，滅に於て
vinayopāyadhātu(170 化衆生方便)　能化の方便の界
vinā(＋instr. 1離)　無くば，無くして
vinātmadṛṣṭyā(95 無我…)　我見無くして
vināpi duḥkhena(95 無苦…)　苦なくも
vinābhoga(37 自然，無思)　功用無くして
vinārūpya(165 捨無色)　無色の無い，無色を離れた
vinā yatnaṁ(37 自然)　努力なくして
vināśakāraṇa(150 壞因)　滅壞の因
vinā saṁskāraṁ(43)　行無くして，造作無くして(saṁskāra は abhisaṁskāra ともある，過去の行か，或は淸淨法を指すかも知れぬ)，(vinā は acc をも取る)
viniḥsṛta(188 sṛ 出離)　〃した
viniḥsṛti(39)　出，發
vinigūhana(162)　隱すこと
vinidhāya(19 dhā)　置いて，置かれて
vinirjaye(144 伏)　征服する爲に，征服に於て
vinirmukta(93 muc)　離れたる
vinivaraṇatva(90 離諸障)　障蓋を離れたこと，離障たること
viniścaya(54 判)　決擇，決定
viniścayataḥ(55 判)　決擇から
vinihita(19 dhā 荷負)　置かれた，保つた
vinihitoccasatvabhāra(19 荷負衆生擔)　高い衆生の荷の置かれたる
vinīta(80 nī 調伏)　調伏せられた，調順の，化せられた
vinīti(20 令調)　調伏すること
vinīteṣu(37)　化せられ終つたときには
vineya(16 所化)　〃，調伏せらるべき弟子，敎導せらるべき弟子
vineyānām arthe(68)　諸の所化の爲に
vineyadurvinayatva(135 能化)　所化の難化たること
vineyadhātu(170 可化衆生？)　所化界
vineyavaśena yatheṣṭopapattinirmāṇa(26 隨所欲自在化)　所化の爲にその所欲の如くに生れることの變化
vineyasasyaparipācanāt(16 成熟故)　所化といふ穀類を成熟せしめるから
vineyānurūpa(79 逗機宜，隨機說)　所化に順ずる

vineyāvarjakadharmadeśakatvāt(16 說法敎化攝衆生故)　所化を誘引する說法をなすものであるから
vinodana(28)　滅除
vipakṣa(98 治障)　所對治(通常 pratipakṣa 能對治と相對す)
vipakṣapratipakṣataḥ(141)　所對治を對治するが故に
vipakṣapratipakṣāv atra pakṣadvayaṁ veditavyaṁ(30)　ここにいふ能對治と所對治とが二品であると知るべきである
vipakṣapratipaksai rahito'rahitaś ca jayate satataṁ(134)　所對治と能對治とから離れたものと又離れないものとが常に生ずる
vipakṣaprahāṇa(71 障斷)　所對治の斷
vipakṣabījaviyoga(35)　所對治の種子の分離
vipakṣavṛddhyā(132 增障)　所對の增長から
vipakṣaśamana(30)　所對治の靜まり
vipakṣasvabhāva(61 所知體)　所對治を自性となすもの，所對治の自性
vipakṣahīna(100 治障)　所對治が無いこと
vipakṣānavamṛdya(114 不能彼障礙不能礙)　所對治に打摧かれざる
vipañcita(81 pañc)　細說，-jña 細說で曉る，廣顯智，細說で理解し
vipattikāla(18 不成，不成就時)　失敗の時
vipattiduṣkaracaryāduḥkhaiḥ prayogānirvartitā(181)　不成就と難行を行ずる苦とによつても加行から不退轉なこと
vipariṇāmataḥ(151 令…變生)　轉變からである，變異するからである
viparitaṁ nīyamānasya(138)　顚倒して了義とせられるものの遮止
viparyayāt(2 翻)　反するから，反對であるから
viparyayeṇa(4 相違)　反對的
viparyāse ca susthitāḥ(82 善住於顚倒)　又，顚倒に於て善住したる
vipaśyanāpakṣa(93 毗鉢舍那分)　〃，觀分，觀品
vipaśyanāpramodyāvāhaphalakatva(80 能引毗鉢舍那)　觀の歡喜に導く果のもの，觀の歡喜の果を來すもの
vipaśyanāmārga(91 觀道)　觀の道，毗鉢舍那の道
vipaśvī(83 毘婆尸)　〃佛
vipāka(32 報，107 果報)　〃，異熟
vipākaniṣyandaguṇa(32 依報二果の功德)　異熟と等流との二果の功德
vipākaphala(71 報果，果報果)　異熟果
vipākaśuddhi(29 報淨)　異熟の淸淨
vipācanokta(30 捨成熟)　捨成熟といはれたもの，爛成熟といはれるもの(pācana は pac の caus. より名詞となつたもの，然し意味は殆ど異ならない)
vipācikā(100＝vipācaka)　成熟
vipulam api dānamayaṁ puṇyam abhisaṁskṛtya(102 廣施不求報恩)　廣大なる布施所成の功德をなしても
vipulagata(53)　廣大な(gata は在るの意味であるが，此字が無い場合と同じに見て譯さずとも可)
vipulagāḍhagambhīra(2 難解)　廣大，堅固，深遠な
vipulapuṣṭi(126)　廣大增長
vipulasatatapuṇyatadvivṛddhi(53)　廣大にして常住な福德とその增長と
vipulasatvārthasaṁpādana(19 廣利一切衆生業成就)　廣大なる衆生の利益

vāci jñānaṁ divyaśrotrabhijñā(25)　言語に關するそれを知る智が天耳通慧である
vātsalya(31)　親愛
vāda(13 演)　說，說くこと
vāditra(77)　樂器
vādin(13)　說きつつ，說く，說く人，論者
vāyu(153 風)　〃
vāri(90)　水
vārija(2 華)　蓮花
vālikā(83 沙)　〃，砂(vālukā とも)
vāsakalpana(145)　住居を營むこと
vāsana(53)　熏習氣(佛譯には脚註に此梵語を出さない，又索引にも vāsana を出さない)
vāsanabodhanaśamanaprativedhais tadvimocayati(53 熏覺寂通故，解脫生死事)　熏習と覺悟と寂靜と通達とによつてそれから解脫せしめる
vāsanā(152 熏習)　〃，習氣
vāsanāsamudghāta(186 斷習)　習氣の斷
vāhin(17 流)　〃，運ぶ，流れる
vāhyaparipākaviśiṣṭatvāt prakṛṣṭā pācanā prapācanā(30 勝成熟，過外道法故)　勝成熟は外の普成熟より優るが故に殊勝な成熟，vāhya = bā-
vikārābhajana(17 不退壞？)　變化に與らない
vikalpa(35)　妄分別
vikalpa-kleśa(5 以分別爲煩惱)　妄分別といふ煩惱
vikalpavibhu(169 想作自在成)　妄分別に對して自在である，vikalpa は分別，憶想分別，想と譯す
vikalpavibhutvalābhād yathāvikalpaṁ sarvārthasamṛddhitaḥ(170)　妄分別に對して自在を得るから，妄分別の如くに一切義が成就するから
vikalpasya parāvṛttau(41 如是分別轉)　分別の轉依に於て(分別は意識)
vikalpo manovijñānaṁ(65 分別謂意識)　妄分別とは意の識である
vikalpavikṣepaś ca dāyakapratigrāhakadānavikalpanāt(107 分別散亂，分別三輪故)　また分別の散亂，與へる者と，受ける者と，施物との三輪を分別するから
vikalpavisaṁyoga(94 分別無)　妄分別を離れて居ること
vikalpāgocaratvāt niṣprapañcatayā(65 由分別不行境界無戲論故)　無戲論たることによりて妄分別の境でないからである
vikalpānuśayābhedyārthena(96 隨眠分別此能破故)　妄分別隨眠の破し得ない義によつて，…に破せられない義を以て
vikalpopaśamārtha(149 息諸分別義)　妄分別の寂靜の義
vikāraparipākābhyāṁ(151 變起與熟起)　變異と成熟との二によりて
vikārotpatter(154 有壞有起)　變化が起つて居るから，變化が生ずるから
vikṛti(122 異)　變化
vikrānta(174 勇猛)　超越者
vikrīḍana(26 戲業)　遊戲
vikrīḍita(26 krīḍ)　遊戲せる
vikṣipet(92 kṣip 令離)　散亂するであらう
vikṣiptacittāḥ svasthacittam(35 狂者得正)　心の散亂せる者は健全な心を得る
vikṣiptamati(180)　散亂した智
vikṣiptasamāhitobhaya(107 亂，定，俱)　散亂と，三昧に入れると，俱なると
vikṣepa(92)　散亂

vikṣepaṇa(100 散亂)　〃
vikṣepadoṣadarśanāt(92 見亂過失)　散亂の過失を見るが故に
vikṣepapratipakṣatva(80 亂心對治)　散亂の對治
vikṣepasaṁśaya(57 亂癡)　心散亂と疑惑
vikhyāna(64)　現はれ
vigaṇayati(113 gaṇ)　考へる
vigama(22 去，離，滅，永盡)　離，離去，消滅，離脫
vigarhaṇa(133 呵責)　非難されること
vigarhate(83 garh 毀訾)　非難する
vigarhante(123 garh 治罰)　非難する
vigṛhyavaktṛ(186 極治罰？)　諍論を說伏する人
vigraha(34)(複合詞の)　分解
vighāta(80 破，貧窮)　破，滅すること，除くこと，缺乏，妨げ
vighnakāraka(186)　障害を作すもの
vicakṣaṇa(20 通達)　怜悧，賢い，達熟せる
vicaya(6, 144 擇法)　思擇，簡擇，探究
vicarati(52 car 勤作)　走り廻る，働く
vicaret(90 car)　進むであらう
vicalati(43 cal)　移動する，移去する
vicāra(57 觀)　伺，伺察，考慮，反省，疑，研査
vicāraṇa(138)　伺察
vicāraṇā(91)　伺察
vicaraṇācitta(91 觀察心)　〃，伺察心
vicārayet(90 car 思)　伺察するであらう
vicikitsā(28 疑)　〃
vicitra(6 種種)　種々の
vicitrair prakārair(25)　種々なる種類を以て，種々なる方法にて
vicitravijñaptivibodhataḥ(174 諸識身？)　種々なる識の覺の故に
vicitrākārapratyupasthāna(80 種々類現前)　種々なる種類のものを現前せしめること
vicitrita(80 citra 畫)　畫かれた
vicchinatti(102 chid 斷)　斷ずる，斷える
vicchinnāyāṁ gatau(119 隔世)　隔つた趣に於て
vijetṛ(174 能降伏)　勝利者
vijña(123 智慧)　賢き，賢き人
vijñānām antikād(8 非智者邊)　諸の智者(vijña)の許から
vijñapti(60 識)　〃
vijñaptitathatā(168 唯識如)　唯識眞如
vijñaptimātratā(66 唯識)　〃性
vijñānakāya(65 識身)　〃(身は集りの意味，五識を合して五識身といふ)
vijñāpanīya(80 令解)　使他善了知，識知せしめる
vijñāya(124 jñā)　識りて
vijñāyate(3 jñā 知)　識られる
vijñeya(14 jñā 應知，80 能持解)　識らるべきもの，所了別，善了別，識らるべきである
vitaranti(78 tṝ 開)　擴げる，與へる
vitarka(28 覺，57 尋)　尋思，想像，疑，推理，熟慮
vitta(113)　財物
vidadhati(97 dhā)　與へる
vidita(2 vid 解)　理解せられたる，知られたる
vidiś(123)　四維(維は東北，東南，西南，西北)
viduṣāṁ(6 vidvas, viduṣ, 聰慧正觀人)　諸の聰慧者には
vidūṣaṇa(131 說過失)　拒非，却けること
vidyamānatā(48)　存しつつあること

い狀態に行くこと
lokasaukhya (126 世樂)　世間の樂
lokottara (7)　出世間の
lokottarajñāna (62 出世間智)　〃
lokottarapṛṣṭhalabdhaṁ laukikaṁ (96) 出世間の後に得られたる世間的智，通常，後得智といふ
lokottarapṛṣṭhalabdhaṁ laukikaṁ jñānaṁ (63 出世後得世智)　〃，出世間後得の世間的の智，後得智
lokottaraprajñotpādanayogyatā (29) 出世間の慧の生ずるに適して居ること
loṭ (129)　命令詞を指す文法上の辭
lobhatvena tathā vṛttiḥ (165 亦僞勤) 又，貪欲による働き
lola (122 貪著)　〃，求めること，貪り
loṣṭa (59 石)　土塊
loha (38 鐵)　〃
laukikāgradharmāvasthā (93 世間第一法位)　世第一法位
laukikī (114)　世間的の

V

vaktāraḥ (163 vaktṛ)　諸の語るもの
vacanīyaḥ (154)　言はるべき，言はれねばならぬ
vacasābhyupeta (119 善說法)　〃，言說を具足せる
vacasābhyupetaṁ vākkāraṇenopetaṁ (120 善說者不顚倒故？)　言說を具せるとは語ること，卽ち說法，を具足すること
vajra (16 金剛)　〃，金剛杵
vajropama (96)　金剛喩，金剛に喩へられるものの意味(第十地の最後の定の名，この最後心の禪定を經て佛果となるので，等覺である)
vajropamaṁ samādhānaṁ (96 金剛定) 金剛喩三昧を(samādhāna はここでは samādhi と同じきこと，釋に在る如し)
vaṇig (89-nij 商)　〃人
-vat (2)　如く，(3)有する
vatsala (31)　親愛，親愛なる
vatsalatā (95)　親愛
vana (97 草木)　樹木，森
vanādigrahaṇam upabhojyāsthirasthiravastunidarśanārthaḥ (98)　樹木等の語は受用せられる不動と動との事物を示す意味
vayam ārabdhavīryā buddhatvaṁ prāpsyāma iti (48—49)　吾々は已に精進を起したものであつて佛たるに達するであらうと，吾々は已に精進を發せるもので，佛たるに至るであらうと
vara (8)　一層良い
varaguṇadhanadāyaka (2)　優れた功德と財寶とを與へるもの
varayogamanodhāraṇaparamārthajñānatas coktih (101 建善，心持及眞解) そして，最勝と結合すると，意を持すると，第一義智を得ることとから，いはれること
varjanā (28)　除くこと
varjayitvā (152 vṛj 除)　除いて
varjita (14 vṛj 無)　離脫したる，無い，缺いた
varjya (97 vṛj)　捨つべき
varṇa (12 色)　顯色，色，色彩
varṇayati (83 varṇ 說)　賞讚する
varṇasaṁpanna (12 色成就)　顯色具足の
varṇitavān (83 varṇ -vat 讚歎)　稱讚した
vartate (27 vṛt 有)　在る，働く，動く，續く

vartante (39 vṛt)　起る，働く
vartamāna (170 vṛt)　存しつつ，行じつつ
varti (154 燈炷)　〃，燈
vartman (117 道)　〃
vartmāccheda (146 生死道不絕)　道を斷ぜざること，道の不斷絕
vartmānupaccheda (147 生死道不絕) 道の不斷絕
vardhate (187 vṛdh 進)　進む，增大する
vardhana (100 增進)　〃，增長
vardhamāna (74 vṛdh 增進)　增長しつつ
vardhayati (162 vṛdh 長)　增長せしめる
vardhayāmī (128 vṛdh 增)　私は增長せしめる
vardhe (122 vṛdh 長)　私は增長する
valgu (78 悅可意，善力)　甘美な，美はしい，心を引く
vaśa (128 自在)　〃，力
vaśavartaka (106)　自在を得るもの
vaśavartin (56 自在)　自在なる
vaśavartī viharati (52)　自在者として住する
-vaśāt (2)　爲に，によりて，の力で，力の故に
vaśitā (66 自在)　〃，勝
vaśitāmāhātmyā (27 自在大)　自在の偉大性
vaśitva (32 自在)　自在性，自在，自在位
vaśitvam āgamya manasy anuttaraṁ (32 得上自在禪)　意に於て無上なる自在性に達して
vaśī (25 -śin 自在)　〃な，總てを自己の意志に從はす超自然力を有するもの
vaśe vartate (151 vṛt 自在…隨轉)　制せられる，制する
vasana (134 衣 su-, nir-)　〃，着物
vastu (136 品類，事)　事
vastu āmiṣadānasyādhyātmikaṁ vastu paraṁ (111)　事は財施の中では內的の事が最上である，事は財施に屬する內的の事が最上である
vastujñānatadālambavaśitākṣayalakṣaṇa (44 諸物及緣智，自在亦無盡)　事物の智慧とそれの所緣の智慧との自在の無盡が特質である
vastutaḥ (63)　實に，實際上
vastutadālambanajñānayor akṣayavaśitālakṣaṇaḥ (44 由於諸物及緣彼智二種自在永無盡故)　事物とそれの所緣との智慧に於て無盡なる自在を特質とする
vastra (39 衣)　〃
vastraviśeṣa (134)　一種の衣服，勝れた衣服
vastvābhogāvabodhāc ca (118)　そして事物の功用の覺悟から
vahana (17 去)　運ぶこと
vahni (16 火)　〃
vahniprakhyo 'parocchrāyaḥ (16 如增火) 他によつて向上する火の如し
vā (185)　然らざれば，(68, v. 47) 及び(ca の意味，攝大乘論第三品(p. 69)の引用に，及と譯さる)
vā=iva (4, 40 譬如…)　如し
vākkaraṇa (86)　談話，言說
vākya (138 言)　〃，言句
vāgdoṣa (110 語過)　口の過失，言語の過失
vāgmī (86 -min 巧說)　善語，善く語ること，能辯な
vācā (vāc, 1 言，以言)　語によつて，語を以て

ratnakūṭa (165 寶積經)　〃
ratna-peṭa (2 寶篋)　〃，寶石を容れる籠
ratnabhūtāni lakṣaṇāni (76)　諸の寶たるの特質は
ratnākara (16 寶篋)　寶藏
ramya (18 樂處)　樂しみ
ramyatā (18 樂處)　樂しみ
ravita (80 rav, ru)　叫んだ，叫び，響
(187 口失) 暴音
ratnākarameghopamatvam anubhāvaḥ (34)　力を示すのは寶藏と雲との譬喩である
raśmi (26 光，神光)　〃，〃，光線
raśmikarma (26 光業)　〃
rasa (2)　味
rahita (70 rah 無)　缺けた，無い，離れた
rāgajāpatti (88 貪罪)　貪より生ずる罪
rāgādyābhāsa (63 貪光)　貪等の顯現
rājā (2 王)　〃
rātrindivena (187 晝夜)　〃，日夜に
rātrau (86 夜)　夜には
riñcanti (160 ric 捨)　捨てる
ripa (98 怨仇)　敵
ruci (27 欲)　愛喜
rucimanaskāra (74 欲修作意)　愛喜作意
ruta (3 文)　〃，叫，響，(138 ru) 說かれた，叫ばれた
rutānyatva (3 文異)　文とは異なる
rūpaṁ daśāyatanāny ekasya pradeśo vedanā ṣaḍ vedanākāyā ity evamādi (91)　色は十處と一の部分とであり，受は六受身である，と此の如き等
rūpāt (77 餘色)　色から
rūpagaṇa (36 諸色)　色聚，色の群
rūpadharmālambana (57 色緣)　色法所緣
rūpabhrānti (60)　色迷亂
rūpavijñapti (60 色識)　〃
rūpākhyā (60)　色と稱せられる
rūpārūpe dharmo lakṣaṇahetus tathaiva cārogye (75 爲色爲非色，爲通爲正法)　法は色非色に於て特質の因で，同じく又無病に於て
rūpārūpyabhavapriyānām (21)　色界無色界の有を愛する人々には
rūpin (54 色)　有色
ropaṇa (118 令植，161 令禁)　成育せしめること，增進せしめること
ropita (108 ruh 建)　高められた，高められ
raudrakṛpā (130 惡？)　兇惡に對する悲愍

L

lakṣaṇa (9 相，能相)　特質，相，(80) 豫言
lakṣaṇatathatā (168 空相如)　實相眞如
lakṣaṇa-virodha (5)　特質との矛盾
lakṣaṇasthānakarmasu (40 相處業三種…說)　特質と處と業とに於て，に關して
lakṣaṇahetu (75 相好因)　特質の因，相の因 (相好は通常は三十二相八十種好をいひ，單なる相は特質の外部に表はれた相狀をいふ，ここでは特質)
lakṣaṇānuvyañjana (185 相好)　三十二相と八十種好と
lakṣaṇāvirodha (5)　特質に矛盾しない，相に矛盾しないこと
lakṣaṇaikāntyād (149 相定)　相が一定して居るが故に，相が決定して居るが故に
lakṣaṇatas (82 相)　〃から，相の故に

lakṣaṇā (64)　示相，語の間接的或は喩說的の意味
lakṣaṇā punaḥ pañcavidhā yogabhūmiḥ (65)　示相は又五種の瑜伽地である
lakṣya (64 所相)　〃
laghukāya (75 得身？)　輕身
lajjana (134)　羞，羞ずること，羞がある
lajjā (72 有羞)　羞，慚愧
lajjāyamāna (72 lajjāya)　羞しつつ
labdharatnākaropamaṁ (34)　寶藏の譬が得られたものである
labdhāryamārga (69 得聖道人)　聖道を得たるもの
labdhau vyākaraṇasya (141 得記)　記を得たるに於て
labdhvā (7 labh 得)　得て，得れば
labhante bodhim uttamaṁ (82 速得大菩提)　最上の菩提を得る
lambhana (101 令)　得
lambhayati (101 labh)　得る，得しめる
laya (57 沈沒，下劣心)　沈，沈鬱，惛沈，怯弱，沈滯
layābhāva (114 下體無)　退屈が無いこと，退弱が無いこと
lalita (80 lal 嚴飾)　〃の
lābhasatkārato audāriki (118 麁者利供養)　利養恭敬の故にとは麁的である
lābhasatkārapūjā (72 爲利無供養)　利養恭敬の供養
lābhahīna (123 失利)　利無き，利養を缺ける
lābhahetor (113)　得るが爲に
lābhitā (28 受)　得ること，得たこと
lābhin (175 得)　得ること
lābho vyākaraṇasya (160 得記)　記を得ること，記の得
lāla (77 涎？)　唾液
liṅga (10 相，相貌)　〃，特相，特質
lipta (134 lib)　汚された
līna (91 lī, 著，拔沉)　退縮せる，下劣な，執著せる
līno hi buddhyāśayo yānadvaye prayuktānāṁ kevalātmārthādhikārāt (115)　何となれば，下劣な覺の意樂のものは二乘に於て精勤する人々の單なる自利を主となすからである
līnātyudārāśayabuddhiyogāt (115)　下劣と甚廣大との意樂の覺と結付くから
līnatva (135 下，下心)　下劣性，退縮性，沈鈍
luṭite (88 luṭ 所濁)　濁らされる
luṭite prasādite (88 luṭ, sad)　濁らされ澄靜となつた水に於て，水が濁らされ澄靜となつたときに
lubdhahrasvahṛdaya (180 慳)　慳な小心
loka (20 世)　〃，世人
lokato 'yaśo dabhate (133)　世間から不名譽を得る
lokagata (114 世法)　世間に在る，世間の＝ laukikī 世間的の
lokajñatā (137 知世間)　〃，世間智
lokatraye (117 於三世中)　三世間に於て
lokadṛṣṭa (155 世見)　世間の見
lokadharma (134)　世間の八法 (利衰毀譽稱譏苦樂の八法)
lokadhātūn gacchati (92 遊諸界)　諸の世界に行く
lokadhātvantara (25)　他の諸世界
lokamohaprakāra (58)　世間の愚癡の種類
lokasamatīta (127 過世)　世間を超過せる
lokasamānabhāvagati (33)　世界と等し

を取ることを先として，義を取る働きを伺察する

yena nirmāṇena satvārthaṁ karoti (45 nirmāṇena は恐らく不要，由作所化衆生利益故) それによつて衆生の利益を爲すもの

yena pariṣanmaṇḍaleṣu dharmasaṁbhogaṁ karoti (45 由依大集衆中作法食故) それによつて會衆輪の中に於て法の受用をなすもの

yena mātuḥ kukṣim avakrāmati (175 謂入母胎) それによつて母の胎に降入するものである

yena sahitaṁ sarvaṁ vibhutvajñānaṁ pravartate (41) それに伴うたる一切の威力の智慧が働く

yenābhikṣṇaṁ na deśayet (81 不一切時說故) それによつて繰返しては說かないであらうことである

yenāryadivyāpratimair vihārair brāhmyaiś ca nityaṁ viharaty udāraiḥ (25 三住住無比) 如何なる無等の聖住と天住とにより，又高勝なる梵住によりて常に住するにしても

yeṣāṁ na sukaraṁ saṁkhyā kartuṁ (143 此不可數) それ等について，數へることは容易ではない

yair kāraṇais tat tathānuttaraṁ śaraṇaṁ tat saṁdarśayati (35) 何れの因によつてその歸依が又無上の歸依であるかのそれが示される

yo＝yoniśas (7) 如理に

yo aṣṭavimokṣadhyāyināṁ samādhivaśena pratibimbākhyānāṁ saṁskārāṇām utpādaṁ (152 入解脫禪者定自在力故諸行像生) それは八解脫禪に入れるものには，三昧の自在力によりて，像と稱せられる諸行の生があるものである

yo gotrabalena pāramitāsu pratipattyabhyāsaḥ (102 依種性力，而修習故) すべて種性の力によつて波羅蜜の實修數習なるものである

yo dharmasrotasi buddhabodhisatvānām antikād avavādagrāhakaḥ (58 諸佛菩薩教授所有法流悉受持故) それは諸佛諸菩薩の許から法流に於ける教誡を受けることである

yo buddhānusmṛtisahagataḥ (56 念佛相應故) 佛に對する隨念と俱行するもの，凡て念佛と俱行するもの

yo bhāvanāyā anupalambhaḥ (48) 修習の不可得なるものこそ

yo yatrārthe saṁśayitas tasya tan niścayārthaṁ deśanāt (53 若人於義處處起疑，爲令彼人得決定故) 何人でも何れかの義に關して疑うた其人の爲に，それを決定する義を敎へるからである

yo yad icchati tasmai tasya dānāt (100 施於求財者隨其所欲而給與之) 何人でも凡て欲するものにはその欲するものを與へるから

yo 'rhataś caramān skandhān varjayitvā (152 除阿羅漢最後五陰生) それは阿羅漢の最後の五蘊を除いてである

yo vedanācittadharmālambanaḥ (57 謂受心法緣) それは受と心と法との所緣である

yoga (27 相應，神通相應) 〃，(14 習) (97, 99, 142) 瑜伽，精勤，實修，具足，結合

yoga (108)＝prayoga (109) 精勤又は修習＝加行

yaga iti śamathavipaśyanābhāvanāyāṁ (98) 瑜伽に於てとは止と觀との修習に於てといふ意味

yogataḥ (164) 勤修の故に

yogata ity abhyāsāt bhāvanāmārgeṇa (63) 精勤からとは修道によつて數習するによりてである

yogam akṛtvā (70) 精勤を作さずして

yogaḥ karaṇīyaḥ (182 勤精進) 勤修が爲さるべきである

yoge abhilāsa (73 樂求？) 精勤に於ける欲

yoge 'bhilāṣo 'vikalpe taddhṛtyāṁ pratyayāgame (73 樂求求四種，平等，無分別，現持當緣故？) 精勤に於ける欲と無分別に於ける欲と，それの堅持に於ける欲と，緣に至るに於ける欲とがある

yogaprabhāva (12 諸通) 瑜伽の威力

yogabhūmi (65 學境) 瑜伽地

yogavibhrama (51 行迷) 精勤の動搖，動搖せる精勤

yogābhilāṣa (73 求平等？) 瑜伽の欲，精勤の欲？

yogopaniṣadātmaka (56) 精勤と因とより成るもの，精勤と因とを自性となすもの

yogopaniṣadyoga (57) 精勤と因と精勤

yogin (77 能行者，修行人) 行者，瑜伽行者

yogyatā (29) 適して居ること

yogyaṁ ca pācane (170 亦應成) そして成熟に於て勤修すべき

yojana (102) 結合

yojayanti (164 yuj 與) 與へる，供給する

yojayet (91 yuj) 努むべし，精勤するであらう，修すべし

yojya (115 yuj) 行はるべき

yoni- (6＝yoniśas) 如理に

yonimanaskāra (126 念正，正念) 如理作意 (yoniśo を yoni となした，釋に yoniśomanaskāra とある)

yonivicaya (6 yoni＝yoniśas) 如理に思擇すること

yoniśas (90) 如理に

yoniśaḥ pratipadyate (87 起正思？) 如理に行ずる

yoniśo dharmamanasikārāt (118 依止正念，由如法不倒故？) 如理に法作意するが故に

yoniśo manasi kartavyaṁ (8) 如理に作意すべきである

yoniśomanasikāra (28 如法思惟) 如理作意，如理に考へること

yoniśo manasikriyā (65) 如理に作意すること

R

rakṣa, rakṣaṇa (28 守護) 守る，守護，防護

rakṣaka (3 護，守護) 守護するもの

rakṣati (100 rakṣ) 護る，守護する

rakṣahīna (123 失護) 守護無き

raṅga (39 色) 〃，色彩

raṅgair vākāśacitraṇā (40 譬如染畫空) 色を以て虛空に畫くが如し，vā は iva

racana (72 修治) 著作

racanācchanda (73) 著作の願ひ

rajaka (89 浣衣) 〃者，染絲者

rajas (181 塵) 〃

rañjikatva (80) 悅ばしいこと

rati (72 有樂，可樂) 愛喜，愛樂

ratiyukta (148 樂得) 樂合，愛との結合

ratisaṁprayukta (147 樂得) 樂との相應，樂と相應せるもの

ratna (8 寶，三寶) 〃

修習する，（又は，yadā は或時には，にても可，止を修習する時には止のみを修習し…）

yadi (3 若)　若し…すれば

yadi no hīti vadet (154)　若し否實に然らずといふであらうならば

yadi manojalpād evāyam arthaḥ khyātīti paśyati nānyan manojalpād yathoktaṁ dvayālambanalābhe (56)　若し意言から此義が顯現すると見，他の意言からではないと見るならば，前所説の如くに二の所緣の得がある，二の所緣が得られる

yama (108 禁，禁防)　制御，禁

yam adhikṛtyoktaṁ (93)　それに關していはれた

yamodyamamaya (108 守？　禁勤)　制御と精勤とより成る

yaśas (84 名稱，名聞)　名聲，名譽

yaśohetutva (9 名聞因)　〃，名譽の因なること

yas tatsaṁpratyayasahagataḥ (57 隨念佛時信心相應故)　それはそれの敬信に俱行するもの

yas teṣām evārhataś caramaṣāṁ (152 前所除最後五陰生，由後生種子無故)　それは今いうた同じそれ等の阿羅漢の最後の五蘊の無種子性によりてである

yasya pudgalasyārthe tatpravartate (40 隨何根人…)　何れの人の爲にかそれが働く，それが起る

yasya pratipakṣeṇa śūnyatāsamādhitrayaṁ dharmoddānacatuṣṭayaṁ ca deśyate (73 如來爲對治此七非有取，次第説空等三三昧，及説種法憂陀那)　それの能對治として三種の空性三昧と四種の法綱要とが説かれる

yasya yatra yathā yāvatkāle yasmin pravartate (40 隨人，隨世界，隨時種々現)　何人に對しても，何處に於ても，如何樣にも，何れの時に於てでもどれだけの範圍に於ても，働く

yasyārthasya tan nāma (139 能知此義屬此名故)　何れの義に屬してもそれが名である

yā 'vidyamānatā saiva paramā vidyamānatā (48)　凡て非有なるものこそ卽ち最高の有なれ

yāṁ pūjām āyatyāṁ prayojayitum praṇidadhāti sā dūre (119 發願於未來欲供養者爲遠)　凡て供養を未來に於て行はんと願ふのはそれは遠くに於てである

yāṁ vācaṁ tatra gatvopapannā bhāṣante (25 隨彼所起言語悉聞知故)　その言を，そこに往いて生れたものが，語るものである

yān varjyāsevya yoge bhavati vipulatā (97)　それを捨てて，又は，奉じて，瑜伽に於て廣大性がある

yācaka (113 乞者)　〃

yācake jane (109)　請ふ人々に於て，請ふ人々の內に

yāta (16—17 yā 度)　行つた，行く，至つた，度つた

yāta (68 yā)　進んだ

yāti (　〃　)　進む

yātavya (　〃　)　進まねばならぬ

yānti (　〃　)　彼等は進む

yātam pāraṁ (35)　彼岸に至つたる

yāti (92 yā 進)　行く，至る，進む

yātrā (18 入)　入ること

yādṛśenāśayena (31)　如何なる意樂によつて…か…

yānatraya (10 三乘)　〃

yānatrayagatatvāt (78 被三乘)　三乘に到つて居るから

yānatrayaprayukteṣu (117)　三乘に努める人々の間に於て

yānatraye kauśalam etya buddhyā svayaiva yānaśya yateta siddhau (120 善解於三乘，自乘令成就)　覺によつて三乘に於ける善巧に至つて，自己の乘の成就に於て努めるであらう

yānanadīplavārūḍha (152 乘車乘船)　乘物と河の筏とに乘れるもの，車と河舟とに乘れるもの

yānadvaya (35 二乘)　〃

yānadvayena parinirvāpaṇāt (35 令…解入二乘涅槃)　二乘によつて般涅槃せしめるから

yānasya (60 趣)　進むものの，乘の

yānānuttaryāt (93)　無上乘であるから

yānānuttaryeṇa (94)　無上乘によりて

yānānulomanāt (79 隨乘)　〃，乘に隨順するから

yānānyalajya (173 異乘)　他乘の差

yānāvikārya (172 不捨)　乘に對して不變なこと（？）

yāne tiṣṭhati tadārūḍhānavasthanavad (152 如人乘馬，人去馬不去)　乘物が住しつつあるときに，それに乘つた人の住せざるが如し

yāvat (4 乃至)　〃，せいぜい

yāvantaṁ kālaṁ yāvatāṁ satvānāṁ yatrārthe śaraṇaṁ bhavati (35)　幾何の時の間，幾何の衆生に，何れの義に關して，歸依があるか

yāvantaḥ (138 yāvat 所有)　あらゆる，乃至

yāval lokasya bhāvas tat samānayāgatyā atyantam ity arthaḥ (33)　世界の存在する間中それに等しく行くことによつて畢竟であるといふ意味

yukta (1 yuj, 相應)　〃せる，適切な，理に合せる，如理な，具足せる，結付ける

yuktajana (115)　行ずる人々

yuktarūpa (8)　適當なもの，如理のもの

yuktasamāoatāpadair (21)　適合せる等しい句を以て

yuktā (50 yuj 相應)　精勤な

yukti (30 道理)　如理，理

yuktiprajñaptivyavasthāna (168 道理假建立)　〃，道理假説建立

yuktiyānavyavasthiti (167 立理亦建乘)　道理と乘との建立

yuktivihita (77 dhā)　如理を具したる

yuganaddha (91 yuganah 俱，相應)　〃，相合せる，適合せる

yugapat (43 同時)　同一時に

yujyate (137 yuj 勤修行)　精勤する，適當する，合理である，理に合する

yuta (35 yu)　結合したる，具足せる

yuta (104 yu)　結合せる，修せる，從事せる，ともなる (cf. Pāli Dic.)

yuvan (151 少壯)　青年

yena gaganagarbho bhavati (42 所欲皆得虛空藏故？)　之によつて虛空藏となる

yena garbhān niṣkramaṇaṁ kāmaparibhogaṁ pravrajyāṁ duṣkaracaryām abhisaṁbodhiṁ ca darśayati (175 謂出胎，受欲，出家，修行，成道)　それによつて胎より出づること，欲受用，出家，難行を行ずること，及び現等覺を現ずるものである

yena nāmagrahaṇapūrvikām arthagrahaṇapravṛttim upalakṣayate (58 謂先取名，後轉取義)　之によつて名

する妄分別

yathānucaritaṁ vicāritaṁ vā (91)　如何に隨行したか或は伺察せられたか…

yathānuśiṣṭapratipattitaś ca saṁrādhayec cittam ato 'sya dhīraḥ (120 隨順如所教，以此令彼喜)　そして教へられた如くに實行するから，その故に賢者は彼の心を喜ばすであらう

yathā pāṁśuvaśād vastre raṅgacitrāvicitratā (39 譬如滋灰力，染衣種々色)　譬へば塵の力から，衣の上に色彩の種々なると多樣でないとがあるが如く(滋灰は染料又は染めること)

yathāpratijñatva (80 如所立義信順)　所立宗の如くであること，提出せられた主張の如くであること

yathābhājanam (73 如其根器)　器に應じて

yathābhavyaniyojanāt (100 隨其所應而成熟之？)　其能力に應じて促進せしめるから

yathābhikāmaṁ (83 隨所欲)　欲するままに

yathābhūtajñāna (8 如實知解)　如實智

yathābhūtaparijñāna (168 如實知)　如實遍智，如實智

yathābhūtam aspṛṣṭatvāt (127 由苦如實未觸故)　如實には觸れなかつた故である

yathāyatnaṁ bhānuḥ pratatavisadairaṁśavisaraiḥ prapāke sasyānāṁ diśi samantāt prakurute (43 如日自然光，照闇成百穀)　恰かも努力無くして，太陽が多くの明澄な光明を放つことによつて，諸の穀類の成熟に關して，諸所に普ねく，働きをなす如く(-viśadairaṁśu- ならん

yathāyogaṁ (108)　所應の如く，事情に應じて，通常

yathāruta (3)　文の如き

yathārutam (6 如文)　文の如き，響の如き

yathārutārthasya vyañjasya (138)　說かれた如き義の文句の

yathārutārthā 'nusāreṇa (3)　文の如き義にのみ隨うて

yathārthanāmābhiniveśakalpa (76 如名如義著，分別)　義と名との如きの執著の分別，如名起義分別，如義起名分別

yathārha (78 應機)　適宜な，宜しきに隨つて

yathārhavineyadeśikatva (80 如其所應教示導)　所應の如くに所化に說くこと

yathāvāditathākārin (116)　說いた如く其如く行ずること

yathāvāditathākāriṇaṁ hi samādāpakaṁ viditvā yatra kuśale tena pravartitāḥ pare bhavanti tadanuvartante (116)　說いた如く其如く爲すことを，實に，勸發するものであると知りて，どこでも善に於て，その勸發によつて，他の人々が行ずるものとなり，それを隨行するからである

yathāvineyadharmadeśanāt (30 應機說故)　所化卽ち衆生の機に隨つて法を說くから

yathāvineyaṁ (174 隨物機)　所化に隨うて，所化の如くに

yathāvyavasthānamanasikāreṇa (15)　固住せる(又は，安立せる)如き作意によつて

yathāvyavasthānamanaskriyātaḥ (25 如所立方便)　定められた如き作意から，建立せられた如き作意から

yatheṣṭagamanād ākāśikaraṇāc ca (42)　欲するままに行くから，また虛空となるから

yathā saṁnāhaprayogavīrya (13)　被甲加行精進に隨つて

yathā satvā upapattito niḥsarantīti (25)　如何に諸の衆生が生から出離するかといふを知る智

yathāsvabhāvatrayaparijñānāt paratantrasvabhāvakṣayāya saṁvartate (69)　如何に三自性を遍知するから依他自性の滅に導くか

yathepsitaṁ (109)　願ふ如く，願ふ如きものを得て

yatheṣṭaṁ (45 他所欲，由所欲)　欲するが如くに，欲するままに，願ふが如くに，所欲の如くに

yatheṣṭopapattiparigraha (166 得隨意受生)　願はれた如き生れを攝すること，所欲に隨つての受生を攝取すること

yathokta (138 非義？)　說いた如き人

yathoktārthaprasannasya (55)　已に說かれた如くに義を信ずることの，又は，ものの

yathā…tathā (2)　恰かも…の如く，その如く，譬へば…の如く之と同じく

yathā tair abhisamitaṁ tathābhisamayāt (94 如餘菩薩所得，我得亦爾)　彼等によりて現觀せられた如くにその如くに現觀するから

yathā yathā (21)　それぞれの(tathā tathā それぞれに應じて，に承けられる)，如何なる狀態に於てでも…それぞれに應じて，それの如くに＝yena yena prakāreṇa, それぞれの仕方によつて(tena tena prakāreṇa それぞれの仕方で，に承けられる)

yathā yathā hy akṣavicitragocare pravartate cāragato jinātmajaḥ (2)　異根於異處，異作有異行？)行の中に在る勝者の子は，實に，それぞれの眼の種々なる境に於て働くが如くに

yad etatpūrvaṁ nāmni sthānam uktaṁ (65 安心法界，如先所說，皆見是名？)　それはこれより以前(XI, 6, 33)に名に於ての處といはれたものである，それはこれ以前に名に於て處せしめると說いたものである

yaduta ahaṁ mameti (155 所謂我我所執)　卽ち我は存す，それは我のものであるといふもの，卽ち我我所である

yad bhavaty eva teṣāṁ (13)　何でもそれ等にあるもの

yadvad…tathaiva (38)　如何なる仕方で…此の如くに，それと全く同じく

yad vidyamānam pratītyasamutpādam avipaśyann avidyamānam ātmānaṁ nirīkṣate (23 緣起之法是有而不見有，我體不有而復有見)　緣起は存するものであるを見ずして，存しない我を見るものとは

yadvīryaṁ (106)　その精進なるもの

yadā (30)　其際，その時

yadā cittaṁ pradadhāti (57)　何時でも心が努力するとき，又は働くとき

yadā vyayacchate vīryam ārabhate (57)　何時でも，心亂れ，精進を始めるときに

yadā śamathaṁ bhāvayati (vipaśyanāṁ vā) (146 或止，或觀)　時には止のみを修習し，或は時には觀のみを

高の解脫によつて其心の解脫せる人

muktahastatā (175 開手)　〃，寛大なこと，惜しまないこと

muktadoṣamala (134)　過失の垢を脫して

muktatvāt (107)　解脫するから，解脫したから

mukhena (42)　門によりて，口によりて

mucyate (12 muc)　解脫する，脫する

mudita (130 mud 喜)　歡喜せる

muditaiḥ (16)　歡喜によつて

muditatara (102)　一層歡喜せる

muditāśayena (102 勝喜心)　歡喜意樂によりて

muni (97 尊)　牟尼

munivihitasudharmasuvyavastha (24 佛善成法)　牟尼の決定せる善法によく安住せる

munisatatamahāvavādalabdho bhavati (97 恆受尊教授)　牟尼の恆常の大教授を得たものである，…得たものになる

muṣitā smṛtiḥ (187 念無失)　忘失の念

mūḍha (7 muh 癡業)　愚者，愚な

mūrti (52)　身體

mūrdhāvasthā (93 頂位)　〃

mūla (125 根)　〃，根本

mūlacitta (24 心根)　根本心

mūlabalāt (14 根力)　善根の力から

mūlādibhāva (126)　根等の狀態，根等たること

mṛdu (50 下品輭)　輭品，柔軟

mṛduka (12 薄い，柔輭)　微な，弱い，柔かい

mṛṣārvāda (110 妄語)　〃

mṛṣṭam aśanaṁ (124 mṛj 美食)　〃

megha (16 雲)　〃

meghabhūta (34 與大雲相似)　雲の如きもの

meghasvaraghoṣa (80 雷聲)　如雲雷吼音，雲雷の響く音聲の如き (nāga は象とも龍ともなす)

meghenevākāśasthālīyāsyāśrayasaṁniviṣṭasya śrutadharmasya dharmameghety ucyate (183 譬如浮雲遍滿虛空…充足一切可化衆生，由能如雲雨法故名法雲地？)　雲によつて一部の (？) 虛空の遍滿せられるが如くに，所依身に滲透した所聞法について法雲地といはれる (全部の文字通りの意味が明確でない，-sthālīyasya が判らないので，-sthalīyasya かと見た)

meghopama (34)　雲の譬喩

medhā (27 念)　聰慧

medhānukūlā vipākaviśuddhiḥ (29)　聰慧に順ずる異熟の淸淨，異熟の淸淨は聰慧に隨順する

maitracitta (126 有慈者)　慈心ある者

maithuna (41 欲染)　婬欲法

mokṣakāma (17 求解脫者)　解脫を欲するもの

mokṣabhāgīya (12 解脫分)　〃の

mokṣamārgaṁ bhāvayanti (23 bhū)　解脫道を修習する

mokṣādhipa (114 增上)　解脫と增上

mocana (99 令解脫)　解脫

moda (18)　歡喜

modate (17 mud 喜)　歡喜する

maulasamādhi (57)　根本三昧

maulīṁ sthitiṁ (92)　根本の住を

Y

yaḥ (5)　何が…か，それは

yaḥ parijñeye vastuni parijñeye 'rtha parijñāyāṁ parijñāphale tatpravedanāyāṁ ca (57 一通達物…二通達義…三通達果…四通達覺…)　それは遍知せらるべき事物に關し，遍知せらるべき義に關し，遍知に關し，遍知の果に關し，及びそれの覺に關してである

yaḥ prajñapte śikṣāpade taduddeśasya vibhāgaḥ (55 謂，如所制更廣分別)　すべて學處が已に制定せられたとき，その總說の分別なるもの，それは學處が已に制定せられたときに，それの總說を分別するもの

yaḥ samantakamaulasamādhisahagataḥ savitarkasavicāranirvitarkasavicāramātrāvitarkāvicārasahagataś ca (57 有覺有觀等三三昧相應故)　それは普ねく根本三昧と俱行するものと，及び有尋有伺，無尋唯有伺，無尋無伺と俱行するものとである

yac chrutacintābhāvanāprayogenālambanīkṛtaṁ parikalpitaṁ (169 謂聞思修慧方便，人所緣起分別)　それは，聞思修の加行によつて所緣となされたもので，分別性である

yatkiṁcid veditam atra (131)　少しでも感受したものは，ここでは

yat kliṣṭaṁ sarvadā (65 一切時染汚識)　それは常に染汚せられたるものである (卽ち染汚識)

yat teṣāṁ bījam ālayavijñānaṁ (169)　それはこれ等の因たる阿梨耶識なるものである

yat prakṛtyālambanībhūtam ayatnaparikalpitaṁ (169 謂自性現前，非分別故名自然住)　それは本性上所緣となつたもので，無努力の分別性である

yati (59)　行者，行，制御

yatna (55 用，功用)　〃，勤勇，努力

yatnam ugraṁ (76 勝勇猛)　强い努力，强い精進

yatnasya svayaṁbhūtva (155 自起則不然)　勤勇の自然有たること

yatnapratyayatva (155 以人爲緣？)　勤勇が緣たること

yatra vineyās tiṣṭhanti tatsthānagamanajñānaṁ ṛddhiviṣayābhijñā (25 隨彼處處往敎化)　何處にでも諸の所化が住するその處に至る智が神境通である

yatrastha (96)　そこに住するもの…所のものである

yathā (2 譬如)　例へば…如く，恰かも…如く，如何に…かを

yathākāmaṁ bhogasaṁdarśanāya (41 如所欲受用皆現前)　欲するままに受用を示現する爲に

yathākāmanidarśanāya (26 隨欲現)　所欲の如くに示さんが爲に

yathākramaṁ (2 如其次第)　〃，順序に應ずる如く

yathākhyānam (6 如文)　說明文のままの，說明の如く

yathā ca tatprāptiḥ (36)　その到達の如くに，その到達に隨つて

yathājalpārthasaṁjñāyā nimittaṁ (64)　意言の如き義と想との相，意言に隨ふ義と想との相

yathātmanaḥ svātmahitāni kṛtvā (95)　恰かも自己の爲に自己の諸の利益を作して

yathādhigamadharmavyavasthāna (58 所得法)　證得した如くに法の安立，證得の如き法の固住

yathādhimokṣam (16 隨所欲)　信解に隨つて，信解の如くに，信解に應じて，信解あるに隨つて

yathānamārthābhiniveśavikalpa (76 如名起義分別)　名の如くに義に執著

法，大義法
mahārthasaṁpādanakṛtyakārika (19 大義成) 大利益を成就せしめる所作をなすこと，…所作をなすもの
mahārthatā (9 大義) 大義性，大義たること，大義
mahārthatva (9 大義) 〃，大義たること
mahāryadṛṣ (10 大聖法) 大聖の見を有するもの
mahāryadharme (53) 大聖法に於て
mahārhacittotpādavarjita (17) 大なる尊き發心を缺いた
mahāśanaviṣākrāntalola (124 食毒) 大食毒を有するものを貪るもの
mahāśani (98 mahā-aśani 大電，大電光，大雷，mahā-śana 大食の śana が śani となつたか，mahāśaner の r が，次に rip- とあるから，落ちた形か)
mahāśrayārambhaphalodayātmika (19) 大なる所依と發勤と果の生ずることとより成るもの
mahāsatva (174 摩訶薩) 〃，大衆生
mahāsatvaparipākā (12) 大に衆生を成熟せしめること，衆生の大成熟
mahāsāgara (44 巨海) 大海
mahāsuvarṇagotra (12 勝金性) 大なる金の鑛石(シナ譯の性は gotra，種性，の譯語)
mahāsuvarṇagotraupamya (12 種性金譬) 大なる金の鑛石の譬喩
mahāsuhṛt (16 友) 大親友
mahotsāha (13 勇猛) 大勤勇，大精勤，大なる努力
mahodaya (13 出離) 大昇進，大向上，大生
mahopāya (45 mahāmāya は誤植，大方便) 〃
māṁsacakṣuḥ (143 肉眼) 〃
māṇḍavyasūtra (187) マーンダヴィヤ經
mātāpitṛbāndhavāśayaviśiṣṭa (31) 母，父，親屬に對する意樂よりも優つて居る
mātṛbhūta (162) 母たること
mātra (141 限極) 品(上品等の)
-mātra (22 唯) 唯…のみの
mātrādi (162) 母等
mātsaryasya prahīṇatvāt (100) 慳貪を棄てたから
māna (165 慢下) 慢
mānin (175 有慢) 慢を有するもの
mā bhūd ante 'py anindhanasyāvasthānam iti (154) 最後に於ても亦薪無き火の住することあること無し
māyākāra (150) 幻師
māyākṛta (59 幻事) 〃，幻に現はされたもの，幻として作られたもの
māyābhā (61 如幻) 幻の如く(=māyopamā)
māyārājñō (61 幻王) 幻王によつて
māyāhastyākṛtigrāhabhrānter (61 幻像〔象の寫誤〕及取幻〔像とすべし〕迷故) 幻の象と形相とを取ることの迷亂から
māyopamān paśyati lokadhātūn sarvān sasatvān savivartanāśān (25 世生成壞事見彼猶如幻) 衆生を有し成壞を有する一切の世界を幻の如しと見る
māyopamasarvadharmekṣaṇāt (17 觀一切諸法如似知幻) 幻の如き一切諸法を觀ずるから，幻の如しと一切諸法を考へるから
māyopamānvīkṣya (18 如知幻) 幻の如しと觀察して
māyopamatva (26 猶如幻) 幻の如しといふこと，幻の如し

māyopamatvaparijñayā tathaivābhūtarūpasaṁprakhyānāt (141 知身如幻，色相似故) 幻の如きことを遍知するによりて，全くその如く非實の色が顯現するから
mārakarmavedanāt (163) 魔の業を覺せしめるから
mārakṛtāntarāya (124 爲魔障礙) 魔の起す障
māranirantarāyatā (29 諸魔不可奪) 魔に妨礙せられないこと
māraparapravādin (28 惡魔外道) 〃，魔や外敎徒
mārabhavan (26 魔宮殿) 魔宮
mārabhañja (186 破魔) 魔を摧破するものよ
mārayanti (161 mṛ) 殺す
mārān avedayanti (162 令覺諸魔事) 諸魔を知らしめる
mārānvaya (26) 魔の眷屬，魔の從者
mārga ity upāyaḥ (100) 道とは方便である
mārgadvayasvabhāva (54) 二道の自性
mārgasvabhāvayor na kaścin nirdeśaḥ (57) 二道の自性について何等の細說もない
mārgāṅga (57 八道支) 〃
māhātmya (13 大) 大自在，偉大性，自在性，大我性
māhārthyasya ca darśanaṁ (73 見義) そして大義の見と
mitra (163 同侶) 友
mitraṁ śrayed (119) 友に依るべし
mitrād āttā (50 他力) 友から取つたるもの，友から得たるもの
mitrabalāt (14 友力) 友の力から，友の力の故に
mitrabhedārthaṁ (110 壞他眷屬) 友人間を破らんが爲に，友を離間せんが爲に
mithyā cintitārtha (138) 邪に思惟せられた義，邪に思せられた義
mithyākṛta (72 邪作) 邪の作
mithyāniścayāpakarṣakatva (80 決定拔邪) 邪な決定を損減すること
mithyānubhavāt (141 邪覺) 邪の感受があるから
mithyāpratipattitathatā (168 邪行如) 邪行眞如
mithyābhiniviṣṭakaruṇā (130 邪著) 邪に執著したものに對する悲
mithyāvāda (110 妄語) 邪語
mithyāsaṁtīrita (138 tīraya, nom. p. 邪思) 〃，邪な考へたこと
mithyātvasamyaktva (84 邪正) 邪たると正たると
miśra (49) 混合せる，相關せる，多くの
miśraikakārya (49) 混合と同一の所作，相關せる同一所作，和合せる同一所作，混淆せる同一所作
miśropamiśrakāryatvāt (119) 混合和合の果の故に
miśropamiśrabhāvana (141) 雜修と隨雜修，雜と隨雜との修習
miśropamiśratvena (178) 混合隨混合性によりて(よくは判らない，隨混合は混合を強めていふか，從つて全くの混合といふ程の意味か，第七は有相であつて一方に無相を含んで居る點を混合隨混合といふのであらうかと思はれる)
mīmāṁsayā (91) 審察によりて
mukta (2 muc 開) 開かれたる，放たれた
muktacitta (184 心脫) 心の解脫せる者よ，解脫心の者よ
muktacittaḥ parayā vimuktyā (95) 最

mamatvābhāva (39)　我執の無いこと
mamāyati (20 mamāya 染？)　專有する，(怨などを)懷く，心に思ふ，又は，嫉む
mamāyita (39 mama)　我執，愛した
-mayya (95＝-maya)　所成の
maraṇakāle (83 死時)　臨終時に於て
marīci (62 焔)　〃，陽焔，光線
marṣa＝marṣaṇa (105 忍，忍耐)　〃
marṣaṇa (32) 忘れること，(61 耐，忍惱) 忍ぶこと，耐へること
marṣaṇā cāpakārasya arthe vyāpāragāmita (161 耐惡與助善)　及び作害を忍ぶこと，利益に於て作すに至ること
marṣādhivāsanajñānaṁ (105 不報，耐，智性)　忍と耐と智と (marṣa は忍耐であるが，不報は忍耐して怨に返報しないことであらう)
malaśuddhitas (81 無垢)　垢の清淨から，垢から清淨なるが故
malāpakarṣa (88 穢除)　垢の取去られたこと，垢を除くこと
malāpeta (93 離垢)　〃，垢を有しない
malina (134)　汚れたる
mahataḥ satvārthasya saṁpādanāt (109 利多衆生故)　大なる衆生利益が完成されるから
mahatva (171 大義)　大性，大なること
mahatvaṁ buddhakarmaṇaḥ (171 事)　佛業の大性
mahatvayoga (171 具足)　大性を具足すること，大性との結合
mahatī (75 廣大)　大なる
mahatī vibhutvalābhināṁ (75)　大なること，徧主たるを得たる人々のものである
mahadupakarasaṁjñā (113 大饒益想)　〃
mahadupadhidhruvasatkriyābhipūjī (131)　大なる物を以ての常住の恭敬で尊崇しつつ
mahākaruṇā (187 大悲)　〃
mahākaruṇācāryena (19 大悲闍梨)　大なる悲を敎へる人によつて
mahākṛpācāryasadoṣitātman (18 大悲恆在意)　大なる悲愍を敎へるものが常に自心中に住する者
mahāgada (24 藥)　大解毒藥
mahācalendrastha (36 不動如山王)　大山王が住する
mahājñānasamādhyāryamahāsatvārthaniśraya (12 大果及大智，大定，大義)　大智と聖なる三昧と大衆生の利益との依止(三昧と聖なる大衆生)
mahājñānākaropama (46 說是大智藏)　大智慧寶藏に喩へられる，智慧の大寶藏の喩がある
mahātmadṛṣṭi (74 大我見，大義？)　大自在の見，大我見，大我の見
mahātmadṛṣṭir iti maharthā yā sarvasatveṣv ātmasamacittalābhātmadṛṣṭiḥ (95)　大我見とは大義で，それは一切の衆生に對して自己と平等なりとの心を得た我見である
mahādana (19 大取)　〃；大なる取ること
mahādānamahādhivāsanā mahārthasaṁpādanakṛtyakārikā (19 大取及大忍，大義三事成)　大取と大忍と大利を成就せしめる所作を作すことと
mahāditya (96 大日)　大なる日，大なる太陽
mahādharmadāna (78 廣大法施)　大法施
mahādharmapravarṣaka (47)　大法を雨らすもの
mahādhivāsana (19 大忍)　〃，大なる忍
mahānadīśrota (16 流)　大河流
mahānidhāna (16 藏)　大倉庫
mahāndhakāra (127 幽，大闇)　大闇黑
mahāpatha (16 道)　大道
mahāpuṇya (174 大福德)　大功德者
mahāpuṇyaskandhaprasavakaraṇa (6)　大なる非福德蘊を生ずること
mahāpuruṣatva (185 大丈夫)　大人たること
mahābandhanasaṁyuta (124 大縛)　大縛に縛せられた
mahābodhipariṇāmana (130 廻向大菩提)　大菩提に廻向すること
mahābodhinimittataḥ (12 大果)　大菩提の因といふ點から，大菩提の因の故に
mahābodhi-prāpti (4 得大菩提)　大菩提に到達すること
mahābodhiphalatvāt (19 令得大菩提故)　大菩提を果となすことの故に
mahābodhisaṁbhāraparipūrika (104 大菩提滿足)　大菩提の資糧の滿足するもの，資糧を滿足するもの
mahabodhisaṁbhārasyānyasyākarṣaṇāt (128 招引大菩提二聚及餘)　大菩提の資糧と他のものとを牽引するから
mahābodhisaṁbhārārtha (6)　大菩提の資糧の目的
mahābodhisatvārthakriyālambanatva (14)　大菩提と衆生に對する利行とを所緣となすこと
mahābhaya (21 大可畏)　大怖畏
mahābhisaṁdhyarthasutatvadarśana (17 解義亦證實)　大祕密義と正しい眞實とを見ること
mahābhūta (153)　大種
mahābhūmipraviṣṭa (77)　大地に入れる
mahāmaitrīkṛpābhyāṁ (47 大慈與大悲是二恆不絕)　大なる慈と悲愍とによつて
mahāyaśas (174 大名稱)　大名稱者
mahāyāna (2)　大乘
mahāyānagāmin (1 發大乘心者)　大乘に赴くもの(ここは uttamayāna が用ひられて居るから，此方であらう)
mahāyānadharma (7 大乘)　大乘法
mahāyānadharmatā (6 大乘法空)　大乘法性，大乘法
mahāyānadharmarakṣā (28 於大乘法有災横處則能守護)　大乘法を守護すること
mahāyānadharmādhimuktitaḥ bodhicittotpādataḥ (118 由信大乘發菩提心故)　大乘法に對する信解から菩提心が發るが故に
mahāyānasaṁgraha (171 攝大乘)　〃，大乘を包括すること，大乘の總攝
mahāyānasūtrālaṁkāreṣu vyavadātasamaya- (189)　-kāre suvyavadāta- と訂正すべし，何れの章の終りにも -kāre とあるし，-kāreṣu では讀めない，シナ譯に極淸淨時とある極が suvyavadāta- の su- の譯語である
mahāyānaikāyanīkaraṇa (35)　大乘を唯一道となすこと，大乘を唯一道となさしめる
mahāratnagotra (12 妙寶性)　大なる寶玉の鑛石，寶玉の大鑛石
mahārambha (13 方便，方便大)　大發勤
mahārtha (9 大義)　大義を有する，大義ある
mahārthadharma (9 大聖法)　大義ある

bhūṣaṇa (134)　飾
bhūṣayā (2)　莊飾の爲に
bhūṣā (2 莊)　莊飾，飾られた
bhūṣāprakṛtiguṇavat (2 莊美質)　莊飾の爲に本性の勝質を有する
bhūṣita (134 bhūṣ 莊嚴)　〃，せられたる，飾られたる
bhṛtya (52 奴，賤奴)　召使
bhṛśa (27 上品)　優れた，强い，烈しい (122 重障)　强い，澤山の
bhṛśaṁ (52)　速かに，强く，屢
bhṛśaduḥkhitāṁś ca āpāyikān svargagatān karoti (26 信令生善道)　そして，烈しく苦しめる惡趣のものを天上に在るものと作す
bhṛśaduḥkhatāpane…saṁpravartate (20)　烈しい苦痛と苦難とを行ふ
bheda (10 差別＝prabheda)　〃
bheda (110)　破ること，離間，不和合，壞
bhedena (70 別意)　差別すれば，差別していへば
bhedabahula (105 不壞他意)　多く不和合のもの
bhedabhinna (109)　種々なる差別
bhaiṣajya (16 藥)　〃
bhaiṣajyarāja (16 藥王)　〃
bhoga (30 噉)　食ふこと，噉食 (30 資生) 受用，財，食
bhoga (98 資生)　受用，財，食
bhogeṣu cānabhirati (99 不染)　又受用に愛著しないこと
bhogadveṣṭur dātur (129 輕財而以施)　財を厭ふ施者の
bhoganirapekṣa (100 資財不悋)　財を顧みないこと，財を顧戀しないこと
bhoganirapekṣasya śīlādiṣu pravṛtteḥ (115 不顧財者能行戒等故)　財を顧みない者は戒等に於て能く行ずるから
bhogayogyatā (30)　食に適すること
bhogavṛddhinayana (89 增長資財)　財の增長に導くこと
bhogasakti (107 資財著，115 著財)　〃，財に對する執著
bhogātmabhāvasaṁpattī (104 二成)　財と身體との成就，享受又は受用と身との成就
bhogāpramatta (173 財不放逸)　財の不放逸，財に於ける不放逸
bhojana (18 食)　〃
bhojanaṁ dadat (52 以食施彼)　食物を與へるから，食物を與へつつ
bhojya (30 食)　〃
bhrama eṣḥ (22)　これは迷亂である
bhrama eṣa tūtpanno yeyam ātmadṛṣṭiḥ (23 如是我見但是迷謬)　然しこれは生じた迷亂であり，それがこの我見である
bhrānta (124 迷謬)　〃
bhrānter＝bhrāntitas (61)　迷亂から
bhrānteś ca saṁniśrayaḥ (58 及迷依)　そして迷亂の依止である
bhrāntikara (62 起迷)　迷亂を起すもの
bhrāntinimitta (59 迷因)　迷亂の因
bhrāntimātra (23)　唯迷亂のみのもの
bhrāntitas＝bhrānter (61)　迷亂から

M

maṅgala (80 吉祥)　〃
majjagata (88 徹髓)　〃，髓に在るもの，髓に徹したもの
maṇi (37 意珠)　摩尼，珠，如意珠 cintāmaṇi
maṇḍana (18)　莊嚴
maṇḍala (26)　輪圓座 (會衆は多く輪坐するから會衆の全體を纏めて會衆輪，輪は場所とのみはいへない)
maṇḍalajanma (180 在聖衆生)　輪に於ての生 (輪は會衆輪 buddhaparṣanmaṇḍala)
mata (5 man)　言はれた，考へられた，想像された
mati (7 解脫智解)　慧，思，意
matim upadhāya samūladharmadhātau (24 心根安法界)　根本心と共なる法界の中に慧を安じて，根本心を有する法界の中に慧を置きて
matimat (53 有智人)　有智者
maturiva vatsalatvaṁ (134 如慈母愛)　母の愛の如くである
matsaritva (81 有悋)　慳なること
matsarin (130 慳)　慳を有する
madavyapeta (78 離醉)　憍を離れたる
madya (130 酒)　〃
madhura (16 美，美語，調和)　甘い，美しい，軟美な，柔和な
madhyama (151 中年)　〃，中
madhyāntavibhāga (141 中邊分別論)　〃，辯中邊論
madhye (114)　中で，中に於て
manas tadālambanam ātmadṛṣṭyādisaṁprayuktaṁ (174 意謂與我見等四惑相應，緣阿梨耶識者)　意とはそれ，卽ち阿梨耶識を所緣とする我見等の相應法を有するものである
manasaś codgrahasya ca vikalpasya (66 意受分別)　意の，また受の，更に妄分別の
manasikurvataḥ (61)　作意しつつあるものには，作意するものには
manaso 'dhyabhedatā (28 淨心不可壞)　意の分裂しないこと，心の分破しないこと
manaso 'py asvasthatā (133)　意の不安定，意も亦不健全
manaḥkleśa (110 意地三煩惱)　意の煩惱，意に存する煩惱 (三毒を指す)
manaḥpradoṣa (8 惡意)　〃，意の過惡
manaskāra (7 正憶)　作意
manaskāravikṣepa (107 下意散亂)　作意の散亂
manaskriyā (25 方便)　作意
manuṣabhūta (52 人身)　人たる衆生，人
manojalpa (55 意言)　〃，意にてもの言ふこと，分別，想像
manojalpair iti saṁkalpaiḥ (56 意言者分別也)　意言によつてとは分別によつてといふこと
manojalpair prabandhataḥ (91 以意言相續)　意言によつて繼續して
manojña (79 可意)　悅意の，心に適ふ，氣持よき
manodhāraṇa (101 心持)　意を總持すること
manoratha (29 歡喜)　希望，希望物，願ひ
manorathaparipūraṇād (109)　願を滿たすが故に，希望を滿たすから
manorathasaṁpattiḥ (29)　希望の成就，希望物を得ること
manorathāptiḥ (29)　希望物を得たること，希望を達したこと
manorama (79 意樂)　心を引く，樂しい，美はしい，可樂の
manovṛttibheda (40 別轉變化？)　意の働きの別
mantra (153 呪)　〃
mantraparigṛhīta (59 依呪術力)　密咒に咒せられた，密呪に捉えられた
mandataratama (154 漸微)　漸次に微となること，微の漸次に來ること
manyate (20 man)　誇る，高ぶる
mamakāra (160 我所)　〃

bhavagata (66 三有)　有に在る，有の
bhavagatisakalābhibhūyagantrī (22)
　總ての三有と五趣との超出に至る
bhavati tathāgataḥ paraṁ maraṇān na bhavati (38 死後有如來，死後如來無)　如來は死後存するか存しないか
bhavana (87)　處，(天上ならば)天宮
bhavanirbhayatamāhātmya (27 無畏大)
　有を怖畏しない偉大性，有に入るを怖れない偉大性
bhavabhoga (114)　有の享受，生存の享樂
bhavaviṣayanimittanirvikalpa (117 離相)
　有，卽ち生存，の境相を分別しないこと，有の境相の無分別
bhavābhirāma (36 著諸有)　有の愛樂，有を愛樂戀著すること
bhavopapatti (62 受生)　〃，有に生ずること，此生存に出生すること
bhavān (154 汝)　卿は
bhavitavyam atra mahatā prayojanena (6 顯大要用)　ここには大なる用(目的)が存せねばならぬ
bhavitum (4 bhū)　成るべく，あるべく
bhavitum arhati (4)　成るを得る
bhastrā (4)　鞴
bhājanaloka (169 器世界)　器世間
bhājanapariśodhana (26 清刹土)　器世間を清淨にすること
bhājanatva (161 令器)　器たること
bhājanatvāya (137 爲令成器)　器たらしめる爲に
bhājanībhavati (116 bhū 成器)　器となる
bhājanībhāva (116 令器)　器となること，器たること
bhānu (38 日輪)　太陽
bhānumaṇḍala (38 淨輪)　日輪
bhāra (19 擔，158 負擔)　重擔，荷物
bhārahāra (159 負擔者)　〃，荷物を運ぶもの
bhārahārasūtra (159 負擔經)　〃
bhāryā (162 聘室)　妻
bhāva (22 有法)　有
bhāvābhāvapraśne (38)　有と無との問に於て，有と無との問に關して
bhāva (59)　物
bhāvānām (23, 150 法體)　諸の物の，諸の事物の，諸の法の
bhāvātigahana (6 甚深體)　體の甚隱密
bhāvābhāva (3 體非體，有無體)　體有ると體無しと，有と無と
-bhāvana (57) bhāvanā 卽ち修習が複合詞の最後部に在る場合
bhāvanānām avipaśyatāṁ (48)　諸の修習を見ないものの
bhāvanāyāś ca niryānaṁ dvyasaṁkhyeyasamāptitaḥ (96 修位二阿僧祇)
　修道よりの出離は二阿僧祇劫の終つてからである(第二大阿僧祇劫と)第三大阿僧祇劫とを二阿僧祇劫といふ，故に三大阿僧祇劫を經ての成佛を認める，三祇成佛說である)
bhāvanākārapraviṣṭa (59)　修習の行相に入れるもの
bhāvanāgra (131)　最上の修習
bhāvanāmayī (50)　修所成のもの
bhāvanāmārgāvasthāyām āśrayaparivartanāt pāramārthikajñānapraveśaṁ darśayati (24)　修道位に於て轉依をなすから第一義の智に悟入することを示す
bhāvanāsātatya (166 習善無間息)　修習の常住，修習の相續無間斷
bhāvita (169 bhū 觀察？)　考へられた
bhāvyate (141 bhū)　修習せられる

bhāvyamāna (3, bhū 修行)　修習せられつつ
bhāṣā (139 言音)　言語
bhāṣate (3 bhāṣ 說)　說く，語る
bhāṣita (3, bhāṣ)　說かれたる
bhāsvaratva (151 明起)　明性
bhikṣubhikṣuṇyoḥ strīpuruṣavyañjanaparivartanād asādhāraṇā ced āpattiḥ (55 謂，比丘比丘尼男女轉根出不共罪)　比丘又は比丘尼の女又は男の根を轉ずるから，然らば犯罪は不共である(ced＝ca 然らば，そして)
bhikṣusaṁvarasamādānaṁ sarvasvaparigrahatyāgāc chīlapratiṣṭhitasya ca kṣāntyādiyogāt (115 比丘受護者能捨一切所有受故，住戒者能具足忍等故)
　比丘の律儀を受けるは一切の自己の所有物を捨てるから，また戒に住せるものは忍等を行ずるから
bhikṣusaṁvarastha (100 比丘住護者)
　比丘の律儀に住するもの，比丘律儀を奉じて居るもの(護は律儀の古譯)
bhinnaka (159 說有異)　別のものである
bhinnamata (49 別解)　各別の意見を有し
bhinnavṛttika (44 位差別)　各別なる働き，別々の働き
bhinnāśraya (49 別依)　各別の所依を有し
bhibhāsyate (39 bhās)　照らされる
bhujyamāna (2 bhuj 食)　食はれつつ
bhuñjāna (52 bhuj)　食ひつつ
bhūta (34)　生物，(55 實)　眞實
bhūtānāṁ (153)　諸大種の
-bhūta (34)　如きもの
bhūtakṛta (153 大種所作)　〃，大種によつて作られた，大種によつて作された
bhūtaguṇa (165 眞)　眞實の功德
bhūtajñāna (168 眞智)　眞實智，如實遍智と同じ
bhūtapratyavekṣā (55 實觀)　眞實觀察
bhūtāmitābhayārthāya (183 數無畏？)
　無量の事物に對する無怖の爲に
bhūtārtha (59 眞實境)　〃，實義，眞實義
bhūtārthika (186 實義？)　眞實を求めるものよ
bhūto'rtha (59 眞實性義)　眞實の義，眞實の境，實の義，實の境
bhūtvā (30 bhū 得)　なつて，なりて
bhūtatvāya (165)　眞實性の爲に
bhūmiṣu gatasya (33 諸地所有)　諸地に存するもの
bhūminirukti (181 釋菩薩十地名)　地の釋言，地の釋義，地の語源解釋
bhūmiparyavasāna (14 地地滿？　以地滿爲究竟)　地の終り
bhūmiprayoga (14)　地の加行，地に於ての加行
bhūmipraviṣṭa (51)　地に入れる(功用の信，初地より第七地まで)
bhūmipraveśasaṁkliṣṭāś ceṣṭāḥ śraddhādayaḥ (143 應知信等，根垂入於初地)　信等の行動は地に入るに强ひられたもの？　信等は地に入るに迫られた行動である？
bhūmilābha (183 得地)　地を得ること
bhūyas (16)　更に
bhūyo bhūyas (140 數々)　〃，再び，新たに
bhūyo bhūyo 'mitāsv āsu ūrdhvaṁgamanayogataḥ (183)　數〻これ等の故無量の地に於て上地に至る勤修の故に

佛法を成熟するから，佛法成熟の故に(佛法は佛の功德といふが如し)

buddhanāmavirahita(26 於無佛世界) 佛名の缺無な

buddhaparṣanmaṇḍalamadhye(26於佛衆中) 佛の會衆輪の中に於て

buddhapraṇītānuṣṭhānād arvāgasthānacetanā(74 方便恆隨攝？，心住不顚倒？) 佛の導きを實踐するから，心が此方に處しないもの

buddhaprabhā(35) 佛の光明

buddhabhūmi(14 佛地) 〃

buddhayāna(3 佛乘) 〃

buddharahite kāle(70 在無佛世界) 佛の無い時に，佛の缺けて居る時期に

buddhavacana(3 佛說) 〃，佛語

buddhaśāsanādhimuktilābhārthaṁ (176) 佛の敎の信解を得る爲である

buddhasuta(108) 佛子

buddhasaukhyavihāre 'tha dārā'saṁkleśadarśane(41) 住佛無上樂，示現妻無染)佛の樂住に於て，また妻に對して無染汚の見に於て

buddhastotra(184 禮佛) 佛讚頌

buddhādhyeṣaṇataś caiṣāṁ āvṛteś ca vivarjanāt(162 令勸請，亦爲防後障) 諸佛に勸請するが故に，又彼等に障から離れしめるが故に

buddhānubhāva(35 佛力，佛加) 〃，佛の威力，佛の威神力

buddhānekatvāpṛthaktva(48 諸佛不一不多) 佛の一にもあらず異にもあらざること，諸佛の不一不異たること

buddhāśayaprāpter(68 得作佛意) 佛の意樂を得たるが故に

buddhatva(15 佛身，佛果，大乘果) 佛其もの，佛たるもの，佛位，佛

buddhatvam udbhāvitaṁ(33) 佛たることが顯はされて居る

buddhatvaphalābhinirvartanāt(73) 佛たる果を生ずるから

buddhatvasaṁpatprāptivibandhana (98 與佛果作障礙) 佛たること，佛果，佛位の成就に達するを妨げるもの

buddhatvāyogād(48) 佛たることに相應しないから，佛たることと結合しないから

buddhi(8 眞慧，解) 覺

buddheḥ kutaḥ saṁvṛtau(109) 況んや覺の俗諦に於て生ぜんをや

buddhimat(21) 有覺者，有智者，賢者

buddhimān ahina-(arhati !)bodhicittam ādātum(49) 有覺者は菩提心を取るを缺かない(取るを得る)

buddhimattā(7 得覺) 覺あること，覺を有すること

buddhimattva(8) 覺有ること，覺を有すること

budha(133 聰慧？) 覺人

budheṣu(97) 諸覺人に於ては

budheṣv iti bodhisatveṣu(98) 諸覺人に於てとは諸菩薩に於ての意味

boddhavya(15 bud, h) 覺すべき

boddhavyabodhāśrayabodhabodhāt(174) 覺せねばならぬものを覺し所依を覺する覺の故に

boddhā(7 boddhṛ, budh 解) 覺つた者，覺者

boddhānuboddha(175) 覺せると隨覺せると

bodha(15) 覺の

bodhaka(175 依覺) 覺するもの，bodhāśraya に當る

bodhana(43 覺) 覺悟，開覺

bodhaviśeṣa(174) 殊勝な覺

bodhi(2 菩提) 菩提，覺，道

bodhitraya(108 菩提) 三乘の菩提

bodhidharmatā(87) 菩提の法性

bodhinata(130 nam 廻向菩提) 菩提に向へる，菩提を禮拜せる

bodhipakṣa(2) 菩提分，覺分，道品

bodhipakṣe bhāvārthena(73) 菩提分に於てあることの義によつて

bodhipakṣasvabhāva(2) 菩提分自性

bodhipakṣādiratnāśrayatvakarma (40 寶依止業) 三十七菩提分等の寶の所依の業，三十七道品等の寶の所依の業

bodhimaṇḍaniṣadana(102 成佛) 菩提座に坐すること，bodhimaṇḍala は菩提道場で，菩提座の周圍をも含めていひ，bodhimaṇḍa は菩提座卽ち金剛寶座で，菩提樹下を指す

bodhisaṁbhārasaṁbharaṇaprīti (130 菩提聚滿足喜) 菩提の資糧を集聚せる喜

bodhisatva(4 菩薩) 〃 (-satva は -sattra)

bodhisatvagotra(11 菩薩種性) 〃

bodhisatvadhyāna(177) 菩薩禪

bodhisatvabhūminiṣṭhā(74 菩薩地究竟) 〃

bodhisatvasaṁvaraparisodhana (90 令護淸淨) 菩薩の律儀を淸淨にすること(護は律儀の古譯)

bodhya(175 應覺) 覺せられるもの，boddhavya と同じ

bodhyaṅga(144 覺分) 〃，菩提分，道品

bodhyabodhakabodhatrimaṇḍalaparisuddhibodhāc ca(175 覺三輪淸淨故，三輪者，一應覺，謂菩薩境，二依覺，謂菩薩身，三覺性，謂菩薩智) 又，覺すべきものと，覺するものと，覺と，の三輪淸淨を覺するが故に

bauddha(38) 佛に屬する，佛の

bauddho dhātu(44 佛界) 佛の界

brahmaparipṛcchāsūtra(75 梵天王問經) 勝思惟梵天所問經

brahmavicarya(81) 梵行

brahmasvararutaravita(80 梵聲) 如梵音聲響，梵天のものいふ聲の響の如き

brahmyavihāra(106 梵住) 〃

brāhmya(121 梵住) 梵の，梵的の住

brāhmyair vihṛtavihāra(122) 梵的によつて引かれた住

brāhmyavihāra(122 梵住) 〃，梵的の住

brāhmyavihārābhave(123 梵無體？) 梵的の住の無いときには

brūyāt(110 brū) 語るであらう

BH

bhakta(124 bhaj 樂著) 耽つた，享受した，經驗した

bhakti(81 信) 淨信

bhagavat(28 婆伽婆) 婆伽梵，世尊(世尊は lokajyeṣṭha, lokanātha などの譯であり，bhagavat は有德，吉祥を有するものの意味であるが，よく世尊の譯を用ふる)

bhagavati(6 諸佛？) 世尊に於ける

bhagavatā(3) 世尊によりて，薄伽梵によりて

bhaṅga(144 破，壞) 破壞，滅

bhaṅgura(80) 變化のある，高低がある

bhañjaka(186) 摧破するもの

bhaya(3 怖) 怖畏

bhayaprahāṇārthaṁ(183) 怖畏を捨てる爲である

bhava(18 有) 〃，生存

ること

protsahayatīva(128 sah 勸，通常は -sāhayati)　刺激するかの如くである

protsāhanā(128 勸進)　刺戟すること，勸めること

prodbhāsa(62 影)　〃，光影

prodbhūti(34)　生，出生

plava(153 船)　筏

PH

phala(129 phal)　果があれ(phalati の語尾 -ti の無い形)

phala teṣv eva nikāmaṁ yadi me kartavyatā te 'sti(129 彼樂我樂故，施彼我須？)　彼等に於て思ふままに果があれ，若し彼等にこの私によりて爲さねばならぬことがあるならば

phalaka(150)　玉手箱？，板(有鈕子とある，よくは判らない)

phalada(130 與果)　果を與へる

phalaparigrahaguṇa(14 作受果功德)　果を攝する功德

phalaprāpti(9)　果到達，果に達すること

phalabhāvena(11 果體)　果たるものとしては，果性によつて

phalabhedopalabdhi(10 果)　果の差別の認められること，果の差別の可得

phalasi(129 phal 與果)　汝に果を來す，汝に果がある

phalasyodāgama(136 得果)　果に至得すること，果の逮得(釋にsamudāgama 至得，證得と釋す)

phalānubhūti(28)　果を感受すること，果の領納

phalānvita(167 果)　果に伴はれた

phalitavyam(129 phal)　果が結ばれねばならぬ

phaleti loṭ(129)　果とのみあるは命令詞

phalodaya(19 大果)　果の生

phalodaye cāśrayayogyatā parā(29 果起依最上)　又果の生ずるに於て所依に最上に適して居ること，果の生ずるに所依としての最上の適合性

B

badhirāḥ śrotraṁ(35 聾者得聽)　聾者は耳を得る

badhnīyāt(91 bandh)　結付けるであらう，結付けるべし

bandhana(19 縛)　繫縛

bandhu(161 親者，諸親，善友)　親屬

bandhya(117 無益)　無益，效果の無い

bala(8)　力

balāt(96)　强力に，强く，强いて

balakāya(145)　軍隊

balavatvapratilambha(29)　强力を得ること，力體を得ること

balavatva(29 力體)　力を得ること，力

balavaiśāradya(11 力無畏)　十力四無所畏

balavaiśāradyādibhiḥ buddhadharmair asamatvād viśiṣṭā vṛtti(36 殊勝轉，謂轉依已，力無畏等一切佛法無與等故)　十力四無所畏等の佛法と不平等の故に殊勝の轉である

balavaiśāradyādibhir susaṁpūrṇasvabhāvatvāt(35 由力無畏等諸善功德自性滿故)　十力四無所畏等によつて，その自性がよく圓滿せられたものなるが故に

balavaiśāradyāveṇikabuddharma(143 力無所畏及不共法)　十力と四無所畏と十八不共佛法

balopalambhe(29)　力を得ることに於て

bahitas＝bahirdhā(120，121)　外から，外に

bahukalpanirgata(98 無量劫？)　多劫を經たる

bahukāyikacaitasikaduḥkhadurgatigamanahetutva(21 身心苦多及向惡趣)　多くの身的心的の苦と惡趣に行くとの因であること

bahuduṣkarakāryatva(8 多有留難)　多くの難事の爲すべきもの，多くの難行の爲すべきもの

bahudhāvastha(159 多位)　多種の位

bahuprakāra(10 多種)　多數の種類

bahumatatva(84 恭敬)　高く尊敬せられること

bahumāna(33 恭敬)　尊敬，尊崇

bahumānasūkṣmamānā(75 多慢及少慢)　多慢と微慢

bahumukha(6 多門說)　多門なる，多方面な

bahulanirdeśa(54 無量說？)　屢〻細說すること

bahulikāra(81)　熱心，熱望

bahulikārānugata(81)　熱心に從事した

bahuśubhatara(129)　多くの一層善き

bahusatvaparipācana(12)　多くの衆生を成熟せしめること

bādhaka(87 劇)　惱ましい，苦しい

bādhyate(155 bādh 違)　相違する，妨げられる，惱まされる

bāndhava(31)　親屬，親戚

bāla(151 嬰兒，凡夫)　幼童，凡夫

bālair gṛhyante(61 諸凡夫所取)　諸の幼童によつて解せられる，諸の凡夫が取る

bālāśraya(5)　愚者の依る所

bāhuśrutyād(78 多聞)　多聞であるから

bāhyam apy ataḥ(153)　故に外のものも亦，故に外法も亦

bibheti(18 bhī 怖)　怖れる

bimba(61 質，骨像？)　影像，鏡像，像

bimbasaṁkalikāgrāhabhrānter (61 骨像及取骨，觀故)　影像と骨骼とを取ることの迷亂から

bīja(63 種子)　〃

bījapuṣṭatā(29 種子充滿)　種子の長養，種子の增長

bījamātṛgarbhadhātrīviśeṣa(15 種子勝，生母勝，胎藏勝，乳母勝)　種子と母と胎と乳母との勝，優れた種子母胎乳母

bījānurūpatva(11 子相似)　種子に隨應すること，種子に一致する

buddha(3 佛)　〃

buddhāt praśaṁsāṁ labhate(27 諸佛所稱譽)　佛から賞讃を得る

buddhāḥ kalyaṇamitrāṇi(162)　諸佛は善友である

buddhāḥ śuddhātmalābhitvāt gatā ātmamahātmatāṁ(37)　淸淨なる我を得たから諸佛は我の大我性に達した

buddho bhavitum arhati(4 得大菩提果)　佛に成ることを得る

buddhakṣetra(120 佛土田)　佛國土

buddhagotra(48 佛種性)　〃

buddhatathāpraśne avyākṛtanayo mataḥ(38 作是說，定是無記法)　佛に關する此の如き問に於ては無記の理趣が考へられる，佛の如是の問については無記の理趣がいはれる，無記の理趣であるといはれる

buddhadarśana(97)　佛を見ること

buddhadharmaparipākāt(5 爲成熟佛法)

prasada(72 淨信)　〃
prasanna(78 sad)　信心な
prasannasyety adhimuktasya niścitasya (56 淨者信決定)　信じたことのとは信解したことの，決定したことのといふこと
prasannādhikārānadhikatvāt(78 不爲財利令彼信故？)　信心の奉仕に優る所はないから
prasava(15 生)　生ずること，生，出生
prasavakaraṇa(6 引)　生ずること
prasavati(123 sū 生)　生ずる
prasavate(52 sū)　生ずる
prasāda(27 信)　淨信，澄淨，明瞭，淨色
prasādaṁ janayitvā(26 令發信心)　淨信を生ぜしめて
prasādhaka(147 成就)　成立
prasādhana(3 成立)　論證
prasādhayat(88 sādh)　證明しつつ，證明するから，成立せしめるから
prasādhita(153)　極成して居る(極成はすべてに認められて居ること)
prasīdati(158 sad 信)　信ずる，澄ます，喜ぶ
prasṛta(80 sṛ 隨捨？)　通暢な，廣く擴がつた
praskandati(158 skand 欲)　傾ける
prasthāpayati(81 sthā 建立)　〃する
praha, -hā(153 掘鑿)　？
prahāṇa(62)　斷，斷滅，捨，避
prahāṇasaṁskāra(143 斷行)　〃，正勤行(pradhāna の方が可)
prahāra(184)　打つこと，打ち除くこと
prahīna(93 hā 斷)　捨した
prahīṇa(100 對治)　斷，捨
prahṛṣṭa(130 hṛṣ)　非常に悅んだ，狂喜して
praheya(58)　＝heya(應斷)捨てらるべきもの
prahlādana(80 猗)　悅ばしめること(猗は倚と同じ，輕安をいふ，身が輕利安適で心が善をなすに堪へるをいふ，ゆつたりのびのびして居ること，猗は嘆美の辭ともある，ゆつたりして居るからであらう，恃とも依とも解する)
prāk(yothoktaṁ- 105)　前に(已にいはれた如し)
prāgabhāvāt(155 先無)　前無なるが故に，以前に無なるが故に
prāgeva(36 何況，況)　況んや…をや
prāgeva tadviparyayāt(112 何況利翻彼)　況んやそれに反するが故なるに於てをや
prācurya(55 疾利)　夥多
prājñatvāt(119)　智慧を有するが故に
prājñatvād upasthitakleśopaśamanataḥ (119 信念與慧相應，煩惱斷故)　智慧を有するが故に煩惱の寂滅に住したことによつてである
prāṇa(110 自身)　命
prāṇātipāta(104)　殺生，生類を殺害すること
prāṇātipātādipratyayānāṁ ca bhayāvadyavairāṇāmaprasavān nirbhītaṁ (104～105 由能不起一切怖憎等諸罪緣起，豈畏，起諸罪故)　又，殺生等を緣とする怖畏や罪や怨を生じないから，無畏である
prāṇān bhogāṁś ca(77 身命財)　諸の命と財とを
prāṇi(49 蟲)　〃，生類
prāṇigaṇa(49)　生類の群
prātipakṣika(61 能治體，142 對治)　〃，能對治的のもの，對治するもの
prātimokṣa(105 波羅提木叉)　〃，別解脫(戒の箇條をも，其箇條書をも，從つて戒本，戒經をもいふ)(波羅提木叉の律儀は別解脫律儀で，別解脫戒ともいふ，受戒の時に八齋戒，五戒，十戒，六法，具足戒等によつて，十不善業の非を防ぎ惡を止めしめる無表色を得する)
prātihārya(20)　神變，示導，變通
prādurbhavati(7 bhū)　顯はれる
prādeśika(111)　局部的な
prādhāna(135)　主なる
prādhānya(113 勝，最勝)　〃，〃，主たるもの
prāpaṇa(139 令解)　達せしめること
prāptakuśaladharmaparihānitas(133)　既に達せられた善法よりの退失から
prāptānuttaravaśitva(32 得上自在禪)　無上なる自在に達したること
prāptāprāptavihāni(133 退失已得未得)　既得と未得との退失，已得と未得とを捨てたもの，已到と未到とを失ふこと
prāpti(137 得)　〃，至得，得達，到達
prāptiniścaya(57 得決定)　〃，得の決定
prāpnuvanti(52 āp)　達する
prāpnoti(159 āp)　得る，達する，陷る，墮する，ことになる
prāpya(170 應得)　達すべき
prāpyārthin(108)　得んと求めるもの
prāmāṇika(138 量)　〃，可信のもの
prāmāṇiko 'rthaḥ(138)　可信の義
prāmukhyena(106)　上首のものとして，或は，主として
prāmodyaviśiṣṭatā(15 歡喜勝)　殊勝の歡喜たること，歡喜の殊勝たること，歡喜の優れて居ること
prāyas＝prāyeṇa(117 倍)　大部分

prārthita-artha(4, arth)　望まれたる目的
prāhāṇika(28)　正勤に要する，精勤に勉める(prahāṇa, 四正勤，より派生せる語，prahāṇa はパーリ語の padhāna に當るが，pradhāna が正しい．屢〻 prahāṇa と用ひ，此語に斷の意味あれば，玄奘は斷と譯す，四正斷；然し pradhāna と prahāṇa と混ずる後者は不可)
prāhāṇikāṅgasamanvāgama(30)　精勤に要する諸支の具足，精勤の諸支の具足
prāhāṇikāṅgair samanvāgatva(28)　正勤に要する諸支を具足すること
priyajanapremnā(110 利所愛故)　愛する人に對する親愛によつて
priyatara(18)　一層愛らしい
priyavāditā(116 愛語)　〃
priyaśrāvaṇa(17 所樂聞)　聞くを喜ぶもの
priyākhyāna(116 愛語)　〃
priyākhyāna(175 愛語)　〃，愛の談話
prīṇayati(144 prī 喜滿)　喜ばす
prīti(2 歡喜，愛樂，喜)　喜樂
prītisahagata(106 喜俱)　喜俱行の
prītisukhajananin(80 喜樂生)　悅樂，喜樂を生ずるもの
prīyaṇā(71 得喜)　喜
prīyaṇākhedaniścaya(71)　喜と不疲倦の決定と
prema(95 愛)　可愛，親愛
premaka(80)　愛せしめる，愛する
premaṇīya(80 可愛)　〃，善愛な，愛を起さしめる
prerita(147 īr 因？)　動かされた，起された，起つた，激せられた
protsahana, protsāhana(此方が可ならん，caus. より來る)(49 勸進)　勸め

る
prabhavati (7 bhū)　生ずる
prabhavānubodhāt (174)　神通の隨覺の故に
prabhā (35 放光)　光明
prabhākarī (181 明)　發光
prabhāva (25 神通，自在通)　威力，神通，神通威力
prabhāvamahat (33)　大威力を有する
prabhāvaviśeṣa (162)　殊勝な威力，殊勝な通力
prabhāvādhimuktitas (5 令他信解)　威力の信解から，威力を信解するが故に
prabhāvotkarṣaviśeṣeṇa (40)　威神力の增勝の差別によりて
prabhāvita (34 bhū)　所顯，顯はされた，認められたる
prabhāsyate (39 bhās)　照らされる
prabhāsva (80 明亮)　〃な
prabhāsvara (12 光明)　〃の，明亮な，清淨な
prabhāsvaratva (88 淨)　清淨なこと
prabhūta (12 極多)　夥多の
prabhṛti (86)　等，始めとして
prabheda (11 品類)　差別，區別
prabhedalakṣaṇa (9)　差別を特質とする
prabhedavṛtti (189 差別)　差別せる働き，差別の働き
prabhedasaṁgraha (104 差別)　差別を攝すること
prabhedana (98 差別)　〃
pramatteṣu (130 放逸)　〃者に對する
pramarṣayat (32 mṛṣ)　忘れつつ
pramāṇa (79 驗)　量
pramāṇaparīkṣā (91)　量の討究
pramāṇabhūta (138)　量となつた
pramāṇasaṁpanna (12 量成就)　量具足
pramāṇāvirodhena (79 不違驗故)　量に矛盾しないから
pramita (78 mā 分量)　限りがあり，適當な，少しの
pramitāyām akhedāt (79 樂聞無厭故)　適當なものに於ては無倦厭であるから
pramuditamanasaḥ (77 喜)　諸の其意の歡喜せるもの，諸の歡喜せる意の人々
pramuditābhūmi (15)　歡喜地
pramokṣa (26 照)　放つこと
pramodana (74 歡喜)　〃
pramodya (2 喜)　歡喜
prayatna＝yatna (158 功力)　勤勇
prayatnavatva (4 恆作正勤守護正法)　努力を有すること
prayukta (4 yuj 勤行方便)　修行したる，加行せる，勤修者
prayukta (115＝yukta, yuj)　行ずる
prayujyate (4 yuj)　修行する
prayujyamāna (4 yuj 行)　修行しつつ
prayujyamāna (71 yuj 勤行時)　精勤しつつあるもの
prayujyeta (83 yuj)　努める
prayoga (4 方便)　加行
prayogaḥ satveṣv akhedaś ca (95)　諸衆生に對する無疲倦の加行は
prayogadarśanabhāvanāniṣṭhāmārgaviśeṣabheda (159 方便道，見道，修道，究竟道)　方便と見と修と究竟とのそれぞれの道の差別，特殊の道の差別
prayogaparyantagamana (182 功用方便究竟此遠能去)　加行の邊際に行くこと，加行の極限に行くこと
prayogābhiyogaparikheda (115)　加行を精勤するに意が倦むこと
prayogin (56 方便)　加行を有する

prayojana (154)　理由，動機，目的，趣意，要，用，必要
pravadanti (114 vad 說)　說く
pravadatīva (128 vad)　語る如くである
pravara (35)　最も優れた
pravartaka (116 正轉)　〃，行ふこと
pravartate (11 vṛt 行)　行ずる，存する
pravartate (21 vṛt 流轉)　赴く，流轉する，行ずる，働く，起る，存する，扱ふ，害する，貶する
pravartanāt (116 轉故)　行ふことの故に
pravartayati (175 vṛt 轉)　轉ぜしめる，轉ずる
pravartita (116 vṛt)　行じた，行ずるもの
pravardhita (30 vṛdh 增)　增長したる
pravarṣaka (47)　雨らすもの，雨
pravāhin (97 大海)　流水，河
pravicaya (54 能擇，簡擇)　〃
pravinetum (35 nī 化)　〃，調伏すべきを
pravibhāga (54 解)　分別
pravibhāgataḥ (55 解)　分別から
praviśana (44 納)　入ること，流入
praviṣṭatā (29 入)　悟入したこと，入つたこと
pravisṛtiratibhogī (＝pravisṛtiratibhogaś cāsya (113)　彼に屬する發擴と愛樂受用(？)(意味未詳，pravisṛti と ratibhoga とに分つか，又は pravisṛtir と atibhoga とに分つかすら未詳，恐らく前者)
pravṛtti (36 他利，他義轉，149 起)　〃，起ること，現はれ，働き，轉，變へること，進轉，能轉
pravṛttitathatā (168 輪轉如)　〃，流轉眞如
pravṛttinivṛtti (72)　發起と止息
pravedanā (139 覺)　〃すること，知らしめること，發表すること
pravedha (92 vyadh)　通達したる
praveśāya (140 入地)　入るに，入る爲に
praveśe caiva bhumiṣu (141 入地)　また諸地に於ける入に於て
pravrajita (176 vraj 出家)　〃
pravrajya (175 出家)　〃
pravrājayati (164 vraj 度令出家)　出家せしめる
praśaṁsate (83 śaṁs 讚嘆)　稱讚する
praśaṁsanti (162 śaṁs 稱譽)　賞す，賞讚する
praśasyate (117 śaṁs 讚)　稱讚される
praśaṁsana (163)　賞讚
praśaṁsā (17 讚嘆，稱譽)　〃，稱讚
praśaṁsāvidhāna (97)　稱讚を與へること，稱讚をなすこと
praśama (28 捨，斷)　寂靜，止滅
praśamavidhidharmāṁśuvisara (43)　寂靜への方法としての法の光を放つこと
praśamana (16 破)　滅すること，治癒すること，鎭めること
praśastamūlatva (13)　讚嘆の根本たること
praśna (184 疑)　問難
praśrabdha (92 猗又は倚)　輕安，靜安，prahlādan の譯參照
praśrabdhyā (144 猗而樂)　輕安によつて，猗によつて
prasaṅga (154 過)　過失，字義は附隨，隨起，結合など，然し附隨する過失を指すから，用例上で過失の意味
prasajyate (150 sañj 墮)　過失になる，必ず續いて起る，必ず結合し來る(過失として續き起る，過失となる)(prasahyate は誤植)

樂滅斷煩惱)　寂靜を愛するものは一一苦痛の止滅に赴く
pratiharet(92 hṛ 攝持)　引戻すであらう，引戻すべし，防ぐべし，閉づるであらう
pratīcchaka(56 領受)　受領
pratīta(78 i 解，明了)　解せられた
pratītapadavyañjanatva(78 字句可解)　句と文との解せられたもの
pratītābhidhāna(79 令易解)　解せられたものを言詮すること
pratītārthatā(79)　義を解したこと
pratītyadharmodaye sukuśalaḥ(110 極善緣起)　緣によつて法の起ることに於て熟達して居る
pratītyabhāvaprabhava(23 緣起體)　緣によつて有の生ずること
pratītyabhāvaprabhave…samakṣavṛttiḥ(23 緣起體現見)　緣によつて有の生ずるに於て現見の働くこと，緣起に於て現見を有する
pratīyād(79 易解)　解し易いから
pratyakṣa(169 現見)　現量得(現量の語は，ここでは量としていふのでなく，現見とある如く，現量で見ることである)
pratyakṣacakṣuṣkatā(4)　直接に見る眼のあること
pratyakṣacakṣuṣa(3 現見)　直接に見る眼を有する
pratyakṣatā(24 現見)　現量たるもの
pratyakṣato gamane(24 現見)　現量的となるので，直接見ることになるに於て
pratyakṣaṁ paśyati(23 現見)　直接に見る，現量的に見る
pratyanubhavana(28)　それぞれ感受すること，それぞれ得ること
pratyabhijñāna(150 舊物解)　再認識
pratyaya(11 緣)　〃
pratyayavaśena(10 有緣力起)　緣の力によつて，緣によつて
pratyayasaṁdarśana(131 從四緣亦應顯示)　緣を示すこと
pratyayāgame(73 當緣)　緣に至るに於ける
pratyayādhīnatvāt(67 屬因緣故)　緣に依るからである
pratyayābhigama(73 當緣)　緣に至ること
pratyarthika(80)　敵對
pratyavagama(5)　確知
pratyavekṣaṇa(50)　內省，觀察
pratyavekṣaṇayā(91)　觀察によりて
pratyavekṣaṇaka(47 觀)　妙觀察の
pratyavekṣaṇakaṁ jñānaṁ jñeyeṣu avyāhataṁ sadā(47 觀智識所識，恆時無有礙)　妙觀察智は諸の所知に於て常に無障礙である
pratyavekṣaṇatā(103)　觀察，妙觀察
pratyavekṣate(91 īkṣ 有觀)　觀察する
pratyavekṣase(187 īkṣ 觀)　汝は觀察する
pratyavekṣā＝pratyavekṣaṇā jñāna(46 觀智)　〃，妙觀察智
pratyātmaṁ(90)　自らで，內部に，內心に
pratyātmavedanīya(2 自覺證)　自內證せらるべき
pratyātmavedya(77 自證)　自內證の
pratyupakārāśaṁsana(74 轉施)　報恩の願ひ
pratyupakārin(164)　報恩をなすもの
pratyupasthāna(182)　顯はれること，對して立つこと
pratyupasthita(80 sthā 起)　現前した，現前せしめた
pratyeka(10 各，一一)　〃

pratyekaṁ(41 一一)　〃
pratyekaṁ janapadeṣu yā bhāṣāḥ(139 能知異土言音故)　各〻諸國土に於けるそれの言語なるものである
pratyekaṁ bodhiṁ buddhāḥ(127 辟支佛)　獨りのみで覺をなす諸佛
pratyekabuddha(6 辟支佛乘)　獨覺乘，緣覺乘
pratyekabuddhabhaumena(40)　獨覺地に在るものによりて
pratyekabodhi(169 緣覺菩提)　獨覺菩提
pratyekabodhibuddha(127 辟支佛，緣覺)　獨覺(一人のみで覺を有して居る佛)
pratyetavya(10 i 應知)　認めらるべき，知らるべき
prathana(10 流)　擴めること
prathamā bhūmir iṣyate(94)　初地であるといはれる
prathamacittotpāda(16 發心)　最初の發心
prathamatas(91 初)　第一に，先づ
prathamata eva(10)　最初から實に
prathayati(9 prath 流，廣流)　擴める
prathita(84 prath 遠)　擴がつた，廣く知られたる
prathitayaśāḥ(84 名稱遠)　名聲が廣く，擴がつた名聲を有するもの，その名聲の擴まつたもの
pradakṣiṇa(79)　正しい，巧妙な，慣れたる
pradadhāti(57 dhā，142 持)　努力する，働く，持する，專注
pradarśayati(27 dṛś)　示す
pradarśita(118 dṛś)　示された
pradānaprabhedena ceti vṛttiḥ(104)　與へる差別によつてといふのは働きである
pradāhaka(182)　能燒
pradiṣṭa(113 diś)　示された
pradīpta(124 熾然)　熱せる，燃えた
pradhānatā(86)　精勤(praṇidhānatāか，然らば願)
pradhānabhāva(75 此體更無上)　主たる狀態，勝れた狀態
pradhānabuddhi(82)　最勝の覺，主なる覺
pradhānavastu(167 勝類)　主なる事
pradhāraṇa(55 淨持)　心に堅持すること
pradhāraṇād iti pravicayāt(56 持者擇彼種)　心に堅持するからとは簡擇するからの意味
pranaṣṭaka(124 失)　失へるもの
prapatti(＝pratipatti の m. c. にて -ti- を省いたもの)　行
prapattaye＝pratipattyarthaṁ(120 隨順行)　實行の爲に
prapadyate(86 pad 往生，行，受)　行く，入る，達する，生れる，行ずる，受ける，至る
prapācana(30 勝成熟)　〃
prapūri(92 滿)　滿たすこと
prapūrau ca viśuddhau ca dharmakāyasya sarvathā(92 滿淨諸法身)　法身を充たすことと，淸淨にすることとに關して，何處にても
prapūrṇa(76 滿)　〃，滿つ，滿たされる，滿たした
prapūrṇakāya(75 滿身)　〃，圓滿身
prabandhānupacchinnatva(80 相續不斷)　〃
prabandhena(149 相續)　〃によりて
prabalatva(27 力)　强力
prabādhyate(124 badh 惱)　妨げらる，惱まさる
prabuddhatatva(119 覺眞)　眞實を覺せ

pratikṣaṇaṁ (102 念々)　刹那毎に
pratikṣaṇamandataratamopalabdhi (154 漸微可得)　刹那毎に漸次に微になることが可得なこと，…認められること
pratikṣeptṛ (138 誇法)　〃者
pratigraha (113)　施されて受取つた物
pratigrāhakeṣu (104)　諸の受者に對する
pratigha＝pratighāta (8 礙)　〃
pratighopekṣāmānaḥ (132)　瞋と捨と慢と
pratijñā (149)　立宗，所立
pratideśaka (175)　告白するもの，懺悔するもの
pratideśanā (7 悔過，懺悔)　〃，懺悔，追悔，悔過
pratideśayāmi (147 懺悔)　私は懺悔する
pratipakṣa (3 能治)　能對治，對治
pratipakṣadharmaviśeṣayoga (110 對治差別)　殊勝の對治法の修習，精勤
pratipakṣabhāvanāyāṁ nirantarāyatvaṁ kuśalābhirāmatā ca karma (29 一切善法恆樂修習，是名捨業)　業は對治の修習に於ける無障礙たることと，及び善を愛樂することとである
pratipakṣasaṁpattiyoga (35)　能對治の成就の結合
pratipakṣahānitas (132 治滅)　能對治の滅退から
pratipakṣopabhoga (30)　能對治の受用
pratipattavya (90 所修)　行ぜらるべきもの
pratipattāvavipratisāratva (80 信受不悔)　實行に於て後悔の無いこと
pratipatti (71 隨修)　正行，行 (155 證)　確認
pratipattuḥ (90 -ttṛ 修者)　行ずる者の
pratipatter dvayor (171 行)　兩者に於ける行の大性
pratipattinairyāṇikatva (80 信順出離)　實行によつて出離するを得ること
pratipattibheda (89 修行差別)　〃，種々なる行
pratipattimāhātmya (22 隨順大)　行の偉大性，行の自在性
pratipattyabhyāsa (102 修習)　實修數習，行修習
pratipadyante (185 pad 知證)　認める，知る，確認せられる
pratipanna (9 pad)　發行せる，行じたる
pratipādanam arthasya (104 施彼)　義を與へること (義は事物)
pratipādayati (88 pad)　說明する，明かにする
pratipādayet (102 pad 施)　與へるであらう
pratiprasrabdhi (55 更捨)　廢止，息，已滅
pratiprasrambhaṇa (55 捨)　廢止
pratibimba (61)　鏡像，影像，映像，像，(125 如) 如きこと
pratibimbena (151 像起)　像によりて
pratibodha (15)　覺悟，覺すること
pratibhaya (89 畏心)　怖畏
pratibhāna (5 辯)　辯才，辯，樂說，語るに堪へること，叡智
pratibhānaparyādāna (5 辯窮卽默然)　辯才盡きること，辯才窮すること
pratibhāsa (62 影)　＝prodbhāsa 光影
pratibhāsa (93 光)　顯現，光影，眼華
pratibhāsita (59 bhās 顯現)　顯はれた，顯はれて居る
pratirūpa (79 應物)　宜しきに適ふ，適當な

pratirūpair dārair niyojayati (162 爲娉室)　適當な妻を與へる
pratirūpaka (165 似)　像似
pratirūpadeśavāsa (84)　適當な場所に住すること，優れた土地の住
pratirūpadeśavāse 'bhiramate (86)　適當な場所に住することに於て愛樂する
pratilabdha (47 labh)　得られた
pratilabdhasāṁketika (9 世俗得)　已に得られた施設，已得の俗諦
pratilabhate (181 labh 得)　得る
pratilaṁbhika (9)　得らるべきもの
pratilambha (57 得)　〃，所得
prativarṇika (74 相似)　像似の
prativarṇikābhūtāyāṁ bhāvanāyāṁ ca nāruciḥ (74 相似不欲修，眞實欲修習)　像似と眞實との修習に於て，非愛喜でないと愛喜と
pratividhyati (71 vyadh 通達)　〃する
prativedha (53 通)　通達
prativedhayogāt (100)　通達と結合するから
pratiśaraṇatva (30)　依處，依たること
pratiśaraṇībhāva (76 爲世間依怙)　歸依となること
pratiṣedha (6 遮)　遮，否定，阻止
pratiṣṭha (14 sthā 所住)　〃，住
pratiṣṭhā (41 安立，任持)　安住，住，住處 (安立は器世界)，建立，依止處
pratiṣṭhānimitta (169 住持因)　〃，住持の因
pratiṣṭhābhūtatva (16 持)　基たるもの，基となつたもの，保持となつたこと
pratiṣṭhābhogabīja (169 住持及受用，種子)　〃
pratiṣṭhāśāntanirbhita (104)　任持，寂靜，無畏
pratiṣṭhita (115 sthā 持，住，建立)　住せる，立つた，確立した，建立された，安立されて居る
pratisaṁkhya (29 數)　簡擇 (通常は -saṁkhyā, m. c. ? 擇滅無爲の擇)
pratisaṁkhyabhāvanā (通常は -saṁkhyā, m. c. にて -saṁkhya ?, 29 數修習，數習)　簡擇修習，簡擇して修習すること
pratisaṁkhyā (125 數擇)　簡擇
pratisaṁkhyāna (102 數)　簡擇，智慧のことをいふ
pratisaṁkhyānabhāvanā (29 數習爲性)　簡擇修習
pratisaṁkhyāya (89 khyā 思惟策勵 ?)　思擇して
pratisaṁdadhāti (158 dhā 起)　結生する
pratisaṁyukta (71 yuj)　結合せる，相應せる，關して，屬する，所屬の
pratisaṁvit (66 四辯)　〃，四無礙辯，四無礙解，無礙智
pratisaṁvidviśeṣalābhāt (66 由得四辯，善巧勝故)　殊勝なる四無礙解を得たるが故に，殊勝なる四無礙辯の得の故に
pratisaṁvinmatisādhutvāt (182 四辯智力巧，說善)　無礙解の慧が善性であるから
pratisaṁvedanā (73 知)　pratisaṁvit 卽ち無礙解の派生語であらう，然らざれば通常の如く感受
pratisaṁvedayati (12 vid)　感ずる，知られる，感受する
pratisaraṇa (138 依)　〃，依止
pratisāra (104 悔)　追悔，後悔
pratisvaṁ (14 由地地)　一一に
pratisvam ādhipraśame śamapriyaḥ (21

後得智と無分別智との住によりて
peṭa(2 篋)　小箱
paitṛkam ṛṇaṁ dāpyate(162 令後償)
父の負債を拂はさしめられる
paiśunya(110 兩舌)　〃，離間語
poṣayati(162 puṣ)　育てる
paura(1 城)　都雅な語，雅語
paurādinā *or* paurādikayā(1 能至涅槃城)
都雅な語等によつて
paurī(79)　都雅な，みやびやかな
paurvāparya(37)　前と後とが
paurvāparyāviśiṣṭāpi sarvāvaraṇanirmalā(37 如前後亦爾，及離一切障)
前と後とが無區別であるにしても，一切の障から無垢である
paurvāparyeṇāviśiṣṭatvān na śuddhā(37)
前後によりて無區別であるから淸淨ではない
prakāraprabhedagāmbhīryaviśesābhyāṁ (40)　種類の差別と特殊の甚深とを以て，種々なる種類と優れた甚深とによりて
-prakāśa(16 如)　〃，似る
prakāśana(47 開法)　開演
prakāśanārtha(72 開示)　〃する爲
prakaroti(7 kṛ)　作す
prakurute(43 kṛ)　働きをなす，生ずる，或人に或事を爲す
prakurute＝kurute(1 kṛ, 作)　作す
prakṛti(2)　本性，本性上の
prakṛtitīkṣṇendriyatayā(141 自性利故)
本性利根たるによりである
prakṛtipariśuddhatvāt(65 由自性淸淨故)
自性淸淨たるが故である
prakṛtipraduṣṭa(8 自性惡)　〃，自性上の惡
prakṛtiprabhāsvaratva(141 自性淨)　〃，本性淸淨性
prakṛtiśīla(31 自性尸羅)　本性上の持戒
prakṛtisāvadya(8 自性罪)　〃，自性上の罪
prakṛtistha(11 性種)　本性住，本性に存する
prakṛtyasaṁkliṣṭatvāt(22 自性無染不順淨故)　自性は雜染せられたことが無いからである
prakṛtyā(11 性種)　本性によつて，本性上，本性的
prakṛtyā ca calatvād vṛddhihānitaḥ(153 性動，增亦減)　又，本性上の動搖の故に，增益と減息との故に
prakṛtyā paraduḥkhadarśanaṁ(29 見諸衆生苦)　本性によりて他人の苦を見ること
prakṛtyā śūnyatāṁ(94 自性…空)　自性によりての空性を，本性によりての空性を
prakṛtyaiva, prakṛtyā(2 自性)　本性上，自性によつて
prakṛtyaiva nimittāsamudācārāt(170 自然不行諸境界)　本性上相に現行しないからである
prakṛṣṭa(30 kṛṣ)　殊勝な
-prakhya(16 如，譬)　似る，如き
prakhyāna(62 光顯現)　現はれ，明かになること，知られること，顯現，知ること
pragacchati(120 gam)　行く
pragata(161 gam)　進んだ，勝れた？，及んだ？
pragāḍha(32 gāh)　極度の，多くの
pragāḍhaprasādana(118 深淨信心)　深い淨信
pragāḍhāpakāramarṣaṇakṣāntyā(32)
極度の作害を忘れる忍辱によつて
pragṛhṇāti(142 grah 攝)　〃する
pragraha(142 擧)　〃，勤，努力，取上げること(止觀の觀を指す)

pragrahanimitta(92 起相)　〃，擧相
pracyāvana(124 害人)　避けしむるもの，避くべきもの
prajanita(109 jan)　生じた
prajā(76)　生類，衆生，生者
prajānāti(101 jñā)　遍知する，知る
prajñapta(55 jñā 制)　制定せられた
prajñapti(54 制)　制定
prajñapte śikṣāpade punaḥ paryāyeṇānujñānāt(55 謂，先時已制，後時更開)　學處が制定せられたのに再び異門によつて開許するから
prajñaptivyavasthāna(167 假建立)　〃，假說の建立，假の安立
prajñaptyastitayā(154)　假說の有性によりて，假說上の有であることによつて
prajñaptitas(155 假名)　假設上，假說からは，假說として
prajñaptito yadārocite pudgalāparādhe śāstrā saṁnipātya saṁghaṁ śikṣāṁ prajñāpayati(55 制者，謂，依彼犯人大師集衆說彼過失制定學足)　制定から，何時でも或人の罪過が告白せられた時に，大師が僧伽を集めて學處を制定する
prajñājīvasudeśana(100 命說)　慧命と善說示と
prajñādāna(72 施智)　智慧の布施
prajñāpayati(55 jñā 制立，施設)　制定する，假說する，知らしめる，敎へる
prajñāpāramitā(22 般若波羅蜜經)　〃
prajñā vimuktiḥ(20 令覺，由得智慧故)
慧解脫(梵文はシナ譯に集德，由遍集福智故を缺くから，慧と解說とは第七と第八とに當ることになる)
praṇayana(177)　作ること，著はすこと
praṇaśyati(138 naś 壞)　壞する
praṇidhāna(9 願)　〃
praṇidhānapratipattiviśeṣa(9)　優れた願と行
praṇidhānabalika(143 願力)　願の力ある
praṇidhānamahādaśābhinirhārāt(15)
大なる十種の願によりて引發せられたる
praṇidhānavataḥ(118)　願を有する人に
praṇidhānavaśa(69 願力)　〃
praṇidhānavaiśeṣikatā(143)　願の殊勝たること，殊勝なる願たること
praṇidhijñāna(143)　願智，願の智慧
praṇihitatva(89 dhā, -tva は異例の如し)
決定したる，集中したる
praṇīta(119 勝)　〃，妙，好，願はしい，勝れた，導きたる
pratata(34 tan)　擴がつた，多くの，覆うた，充ちた，間斷なき
pratatavividhaduḥkhāpāyanopāyaga(35)
間斷なき種々なる苦，惡趣，非方便に陷れる，行く，行ける
pratataviśadāmbupraviśana(44)　多くの淸澄な水の流入
pratapana(84)　輝き
pratāraṇa(165 假許)　欺瞞
pratikāra(107 報恩)　〃，返報
pratikāreṇa vā arthi bhavati vipākena vā iti(102 不求報恩及以果報)　或は報恩或は異熟(卽ち果報)を求むものでない
pratikāranirapekṣasaṁjñā(73 不求報恩想)
報恩を氣にしない想，報恩を顧みない想
pratikṛti(108)　報恩

pālayen na kathaṁ (110 何因不禁守)
どうして保護しなからうか
pāśita (67 pāś) 縛せられた
piṭakatraya (53 三藏) 〃
piṇḍapāta (86) 受食，施食，乞食(piṇḍa は團子形にせられた食，pāta は落すこと，乞食の時食の應量器に容れられること)
piṇḍita (95 piṇḍ) 集合せる，團子とせられた，纏められた，集められた
piṇḍitam anyaduḥkhaṁ (95 他諸苦)
集合せる他の苦を
piṇḍārtha (18 略示彼義，總) 要約義，總義，總集義
pītavarṇa (47 黃色) 〃
puṭa (77) 孔，凹み，容れ物
puṇya (4 福) 〃，福德，功德
puṇyajñānadvayena (29) 福德智慧の二によつて
puṇyajñānamaya (14 福智？，以福智爲自性) 福智所成のもの，功德と智慧とより成るもの
puṇyajñānasambhārasaṁgṛhīta (4 福智聚)
福德智慧の資糧に攝せられたる，福慧の資糧に攝せられたる
puṇyasaṁbhārasaṁyuta (104 福聚具足)
福德，又は功德，の資糧の結合せるもの
pudgala (54 人) 〃，補特伽羅
pudgalasyāśaya (82 別欲) 人々の意樂
pudgalagraha (155) 人執
pudgaladharmābhāvalakṣaṇatvāt tadātmakatvac ca (38 人法二相不可說故)
人と法との無を特質となすが故に，又それを本性となすが故に
pudgalanimitta (169 人相) 人の相
pudgalanairātmyaprasādhanārthaṁ (154)
人無我を能立する爲に
pudgalanairātmyālambana (57 人無我緣)
人無我所緣
pudgalavādin (155) 人我論者，我を實在と主張する論者
pudgalābhisaṁbodha (157) 人の三菩提
punaḥ sa yatnaṁ paramaṁ samāśrito na khidyate kalpasahasrakoṭibhiḥ (32 久劫行上勤) また彼は最上の精進に依止して千コーティの劫の間も疲倦しない，又は退なし
punaraparaṁ (79) 更に又，其上，然し猶
punaruktadoṣajaha (80 離重) 離重複過失，重言の過失を離れた
puratḥ (169 在心前) 現前に
puratḥ svayaṁ yac ca nimittaṁ yat sthitaṁ svayaṁ (169 安相在心前，及以自然住) 凡て現前に立たしめられた相と，及び自然に住したものと
puruṣakāraguṇa (14 作丈夫所作功德)
丈夫の作す功德
puruṣakāraphala (123 丈夫果) 〃，士用果
puṣṭatarotpattyā (152) 一層の增上の生ずることが無くば
puṣṭatā (29) 長養，增長
puṣpa (125 華) 〃，花
puṣpam abandhyaṁ (126) 花は虛しくない
pūjakapūjyapūjānupalambhataḥ (118 設供，受供，供具，三事不可得)
供養する人と供養せられる人と供養することとが不可得なるが故に
pūjanā＝pūjā (118 供養) 〃，尊崇，祀り
pūjā (72 供養) 〃，尊崇
pūjārthaṁ (92 爲供養故) 供養せんが爲に

pūjāparaḥ śāstari (180 供養) 大師に對して供養を最上とする
pūraka (104) 成滿，滿ちたもの
pūraṇī (80) 圓滿する，充たす
pūrayati (133 pṝ 滿) 〃す，〃ずる
pūrayanti (163 pṝ 令滿) 滿たさしめる
pūraye (146 pūri 自熟) 滿す爲に
pūri (146 熟) 滿，圓滿
pūrvaṁ tad abhyāsavidhānayogāt (125 宿習) 過去に其修習の制規を勤修せるが故に
pūrvaṁ hi sthāpitasya paścāt svayaṁsthitasya (169 謂先觀安相，後觀自然住相) 何となれば，先に立たしめられたものについて，後に自然に住したものについてなすから
pūrvaṁgama (80 初得吉祥) 先立つて，前導して，前導
pūrvakarmapratibimbatvāt (62 由是宿業像故) 前世の業の映像であるから
pūrvakarmāvedhena (152 宿業自在) 宿業の勢力によりて(シナ譯に自在とあるから，āvedhena は vaśena であつたかも知れぬ)
pūrvakṛtapuṇyatā (86 宿植善根) 先世に作された功德，功德の前世に作されたもの
pūrvaga (92 前) 先行の，前の
pūrvagama (92) 先行する
pūrvaparibhāvitapratilabdhamārgābhyāsa (57 先所得道勤習) 先所顯所得の道の數習，以前に顯はされ得られた道の數習
pūrvapaścimānāṁ (68 前後異) 諸の前と後との
pūrvapraṇidhāna (118 宿願) 〃，過去世の願
pūrvapraṇidhānacaryābalādhānaviśeṣāt (39～40) 宿世の願行力の特殊の支持から(これが āvedhavaśāt の解釋)
pūrvapraṇidhānabala (102 昔願力) 〃，宿世の願の力
pūrvaśubhāsubhādhāne jñānaṁ pūrvanivāsābhijñā (25 知彼先住善惡所集) 前世の善惡の場所に關する智が宿住通慧である
pūrvasaṁniśrayena (101) 前のものに依りて
pūrvādhṛta (9 kṛ 前說) 前に已に說いたる
pūrvāparanirodhotpādakrameṇa (126 前滅後生) 前が滅し後が生ずる順序によつて
pūrvāparārdhabhyaṁ (36 初二句，後二句) 前半と後半との二によつて
pūrvābhibhāṣin (137 先語) 先に話しかけつつ
pūrvottaraprasava (126) 前後生，前者が後者を生ずること，前のものが後のものを生ずること
pūrvottaraviśrayatśa ca (101 前後) そして，前後に依ることから
pṛcchātas (153 難問) 詰問から，質問から
pṛcchyate (154 prach 問) 問はれる
pṛthak (45 別) 別々に
pṛthaktva (40 異) 異性，異たること，異
pṛthagjana (111 凡夫) 〃
pṛthivī (97 大地種) 地
pṛthivīsama (16 如地) 地に等しい，地の如し
pṛthivyāś ca pariṇāmacatuṣṭayāt (153)
又，地に四種の變化あるが故に
pṛṣṭha (63 後) 〃
pṛṣṭhalabdhāvikalpena vihāreṇa (144)

paraikacittasya(32 一念)　最上一心の
paraiti(23 i 通達)　赴く，行く，到る，達する，了達する
paropaghāta(18 han)　他を損傷した，他を損傷すること
paropaghātāya(110 惱他)　他を惱害する爲に
paropaghāteṣv adhivāsaka(172 耐損)　他人の惱害に對しての忍あるもの
paropatāpin(136 惱他)　他を苦しめるもの
parṇatyāgādāna(126 長葉，葉長落)　葉の捨し又取ること
paryanta(68 究竟)　〃，邊際，極限
paryavadāta(82 dai 白)　白淨な
paryavasāna(14 究竟，82 後)　〃，終り，後
paryavāpti(105)　理解，完成，成就
paryādāna(5 窮)　盡きること
paryāya(29 門)　同義，語，差別，異字同義語，一般に，門とも異門とも
paryāyāntareṇa(114)　異門によつて，他の門，卽ち仕方，によつて
paryupāsya(83 ās)　奉侍して，承事して
paryeṇa(64)　續いて，異門で
paryeṣā＝paryeṣaṇā(168 求知)　尋求，尋思
paryeṣin(8 求)　求めつつ
paryeṣṭi(14 求)　求めること，尋求
parvata(97 諸山)　山
parṣatkarṣaṇaprayuktair vidhir eṣa samāśritaḥ(117 欲攝衆，依此四方便)　會衆を引かんと努める菩薩によつて此規則が依用せられる，此規則，方法，が依られる
parṣatpūraṇāt(79 遍徒衆故)　會衆を滿たすから，會衆に滿たすから
parṣad(26 衆，集衆)　會衆，說法の座に會集した人々，人々の會合
parṣanmaṇḍaleṣv avicchinnadharmasaṁbhogapravartanataḥ(65)　會衆輪に於て斷絕せられない法受用が行はれるが故に
paścāt(3)　後に
paścima(96 最後)　〃の
paścimāntaphala(125 至大果？)　最後の終りは果
paśyatāṁ(181 paś 見)　見つつあるものには
paśyatāṁ kalpanāmātraṁ sarvam etad yathoditaṁ(49 觀法唯分別，此義如前知)　此一切は前說せるが如く唯分別のみなりと見つつあるものには
paśyatāṁ gurutvaṁ dirghaṁ nimittaṁ(48)　尊重と長時と相とを見つつあるものの
paśyana(65)　見ること，觀ずること
pāṁśu(39 滋灰)　塵，糞，尿，肥料(シナ譯の滋灰は染めること，又は染料を指すのであらう，梵文 XI, 49 のシナ譯の釋に，二種我見有りて，滋灰するが故に，とある pāṁśu を滋灰とすれば染料(で染める)の意味であらう，滋は乾に對して濕，潤としても用ひる
pāṁśuviśeṣa(39)　一種の塵，或種の染料，特種の塵(又は勝れた塵)
pāta(71 pā)　落ちた，起つた
pāpakārin(151 作惡)　惡を作すもの
pāpakāvarṇaniścaraṇa(133)　惡名が起ること
pāpako 'varṇaśabdaśloka(123 惡名)　惡しき名，聲，譽(varṇa は名聲 śabda は聲譽，śloka は稱讚，varṇaśabda で名聲)

pācaka(31)　成熟するもの
pācana(30)　成熟
pācanana(30)　成熟
pācanaśoṣaṇasamānakāryatvāt(39 乾熟等)　成熟，乾燥の如き所作をなすことから
pācikā(132 成生)　成熟すること
pācitātmā(30 自熟)　自己が成熟せられ，成熟せられた自己を有する
pāta(98 pā)　陷つた，落ちた
pātāla(49 大海)　深海，海底，深淵，海底に在る絕壁
pātra(125)　葉
pāra(35 涯)　彼岸，際，反對側
pāraga(98 窮，得度)　彼岸に至つた
pāratantrya(12 繫屬於人)　屬他，他に依屬すること
pāramārthikacittotpāda(15 第一義發心)　〃
pāramārthikacittotpādalābhe(19 第一義發心時)　第一義的の發心を得て，…得るに於て
pāramārthikatva(15)　第一義的たること
pāramitā(71 波羅蜜)　〃，多(到彼岸又は度と譯すのがシナ譯，チベット譯でのキマリ，學者は之を空想的語源の考の譯と非難する．卽ち pāram-i-tā を難ずるのである(BHSD s. v.)，然し之を捨ててはシナ，チベットの波羅蜜の理解は解せられないから，非難は行過ぎである，pāram ito janaḥ の用例も陳那の書にある，學者が pārami-tā のみが唯一の正解となすのは偏し過ぎる，恐らく pāram-ita-tā の -ta -tā とを，重複の爲，-ta を省いたとなす解釋がよいのであらう
pāramitāgradharma(bha は誤植)-pravṛttyā(75)　波羅蜜たる第一法を行ふことによりて
pāramitādibhāvenāpariniṣpatteḥ(34 自性不成就故？)　波羅蜜等の性として成就して居ないから，波羅蜜等たるものとして圓成しないから
pāramitādīnāṁ kuśalānāṁ tadbhāvena parivṛtteḥ(34)　波羅蜜等の善が其性として轉じたものであるから，波羅蜜等の善の其性によつての轉の故に
pāramitādhātu(71 波羅蜜性)　波羅蜜の界，種性
pāramitāprativarṇikābhāvanā(74 於相似波羅蜜不應修習)　波羅蜜の像似の修習
pāramitāpratisaṁyuktaśāstraracanābhisaṁskāraṇa(73 於諸波羅蜜相應諸論，應善集修治)　波羅蜜と結合せる論の著作を爲すこと，波羅蜜に屬する諸論の著作をなすこと
pāramitāprabheda(98 度攝品)　波羅蜜の差別，種々なる波羅蜜(度攝の度は波羅蜜の譯語，攝は攝事，samgraha-vastu, の譯語を略擧したもの，後部に四攝事を述べる)
pāramitāmaya(11 諸波羅蜜自性)　波羅蜜所成の
pāramitāvipakṣadharmāvasthiteṣu(131)　波羅蜜の所對治に住せる者に對して
pāramitāśreṣṭhamātṛtas jātaḥ(15)　最殊勝の波羅蜜の母から生じたるもの(波羅蜜といふ勝れた母の所生)
paraṁpara(129 展轉)　〃
pāruṣya＝paruṣa(110 惡)　〃，麁惡語
pārthagjana(85 凡夫)　〃，異生
pālayet(110 pal 禁守)　保護するであらう

知と出生
pariṇatau (82 祕密)　祕密に於て，變意に於て，轉變に於て，
pariṇāma (81 令解)　變ずること，移變（或る物の性質を，其事物を譬へる譬喩の方に移すこと）
pariṇāmana (21 廻向，82 祕密)　〃，變異，轉變，廻向
pariṇāmanā (120 廻向)　〃
pariṇāmanābhisaṁdhi (82 祕密節)　祕密祕密，轉變祕密
pariṇāmayati (103 nam 廻向)　〃する
pariṇāmayet (120 nam)　廻向すべし
pariṇāmikī (69 廻向)　〃の
pariṇāmopalabdheś ca (149 變異)　又，轉變が可得なるが故に
pariṇāmo hi nāmānyathātvaṁ (150)　何となれば變化は卽ち異なることであるから
pariṇāyakaratna (145 兵寶)　主兵臣寶
parityāga (160 捨)　〃
paritrāṇa (34 救護)　〃，扳濟
paritrāṇa (131 救濟)　救護
paridāha (10 熱)　燃燒
paridīpana (33)　明ならしめること
paridīpitaṁ svalakṣaṇaṁ (65)　明かにせられた自相
parinirvāṇagotraṁ nāsti (13 無般涅槃性)　般涅槃種性無し
parinirvāṇārthaprayukta (4 求涅槃勤行方便)　涅槃を得る爲の修行，涅槃の爲に修行したる
pariniṣpatti (85 成)　圓成，成就，眞實
pariniṣpanna (2 pad)　圓成實の，成就性の，完全な
pariniṣpannaṁ svabhāvaṁ parijñāya (169 知眞實性)　眞實の自性を遍知して
pariniṣpannaḥ svabhāvaḥ (58 眞實性自性)　〃，圓成實自性
pariniṣpannalakṣaṇa (22 眞實相)　〃，圓成實相，成就相
pariniṣpannalakṣaṇa (149 眞實相)　〃
pariniṣpannalakṣaṇaṁ (65 是說眞實相)　眞實相である，成就相である，圓成實相である
pariniṣpannena svabhāvena (48)　眞實自性によりて
pariniṣpādana (167 成就)　圓成，完全せしめること
paripantha (14 受障，障難)　障，妨害，妨げ
paripāka (5 成熟)　〃
paripākaprabheda (30 成熟差別)　〃
paripākamāhātmya (33)　成熟の偉大性
paripākavṛddhigamana (29)　成熟の增長に至ること
paripācana (5 成熟，26 令成，30 普成熟)　〃，成熟せしめること
paripācayati (31 pac)　普成熟せしめる，普成熟する，成熟せしめる
paripācayāmi (128 pac 成)　私は成熟せしめる
paripācya (170 pac 應化)　成熟せしむべき
paripiṇḍitākāraṁ vartate (51)　收團の行相を起す
paripuṣṭa (11 puṣ 習種)　育成的，成育したる，增養增長せられたる
paripūraṇa (24)　充たすこと
paripūraye＝pūraye (118)　滿たす爲に
paripūri (32 滿)　圓滿する，滿ずること
paripūrita (31 pṛ)　圓滿したる
paripūrṇa (31 圓滿)　〃，完全な
paripūrṇaśīla (31 圓滿尸羅)　圓滿な持戒，完全な持戒
paripūrṇān kṛtvā (162)　滿たして，滿たすことをなして
paripūrṇo hy avihiṁsako 'dhyavihiṁsaka daśakuśalakarmapathaparipūritaḥ yathoktaṁ dvitīyāyāṁ bhūmau (31 十善業道皆具足故)　何となれば增上不殺生者は完全な不殺生者であつて，十善業道を圓滿したのであるから，十地經第二地に於て說かれたるが如し
paripūryarthaṁ (91) 完全にする爲に
paribhāvanataḥ (125 由久修故)　久修の故に，久修から
paribhūṣaṇatāḍana (163 打罵)　叱責と擲打
paribhāṣā (17 訶)　非難
paribhoga (53 受用)　〃
parimāṇavṛtti (58 分量具)　量の作用
parimitāparimitakāla (166 有數時無數時)　有限量と無限量との時
parirakṣanti (162 rakṣ 防護，防)　守護する，防護する
parivarjana (87 遠離，捨)　遠離，捨離
parivarjanatā (29 遠離)　捨てること
parivarjanīya (76 vṛj)　避らけるべき
parivartaka (114 轉依)　轉の
parivartana (55 轉)　〃，代へること，變ずること
parivartena (108 翻)　代りに
parivārita (145 vṛ 爲眷屬)　圍まれた，圍繞せられたる
parivāsa (153 異相現？)　住居（原寫本には pariṇama|taḥ| とある，變の故に）
pariśiṣṭi (15 餘)　他，餘りのもの
pariśuddhaviśeṣa (65 普遍勝)　普遍淸淨の殊勝
pariśodhana (26 淸，能令淸淨)　淸淨にすること
pariśrama (18)　努力
pariṣanmaṇḍala (45 大集衆)　會衆輪
pariṣkāra (86 供身)　資具，供身什物
parihāṇibhāgīyadharma (165 退分)　退分法
parihāṇilajja (173 退)　退失の羞
parihāṇika (111 退)　〃，退失
parihānitas (132)　退減から
parihāṇiviśeṣabhāgīyadharma (165 進退分)　退と進との分の法，退分法と進分法
parihāṇīya (122 hā 可退)　退くべき，捨てらるべき
parihāra (2 答，139 排除)　却けること
parihārāc ca codyānāṁ 139 避難)　又，非難の排除から
parīkṣakajana (3)　觀察し得る人々
parīkṣaṇataḥ (125 見)　觀察の故に
parīkṣā (168 簡擇)　研究，觀察，檢討
parītta (49 da 又は do 少，小)　限られた，小
parīttaviṣayam (111 得少境)　限られた境を有する，小なる境を有する
parīttasatvārthasadopabhogya (49)　限られた衆生の利益を常に受用せしめる
parīttā mahatī pūjā samānāmānikā ca sā (119)　かの供養は小なると，大なると，又有慢と無慢とである
paruṣa, pāruṣya (110 惡口)　〃，麁惡語
pareṇa (136 八地已上菩薩不退)　それ以後である
pareṣām upapattau jñānaṁ cyutopapādābhijñā (25)　他の人々の生に關してそれを知る智が生死通慧である
pareṣūpadiśyamāna (4)　他に對して敎へられつつ

覺が最上自在を得たもの
paramaśamānugata(22 寂靜？) 最上寂靜に順ずる，…順じたる
paramasukhavihāra(87 大乘樂住) 最上の樂住
paramātmalakṣaṇa(40 大我相) 最高我の特質，大我の特質
paramārtha(5 第一義諦) 第一義，第一義諦，勝義，勝義諦，眞諦
paramārthaduḥkhatva(21 行苦) 第一義の苦たるもの
paramārthaṁ jānāty anayeti prajñā(102) この般若によつて第一義を知るといふので般若である
paramārthalakṣaṇa(22 第一義相) 〃，第一義の特質，眞諦の特質
paramārthaviṣaya(5) 第一義を境とするもの，其境が第一義であるもの
paramārthaśūnyatā(158 眞實空經) 第一義空經
paramāścarya(44) 最高の希有
paramatā(15 最上眞智) 最勝性，最上たるもの
paramatva(14 最上) 最勝性
paravādinigraha(136 令他信受？) 他論者を屈すること，敵者を墮負せしめること
paravijñāpana(15) 他人が識らしめること
parasaṁtāna(115 他相續) 〃，他の身又は心或は身心，他人
parasaṁprāpti(57) 他のものの到達(意味未詳)
parasamaya(112 mata？) 最高の說？
parasādhāraṇaṁ vā phalaṁ(71) 或は他と共同の果が
parasaukhyena sukhānubhava(128 樂勝？) 他の樂によりて樂を享受すること
parahitakaraṇāya(13) 利他を作す爲に
parahitakaraṇaikatābhirāmaś carati bhaveṣu hi siṁhavat(27 常勤於利物，行有無怖畏，勇猛如師子) 他の利益を爲すを唯一の愛樂となし，實に獅子の如く，諸有に於て行く，…愛樂を諸有に於て，獅子の如くに爲す
parahitakriyārtham(13 爲利他) 利他の所作の爲である
parahitātprītiḥ bhojanaṁ(18 以利他歡喜而爲自食) 利他から起る喜が食物である，食物は利他から起る喜である
parākramamāṇa(19 kram) 行進しつつ
parākhyānāt(14) 他人の語ることから
parājaya(62 退) 負，勝利
parājita(61 ji) 負かされた，打勝たれた
parānukampā(29) 他を憐愍すること，他人に對する憐愍
parānugrahaprīti(130 攝他喜) 他を攝受する喜
parārtha(4 利他) 〃の
parārtham(18) 他の利益に，他の爲に
parārthacitta(17 思利) 利他の心
parārthacintana(17 思惟利益他) 利他の思惟，利他を思惟すること
parārthanimitta(18) 他の爲に因つて
parārthavṛtti(36 爲利他) 利他の行動
parārthatā(19) 利他，利他たること
parārthin(52 利他人) 利他を作すもの，利他を有するもの
parārdha(28) 最も優れたる
parārdhaniṣṭhā(28 勝究竟) 最も優れた究竟
parāvṛtta(63 vṛt 轉) 轉じたる
parāvṛttāśrayasya(63 轉依) 轉依したものの，轉依の
parāvṛtti(40 轉，變化) 轉依
parāśraya(18) 他に依る
parikarma(57 成淨) 淸淨にする準備業，成淨は淨を成ずるの意味か
parikarmabhūmi(57 成淨地？) 準備地？
parikarmabhūmisaṁrakṣaṇa(57 成淨持地業？) 準備地と守護？(意味未詳)
parikarṣaka＝karṣa(186 攝) 引くもの
parikarṣaṇa＝karṣaṇa(176) 率ゐること
parikalpa(58 分別) 〃，妄分別
parikalpārtha(149 不眞分別義) 遍計の義，妄分別の義
parikalpitaḥ svabhāvo grāhyagrāhakalakṣaṇenātyantam asatvāt(58 謂分別性眞實，由能取所取畢竟無故) 分別性の自性である，所取と能取との相によつて畢竟して非有であるからである
parikalpitena dharmasvabhāvena(34) 妄分別せられた法の自性によつて，法の自性は妄分別せられたものであるによつて
parikalpitena svabhāvena(48) 分別自性によつて，分別せられた自性を以て
parikalpitaparatantralakṣaṇa(22 分別依他二相) 〃
parikalpitapudgalābhāvāt parikalpitadharmābhāvāt(66 分別人法皆無有體，是故無我) 分別性の人も無であるが故に，分別性の法も無なるが故に，妄分別せられた人も無であるから，妄分別せられた法も無であるから
parikalpitalakṣaṇa(149 分別相) 〃，妄分別を特質となすもの
parikalpitasvabhāvākāra(59) 分別性の自性の行相，分別自性の行相
parikalpitādisvabhāva(82 分別等三種自性) 分別性等の三自性
parikalpitādisvabhāvatrayabodhāt(174) 分別等の三自性の覺の故に
parikalpyamāna(8 klp) 妄分別せられつつ
parikṛṣyate(151 kṛṣ 牽…來) 牽かれる
parikliṣṭā(82 kliś 疲倦？) 苦惱した
parikheda(73 退，退失) 疲倦，退失，意が倦むこと，疲れること，疲惱
parigṛhṇāti(53 grah) 取る，得る，受取る，攝する
parigraha(62) 取ること
parigrahaṇa(78 攝治) 攝受
paricaryā(120 給侍) 〃
paricāra(98 眷屬？) 奉事，奉仕(parivāra が眷屬，伴であるが，眷屬の居るのが奉事になるから，かくも譯すのか)
parijana(130 眷屬) 〃，從者
parijita(136 ji 誦得) 通利した，習得した(Pāli の paricita と同じ)
parijñā pañcadhā 'sya(56) かの五種の遍智
parijñāniyata(56) 遍智に決定せるもの
parijñāta(87 jñā) 遍知したる
parijñātāvin(159 知者) 遍知者
parijñātāvibhārahārapudgalaprajñapti(159 說二此法爲知者負擔者) 遍知者と負擔との人の假說
parijñāna(125) 遍知
parijñāsūtra(159 知經) 遍知經
parijñeya(57 jñā 通達) 遍知せらるべき
parijñotpatti(140 覺境及受生) 〃，遍

naiyamyapāta (166 決定)　決定墮
nairarthakyasārthakya (77)　無義なると有義なると
nairarthakyād (155 非義)　非義であるから
nairātmyadvayaṁ (85 二無我)　〃
nairātmyabhāva (85)　無我性
nairmalya (12)　無垢
nairmalyaprāpti (12 得清淨)　無垢に達すること
nairmāṇikakāya (45 化身)　〃，變化身
nairyāṇyād (79 應機)　適宜であるから
naivopalabdha (77)　得られないものを
no ca saṁtyajati (123)　而も又捨てない
notpattikṣānti (167 無生)　無生忍，無生法忍
notpattikakṣāntilābha (166)　無生忍を得たこと，無生法忍の得
nodana (153 使力)　打擊，推進，推進力，靡かすこと
nopalambhād (131 不得)　不可得の故に，可得でないが故に
nopāya (35)　非方便，無方便
nyāmāvakrānti (171 入，入道)　入離生，Edgerton は nyāma は確かに niyama と同じとなし，漢藏は nyāma を fantastic に解するが，明かに negligible のものとなす，それでは漢藏の敎相を解釋し得ないことが起る，Edgerton は敎相に通じないから，かかる點に無頓著で，人を誤ることが少なくない，辭典の作者としてはもつと謙虛であるべきである，arihat など大乘莊嚴經論梵本 17, 45 に用ひられて居るのを見逃がして居る，又シナ語の譯など大抵は誤，此辭典ほど不信用な辭典は例があるまい

P

pakvatā (30 pac)　成熟したもの
pakṣa (2 分)　品，翼，側，種，仲間
pakṣapāta (107 偏執)　〃，偏黨
pakṣavāta (136 翅風)　翼の風，羽根によつて起された風
pakṣavipakṣa (114 捨障)　能對治と所對治
pañcaka (158 增五經)　五經
pañcakaṣāyātyutsadatā (39 五濁多)　五濁の過多
pañcanivāraṇa (141 一切蓋)　五蓋（五蓋をいふから，五蓋で一切の蓋）
pañcavidhaṁ vidyāsthānaṁ (70 五種明處，五明)　〃，（明は學，知）
pañcasthānasūtravat (104 如五事經中說)　五處經の如し
pañcātmika (1 以五義)　五種より成る
pañcānuśaṁsa (105 五德)　五種の勝利，又は功德
pañcāpattinikāya (55 五聚罪)　五罪聚，五の罪の群，五篇のこと卽ち波羅夷，僧殘，波逸提，提舍尼，突吉羅を合せていふ
pañcopādānaskandha (23 五受陰)　五取蘊
paṇya (89 販賣)　商品，商買
patati (6 pat 墮)　墮する，陷る
patati mahato 'rthādgataḥ (6 墮極熱惡道)　大目的から去つて墮する
pada (25)　處，句，位，場所，住處，特質，徵表
padaprabheda (90)　句の差別，種々なる句
padabodhāt (175 處所)　處所の覺の故に
padam ālambanam ity arthaḥ (95)　處とは所緣といふ義である
padavigraha (34)　句の分解

padavyañjana (1 句)　句と響（pada が句，vyañjana が文，文はアヤであつて，名句文の文であるから，綾，字音のこと，從つて響とでもいふべきか
padasthāna (7, 法句？)　依處，句處，立場，-tva，足處，足處たること
padāparokṣa (25)　特質に關する明晰な
padārtha (7)　句義，處の義
padārthadehanirbhāsa (66 句義身光)　句と義と身との顯現
padālambana (57 句緣)　句所緣
padaiḥ (1 句，以句)　句によりて，句を以て
para (24)　外…物，異なるもの，他のもの，價値が優れたる
paraṁ maraṇāt (38 死後)　〃
parakāryasvakāryatva (99 爲他所作卽自所作)　他の爲の所作は自の爲の所作である，利他は卽ち自利たること
parakīya (110)　他に屬する
paratantratā (11 屬他)　他に依ること
paratantralakṣaṇa (149 依他相)　〃
paratantralakṣaṇabodhāt (175 覺依他性故)　依他相の覺の故に
paratantras tena tatparikalpanāt (58 謂，依他性眞實，由此起諸分別故)　これが依他性の自性である，之によつてそれが分別せられるから
paratantrasvābhava (169 依他性)　〃，依他自性
paratra (20)　他所の，他所に於て，他人に於て
paratra labdhvātmasamānacittāṁ (19 他自心平等)　他の人に於て自己と平等なといふ心を得た
paratrātmasamāna cittatāṁ labdhvā (19 得他自心平等)　他の所に於て自己と平等なといふ心を得て
paratreṣṭaphalecchā (176 愛果)　他世に願はれた果の欲求
paraduḥkhotpādane 'tibhīruś ca (110 懼他苦)　更に他人に苦を起すに於て極恐怖がある
parapakṣadūṣaṇa (29 能與異部過，能與他部而作過失)　他論の破邪，他論を破すること，敵者を破邪すること
paraparasaṁjñāpagamāt (111 他想斷)　他を他とする想が除かれるから
parapravāda (54)　外敎の異論
parapravādābhibhavanād vivādādhikaraṇādibhiḥ (54)　抗論，論諍等によつて外敎の異論を制伏するから
parapravādin (80 外道)　外論者，誤說をなす人
paraprasthāpana (132 建立衆生)　他を勸めること
paraṁparayā (32)　相續的に，相續によりて，展轉して
paraṁparayā (44 展轉)　展轉によりて，展轉して
paraṁparā (102 從初相續)　相續
paraṁparādhāraṇatayā (171 得展轉受持故)　展轉受持することによりて
paraṁparānugrahakṛtt (31)　相互の饒益をなし，交互の饒益を作し
paramaś cāryaḥ (174 上聖)　又，最高の聖者
paramagahanatvāt (6 有異卽險處)　最上の隱密であるから
paramaguṇayoga (42)　最高功德との相應，最高功德と相應せる，結合せる
paramatatva (17)　最高眞實
paramavaśitvalabdhabuddhir (27)　最上自在を得た覺を有するもの，其

nirvit(4 厭)　厭離
nirvitsahagata(70)　厭離と俱行する
nirvidvirāgavimuktayaḥ(150 厭惡離欲解脫)　厭離，離欲，解脫等
nirviśiṣṭa(150 無差別)　差別が無い
nirviśeṣa(20 無別)　無異，無差別
nirviśeṣaṁ hi tasyobhayam ityarthaḥ(20 俱無別故)　實に彼には無異である，何となれば，彼には無異であるから，といふ意味
nirviśeṣatva(19 無差別)　〃
nirviśeṣo bhavati tīrthikaiḥ(158 同外道)　外道と無異である
nirvṛti(21)　解脫，涅槃，寂靜
nirvṛti(67)＝parinirvṛti(68 涅槃)　〃
nirvṛtimāhātmya(22 寂靜大)　〃，涅槃の偉大性
nirvṛtisukha(21)　解脫の樂，寂靜の樂，涅槃の樂
nirvṛtti(62 盡)　終止，生起，成長
nirvedhabhāgīya(62 初極通達分)　順通達分の(nirvedhabhāgīya は俱舍論では順決擇分と譯し，煖，頂，忍，世第一法の四善根をいふ，此論のシナ譯には，通達分と譯される)
nirvedhabhāgīya(93 通達分)　順通達分(釋に，通達分善根として 23 頌に煖位，24 頌に頂位，25 頌に忍位，26 頌に世第一法を說くとなす，小乘說では煖頂忍世第一法は順決擇分の四善根で，28 頌は見道位卽ち離垢の法眼淨を得るとなすが，これが通達分である，通達は見道をいふに外ならぬ，但し大乘唯識說の名稱，小乘俱舍では通達分の名はあまり用ひない，恐らく法相の名目が未だ決定して居なかつたのであらうか．nirvedha は通達といふ意味であるから，差支ない譯語)
nirvedhabhāgīyāvasthā(24)　順通達分位(此論では集大聚位，通達分位，見道位，修道位，究竟位の五位を認める，順決擇位の名は無い)
nirvoḍhā(10 nirvoḍhṛ, nirvah 能進)　完成せる，成功する
nirvyapekṣa(130)　期待しないこと，無關心
nirvyāpāratā(145)　作すことなきこと，閑散なこと，忙はしくないこと，所動的のこと
nirhṛti(143 成就)　引發
nivārayanti(162 vṛ 遮)　防ぐ，留める，去らしめる
nivārayet(98 vṛ 深防)　防ぐであらう，護るであらう
nivāsa(25 住)　住所
nivṛtti(36 不生，不生轉，廻流)　止轉，轉止，還滅，不轉
niveśaka(56)　住するもの
niveśana(116)　入ること
niveśayat(31 viś, 引入)　〃，引入れつつ
niveśin(56)　住するもの
niveśyate(96 viś 勸？)　引入れられる
niṣadana(102)　坐すること
niṣevaṇa(89 親近)　〃
niṣevaṇālasyatas(132 不勤)　住することの怠惰から
niṣkampatvād avikṣepataḥ(16 物無能動，以不亂故)　震動されないから，散亂しないから，不動であるから，不散亂であるから
niṣkalpana(160 不分別)　〃，分別しないこと
niṣkalpanājñānaparigraheṇa(25 無分別智攝)　無分別智の攝によりて，無分別智に攝せられるによりて
niṣkāluṣya(188 無穢)　無濁の

niṣkramaṇa(175 出)　出づること
niṣṭhāgata(96)　究竟に在る
niṣṭhāgamana(141 圓滿)　究竟に到ること(究竟に到るに於て)
niṣṭhāgamanakarma(40 到究竟業)　究竟に到る業
niṣṭhāyai(140 究竟)　〃の爲に
niṣṭhāśrayaparāvṛtti(96)　究竟の轉依
niṣpatti(179 成就)　〃，完成
niṣpanna(118 pad)　完成せる
niṣpannabodhāt(175 成就)　成就の覺の故に，眞實の覺の故に
niṣpratikāṅkṣa(165 離求)　期待の無いもの
niṣprapañca(188 無戲論)　〃の
niṣprapañcatvāt(40 無有戲論)　無戲論であるが故に
niṣprayojana(154 無理)　無理由
niṣyanda(32 依)　等流果
niṣyandadharma(65)　等流法，等流の法
niṣyandadharmam ālambya(65)　等流法を所緣となして
niṣyandaphala(71 依果)　等流果(niḥṣyanda ともあり，又 nisyanda もあるであらう，通常，果がつけば niṣyanda である)，參照，niṣyandaphala(123 依果)　等流果
niścaya(7)　決智，決定
niścayabalādhānārthaṁ(81 令…得決定故)　決定の力を持する爲に
niścayārtha(53 決定)　決定せる義，決定義
niścarati(77 car 說，流出)　聲として發する，出づる，起る，流れる
niśraya(12)　依止
niśrayāṅga(145 依止)　所依支，所依分
niśrita(5 śri 有依)　依止して居る，依止したる
niśritya(7 śri)　依止して
nisevana(57 習)　〃
nihata(32 han 離)　壞したる，滅したる
nihatasarvāvamānābhilāṣa(32 離見慢？)　一切の輕賤な欲望を壞したもの
nihīna(12 hā 小)　缺少せる，缺けたる，下劣な
nihīnacittasya ca saṁpravarjanaṁ(29 離小心)　又下劣な心を捨てること
nihīnayāna(29 小乘心)　下劣な乘，小乘
nihīnayāna(98 二乘)　下劣乘，聲聞獨覺の二乘が下劣乘
nihīnayānādvividhāt(98 -yānāddvivi- 畏二乘)　二種の下劣乘から
nihīnaśukla(12 善少)　白法の缺少せるもの
nītārtha(138 了義)　〃
nītārthasūtrāntāśravaṇa(51 不聞了義)　了義經を聞かないこと
nīto vibhakta(138)　了義の解說，正しい分別說
nīyate(151 nī 將…去)　導かれる
nīlavarṇa(47 青色)　〃
nīhāra(181 霧)　〃
nṛ(108)　人，人々
nṛṇāṁ(2)　人々に(nṛ 人)
neṣṭaṁ phalaṁ prārthitaṁ(108 離求)　願はしい果を求めることが無い
naika(9)　無數の，非一の
naikabuddhatvaṁ bahutvaṁ(48 不一不多)　一佛でも多でもなく
naikasahasrair pi kalpair(9)　無數千劫によつても
naikāṁśa(146 非一分)　非一向
naiti kathaṁcit(70 不得？)　どうしても至らない
naibandhika(142 繫縛)　〃

nirantarāyatā(29 不可奪)　妨礙しないこと，妨礙せられないこと，無妨礙
nirantarāskhalitaśīla(31 不放逸尸羅？)　無間斷無誤失の持戒
nirandhakāra(173 明)　盲ならざる，暗ならざる
nirapekṣa(110 不顧)　〃，不顧戀
nirapekṣatva(99 無顧戀，不顧)　〃，關心を寄せないこと
nirapekṣin(160 不顧)　無顧戀
nirabhisaṁskāranirvikalpa(161)　無行無分別の
nirarthika(77 無義)　〃の
niravagraha(188 無著)　〃，無繫，無障
niravadya(130 無障，障盡)　非難せられない，無罪な
nirasana(24 壞)　除，滅除
nirasyate(24 as 除)　〃，滅する
nirāgrahatva(188 無所染)　繫縛せられないこと
nirācāryamuṣṭitva(79 離法慳)　師拳が無いこと(師が拳を握りしめて放さないことのないこと，敎を弟子に與へずに慳むことなきこと)
nirātmaka(124 以無我性)　無我のもの
nirātmatāyāṁ duḥkhārthe kṛtye niḥpratikarmaṇī(94)　無我性に於て，苦の義に於て，所作に於て，報恩を望まないことに於て
nirādhṛṣya(186 dhṛṣ 摧伏)　〃すべき
nirāmiṣa(32 離染，非求利)　無染な，無貪な，離財の
nirāmiṣacitta(86)　離財心，無希求心，執著無き心，返報を求めない心のもの，無愛染心を有する
nirāmiṣacittatvāt(120)　其心が離財，卽ち離貪，であるからである
nirāmiṣatā(109 無求功德)　無求性(āmiṣa は貨，肉，食，贈物，期待など)
nirāmiṣā yathārhā ca pramitā viṣadā tathā(78 應機亦離求，分量與無盡)　無貪であり，適宜であり，限りがあり，又分明である
nirārakṣa(186)　無護のものよ
nirāvaraṇa(50 無障)　障の無い
nirīkṣate(23 īkṣ)　見る
nirīkṣase(129 īkṣ)　汝は觀察する
nirukta(136 善音)　釋義，語源的の解釋
nirukti(98 名)　解釋，語源的解釋
nirucyate(97 vac)　いはれる，說かれる
niruttaraṁ yānānantaryāt(93 堪進無上乘)　無上にとは乘が無間斷であるから，無上にとは進むことが引續くからである(-ānantaryāt は p. 94, l. 4 にもかくあるのを出版者は -anuttaryeṇa 又は -ānuttaryeṇa と改めた，シナ譯から見れば -ānantaryāt はここでも亦 -ānuttaryāt 又は -anuttaryāt の方がよい，卽ち無上とは無上乘であるからである，となる)
niruttaragata(1)　無上である所の(gata はかかる場合には，在るの意味又は譯さずともよい)
niruttaralokottarapṛṣṭhalabdhatva(80 無上出世後得)　〃，無上なる出世間の後に得られたものたること
niruddha(67 rudh 已滅)　滅したる
nirudhyate(125 rudh)　滅する
nirunnata(20 不高)　不高憍
nirupadhiśeṣanirvāṇa(109 無餘涅槃)　〃，無餘依涅槃
nirupamaṁ saṁnāhayogātmakaṁ(108)　被甲と精勤とより成り，無譬なる精進が，被甲精進と精勤精進とを本質とする精進が
nirupamaśukladharmayoga(49 無比圓白法)　無比の白法と相應(又は結合)すること
nirūpyate(10 rūp)　示される，說かれる，見られる，達せられる
nirodhamārgasatya(137 滅道諦)　〃
nirghoṣa(80 聲)　〃
nirjalpa(138 無言)　〃，無言說
nirjalpabuddhi(175 無說)　無說覺
nirjalpaikarasais capi manaskārair(91 離於意言而相續…)　意言の無い而も一味なる作意によつて
nirdiṣṭa(21 dis)　細說した
nirdiṣṭa＝upadiṣṭa(61 diś)　說示せられた，別說された，細說された
nirdiśyate(34 diś)　示す，告げる
nirdeśa(64)　別說，細釋，說がある
nirdeśāt(79 釋義)　細釋から
nirdeśabhūta(33)　別說たるもの，別釋たるもの，細說たるもの
nirdhāraṇa(55 應持？)　決定
nirbhaya(17)　無怖畏，怖れないこと
nirbhāsa(66 光)　顯現
nirbhī(110 無畏)　無怖畏，不怖
nirbhīta(135 無畏)　無怖畏の
nirmalatā(12 諸淨)　無垢性
nirmāṇa(26 變化，65 化事)　變化，變化身，化身
nirmāṇakāyaṁ gṛhṇati(70 受化身)　化身を取る
nirmāṇādikṛteṣu(39 變化等)　變化身等の所作に於て
nirmāṇādikṛtyakarma(40 化所作業)　變化身等の所作の業
nirmāṇārthī(70 爲化故)　變化を求めつつ
nirmāṇikaḥ kāyaḥ(104 化身)　〃，變化身
nirmāna(61 無慢)　〃，高慢無き
nirmāna(119 無慢＝amānika)　無慢
nirmānatā(120 除慢)　無慢なること
nirmitakāmeṣu paranirmitakāmeṣu rūpārūpyeṣu ca(152 欲界後二天及色界無色界一切天生)　化樂天に於て，他化自在天に於て，及び色界無色界に於て(前者は nirmāṇarati 化樂天が普通，又後者は paranirmitavaśavartin が普通，これでは他化樂天，此二天が六欲天の最上の二天である)
nirmṛgya(130 無求)　求むる所無く
nirmokṣa, -mokṣaṇa(175, 176)　解釋，釋放などの字義で，從つて解釋の意味となる
niryatna(155 無用)　無勤勇
niryāti(69 yā 發)　出離する
nirlikhita(57 likh)　削消せられた，削り取られた
nirlikhitavipakṣa(57)　所對治の削消せられたる
nirlepa(119 無染，無著)　〃，汚れ無き
nirlepāśayena(102 不染心)　不染意樂によりて
nirvacana(101 名，立名)　解釋，語源解釋
nirvasano'pi(134 無衣)　衣が無くとも，無衣でも
nirvāṇādhikāratā(79 向涅槃)　涅槃に役立つこと
nirvikalpajñāna(3)　無分別智
nirvikalpajñānaprasavāt(15 於法無分別)　無分別智を生ずるから
nirvighāṭana(57 斷)　〃
nirvitarkasavicāramātra(57)　無尋唯有伺

斷)滅，失
nāstīti cittāt param(24 心外無有物)　心より異なるものは無いと
niḥkleśatā(121)　無煩惱性
niḥparidāha(80 無熱惱)　〃處
niḥpratikarman(94 niṣpratikarman 不求)　報恩を望まないこと，返報を期しないこと
niḥpratisaraṇā(112 無依人)　依の無いもの
niḥśeṣa(42)　無餘
niḥṣyandaphala(71)　＝niṣyandaphala
niḥsaṁkleśatā(184)　無雜染たること
niḥsaṁkleśatā ca dharmadhātoḥ prakṛtyā viśuddhatā ca paścād iti trāsasthanaṁ bālānāṁ(88)　そして，法界は本性上無雜染なると，後になつて純淨なるとは諸幼童の怖畏處である
niḥsaṁkleśaviśuddhitā(88 性淨與無垢)　無雜染と純淨
niḥsara(39 出離)　發すること，出ること，出離
niḥsaraṇa(25 出離，正出)　〃，出過，出去ること
niḥsaraṇa(54 出＝niḥsṛta)　出離
niḥsaraṇe jñānam āsravakṣayābhijñā(25)　出離に關してよく知る智が漏盡通慧である
niḥsaranti(25 sṛ 出離)　〃する
niḥsāra(25)　出離
niḥsṛti(54 出)　出離
niḥspṛhasya punarbhave(165 離後有)　再生に於て熱望の無いものの
niḥspṛhatva(130 不求)　希求するのでないこと
niḥsvabhāvatayā siddhā uttarottaraniśrayāt | anutpannāniruddhādiśāntaprakṛtinirvṛtāḥ ‖ (67 無自體故成，前爲後依止，無生亦無滅，本靜性涅槃)　無自性性によりて，後のものが後のものに依止して，不生不滅，本初寂靜，本性涅槃が成ぜられる
niḥsvasukhakāma(129 勿自求？)　自己の樂を欲しない
nikāmaṁ(110)　思ひのままに，夥多に
nikṛticitta(89 無利)　欺心
nikṛṣṭa(20 kṛṣ 下，下賤)　下の，卑しい，輕蔑される，近い，下賤な
nikṛṣṭamadhyottamadharmatāsthita(20)　下と中と上との法性に住するもの
nikṛṣya(96 kṛṣ 拔)　拔出されて
nikṣepaṇa(159 棄)　〃捨
nigamana(97)　結，結論
nigamanaśloka(75)　結頌
nigarhanti(162 garh 令斷)　叱する，叱責する
nigṛhya(96 grah)　捉へられて
nigraha(136)　負處，墮負處，負處に陷れること，屈すること
nigrahaṇānugrahaṇa(70 伏，攝)　制伏と攝受，折伏と攝受
nicaya(45 聚)　集り
nija(135 決定)　自然，自爾
nityakṛpātmaka(17)　常住の悲愍を本質とする，常住の悲愍より成るもの
nityasukhaśucyātmā(67 常樂我淨)　常，樂，淨，我
nityādhimātrāvasthānayana(90)　常住の上品の位に導くこと
nidarśaka(47 現前示現)　示現，示現するもの，見せしめる，宣示するもの
nidarśikā ca nirmāṇaiḥ(176 示現分？)　及び，變化身によつての示現である
nidhānataḥ(118 願)　〃から(praṇidhāna を綴字の關係でかく用ひたもの)
nidhāna(47 大藏)　貯藏所，藏器
nidhi(181 藏)　貯へ場所，倉，財寶
nidhyāna(93 見，觀察)　禪思，直觀，深思
nindana(163)　叱責
nindanti(162 nind 訶)　呵する
nindām īrṣyāprayukte sthitivicayapare cāntarāyānukūlān(97)　嫉の實行と，住と決擇とを主とすると，に對して，障と隨順するものとの非難を與へる
nindāsaṁkliṣṭatva(80)　毀謗に雜染せられないこと
nipaka(79 正行？)　主なる人，賢者(次に śaikṣasya とあるが nipakasya の代へ語であらう，正行が之に當るが如くにも見えるが，恐らくさうではなからう，シナ譯は之を省いて譯さなかつたのであらう，瑜伽論に常委分資糧とあるが，常委もこれの譯でない，委は註に審悉所作とあり，積むであらう，常に積み置かれた分資糧か，常に分資糧を積むかの意味であらう，nipaka を niya となす Edgerton の說は想像で殆ど價値がない
nipācana(30 常成熟)　〃
nipāta(57)　章，不變化詞，集(經集 suttanipāta)
nipuṇo bhavati sarvakāryakaranāt(163)　叡敏である，一切の所作を作すから
nibadhya(92 bandh 繫安)　結著して，繫いで
nibadhyālambane cittaṁ(92 繫緣)　心を所緣に於て結著して
-nibha(16 如)　似る，如き

nimitta(11)　相，因
-nimitta(1 爲)　〃に
nimittam evānimittaṁ paśyanti(170)　相をそのまま無相であると見る
nimittaṁ bandhanasya(16 合三因)　繫縛の因である
nimittasyākhyānatā(170)　相の顯現たるもの
nimittatathatāyor anānātvadarśana (169 別相及如無差別見)　相と眞如との二の無異たることを見ること
-nimittatvāt(34)　因たるが故に
nimittavijñapti(60)　因識
nimitta-saptamī(1)　原因又は動機を示す第七格卽 loc.
-nimittam(1)　爲に
nimittānām akalpanā(167 不分相)　諸の相の不分別
-nimittena(18)　爲に，因によりて
nimne syandana(153 下去)　低きに流れること
niyata(11 yam 決定)　〃
niyatam(71 決定)　決定して，必ず
niyatabhūmyavasthā(72 決定地)　決定地の位
niyatipāta(166 決定)　決定墮
niyama(173 制)　決定，制御
niyamāpramatta(173 制不放逸)　決定の不放逸，決定に於ける不放逸
niyamana(33)　結論，定義，制限，決定
niyujyamāna(4 yuj)　敎へられつつ
niyojana(130 置)　向けること，縛すること，刺激すること，命令すること，結付けること，促進せしめること
niyojayati(162 yuj)　供給する，與へる
nirantara(43)　無間斷な
nirantarāya(28)　障礙の無いこと

趣入せしめられた諸の衆生を專有しない

na caiva(95 非希有)　然し必ずしも希有ではない

nata(120 nam 下心)　稽首したる，稽首して

na tanmaya(23 無性)　その所成でないもの

na tu dharmāṇāṁ kliṣṭānām kuśalānāṁ vā(64 如是染位心數淨位心數唯有光相，而無光體)　然し染汚の或は善淨の諸法の顯現は無い(染汚の次の或はは寫本には無い)

na tu sarvathaivāpravṛttiḥ(150)　然し全く起らないのではない

na tu sarvathaivābhāvataḥ(66 亦非一向都無有體)　然し全然非有であるからでは無い

natonnata(88 凹凸)　〃，窪みと中高

nadī(49 河水)　河

nadīplava(153 艅)　河筏

nanu(154)　ではないか

nanu ca dṛṣṭaṁ vartisaṁninirśrite pradīpe prabandhena gacchati vartyā avasthānam iti(154 若汝言何故現見燈燄念念滅，燈炷如是住)　若し此の如くに，然し燈が燈心に依止するから，結合によつて，行き，燈心によつて住することが見られるではないかと言ふであらうならば

na punaḥ śaknoty antarāyaṁ kartuṁ(30 不能障礙)　更に障礙を爲すを得ない

na bhāvo nāpi cābhāvo buddhatvaṁ tena kathyate(38 非體非非體，如是說佛體)　故に佛たるものは有にも非ず又無にも非ずと說かれる

na buddhānām evaṁ bhavati mama pakvo yam iti(43)　諸佛には此人は私に成熟されたといふ此の如き念は起らない

namo 'stu te(184 頂禮)　汝に歸命する，汝に歸命があれ

naya(32)　道理

nayāmi(128 nī 將去)　私は導く

narakabhavanavāsa(87 處地獄)　地獄處の住

narakavāsa(87 入大地獄)　地獄の住

navacandra(16 月)　新月

navavidhavastu(30 九種物)　九種の事

navavidhātma(30)　九種より成る，九種を體となすもの

na vicchinatti(102 chid 無有絕)　斷ずるなし，斷絕しない

na visaṁyogāya nāvisaṁyogāya(141 不離不合故)　離繫にでもなく不離繫にでもない，離にでもなく，合にでもない

na vīryavān bhogaparājito 'sti(115)　精進を有する者は財に打勝たれない，財に負けない

na hi tatsvabhāva eva tasya dṛṣṭānto bhavati(154 非自體爲譬故)　其自性其ものがそれの譬であるのではないからである，其自性其ものがそれの譬となるのではないからである

na hi tathaivāvasthitasyānte nirodhaḥ syād ādikṣaṇanirviśiṣṭatvāt(150 若住不滅，則後刹那與初刹那住無差別)　何となれば，其ままに住して居るものには，最後に於て滅盡はないであらう，最初の刹那と差別はないから

na hi tiṣṭhaty āśraye ca tad āśritasyānavasthānaṁ yujyate(152)　何となれば，所依が住するときに，而も其能依の住しないことは合理ではないからである

na hi saṁskārāṇāṁ deśāntarasaṁkrāntilakṣaṇā gatir nāma kācit kriyā yujyate(152)　何となれば，諸行には，他處に赴くことを特質とする行くといふ一種の作用は合理ではないからである

na hy adānto 'vavādādiṣu pareṣāṁ samarthaḥ(20 非不調敎授故)　何となれば，調順でないものは他人に對する敎授等に於て堪任，又は可能，でないから

nāgasvaraśabda(80 象聲)　如龍音聲，象の吠える聲を有する

nāgendraruta(80 龍聲)　如龍王聲，龍王の叫びの如き

nātinirmala(111)　絕對無垢ではなく

nādhivāsa(74 不隨)　〃，不同意，不承諾(adhivāsana がパーリに assent とある

nādhivāsamanaskāra(74 不隨作意)　同意作意でないと譯されやうが，na は adhivāsa にのみかかるので不同意作意，不隨作意，anadhivāsanamanaskāra と同じ

nādhivāsamanaskāro vyākṛtaniyate spṛhā(74 不隨及欲得？，欲得有二種？)　不同意作意と授記と決定とに對しての熱望

nādhivāsā(134 不忍)　〃，不耐

nānākaraṇa(23 少異)　〃

nānātvasaṁjñāvigata(181 離種種想)　〃，異想の除去

nānādhātukatva(10 有種種差別界)　種種なる界があること

nāpy ato dvayād anyad ātmalakṣaṇam upapadyate(23 亦非異此二種而有我相)　この故に又二より他の我の特質に適合しない(二とは我見と五受陰となり)

nābodhisatvānāṁ(18 於二乘無)　菩薩でないものにはこれは無い

nābhāvaḥ śāntilakṣaṇena bhāvāt(38 非非體者由息相有體故)　無でもない，消の本質によつて有であるから

nābhiprāyikārtha(138)　意趣の義でない，趣意でない義

nāma(150)　卽ち，確かに，實際，然し

nāmadheya(83 名)　〃，名號

nāmadheyagrahaṇamātreṇa(83…稱念…名)　名號を持するのみで

nāmaparikalpam upādāyārthaparikalpam arthaparikalpam upādāya nāmaparikalpam aparikalpam akṣaraṁ(58 一依名分別義，二依義分別名，非分別者字也)　名の分別に基づいて義の分別を，義の分別に基づいて名の分別を伺察する，文字は無分別である

nāmaparyāya(138 名門)　名異門

nāmaparyeṣaṇāgata(168)　名の尋求に在るもの

nāmālambana(57 名緣)　名所緣

nāmni sthānāc ca cetasaḥ(55 安心唯有名)　心を名に於て處するから，心の名に於ての處から，心が名の中に住まるから

nāmno vastuny āgantukatvaparyeṣanā(168 推名於物是客)　名の事物に於て客塵たることの尋求，名が事物に對して客塵たることの尋求

nāruci(74 不欲と欲とに當る)　釋に aruci と ruci とに分つ，na-aruci と aruci とになつて，欲と不欲とになる，ruci は愛喜と譯される

nālasa(180 無懈)　怠惰無く

nāśa(25 壞)　〃，世界の壞劫の壞，(139

が法であるもの

dharmān sarvaprakārān vidhivad iha jinā darśayanti agrasatve (97)　勝者は此點について諸の一切種の法を規則通りに最上衆生に示す

dharmānudharmapratipanna (84)　法隨法行者

dharmābhavopalabdhi (88 無體及可得)　法の非有と可得

dharmābhāvaś ca dharmopalabdhiś ceti trāsasthānaṁ (88)　法の非有と法の可得とは怖畏處である

dharmābhisamaya (51 得法)　法の現觀

dharmāmbuvarṣa (34 雨法雨)　法水の雨

dharmāmbuvarṣapratasuvihitasyākṣayasya (34)　擴がつてよく配置せられ無盡である法水の雨の

dharmāyatanika (153 法入)　法處の，法入の

dharmārāmarati (181)　法樂の喜

dharmārka (43 法日)　法といふ太陽，法といふ光

dharmārthasāṁkathyaviniścakauśalyam (54 由種々簡擇此爲方便故？)　法と義と談論を決定するの善巧，法と義とを談論し決定する善巧

dharmālambanalābhaḥ syāt (56)　法の所緣を得るであらう，法所緣の得があるであらう

dharmāloka (93 明)　法光明，法明

dharmālokavivṛddhyā (144 明增)　法の明の境長によりて

dharmāsaṁpramoṣa (57 不忘)　法の不忘，法を忘れないこと

dharme tathājñāśaya eva (120 願樂)　法に關して如是に知らんとの意樂に於て

dharmeṇālambanād api (116)　法によりては又所緣から(-nād api は -nādy api 又は -nādinā？であらうか，卽ち，所緣等又は所緣等によりて)

dharme 'rato dharmarataḥ (173)　法に於て愛樂しないもの，法を愛樂するもの

dharmeṣu dāyādaguṇena yukto naivāmiṣeṇa pravaset sa mitram (120 爲法不爲財)　彼は諸法に於て相承の功德と結付き，財とは結付かずして，友と住するであらう

dharmoddāna (148 法憂陀那，法印，158 法印經)　〃，〃，法憂陀那經，法攝頌經

dharmoddānākāraiḥ pratyavekṣāviśeṣaḥ (55 謂，法憂陀那由勝觀察)　法の綱領の行相を以ての殊勝な觀察

dharmo naiva ca kaścana (34)　然し法は一も無い，然し何等の一法も無い

dharmyaṁ cakraṁ (43 轉法，法輪)　法の輪，法輪

-dhā (27)　種類の，種の

dhātu (7 種子)　界，種性，種子

dhātuka (10 有差別界)　界ある

dhātuniyata (56)　種性の決定，種性の決定せるもの

dhātupuṣṭi (70 長養善根，83 善種得円滿？)　界の增長

dhātṛ (15 乳母)　〃

dhāraṇa (72 持)　〃すること，受持

dhāranāt (47 攝持)　受持することから

dhāraṇāpratibhāna (17 總持)　總持辯才

dhārayati (162 bhṛ 懷胎)　懷姙する，持する

dhārayaty abhyātmaṁ mana iti dhyānaṁ (102)　內的の意を總持するといふので禪定である

dhārmika (174 正說者)　法師，如法者

dhīmat (174 有慧者)　有智者

dhīragata (27)　賢者に在る

dhīratā (175 勇健)　〃，堅固

dhīro 'pramatta (172 勇力不放逸)　堅固のものと不放逸のものと

dhīsaṁsthita (175 住)　智に住したる

dhura (115)　重擔

dhūma (181 煙)　〃

dhṛti (29 持，135 無畏，猛作)　持，堅固，堅持

dhṛtiḥ prakṛtyā (29 持性)　本性上堅固なること

dhṛtiḥ sahanaṁ kṣāntir iti paryāyāḥ (29 持，耐，忍，謂名門)　堅固，堪忍，忍辱は同義語である

dhairya (135 健)　堅忍

dhyānaṁ samādhibahulaṁ saṁpāditaṁ (109 習諸定)　多くの三昧たる定が完成された

dhyānaṁ caturthaṁ suviśuddham etya (25 第四極淨禪)　極清淨なる第四禪に至つて

dhyānamaye sukhagarbhe (15)　禪定所成の樂を胎となすに於て

dhyānayathābhūtaprajñayoḥ (107 禪及實慧)　禪定と如實智慧とに於ては

dhyānārtham udyata (70 修禪)　禪の爲に勤めて

dhyānena kleśaviṣkambhanāt (99 折伏煩惱由此，禪定，力故)　禪定によりて煩惱を制伏するから

dhyāneṣu sukha (160)　諸禪定に於ける樂

dhyāyin (106 dhyai)　禪定人

dhyāyin (151 修禪)　禪定に入りつつある人

dhyāyiṣv iyam ādhāravṛttiḥ (106)　禪定人に於てこれが含まれて存する

dhruvaśīla (31 常尸羅)　常住の持戒

dhruvakathanayoga (6 續說)　引續き語ることに關係する，常に語ることに關係する

dhvaṁsana (98 令滅)　滅

N

na ṛddhyā manyate (20)　神通によつて誇らず

na kevalaṁ śūnyataiva (6 非獨說空)　只獨り空のみを說くにはあらず，唯單に空性のみではない

na gabhīraboddhā (7 解不深)　甚深義を覺つた者ではない

nagnasyāpi (134)　裸のものにすら

na ca tat tenaiva hetunā bhavitum arhati tasyopabhuktahetukatvāt (149 初因作業，卽便滅盡)　而もそれはその同じ因であることは出來ない，その因は既に用ひ盡くされたものであるから

na ca dharmamayo dharmanairātmyena (23 無性者非法，由法無我故)　また法所成でないのは法無我によりて

na ca niḥśeṣaṁ lokasyānantatvāt (42 由諸世間無有盡故)　然し無餘ではない，世間は無邊であるから

na ca punar aśeṣaṁ dhruvam iha (42 不無餘，世間無盡故？)　然し此世では更に常恆に無餘ではない

na ca viparyāsaḥ saṁkleśo na bhavitum arhati (155 若不顚倒則非染汚)　顚倒がないならば，雜染はあり得ない

na ca sthānāt tasmād vicalati (43)　然しその處から移動せず

na cāvatāritān satvān mamāyati (20 彼入正法時不染衆生故？)　また已に

疲倦

dvayor akuśaladharmahānaye(114 二惡法減)　二の不善法の斷の爲に

dvayor artha(105 彼二義)　二つの利益

dvayor arthakāra(105 二利)　二種の義を作すもの

dvitīyāṁ bhūmau(31)　十地經第二地に於て

dvidhānugrahakriyā(31～32 二世隨攝)　二種の饒益を作すこと

dvividhaṁ hi vailakṣaṇyaṁ(154 不相似有二種)　何となれば異相は二種であるから

dvidhaikasyāṁ(66 不動地有二)　第一に於て二種がある

dveṣṭṛ(129 輕)　厭ふ人

dvyanuśaṁsa(56)　二の功德

DH

dhana(2)　財，財寶

dhandhagatika(69 根鈍？)　遲行のもの

dharama(173)　dharma と同じ

dharamābhiyukta(173 勤法)　法を勤修するもの

dharma(1 法)　〃

dharma evātra dharama ukto vṛttānuvṛttyā(173)　dharma(法)そのものが，ここでは dharama(法)といはれて居る，これ韻律に隨ふによつてである

dharmakāya(45)　法身

dharmakāyaparipūriparinispattaye ca uttarād uttarataraṁ hetusaṁparigrahaṁ karoti(181 爲淨一切種法身，福聚智聚攝令增長故？)　そして法身の円滿を成就する爲に，後から一層後の因の攝を爲す

dharmacakraṁ pravartayati(175 轉大法輪)　法輪を轉ず

dharmacarita(183 正行)　法行

dharmatatva(178 法實)　法眞實

harmatatvaparyeṣṭi(58 求眞實義)　法の眞實を求めること

dharmatayā(123 如法)　如法に，法爾に，法性によつて

dharmatā(87 法性，4 法空)　〃(=dharmadhātu)一般には，法性，法其もの

dharmatācitta(88 心眞如)　法性心

dharmatāpratilabdhaṁ dhyānānasravasaṁvarasaṁgrhītam(105 法得者攝禪護及無流護故)　法性の得は禪定と無漏との律儀に攝せられる(無流は無漏の舊譯)(禪定の律儀は靜慮律儀で，定共戒ともいひ，無漏の律儀は無漏律儀で，道共戒ともいふ，此二は隨心轉で，波羅提木叉の律儀は不隨心轉)

dharmatāpratilambha(55 法爾所得)　〃，法性所得，法爾の可得，法性によつて得られたる

dharmatāpratilambhika(9 法性得)　法性の得らるべきもの

dharmatāṁ pratividhya(179 通達眞如)　法性に通達して

dharmatāyukti(168 法然道理)　〃，法爾道理

dharmatālabdha(176 法性得)　法性を得たもの

dharmatopagata(176 法得)　法性を具したる，得たる，近づきたる

dharmatopagatā parā(176 法得)　最上の法性得

dharmadānasya mahāyānaṁ(112 法施以說大乘故)　法施の中で大乘を與へるのが最上である

dharmadāyādatāṁ nisritya(120 以法利具足爲依止)　法の相承に依止して

dharmadeśanā(77 以法爲人演說)　說法

dharmadvayavyavasthā(2)　法に於ける二種の決定

dharmadhātuvinirmukto yasmād dharmo na vidyate(87 遠離於法界，無別有貪法，由離法性外，無別有諸法)　何となれば，法界を離れた法は存在しないから

dharmadhātuvisuddhihetu(44)　法界淸淨の因

dharmadhātoś ca samatāṁ pratividhya(94 通法界，他自心平等)　そして法界の平等性に通達して

dharmanāma(91 諸法名)　〃

dharmanidhyānakṣānti(105 觀法忍)　法を禪思する忍，法を觀念忍可する忍(nidhyāna は禪で思惟認可すること，これで判るやうに，kṣānti は忍辱のみではなくて認可，認知の意味もある，忍は智の前提又は智でもある，辱を忍ぶとなすは三種忍の前二で，後一は智)

dharmanairātmyapratibodha(15)　法無我の覺悟

dharmanairātmyamuktīnāṁ(68 法無我解脫)　法と無我と解脫との

dharmapravicaya(145 擇)　擇法，法の簡擇

dharmaprāpti(7 得法)　法の到得，法に達すること，法を得ること

dharmamaya(23 法性)　法所成のもの

dharmamayo dharmamātratvāt pudgalanairātmyena(23 法性者唯法，由人無我故)　法所成のものは唯法のみのものであるから，人無我によつて

dharmamukhasrotasā(75 受法流)　法門の流れによつて

dharmamukhānuyānāt(120 隨法)　法門に隨行くが故に

dharmamukhe vyavasthitaḥ(96 於…法門如欲住)　法門の中に安立される，…固住させられる(-sukhe は -muskhe)

dharmamegha(66 法雲)　〃

dharmaratna(76)　法寶

dharmaratnanimittatvāl labdharatnākaropamaṁ(34 佛爲法寶因)　法寶の因たるが故に寶藏の譬が得られたものである

dharmaratnapratatasumahatas(34)　擴がれる極大の法寶を生ずるが故に

dharmaratnākarābha(34 大藏)　法寶藏の如し，法寶の源の如し

dharmavibhūtamāna(178 斷法門異慢？)　法に於ける慢の伏せられたる

dharmavyavasthāna(167 法假建立)　法の建立，法を建てること

dharmavyasana(8)　法の喪失

dharmasaṁbhoga(44 法食)　法受用，法受用身，受用身

dharmasthitinimittāsaṁpramoṣa(57 法住相不忘)　法住の相を忘失しないこと

dharmasya vidheyatāpatteḥ(116 由…堪受法)　法に命ぜられることになるから

dharmasrotas(58 法流)〃，法の流れ

dharmāṁśu(43 法日光)　法の光

dharmāṇāṁ pramukhaṁ(106 諸法之上首)　〃

dharmādhimuktibījāt(15)　法に對する信解を種子となすから

dharmādhimuktyāśayato vibhutvāt(119 信，心，通)　法の信解により，意樂から，神通から

dharmādhimokṣa(14 大法，以大乘法爲所信)　法を信解するもの，その信解

るが，シナ譯の頌にも釋にも法，財，無畏の三施となすから，dṛṣṭa は法施…にかかり，見られた，認められた，きまつた，確かな，などの意味と見る

dṛṣṭa evra dharme (15 現在)　現法に於て，現在に於て

dṛṣṭadharmabāhuśrutyena (147 由現在聞持力)　現在に於ての多く聞くことによりて

dṛṣṭadharmasaṁparāyānugraha (31 二世隨攝)　現在と未來との攝受

dṛṣṭadharmāmiṣābhaya (104 法財無畏三)　見られたる法と財と無畏

dṛṣṭamātrāt (185)　唯見られたのみで

dṛṣṭasatya (86 見諦)　〃，諦の見られたる，見諦者，已に諦を見た者

dṛṣṭasatyāvasthā (70 見諦位)　〃

dṛṣṭādṛṣṭārthayānataḥ (69 見義不見義)　見義乘のものと不見義乘のものとの故に，見と不見との義を乘とするものの故に(見義は見諦で，眞理を見て悟ること，小乘の預流果以上，大乘の初地以上，共に聖者)

dṛṣṭānta (2 譬)　譬喩，實例

dṛṣṭāntatva (154 此譬)　譬たること

dṛṣṭārthayāna (69 見義乘)　見義を乘とするもの(乘は大乘を指す，大乘によつて出離するをいふ)

dṛṣṭi (35)　見，邪見

dṛṣṭirjukarana (90 作正直見)　見を正しくすること，見を眞直にすること

dṛṣṭihāyibhiḥ (94 見所滅)　見道所滅によりて

devatā (123 天)　〃，神，天上人

devendramaduranirghoṣa (80 天王聲)　如天帝妙昔，天帝釋の美しい聲の如き(devendra は天帝，諸神の王で帝釋天のこと)

deśanatas (5 說)　說かれて居るから，敎への故に

deśanādharma (62 所說法)　說かれる法

deśanādharmaratnānāṁ tatprabhavatvāt kuśalasasyānāṁ ca vineyasaṁtānakṣetreṣu (34)　說示の法寶はそれを生ずるが故に，又善といふ穀は所化の相續といふ田の中にそれを生ずるが故に

deśanāvibhutvatas (103 說勢力)　敎示の威力から

deśāntaragamena (151 異處起)　他處に行くによりて

deśayiṣyati (7 diś 說)　示敎するであらう

deśita (57 diś 巧說，說)　說かれた，說かれて居る，敎へられた，(86 sudeśita？善說)善所說

dehābhāvāt (38 由非身故)　身無であるから

dehin (97 衆生)　〃，有身者

doṣa (123 過失)　〃

doṣagahravāt nikṛṣya (96 拔險難)　過失の深坑から拔出されて

doṣamalin (134)　過失の垢を有する，過失に汚されて居る

doṣavati guṇavatvagrāha (73 過失非失非有取)　過失を有するに對して功德を有すとの執，有過失を有功德となす執

doṣasaṁcayasya dauṣṭhulyalakṣanasya (24 熏習稠林過聚相)　麁重の相ある過失の積集の

doṣāvakāśa (155)　過失に陷る餘地，過失の餘地

dauṣṭhulya (92 習，習氣，熏習)　麁重(二障の種子，又は障の現行，或は有漏の種子又は有漏の現行)

dauṣṭhulyakāya (169 熏聚因，熏習聚)　麁重身(身は積集の義で，集まりの意味，それで聚，熏習聚ともある)

dauṣṭhulyakāyapratyakṣaṁ tatkṣaye dhīmatāṁ mataṁ (169 亦知熏聚因，依他性卽盡？)　諸有智者には，それの滅に於て，麁重身の現量があると考へられる

dauṣṭhulyalakṣaṇa (24 熏習稠林…相)　麁重の相なる

dauṣṭhulyasamutpāṭanāt (144)　麁重を破るから，麁重を滅するから

dauṣṭulyāpakarṣaṇo dṛṣṭinimittāpakarṣaṇaś ca (57～58 一拔除熏習，二拔除相見)　麁重を除くことと，見と相とを除くこと

dauṣprajña (166)　惡慧

dauṣprajñya (101 愚癡)　〃，惡慧

dauḥśīlya (101 破戒)　〃

dauḥśīlyādyasaktir (108 戒離破戒著)　破戒等の不執著

dauḥśīlyābhogavaimalyad (181 出犯出異心)　犯戒と功用との垢が無いが故に

dravate (92 dru 融，消融)　融ける，流れる

draviṇa (113 財物)　物，事物

dravyatas (154 實有，實體有)　實物として，實物から，實の物として，實として，實から，實事として，實事から

dravyasat (154)　實事上の有，實有

drāvayati (181 dru 滅除)　〃する，追ひ出す，追ひ拂ふ，逃れしめる

dvaya (2)　二，二種

dvayagata (13)　二に在る，二種の人に在る

dvayagataparama (13)　二種の最高の，二種にある最高の

dvayagrāhavisaṁyukta (93 遠離彼二執)　二の執を離繫したる，二執を離れたる

dvayadāhatas (182)　二を燒くから

dvayapakṣaśāntatā (30)　二品の靜まつたこと，二分の寂靜

dvayaparipacanaśodhana (89 熟二令淸淨)　二の成熟を淸淨にすること

dvayabhrānti (59 二種迷)　二の迷亂

dvayamukhatā (83)　二種の門たるもの

dvayalakṣaṇena viyukto grāhyagrāhakalakṣaṇena (25 了達所有二相，卽解脫能取所取)　所取能取相たる二相を離れたものとなる

dvayasaṁkleśavarjita (186 離二染)　二の染汚を離れたものよ

dvayasaṁjñā (182 二想)　〃

dvayasaṁpattidātāraḥ (163 與二成)　二の成就を與へるもの等

dvayādvaya (36)　二と不二(無二轉と不住轉とに當る)

dvayādvayārthena (55)　二が不二なるの義によりて

dvayādhāna (44)　二を與へること

dvayānugrahapūraka (104 二攝)　二の攝受の成滿

dvayānupalambhād yathoktaṁ dvayālambanalābhe (56)　兩者の不可得から，前所說の如くに，二の所緣の得がある，二の所緣が得られる

dvayān na cānyad (22)　そして二より他のものでない

dvayārtha (13 二義)　〃，二の利益，二の所緣境

dvayārtham ādhāya paraiti nirvṛtiṁ (21)　二利を成じて解脫に達す

dvaye akheda (99 不退有二種)　二の不

parikliṣṭāḥ (82 長時勤修難行苦行, 由極疲倦能得菩提) 長時の難行の努力に疲れること無くして過度に苦惱したこと
dīrghadharma (13) 長大な法
dīrghasamayaṁ (6 長時) 長時間, 長期の間
duḥkha (1 苦) 〃
duḥkhakara (172 作苦) 苦を作るもの
duḥkhakalpa (173 思苦) 苦を思惟するもの
duḥkhakṣayākāṅkṣaṇa (15) 苦の滅盡を望むこと
duḥkhatrāsa (18 畏苦) 苦の驚怖, 苦の怖畏
duḥkhatrāsapratiṣedha (18 遮畏苦心) 苦の驚怖の遮否, 苦を怖れることを否定すること
duḥkhaparitrāṇakriyayā (125 如理拔濟故) 苦を拔濟することを爲すから
duḥkhaparyanta (95 苦邊) 苦の邊際
duḥkhaprakṛti (23 苦自性) 〃
duḥkhabhīta (173 畏苦) 苦を怖れるもの
duḥkhaṁ (182) 苦んで, 困難して, 僅かに, 漸くにして
duḥkhamahaugha ajñānamahāndhakāre ceti yojyaṁ (127 有苦爲大海, 無智爲大闇) 苦の暴流と無智の大闇とに, と結付けるべきである
duḥkhayuktasyātmano 'satva (23) 苦と結合したる我の存せざること
duḥkhavirūḍhimātra (95 唯苦著?) 唯苦の增長のみ, 唯苦を增長するもののみ
duḥkhasvabhāva (23 苦自性) 苦を自性とするもの
duḥkhākrānta (124 苦逼) 苦に逼られた
duḥkhākṣama (125 無大苦難行忍) 苦を忍ばない, 苦に耐へない
duḥkhājñānamahaughe (127 有苦及無智, 大海) 苦と無智との暴流に於て (augha 又は ogha は暴流と譯されるが, 海にても可ならん)
duḥkhātmaka (124 苦爲體) 苦を性となすもの, 苦より成るもの
duḥkhādhāna (21) 苦を持して居る
duḥkhārta (52) 苦に惱まされたる
duḥkhārte (121) 苦に惱めるものに於て
duḥkhādhivāsakṣānti (105 安苦忍) 苦に耐(忍耐)する忍(忍辱)
duḥkhādhivasanakṣāntyā ca parāpakāramarṣaṇakṣāntyā ca (108) そして苦を忍受する忍辱により又他人の作害(不饒益)に耐へる忍辱により
duḥkhābhāve (127 捨苦?) 苦の無いときにも, 苦の無に於ても
duḥkhābhibhūta (124) 苦に打勝たれた
duḥkhāyate (125 nominal verb 苦) 苦しむ, 苦を感ずる
duḥkhita (23 苦, 苦厄) 苦しむもの, 苦しめる
duḥkhita-jana (1 苦衆生) 苦しめる衆生, 苦しんで居る人々
duḥkhin (128 苦者) 苦しむもの
duḥkhe ca satvāsatvakṛte kuśalaprayoge ca (99 於衆生非衆生所作苦) 衆生と非衆生とによつて作された苦に於てと善の加行に於てと
duḥkhotpāda (18) 苦の生ずること
duḥprajñāḥ tīrthakādayaḥ (131 外道無慧) 惡慧の外道等
duḥśīla (130 破戒) 〃
duḥsaṁsthitatā (22 無緣?) 形を變へたもの
duḥsādha (9 難成) 成立し難い, 爲し難い
dugdha (4 乳) 〃
dundubhisvara (80 天鼓聲) 如天鼓音, 天上に在る太鼓の響の如き (帝釋天の法堂にある太鼓)
duraṁ gatā bhavati (182 遠能去) 遠くに行つたものとなる, 遠く行つたものである
durājñeya (6 卒難覺識) よくは知られ難い
durāntikaparṣatulyaśravaṇatva (80 遠近徒衆同依止) 遠近の會衆等しく聞かれること
durānpraviṣṭa (24) 遠く透入せる
durārādha (2 難事) 仕へ難い
durukta (29 vac 惡說) 〃せられた
durgatigamana (21 向惡趣) 惡趣に赴くこと
durgatiparikhedanirbhayatā (17) 惡趣と疲惱とを畏れないこと
durgamārgasamārūḍha (124 住險) 難行路, 又は險路, に上つたもの
durjana (86 惡人) 〃
durjaya (182 難勝) 〃地
durjayā (182 難勝) 〃地
durjñānatayā (45 由此身難知故) 難知たるによりて, 知り難いものであるから
durbala (124 瘦澁, 160 下) 力弱き, 弱, 弱力
durbalatva (143) 弱いこと
durlābhārtha (76 難得義) 〃
duścarita (12 car 行惡行) 惡行, 惡行を行じた
duścaritacārin (112 惡行人) 〃, 惡行を行ずるもの
duścaritaikāntika (12一向行惡行) 惡行一向のもの, 一向惡行のもの, 惡行に於て一向のもの
duṣkara (9 難起, 13 難作) 難いこと, 難行, 難事
duṣkaracaryā (11 難行, 行難行, 修行) 〃, 難行の行, 難行を行ずること
duṣkaracaryāsahiṣṇutā (125 忍, 大苦難行忍) 難苦行に耐へること
duṣkaradīrghādhikākhedāt (15) 長時で夥多の難行に無疲倦であるから
duṣkaraśata (33) 百の難行
duṣkṛta (162 惡作, 惡) 惡行
duṣkṛtāt parirakṣanti (162 防諸惡) 惡行から守護する
duṣkṛte karmaṇi (18 不善業) 惡業に於て, 惡作の業に於て
duṣṭatā (39 過失) 〃, 罪
duṣṭesu satveṣu (36 衆生過) 衆生に過があるときには, 過ある衆生に於ては
duṣpraveśa (101 難入) 入り難く
dūraga (50 遠入) 遠くに至る
dūraṁgama (182) 遠行
dūraṁgamatva (80 出遠去) 遠くに至ること
dūrānupraviṣṭajñānagocara (7) 深く悟入せる智の境
dūrāntaranikṛṣṭa (36 遠邊下賤) 遠, 中, 近
dṛḍha (98 dṛṅh 堅固) 堅固な
dṛḍhatva (135 堅固) 〃
dṛḍhatvād abhedyatayā (16 勇猛堅牢不可壞故) 堅固であるから, 不可分破によつて
dṛḍhaparākrama (115 堅固) 堅固な勇猛
dṛḍhodaya (15 堅發) 堅固の發起
dṛśyamānatā (188) 見られつつあること
dṛṣṭa (104 dṛś) dṛṣṭadharma- とあるから, 現在といふ意味と考へられ

trasitavya (7 tras)　怖畏せねばならぬ，怖れねばならぬ
trasyati (18 tras 怖)　怖れる
trātavya (134)　救ひを爲さねばならぬ，護らるべき
trāsam āpatsyate (18 pad)　怖畏に陷るであらう
trāsahāni (164 斷怖)　怖畏を滅すること
trāsābhinandanimittatva (127)　怖畏と歡喜との因緣たること
tridhātuka (56 種性)　三の種性のもの
tridhātukakleśavihānipūraka (81 具斷三界惑)　三界に屬する煩惱の捨離を滿たせる
trimaṇḍala (175 三輪)　〃
trividhā ca vidyā (27 三明)　〃，そして三種の明
tryadhiko daśātmakaḥ (20)　三だけ多い十數より成るもの
tryātmaka (98)　三より成る
traidhātukātmasaṁskārān abhūtakalpataḥ (94 諸行虛分別)　三界に屬する諸の自行を非實の妄分別として

D

dakṣiṇīyāparimārgaṇa (130 不簡福田？)　尊敬を求めざること
dagdha (154 dah)　燃切つた
daṇḍakarma (55 治罰)　〃，杖で打つての罰，杖業
dadat (52 dā)　與へつつ，與へるから (53 dadataḥ 與へつつある人)
dadatā (129)　與へることによりて
dadhāti (2 dhā 得)　頒つ，與ふ
dadhi (150 酪)　〃
dama (119 調)　制，制伏，調御，制御
damayati (92 dam 伏住)　制御する
damayet (92 dam)　制するであらう，制すべし
darpaṇa (2 鏡)　〃
darpaṇagata (2 臨鏡)　鏡に在る，鏡に映る
darśana (2)　見ること，見，(5 現) 現はすこと，(143 能見) 見
darśanakarma (25 自業)　見の業
darśanajñeyakleśa (94 見道所斷煩惱)　見道の所知の煩惱
darśanapūraṇatuṣṭiṁ yācake (109 得見及遂願)　請ふ人に於ての見の滿ちた知足
darśanaprahātavya (94 見道所滅)　〃の，見道にて滅せらるべき
darśanamātra (185)　唯見るのみ
darśanamārgalābhino bodhisatvasya mahātmyodbhāvanaṁ (95)　見道を得たる菩薩の偉大性を示すのである
darśanamārgāvasthā (94 見道位)　〃
darśana-vāśat (2)　見るによりて
darśanākārabhāvana (57 見種修)　見行相の修習，見の種類の修習
dvyāśayāpti (78 得二意)　二の意樂を得たること，二の意樂の得られたこと，二の意樂に達したこと
darśane timirasya śāntir na bhāvo dāhatimirayor abhāvalakṣaṇāt (38 瞥闇の見に於ける消は有ではない，燃と瞥闇との二は無を本質となすから)
darśayat (1 dṛś, 示現)　示しつつ，見せしめつつ (示現が此論ではよく用ひられるが，すべて，示す，見せしめるの意味)
darśayati (2 dṛś 顯示)　示す，見せしめる
daśakuśalakarmapatha (31 十善業道)　〃，十の善業道
daśapāramitā (75 諸度)　十波羅蜜
daśabhūmika (26 十地經)　〃

daśabhūmikasūtra (143 十地經)　〃
daśavaśitālābha (26)　十自在を得たこと
dasyu (86 盜賊)　〃
dahana (182 燒)　〃
dānacchanda (72 樂說)　與へることを樂ふこと，布施の樂欲
dānadāna (116 施施)　施の施
dānaparaṁparāṁ kṣaṇamātram api hāpayati na vicchinattyā bodhimaṇḍaniṣadād iti (102 施從初相續乃至成佛，無刹那頃有絕有減)　布施の相續を唯一刹那間のみも捨てず，菩提座に坐するに至るまで斷じない，…唯一刹那間のみをも斷ずること無くして捨てない
dānapriti (130 布施喜)　〃
dānaskandha (103)　施の聚，施の積集，施の蘊
dānābhirato na syāṁ prāptaṁ cet tatphalaṁ na visṛjeyaṁ (129 若我不樂施，施果不施時，シナ譯は前句と後句とを順序を逆にすべきである)
若し達せられたその果を施さないであらうならば，私は施を愛樂することが無いのであらう
dāne pāraṁparo 'smin yataḥ (129 還以展轉施？)　何となればこの布施に於て展轉があるからである
dāne sannān (128 sad)　布施に於て弱くなつて居るもの等を
dānta (20 dam 調，調伏，調順)　〃
dāntaṁ śīlayogād indriyadamena (119 調伏者與戒相應，由根調故)　調御せるとは戒との相應 (卽ち，結合又は實修) から諸根を制せるによりてである
dāpyate (162 dā 令後償)　拂はさしめる，與へしめられる，償はしめられる
dāyaka (2)　與へるもの，血族，嫡子，施與
dāyakadarśanāt (109)　施者を見るが故に
dāyāda (120)　相承，相續 (パーリ辭典參照)
dāyādaguṇa (120)　相承の功德
dāra (110 眷屬)　妻
dāridrya (101 貧)　〃
dāsuskandha (151 木)　木の幹，木の聚
dāsa (163 健奴)　奴，奴隸，召使ひ
dāha (38 熱)　燃
dāhakaraṇa (6 被燒然)　燃燒をなすこと，燃燒すること (然＝燃)
dāhaśāntir yathā lohe darśane timirasya ca (38 譬如鐵熱息譬如眼瞥除)　譬へば鐵に於て燃える消えると，又瞥闇の見に於けるが如く
dikṣu (25)　諸方に於て，諸方に
digvidikṣu (123 十方人)　四方四維に於て
dinakara (16 日)　太陽
dinakarakiraṇa (111 日光照)　日の光線
divā (86 div の instr. 晝日)　晝は，日中
divālpakīrṇabhilāpakatva (86 晝日無喧)　晝は人の群も諠躁も少ないこと
divya (25)　天の
divyaṁ cakṣuḥ (143 天眼)　〃，天的の眼
divyavihāra (25)　天住
divyaśrotrābhijñā (25)　天耳通慧
diśi diśi (42 處々)　凡ての方角に於て，至る所で
dīpa (43 燈)　〃，燈明
dīrghakālānuṣṭhānāt (116 長時得饒益故)　長時間實行するから
dīrghakālikaduṣkarākheda (15)　長時の難行に無厭倦なこと
dīrghaduṣkaravyāyāmaśrameṇātyarthaṁ

tarka-gocaratva(5)　黠慧の行境たること

tarpayitvā(113 tṛp)　滿足せしめて

tallakṣaṇa(98 相)　それの相，特質

tasmāt(3)　故に，それ故に，それから

tasmād ādita evānyathātvam ārabdhaṁ yat krameṇābhivardhamānam ante vyaktim āpadyate(150 由初起卽變，漸至明了)　故に初めから，起つたものが異なることで，それが漸次に增長しつつあつて，最後に明瞭となるのである

tasmād eva cātmābhāvān mokṣo 'pi bhramamātrasaṁkṣayo veditavyo na tu kaścin muktaḥ(23 實無我相可得，故解脫唯迷盡者，若緣自身起解脫，亦唯迷盡，無別有我名解脫者故？)　そして此我の無の故に，解脫も亦唯迷亂のみの滅盡であり，それに反して何等の解脫したものも無いと知るべきである

tasmād viyukto dvayalakṣaṇena (24 解脫於二相)　此故に二相より離れたる

tasmān na tat tad evety avadhāryate(150)　故にそれはそれに外ならぬとは決定せられない，故にそれが其ままそれであるとは決定せられない

tasya kuto bhayād bodhicittaṁ vyāvartiṣyate(18 若如是者，更有何意而退菩提心耶)　かれの菩提心が何處からの恐怖の故に退轉するであらうか

tasyādyutpatti(68 有本起)　それの本初の生起，それの最初の生

tasyāpi cittamātrasya nāstītvāvagamanam, grāhyābhāve grāhakābhāvāt(25)　又その唯心のみの無なるを理解する，所取が無ならば能取も無であるからである(-hya- は -hyā-)

tasyāvaśyaṁ hetunā bhavitavyaṁ(149 必藉因緣)　それには必然的に因が存せねばならぬ

tādṛśa(4 如)　かかる

tādṛśo bhavan(18)　此の如くであるものは

tāpaka(124)　明光

tāpana(20)　苦難，苦痛

tāpanakarma(20)　苦難の業

tābhir upasaṁkramya(143)　これ等によりて近づいて

tāratamya(153 漸減)　漸次たること(tara は比較級の語尾，tama は最上級の語尾)

tāratamyopalabdhitaḥ(153 漸微)　漸次たることが可得なるが故に

tārayitum(9 tṝ 欲度)　度らすべく，度すべく，救ふべく

tārkika(3 忖度人)　黠慧者

tāvat(7)　先づ，初めに，先づ初めに

tāvatkālika(150 暫時法)　暫時のもの，それだけの時間のもの

tāsv iti pāramitāsu(161)　これ等に於てとは，諸波羅蜜に於てである

timira(38 翳)　〃，闇瞖

tiryaggamana(153 傍去)　横に吹くこと，横に行くこと

tīkṣṇabhaṅguratva(80 韻清亮？)　銳くて變化があること

tīkṣṇendriya(141 利根)　〃

tīrthakadṛṣṭivyutthāpanāt(35)　外敎者の邪見から立ち上らしめるから

tīrthikamokṣārthotsāha(105 外道解脫中勇猛)　外道の解脫の爲の努力

tīrthika-śāstra(3 外道制諸論)　外道の論書

tīrthya(80 外道)　〃，外敎徒

tīvra utpadyate modo muditā tena kathyate(181)　强き歡喜が生ずる，それ故に歡喜地と稱せられる

tīvracchanda(135)　猛利なる樂欲

tīvracchandakara(56 欲生)　銳利な樂欲を作すもの，强き樂欲を生ずるもの

tīvratā(124 最尊最上)　强いこと

tivrā gurutā(99 極敬)　强い尊重，强い尊崇

tīvrāṇāṁ śītādiduḥkhānam adhivasanā (29)　烈しい冷等の苦を忍ぶこと

tulanayā(91)　秤量によりて

tulyakālapravṛtti(6 難度？)　等しい時に起つて居ること，同一時に始まること

tulyajātīya(170 同一種)　等しき種類のもの

tulyatva(68 同)　等しいこと，同じこと

tuṣitabhavanavāsanādika(26 住兜率天等)　兜率天宮に住する等より成る

tuṣitabhavanavāsādinirmāṇaiḥ satvārthakriyānuṣṭhānataḥ(65 由住兜率天等現諸化事利益衆生故)　兜率天宮に住する等の變化により衆生利益の事業を作すが故に

tuṣitabhavanavāsādisaṁdarśana(17 示現八相成道)　兜率天宮に住すること等を示現すること

tuṣṭi(2 喜)　滿足，知足

tuṣṭim āyāti(113)　知足に至る，知足する

tuṣṭir alpamātreṇa(83 少知足)　少量での知足

tūrya(37 天鼓)　鐃，天鼓又は天鼓(devadundubhi)

tṛṇa(153)　草葉

tṛtīyapakṣa(155 第三體)　第三の場合

tṛpta(44 tṛp)　飽足した，充足した，滿足した

tṛṣṇāmayaḥ snehaḥ(127)　渴愛所成の親愛は

tena ca saṁgṛhya(31 grah)　それによつて攝せられて

tenāprāpya niṣṭhāṁ avicchedāt(145)　それによつて，達せずして，究竟を斷絕しないから

tenaiva ca kāraṇena(19)　そして全く其理由で

teṣāṁ dharmāṇām arthaprakhyānāvagamāt(24)　これ等の諸法の義を知り解するから

teṣu tad ity ādhāravṛttiḥ kṣamiṣu tadvṛtteḥ(105)　それ等に於けるそのとは，含まれて存することである，忍の中にそれが存するから

teṣu teṣu sūtrānteṣu(6 彼經中)　それぞれの經に於て

toya(44 衆流)　水

toṣayati(2 tuṣ 愛)　滿足せしめる

tyaktvā(70 tyak 捨)　捨てて

tyāga(99 施彼)　施捨

tyāgābhyāsena tatsaktivigamāt(100)　施捨を數習することによつてそれ(卽ち境)に對する執著を離れるが故に

tyāge nivaraṇasya(141 捨)　蓋の捨に於て(nivāraṇa, nivaraṇa とも)

trayamukhaṁ(43 三門)　〃，三方面に

trayamukham iti yānatrayeṇa(43 三門者三乘敎門故)　三門とは三乘によりてである

trasati(6 tras 怖)　怖畏する

trasanti(6 tras 怖)　(asmāt trasanti)彼等がこれを怖れる

trāsa(6 怖畏)　〃，驚怖

trāsāsthāne trāsaḥ(6 非怖畏處，妄生怖畏)　怖畏の無い非處に於て起す怖畏

tadātmabhir (85)　その性によつて
tadādau (127 彼初)　その初めには
tadādhipatyotpattitaḥ (62 內入增上起故)　これの增上から起るが故に
tadāptivikṣepasaṁyameṣu (100 不亂)　それに達する爲の心散亂の制御に於て
tadābhāse cittamātre 'vasthānam (25)　それを似現する唯心のみの中に住すること
tadāsevana (99)　それに奉仕すること
tad itas tataś ca mokṣo bhramamātrasaṁkṣayaḥ (22 解脫唯迷盡)　故にこれから又それからの解脫は唯迷亂のみの滅盡である
tadudgrahatas (136 受持)　それを受持することから
tadupadeśārthaṁ (141 爲敎授故)　それを敎ふるが爲である
tadupabhogasyāvastukatvāt (62 所受用塵體無有故)　それの受用には實事は無いものであるから
tadupama (12)　それと似て居る，それに似る
tadupāyalābha (17 得方)　その方便を得ること
tadupāyasaṁgrahāt (98)　それの方便を攝して居るから
tadupāye ca kovidāḥ (163 示以巧方便)　及び其方便に於て巧なものである
tadubhayābhisaṁbandhe svabhāvaviśeṣaprajñaptyoḥ prajñaptimātratvaparyeṣaṇā (168 推名自性及物自性，知俱是假)　此兩者の結合に於て自性と差別との假說の中假說のみの尋求が
tad eva kuśalamūlaṁ (83 有如是善根？)　同一の善根を
tadeva trayaṁ hīnayānāgrayānabhedena dvayaṁ bhavati, śrāvakapiṭakaṁ bodhisatvapiṭakaṁ ca (53 此三由下上乘差別故，復說爲聲聞藏及菩薩藏)　その同じ三が小乘と最上乘との差別によりて二となる，卽ち聲聞藏と菩薩藏とである
tad evedam iti jñāyata iti siddhaṁ (150 謂是前物以是故刹那刹那義得成)　此が卽ちそれであると知られるのであると成立される (第二の iti が imi とあるは誤植)
tad evedam iti viparyāso jāyate (154 世人謂是前物生顚倒知)　それが卽ち此物であるといふ顚倒が生ずる
tadgata (35)　そこに行つたもの
tadgarbha (40 如來藏)　それの藏，それの胎，如來の藏，如來の胎
tadgāmin (1)　それに至る (tad はここでは最上乘)
taddharmadhātor ātmanyabheda (15)　その法界が自己に於て無差別なること，其法界の自己に於ての無差別たること
taddhānivṛddhyā satveṣu anāmodaḥ pramodanā (74 於退則不喜，進則歡喜生)　それの滅退と增長とによつて，衆生に對する不喜と歡喜とがある
taddhṛtyāṁ (73 現持)　それの堅持に於ける
tadbhāvaḥ (59)　其物である
tadbhāvena (59)　その物として，其性として，其ものとして
tad yadi nādita evārabdhaṁ bhaved (150 若汝言物之初起非卽變異者)　若しそれが初めから起つたものでないならば
tadyogāt (182)　それを勤修するから
tadropaṇāt (118 令植善根)　それを成育せしめるから

tadvat (2, 亦如是)　その如く (yathā… tadvat 恰かも…が如く，その如く)
tadvaśenābhigama (77 修力自在而得果)　その力によつて達すること
tadvigamasyādṛḍhīkaraṇa (81 斷疑不堅固)　それを，卽ち疑を，離れたことの不堅固なこと，疑を離れることを堅固ならしめないこと
tadvipakṣalobhānuśayāsamudghātāt (107 樓所對治貪隨眠不斷故)　それの所對治たる貪隨眠を斷じないからである
tadvipakṣavihiṁsāprahāṇe sati (125 斷所治惱障)　それの所對治の害を斷じたときに，…斷じたから
tadvirati (110 彼三遠離行)　その三からの遠離
tadvirahita (50 離前二行)　それを離れて居る
tadviśuddhiprabhāvitatva (34)　それの淸淨の所顯であるもの
tadviśuddhisvabhāva (40)　その純淸淨を自性となすもの
tadviśeṣṭebhyaś ca śakrādibhyaḥ (73)　またかの殊勝なる帝釋天等から
tadvyatikramasaṁpanniḥsaraṇopadeśakatva (80 令犯戒人得正出)　その學處を犯し遂げたものの出過を敎誡すること
tadvyavasthiti (178)　それの住がある，それの建立がある
tanu (12 薄，下)　〃，微なる，微小な，微劣な
tanuka (92 下)　微薄な
tanuduḥkhopasaṁvitti (12 苦薄)　微苦をも感ずること
tanudṛṣṭilajja (173 小見)　小見の羞
tanudoṣalajja (173 小罪)　小なる過失の羞
tanuparamavimadhyaprakāra (33)　微少と最高と中庸との種類
tanūpabhogya (49)　僅かな食物
tannidānaṁ (8 此緣非福)　此因緣にて
tan nidānaiḥ (160 從此)　この因緣によつて
tannibhacittamātra (24)　そを似現する唯心のみ，それに似たる唯心のみ
tannimittatva (11)　それが相であること，その因であること
tan niśṛtaḥ (114)　それに依止したもの
tanmaya (1 爲性)　それより成る，それの所成の (tan は tad で，ここでは kāruṇya)
tanmātratva (168)　それのみたること
tanmātrasaṁstuṣṭi (107)　それのみで滿足すること
tapati (84 tap 朗)　輝く
tapas (105 難行)　〃，苦行
tapaḥprabālyasaṁyukta (105 具勝)　苦行の勢力と結合せるもの，苦行の勢力を具せるもの
taṁ taṁ pratyayaṁ pratitya (23)　それぞれの緣に緣つて
tamaḥ prakāra (23 闇故？)　闇の種類，闇の狀態
tamovṛta (124 闇覆)　闇に覆はれた
tayā (yayā?)sac ca sato yathābhūtaṁ paśyaty asac cāsataḥ (65 彼有如實見有，非有如實見非有)　それによつて有を有から (有として) 如實に見，又非有を非有から (非有として) 如實に見ることである
tayor eva tathatā dvayaṁ (55)　兩者は此同じ二の眞如である
taratamena (151 續起)　〃によりて，漸次によりて
taru (125 樹)　〃
tarka (9 忖度者)　黠慧，〃者

られたかである

tatraika evābhisaṁbuddho nānye 'bhisaṁbhotsyanta iti (48)　此中で，唯一人のみが現等覺したとすれば，諸の他のものは正覺しないであらうから

tatropadhiṁ niśritya pūjā cīvarādbhiḥ (118 由依財物而供養故？)　其中で，物に依止しては供養が衣服等によつてである

tatva (66 眞唯識)　眞實 (＝tattva)

tatvadarśika (78 顯實)　眞實を見るの

tatvabhāvārthanaye suviniścitaḥ (32 知眞及知意)　眞實と意味との義の道理をよく決定したる

tatvabhāva (32 眞)　眞實，眞實性

tatvavijñaptimātrasthānāt (66)　眞實唯識の處から

tatvārthanaya (32)　眞實の義の道理

tatvārthaṁ (71 眞實)　眞實義，眞實の爲に

tatvārthaviṣaya (7 眞實境界)　眞實義を境とするもの

tatve praviṣṭaṁ parivartakaṁ ca vīryaṁ (114 亦入眞，轉依)　眞實に入りたると又轉の進と

tatve māyopamaparyeṣṭi (59 求眞實譬喩)　眞實に關して幻の譬喩を求めること

tatsaṁbandhāt (150)　それとの結合の故に

tatsaṁbhavāt (153)　それが生ずるが故に

tatsaṁvibhāga (136 令他解？)　それに參與すること (他をしてそれに參與せしめること，他をしてそれに預り作さしめること)

tatsādharmyeṇa (12)　それと同法たるによりて，それとの相似によりて

tat sukham eva me sukhaṁ yasmāt (129 何以故，悲者以彼樂爲自樂故)　何となればその樂こそは私の樂であるから

tatshāna (24 向彼)　その處

tatsthānagamana (25)　その處に至る

tathā (22 如)　〃，其まま，(22 如是) それと同じく

tathāgata (28)　如來

tathāgatakule janma (20 由生佛家故，生在如來家)　如來の家に於て生れること，如來の家族に於ける生

tathāgatagarbha (40 如來藏)　〃，如來胎

tathāgatajñāna (20 如來智)　〃

tathāgatatva (40)　如來たるもの，如來

tathāgatānugrahaviśeṣapradeśalābhāya (68 勝攝故)　如來の殊勝なる攝受の一部分を得た爲に

tathatālambanaṁ jñānaṁ dvayagrāhavivarjitaṁ (169 若智緣眞如，遠離彼二執)　眞如を所緣とする智は二の執を離れて居る

tathātvataḥ (118 眞實)　眞實から

tathānugṛhat (102 grah 攝)　同樣に攝受しつつ，此の如く攝受するから

tathābhāvasya śūnyatāṁ (94 似體)　此の如きの有の空性を

tathābhūta (93)　此の如くになつた，此の如くある

tathā 'vedhavaśād (39 由行願力)　それと同じく勢力の爲に，それと同じく勢力の力から

tathatā (34 如)　眞如

tathātā buddhatā matā (37 佛說名爲如)　佛なるものは眞如であると考へられる

tathatāyā abhinnatvāt tadviśuddhiprabhāvitatvāc ca (34)　眞如と無別なるが故に，又それの淸淨の所顯たるが故に

tathatālakṣaṇabhāvāt (38 如相實有故)　眞如の特質が有るが故に，眞如を特質とすることが有の故に

tathatāśrayāt (167)　眞如に依止するが故に

tathāpi (4)　それにしても，然し，而も

tathāpravṛtteḥ (64)　其ままに現はれるから，其ままに存するから

tathāvidha (18)　かかる種類のもの，かかる狀態にあるもの

tathā hi (71)　何となれば

tathā hi tadāsevanād āyatyāṁ bahujanasupriyo bhavati (99 行忍辱者多人愛敬故)　何となれば，それの (忍辱の) 奉仕から未來に於て多くの人に親愛となるから

tathā hi te satvālambanā dharmālambanānālambanāś ca (121 anālambana を脫す)　何となれば，それ等は衆生所緣と法所緣と無所緣とであるからである，何となれば，それ等は衆生緣と法緣と無緣とであるからである

tathā hi sā vilakṣaṇā ātmalakṣaṇāt parikalpitāt (23)　何となれば，それは妄分別せられた我の特質から異なつたものであるから

tathaivāvasthita (150 住不滅)　其ままに住したるもの

tathopabhogatvam uśanti pakvatāṁ (30)　その如く成熟したものを食ふことを願ふ

tad (22)　故に

tadagamane ca pratiṣṭhāpanāt (35 令…不復更入)　そこに行かないことに安立せしめるから

tadadhipateyadharma (72)　そを增上する法，その增上的の法

tadanadhimuktānāṁ (70)　それを信解しない人々には

tadanantaraṁ (93)　其無間に，其直後に

tadanurūpamārgacaraṇa (43)　それに順ずる行

tadanurūpā pācanā (30)　それに隨順する成熟

tadantarāyāṇāṁ tadanukūlānāṁ ca (97)　それの諸の障のとそれに隨順するのと

tadanyavastraprāvṛtasyāpi (134)　それより外の衣服に覆はれて居ても

tadanyānyābhāvāt (6 無異卽互無)　それより外の他のものは存しないから

tadanvaya (131 不苦樂？)　それの類

tadabhāvaprabhāvitatvāt (38)　その無の所顯であるから

tadarthavyutpādanasaṁśayacchedanataḥ (116 由敎法義彼疑斷故)　其義について起つた疑を斷ずるから

tadarthikānāṁ (70)　それを求める人々には

tadanyabodhisatvasamatā (94)　それより外の菩薩との平等なこと

tadapraṇihitasya (95)　その無願の處

tadarthaprāpti (4)　その目的に到達すること，その義の到達

tadartham eva (4)　その目的にのみ，その爲にのみ

tadavirahita (27 rah)　それの缺無でない

tadasthānatrāsa (6 不應怖而怖)　それの非處に於ける怖畏

tadākṛtibhāvo (60)　其形相の有

tadāgantukadoṣaduṣita (88 爲客塵染)　その客塵の過失によつて汚された

tram (26 智力普自在，刹土隨欲現) 智自在から清淨なる國土を興す
jñānāpravṛttikarma (40 智不作業) 智慧の働かない業
jñānālokakara (39) 智慧の照らすこと
jñānālokakaratva (38) 智慧の光明を發すること
jñānena gataṁ ca nirvikalpena (100 合智) そして無分別の智によつて伴はれる (gata=sahagata 俱行)
jñānena gatā ca nirvikalpena (132) そして無分別の智によつて達した
jñānena prayojanaṁ (139) 智を以て必要とする
jñānena saṁprayuktaś ca yogopaniṣadātmakaḥ (56 依智) 智と相應し，精勤と因とより成るもの
jñānena suviśuddhena advayārthena (94 淨智了無二) 極純淨な無二義の智によりて，無二義を知る極純淨な智によりて
jñeya (2 jñā) 知らるべき，所知，(62 能知智) 所知
jñeya iti laukikakṛtyasamyakpravicayavyudāsārthaḥ (106 及離世間所識業) 所知とは世間的の所作を正しく簡擇するを離れる爲であるをいふ
jñeyaprabhāsana (39) 所知を照らすこと，所知を明かにすること
jñeyājitavinirjaye (144 伏諸境) 未だ征服せざる所知を降伏する爲に
jñeyāvaranajñā (hā の誤植) -nāya (85 爲斷智障故) 所知障の智 (滅の誤) の爲に
jvalate (37 jval 然) 燃える
jvalana (26 放光) 光明を放つこと
jvalanaśamana (37 熾然，滅盡) 燃えると消えると

T

tac cobhayaṁ kramād bhavati (169 彼二應次第觀察) そしてその兩者は次第的である，次第からのものである
tac chaktikṛta (128 資生？) それの力から作られた
tac chandasahagata (91) それの樂欲の俱行するもの
tac chabdena pāramitānāṁ grahaṇāt pāramitādeśanā paramitāsamādāpanety arthaḥ (116) それといふ語によつて波羅蜜を指す語であるから，波羅蜜の敎示であり，卽ち波羅蜜の勸發といふ意味である
tac chabdenāpaś ca gṛhyante vāyuś ca (153) それがといふ語によつて，水と風とが解せられる
tajjñānaparyeṣṭyālambana (14 種智？，以種智爲所緣？) 其智を求めるを所緣となすもの，その智の尋求を所緣となすもの
taṭāga (153) 池
tatas (7) それから，その後に
tataḥ pareṇa (24 從彼後) これより以後，それから後に
tatkalāṁ (128 一分) かの一分にも
tatkalāṁ nānugacchati (40) その一部分にも及ばない
tatkalpanatājñāna (15) それの分別性の智
tatkālāparinirvāṇadharma (12 時邊般涅槃法) 其期間の無般涅槃法のもの
tatkṛtyeṣūttame ca buddhatve (15 所作及佛體) それの所作と最上の佛たることに於て，それに關する所作に於て及び最上の佛たることに於て
tatkrameṇa (101 次第起？) その順序によつて，その次第で

tatkṣaye (p. 169, L. 23) その滅に，それの滅の爲に (kṣi m. の dative)
tatpara (172 勤) それに獻身せる，熱心に從事せる，それを最高目的とせる
tatparibhogādhyavasāna (116 起染) それの受用に耽著すること
tatpṛṣṭhalabdhānantajñeyaviṣayajñānamārgalābhāt (36 得無邊所識境界智道) その後に得られた無邊の所知の境の智の道が得られるから，その後得の無限の所知の境の智道が得られるから
tatpṛṣṭhalabdhena jñānena (139 以後得世智) その後に得られた智を以て，後得智を以て
tatprakāra (3 彼種) 此種類，其種のもの
tatpratipakṣaparamārthikajñānapraveśa (23) その對治たる第一義の智へ入ること
tatpratipannānām upadravebhyo rakṣaṇāt (28 有横災則能守護) それに對して起れる災横から護るから
tatpratyayair api bhṛśair (122 設遇重障緣) 强いその緣によつても，强いその緣を以てしても
tatpramāṇīkṛta (138) それを量と爲した，又は，爲す
tatprayogatas (14 勤方便) それの加行の故に，それを加行するから
tatprayojatāt (118 恐らく -yojanāt，敎彼供養？) その目的から (？)
tatprabandhakāmatva (129) それが繼續するを欲すること
tatprāpti (35) その到達，そこへの到達
tatphalasamṛddheḥ (16 現能成就故) 其果が增長するから，其果が成熟するから
tatra ca bodhisatva upakārisaṁjñāṁ labhate kṣāntisaṁbhāranimittatvāt | duḥkhaṁś ca kṣamitavyaṁ bhavati | tatra ca parahitahetubhūte duḥkha (duḥkhe !) bodhisatvaḥ sadā modaṁ labhate, tasya kutaḥ kiṁ kṣamitavyaṁ ‖ (111 の最初に此釋文があつて次に梵文の yasya nāpakārisaṁjñā pravartate na duḥkhasaṁjñā となる) そして此點に於て菩薩は有恩者 (饒益者) の想を得る，忍辱の資糧の因であるから，そして此點に於て利他の因となつた苦に於て菩薩は常に喜を得る，彼には何故に何を忍ばねばならぬか，すべて不饒益の起らないものには苦想は起らない
tatrāpattiḥ kathaṁ bhavaty anāpattir veti nirdhāraṇāt (55 謂，云何得罪，云何不得罪，如是應持) 此點で (此場合) 如何に犯罪であるか (犯罪となるか)，或は無罪であるかと決定するから
tatrābodhatvena bodhapratibodhāt parinispannasvadhāvabodhaḥ (174) 此中無覺性によりて覺の別々覺の故に，眞實自性の覺が
tatrāvasthāvikāritā (64 及位及不轉) そこの位と不變異と
tatrāśrayo bodhisatvaḥ (111) 此中，菩薩が所依である
tatrāśraya yatra deśe deśitaṁ yena yasmai ca (54 依者是處是人是用，謂隨何國土，隨是何諸佛，隨是何衆生，如來依此三種，說修多羅？) 此中で，所依とは何れの方處に於て，何人によりて，何れの人に敎示せ

の如し
cintāmayī(50)　思所成のもの
cintāvihīnabuddhi(126 若無利益衆生思惟)　思惟の缺けた覺のもの，その覺が思惟の缺けたもの，無いもの
cintāsuviniścitatvāt(23 思法決定已)　諸法に對する思惟の善決擇の故に，諸法に對して思惟しよく決定して
cintitārthasamṛddhau ca gatirūpavibhāvane(42)　思惟せられた義の增長に於て，また，去來と形色との顯はれに於て
cintya(2 cint 思惟)　思惟せらるべき
cīvara(86)　三衣，着衣
cīvarapiṇḍapāta(86)　衣服，施食，着衣と受食，衣と乞食
ceṭa(89 奴)　使人，召使
cetanā(13)　心
cetanā chandasamprayuktā svabhāvaḥ (147 思欲相應共爲自性)　思と樂欲と相應するものとが自性である
cetanā chandasahitā(147 思欲共爲體)　思と樂欲を伴ふものと
cetanā mūlaniścita(104 共思)　善根に決定した心(mūla はここでは kuśalamūla の略に相違ない，釋に不慳貪とある)
cetayate(123 cit)　注意せしめる，敎へる，見る，意識する
cetas(25 心)　〃
cetasaprabhava(16)　心の發ること
cetaḥparyāyābhijñā(185 他心通)　心差別通，〃慧
cetaḥprajñāvimuktilābha(63 心慧＝脫)　心と慧との解脫の得，心解脫と慧解脫とを得たこと
cetaḥprajñāvimuktyā nābhāva(38 由心慧解脫有故)　心と慧との解脫によつて無ではない
ced(55)　＝ca, 然らば，そして，又，もしも
ceṣṭa(137 ceṣṭ)　動
ceṣṭita(45 業)　動き，行動
caitasika(123 心數法)　心的働きの，心數の，心的の，心所有法の(心所有法の譯語はよくない，心所卽ち心所有法は心をも又心の働きを一種の實體と見るから)
caitasikā dharmāḥ(64 心數法)　諸〃，諸心所有法(心所有法の譯語は小乘說にはよいがここには不可，心をも心數法をも實體視して居るから)
caitta(169 心法)　〃，心所，心所有法
codya(139)　非難
codya(2 cud 問)　非難，非難せらるべき
cyuta(25)　死
cyutopapādābhijñā(25)　生死通慧

CH

chanda(14 欲)　〃，樂欲
chandajanaka(56 欲生)　樂欲を生ずるもの
chandaparihāṇi(187 欲減)　樂欲の退
channa(111 室)　〃，暗室
chāyābhūtatvāt(62 影)　〃であるから
cheda(171 斷)　〃

J

jagat(9)　世間，世間人，人々
jagato 'grabandhubhūtaḥ(30 世間第一親者)　世間の最上親屬たるもの
jagadakhila(33)　世間全體，全體の世間
jagadagrajanmatā(29 受身世間勝)　世間に於ける最上の生なること
jagadagrabhūtatā(29 世間得第一)　世間最上たること，世間第一たること
jagad avaśaṁ svavaśe vidhāya nityaṁ (27 能安不自在)　不自在な世人を常に自己の自在の中に置きて
jagad upaguhhya(22)　世間を掩護して
jana(1 衆生)　〃，人々
janacarin(43)　生の行
janatā(43)　人々，多くの人，人類，群生
janana(35)　生，出生
jananamaraṇasarvakleśapāpa(35)　生，死，一切の煩惱，惡
janapada(139 異土)　國土，國々
janayati(162 jan 生，出生)　產む
janānurūpāviparītadeśanā(20 不倒)　人人に應ずる無顚倒の敎示
janiya(53 jan)　生じて
jano vimūḍhaḥ svasukhārtham udyataḥ (21)　愚癡の人々は自の樂の爲に精勤する
janma(4 生，出生)　〃，出生
janmakāyam tyaktvā(70 捨於生身)　〃
janmāntardhi(43 法沒)　生と沒，生と死
janmaikam(95)　一生を
jalāśritaprāṇitanūpabhogya(49)　水に依住する生類には僅かな食物がある
jalpa(＝manojalpa 23, 24)　意言(意にて物言ふこと，考へること，想像分別すること＝saṁkalpa)
jalpamātra(24)　唯意言のみ
jalpāt(55)　言から
jalpād arthakhyānasya pradhāraṇāc cintāmayena tal lābhaḥ(56)　言から義の顯現するものを心に堅持するから，思所成の智によりてそれを得る
jalpānvayām arthagatiṁ paraiti(23 通達義類)　意言に隨順する義趣を了達する
-jaha(78 hā 斷)　捨，離
jātakabheda(43)　種々なる流轉の生によつて，生の差別によつて
jātasuprasāda(131)　善淨信心の生じたもの
jātismaratā(83 念生智)　生の憶念
jātya(2 生實)　本物の
jātyasya(12 眞成就)　本物の，純の
jinaputra(174 降伏子)　勝者子
jinaśāsanādara(32 於法令恭敬)　勝者の敎に對する尊重
jinasuta(87)　勝者の子，佛子＝jinātmaja(p. 16)
jināṅkura(174 降伏牙)　勝者の芽
jinātmaja(16)　勝者の子，佛子
jinādhāra(174 降伏持)　勝者持
jīyate(18 ji 於難得勝)　打勝たれる
jīvati(106 jīv)　生きる，育つ
jīvamjīvakasvararutaravita(80 命々鳥聲)　如命々鳥音聲響，命々鳥の鳴く聲の響の如き
jīvita(86)　生活，生命
jīvitapariṣkāra(86 供身？)　生活資具
jugupsana(173 譏嫌)　〃
jugupsin(173 訶)　譏嫌するもの，厭ひ嫌ふもの
jñāna(4 慧)　〃，智慧
jñānaparigraheṇa(108 智攝)　智に攝せられたる
jñānapravṛttikarma(40)　智慧の働きの業
jñānamārgāt suśuddhāt(35)　極淸淨の智の道であるから
jñānavaśitva(26 智力普自在)　智自在(十自在の一)
jñānavaśitvāt samupaiti śuddhaṁ kṣe-

caturvidhamayārtha(8)　四種より成る義，四種所成の義
caturvidham īryapathaṁ kalpayat(103 起四威儀)　四種の威儀路を起しつつ
caturvidhā(10 四種，四種差別)　四種づつ
caturviparyāsānugataṁ pudgalanimittam vibhāvayan yogī śrāvakabodhiṁ pratyekabodhiṁ vā labhate(169 若修行人但觀察人相，唯得聲聞緣覺菩提)　四顚倒に隨ふ人の相を明かにしつつある勤修者(瑜伽行者)は聲聞菩提を，或は獨覺の菩提を得る
ca drśyate 'tha ca(88 而見)　而も亦見られる
catuṣkārthanirdeśa(78)　四種の義の別釋，四義の細說
catuṣṭaya(109 四)　四より成る，四の
catuṣṭve ?(139)　四種に於ける
candrabimba(36 月像)　月の影
caya(73 集)　積集
cayānusmaraṇapritimanaskāra(73)　積集憶念の喜の作意
cayānusmraṇapritir māhārthyasya darśanaṁ(73 喜集及見義)　積集憶念の喜と及び大義の見と
cayāpārthād ayogāc ca āśrayatva asaṁbhavāt(151 續異及斷異，隨長亦隨依？)　積集無義の故に，又不合理の故に，所依たるに不可能なるが故に
cayena(151 長起，長養)　長養によりて，積集によりて，增滿によつて
carati(59 car 行)　行動する
carati bhaveṣu(27 行有)　諸有に於て行く，…作す
carijña(185 知行)　行を知るものよ
carita(83 行)　〃
caret(59 car 行)　行動するであらう
carmakāṇḍavat(63 如調箭皮)　皮と矢竹との如し
caryā(183 修行)　行
caryāvibhutvatas(103 行勢力)　行の威力から
calatva(135 動)　動搖性，動散
cale viparyāsasukhe bhavapriyaḥ(21 有愛動而倒)　有を愛するものは動にして顚倒せる樂に赴く(有愛は色無色界のもの)
cāragata(21 gam 但し gata には殆ど意味が無いと見ても可)　行，又は動作，の中に在る，行じつつある(vyāpāracara と言替へられる)
cāre(186 行)　行に於て
cikitsāvidyā(70 醫明)　醫方明，醫學藥學
cittacaritra(185 心行)　〃
cittacaitta(169 心法)　心と心法，心と心所(心所の譯は實は不可)
cittatathatā(88 心眞如)　〃，心卽眞如
cittatathataivātra cittam veditavyaṁ(88 說心眞如名之爲心)　ここにいふ心は心眞如に外ならぬと知るべし
cittana(136)　シナ譯の思に當る，citta に na のついたものに見えるが恐らくは cintana の誤植，思惟，知の意味であらう(cittana は辭書に無い)
cittaṁ tatpravedhaṁ na vikṣipet(92)　心がそれに通達して散亂しないであらう，それに通達した心が散亂しないであらう
cittaṁ niśrityāsvādanānumodābhinandanamanaskāraiḥ(118 依止思惟，由依味思惟，隨喜思惟，希望思惟故)　心に依止しては，味，隨喜，歡喜の作意によつてである
cittamātra(63 唯心)　〃，唯心のみ
cittamātrāt(147)　唯心のみから
cttamātrādhīnatva(152)　唯，心のみに據ること
cittam ālayavijñānaṁ(174 心謂阿梨耶識)　心は阿梨耶識である
cittam etat sadauṣṭhulyam ātmadarśanapāśitaṁ pravartate(67 我見熏習心，流轉於諸趣)　この心は麁重と共に我見に縛せられて流轉する，麁重と共なる此心は我見に縛せられて流轉する，又は，麁重と共であり，我見に縛せられたこの心が流轉する
cittam etad iti prativedhāt(93 通達唯心)　これが心であると通達するから
cittaṁ prakṛtiprabhāsvaraṁ(88 心性淨)　心は本性清淨である，心は自性清淨である
cittaṁ pragṛhṇāti(57)　心を捉へる，保持する，攝する，攝受する
cittaṁ samādadhāti(92 dhā 持住)　心を三昧に入れる
cittavara(17)　優れた心
cittavaśe prāpta(151 心得自在)　心を制することに達したる
cittavāsanataḥ(54)　心に熏習するからである
cittaviprayuktā dharmāḥ(64 不相應法)　心不相應法
cittasaṁbhava(13 心起)　心の起ること，心の生ずること
cittasthiti(20 令心住，心住)　心の安住
cittasya dhātau sthānaṁ ca sadasattārthapaśyanā(65)　心の界に於ける住と，有無の義を見ること，心を界に住せしめることと，有と無との義を觀ずること

cittasya nāstitvam upaiti(24 物無心亦無)　心の存しないことを了達する
cittasya saṁsthitiḥ(12 心住)　心の住すること
cittasyotpannasyotpannasya vaśe vartate(151 由心自在世間隨轉)　數〻起る心に制せられる
cittād anyad ālambanaṁ grāhyaṁ nāstity avagamya buddhyā(24 解心外無有所取物)　心より外の所緣たる所取は無いと覺によつて理解して
cittādhīnavṛttitāyāḥ(152)　其働きは心に據るものであるから，心に依る働きたるものであるから
citte jñānaṁ cetaḥparyāyābhijñā(25)　他心通慧，心に關してそれを知る智が心差別通慧である
cittotpādalakṣaṇa(13 發菩提心相)　發心の相
cittaudbilyakarin(80 心了)　心生勇銳，心の烈しい喜びを來すこと
cirakālaṁ(4 久)　長時に，久しき間
cirakṛta(29)　久しく爲した，久しく爲された
ciratareṇa(69 久久)　久しくして
cirabhāṣita(29)　久しく語つた
ciramapi(4 久)　久しく…も
cirād＝cireṇa(12 遲)　長時の後に，久しくして
citra(78 種々)　明かな，種〻な
citra(88)　畫，繪畫
citraṇā＝citraṇī(40)　畫くこと
citraṇī＝citraṇā(40 畫)　畫くこと
citrākārajñānakarma(40)　種〻なる行相の智慧の業
citrāvicitratā(39 種々)　種〻なると又は多樣でないと
cintāmaṇi(16 如意)　如意珠，如意寶珠
cintāmaṇiprakāśa(16 如如意)　如意珠

gābhīrya＝gāmbhīrya (13 深)　甚深
gāmbhīrya (5 甚深)　〃
gāmbhīryaprabhedadeśanā (40 如是甚深差別說者)　甚深の差別を說くことは，種々なる甚深を說くことは，甚深の種々なるものを說くことは
guṇa (2 功德)　〃，勝質，勝德
-guṇa (19 倍)　〃，重，度
guṇagaṇavṛddhi (9 功德聚增長)　功德の群の增長
guṇacatuṣṭaya (109 四德)　四より成る功德
guṇajñāta (28)　功德を知ること
guṇajñatāthāśusamādhilābhitā (28)　功德を知ること，又速かに三昧を得ること
guṇatatpara (172 勤德)　功德に獻身せるもの
guṇadarśanāt (92 見定功德)　功德を見るが故に
guṇanidhi (181 功德藏)　〃
guṇa-yukta (2, yuj 功德具足)　功德を具足して居る
guṇavat (2 具德人)　功德を有する，勝質を有する，德を有する
guṇavaty aguṇavatvagrāha (73 功德非德非有取)　有德に對して無德となす執
guṇavān deśa (86 勝土)　有德の場所
guṇasaṁdarśanayogena (102)　功德の示現に結合するによつて
guṇasamuccaya (180)　功德の積集
guṇāḍhya (16)　功德に富める
guṇādhika (119 德增)　功德によつて增上なる，功德によりて優れたる，又は，增上なる功德の，優れたる功德の
guṇābhinirhāra (58)　功德を引發すること，功德を遂げること，功德を完成すること
guṇārṇava (24 功德海)　〃
guṇārṇavapāraga (97 能究功德海)　功德海の彼岸に到つたる
guṇair adhikaṁ na samaṁ vā nyūnaṁ vā (119 德增者戒定慧具，不缺減故？)　功德によりて增上なるとは或は平等でもなく，或は減少でもないことをいふ
guṇair viśiṣṭaiḥ samudāgamaḥ (20 集德，由得神通等諸勝功德)　優れた諸功德によつて證得すること
guṇottāraṇatārthataḥ (11 功德度義故)　功德の起る義の故に，…義から
gurutva (48 尊重)　〃，尊崇
guhya (162 guh 密語)　隱すべきこと
guhyakādhipatinirdeśa (79 佛祕密經)　祕密主所說經
gūhayanti (162 guh 祕)　隱す
gṛhapatiratna (144 藏臣寶)　藏主寶，主藏臣
gṛhin (176 在家)　〃
gṛhipravrajitapakṣa (176 在家出家分)　〃，在家分と出家分
gṛhītvā (160 grah)　取つて，解しても
gṛhṇīyāt (91 grah 策起？)　捉へるであらう，引ぱるべし，引くべし，拔くべし
gṛhyante (153 grah)　解せられる，認められる
geya (91)　祇夜，應頌
gocara (3)　境，行境，所行境
gocarapariṇamana (21 廻向衆生)　境に廻向すること
gocarapariśuddhisūtra (21 行淸淨經)　〃
gotra (6 性)　種性，鑛石，性，種姓
gotraprabhedatā (10 類，品類)　種々なる種性のあること，種性差別相，種性の區別
gotraprabhedasaṁgraha (10 種性差別)　種性の差別を攝すること，種々なる種性の攝
gotrabheda (48 性別)　種性が各別である，種性の差別
gotrastha (166 性位)　種性住のもの，本性住のもの
gotrāgratva (11 種性得第一)　種性の優性，種性の第一たること
granthatas (83)　經文から，經典から
grahaṇa (28 受取)　〃，受持，取ること
grahaṇa (98)　語
grahaṇadhāraṇaprativedha (28 一切受持)　受と持と通達
grahaṇadhāraṇasāmarthyaviśeṣaṇāt (147)　受持し總持する殊勝の能力の故である
grahataḥ (66)　取から
grāha (61 取執)　取ること，取，執著，執
grāhaka (116 攝取)　〃，攝
grāhakabhūta (55 能取自性身)　能取，能取たるもの
grāhyagrāhakabhāvataḥ (148)　所取能取たるものとして，所取能取の關係から
grāhayitva (27 grah)　得しめて
grāhika (50 正受)　能取
grāhyabhūta (50 似受)　所取たるもの
grāhyagrāhagrāhakagrāha (94)　所取の執と能取の執
grāhyagrāhakatvena (59)　所取能取として
grāhyabhūta (55 所取自性身？)　所取，所取たるもの
grāhyavikṣepa (93 所執亂)　所取の散亂

GH

ghaṭanāt (5 由極勤方便)　勤勵があるから，努力から
ghaṭamāna (4 ghaṭ 行)　精勤しつつ，努力しつつ
ghaṭita (2 ghaṭ 成器)　器に作られたる
ghaṇṭā (154 鐘)　鐘，鈴，健吒(ghaṇṭhā は ghaṇṭā の誤植)
ghana (72)　純なる，單なる，深い，充ちたる
ghanasukhaduḥkhaśamopalabdhaye (13)　樂と苦との純なる寂靜を得るが爲に
ghoṣa (16)　響，音，聲音
ghoṣācāra (50 聽法？)　聲行

C

ca (155 若)　若し…ならば
cakra (86 輪)　〃
cakravartyādibhūta (141 轉輪王等)　轉輪王等となつた
cakrādisaptaratnasādharmya (184)　輪等の七寶との相似，又は，共通性
cakṣurādīndriyagocare vicitre (21)　眼等の根の種々なる境に於て
caṅkramaṇa (152 威儀)　經行，散步，逍遙
caturaṅgabalakāya (145)　四支の軍隊
caturguṇabrahmacaryavada (81)　四種の功德ある梵行の說
caturṇām uttaraṁ kṣetraṁ paraṁ, tadabhāve pañcamaṁ (112 應知此中以具德勝人爲無上)　四種の中では順次に後の田が價値が優つて居る，それ等が無いときに第五である
caturtham aśaikṣam atra phalam (160)　第四の無學の果が此處では果である

kṣayitvāt (77)　使ひ盡くすから
kṣayin (111 盡)　〃，滅盡
kṣānta (108 kṣam 耐)　忍耐された，忍せられた
kṣānti (11 大忍)　忍
kṣāntipāramitāparipūryānukūlyavṛttitā (32)　忍辱波羅蜜を圓滿するに順ずる實修
kṣāntiḥ paramaṁ tapa iti (105)　忍は最上の苦行である，と
kṣāntyavasthā (93 忍位)　〃
kṣāranadyāṁ (93 灰河經中)　灰河經に於て
kṣipati (8 kṣip 輕，謗)　誹謗する
kṣipate (26 kṣip 擲)　移す，送る，投げる
kṣipta (152 kṣip 放)　射られた，投げられた
kṣiptasyeṣu (152 放箭擲石)　射られた矢
kṣipraprāpti (146 速果)　速かな到達
kṣiprābhijñatvam ete (51 速諸通)　速かな神通に至る
kṣipram (93 速)　〃かに
kṣiprābhijñatotpādanāt (144)　速疾の通慧が生ぜらるるが故に
kṣiprābhisaṁbodha (147)　速疾の現等覺，速疾の等正覺
kṣīṇāsrava (82 漏盡身)　その漏の盡きたるもの，漏盡のもの
kṣīra (150 乳)　〃，牛乳
kṣudrānukṣudrāpatti (55 細罪)　小隨小の犯罪 (anukṣudra　隨小は具體的には何を指すか未詳，然し kṣudra と併用しても意味に大なる變化のないことは細とのみ譯されるので判る)
kṣudhārta (2 ār)　饑餓に苦しめられたる
kṣudhitaka (52 餓)　飢ゑたる
kṣubdhavimanaśobhān saṁkampayaṁs trāsayate (26 動殿代魔怖)　震へる華美な天宮を震動せしめつつ怖れさす
kṣetrasya ca viśuddhyarthaṁ (141 淨土)　又刹土の純淨の爲に，國土の清淨の爲に
kṣetrasya śuddhasya (120 淨土)　清淨なる國土の
kṣetrapariśuddhi (26)　國土清淨，國土を清淨にすること
kṣetraśuddhau (41 刹土清淨)　國土の清淨に於て

KH

khaṇḍana (164 犯)　破ること
kharatva (63)　硬性
khidyate (32 khid 退，退轉)　疲倦する，疲れる，倦む
khinna (78 khid 退)　疲倦な，退の
kheda (81 厭退)　〃，疲倦
khedavān (5 -vat 退屈)　疲倦を有する，倦退を有する，つかれを有する，いやきを有する
khyāti (50 khyā)　顯現する
khyānti (61 khyā 顯現)　〃する，現はれる，見える
khyāt sarvatas (170 普見)　一切時に顯現する
khyāna (170)　顯現すること

G

-ga (35)　陷れる，行く，行ける
gagaṇagañja (119 虛空藏)　〃(gañja は財寶を蓄へ置く室)
gaganagarbha (42 虛空藏)　〃
gaṅgānadī (102 恆河)　ガンガー河
gaṅgānadīvālukasama (162 滿恆河沙數)　ガンガー河の沙數に等しい
gaṇa (9 衆)　群
gaṇakarṣa (186 攝衆)　衆を引くものよ
gaṇanayā (91)　計算によりて
gaṇaparigraha (45 徒衆)　衆を攝すること，徒衆の攝受
gaṇaṁ prapācayat (32)　衆を成熟せしめるので，衆を成熟せしめつつ
gaṇasya karṣaṇatva (176 徒衆)　會衆を率ゐること
gaṇitatulitamīmāṁsita (91)　計算し秤量し審察せられたる
gata (33 gam) 所有，在る，存する
gataspṛha (120 離於貪著)　貪著を離れたる
gatārtha (39)　意味は解せられた (gata は解せられたであるが，實際は解せられる，解せられ易いの方が適切であらう，以下凡て解し易い，易解，となす)
gati (54 解)　通ずること
gatir nāma kācit kriyā (152)　行くといふ一種の作用は
gatirūpavibhāvane (42 所去皆無擁？)　去來と形色との顯はれに於て
gatyabhāvāt sthitāyogāc caramatva asaṁbhāvāt (151)　行くこと無きが故に，住が不合理なるが故に，最後に於て不可能なるが故に
gandharva (16 泉？)　古く天の空氣や水の在る部分を指すから天水の在る所を考へて泉といふか
gandharvamadhuraghoṣa (16 美樂)　樂神の美しい音，乾闥婆の甘い音聲
gabhīra (7 深)　甚深義＝gambhīra
gabhīrārthavid (7)　甚深義を知る
gamika (78 令解)　〃，說明的
gambhīra (2 深廣)　深遠な，甚深な
gambhīrasaṁdhinirmokṣa, -mokṣaṇa (175, 176 釋義)　甚深の深密の解說
gambhīryaudāryasaṁśrava (135 聞深)　甚深と廣大との義を聞くこと
gamya (157 gam 所取)　通ずるもの，見られる，知られる
gamyate (150 gam)　知られる
garbhabālakumārayuvamadhyamavṛddhāvasthāṣu (151 成胎，嬰兒，童子，少壯，中年，老位等生)　胎兒，幼童，童子，青年，中年，老年の位に於てである
garbhānubodhāt (175 胎藏)　胎の隨覺の故に
garbhāvakramaṇa (61 入胎)　〃，母胎に降下すること (兜率天から白象に乘つて)
garbhāvakramaṇajanmābhiniṣkramaṇābhisaṁbodhyādayaḥ (61 入胎，出生，踰城出家，成正覺)　入胎と出生と出家と正等覺と等
garbheṇa dhārayati (162 懷胎)　胎によりて持する，胎にて懷姙する
gahanatva (6 險處)　隱密，深遠
gahvara (24)　深重な，貫き難い，測知し難い，深坑
gahvaraka (111)　深處，洞穴
gahvaradoṣasaṁcaya (24 過聚體？)　深重な過失の積集，貫き難き過失の積集
gāḍha (95 gāh 堅，深)　堅い，强い，深い
gāḍhaṁ (127 gāh)　深く，强く
gāḍhaṁ viṣṭa (50 極入)　堅固に入りたる
gāḍhaprasanna cittasya (118 深起善淨心)　深き淨心あるものの
gāḍhāyatabandhena (95 他縛卽堅廣)　堅くて大なる縛によつて
gāthā (57 伽陀)　頌，偈

悲愍によりて卑下の生が依られる
kṛpā＝karuṇā(47 大悲)　悲愍，悲
kṛpā(29 哀憐)　哀愍
kṛpātman(18 大悲爲性)　悲愍を性となすもの
kṛpālu(174 有悲)　悲愍，悲愍者
kṛpāśaya(9 意悲)　悲愍と意樂と，悲愍の意樂
kṛpāsneha(127 悲愛)　悲愍親愛
kṛpālusaddharmamahāparigraha (28 受法)　悲愍の正法の大攝受
kṛpāluḥ kṣamitavyaṁ kiṁ kutas tasya (110 於誰邊起忍，於何事起忍)　彼には何を何故に忍ばねばならぬか(後半は寫本に據る)
kecit(9 或)　或人々
kenāpi(3)　誰かによつても
kevala(6 獨)　獨り，啻に，唯單に，單なる…のみの，其まま，全體
kolasamanatā(85 猶如栰(筏))　筏と等しいこと
kolopamatā(85 猶如栰喩)　筏を喩とするもの，筏の如きこと
kovida(163 精巧)　巧な，經驗のある，よく知れる
koṣasthāna(16 所聚)　寶の庫，寶庫の場所
koṣṭha(16 倉)　貯所，內室
koṣṭhāgāra(16 庫倉)　寶庫
kaukṛtya(83 悔)　〃，後悔，惡作
kaukṛtyāyate(72 kaukṛtya 生慚愧)　後悔する
kauśala(147)　善巧
kauśalam etya(120 解)　善巧に至つて
kauśalya(15 巧，巧便)　善巧
kauśalyayukta(9 yuj)　善巧具足せる
kauṣīdya(19)　懈怠
krama(58 次第)　〃，順次
kramadarśanāt(175 隨次現)　順序に隨うて現ずること，次第現
krameṇa(70 漸漸)　漸次に
krameṇottarottara pācanā utpācanā (30 漸成熟，令次第增長故)　漸成熟は漸次に向上する成熟である
kriyā(37 業)　〃，所作
kriyākheda(99 不退)　所作に疲厭しないこと
krīḍati(181 krīḍ 戲)　遊戲する
krīḍārati(17 戲喜)　遊戲の樂しみ
kruddhi(101 瞋)　〃，怒
krodha(101 忿怒)　〃
krodhābhibhūtyāṁ(172 降瞋)　瞋の降伏に於ける
kliṣṭa(29 不善)　染汚せられた
kliṣṭakuśala(63)　染と善と
kliṣṭakuśalāvastha(64 染位…淨位)　染汚と善淨との位
kliṣṭavitarkavarjanā(28 離不善覺起無間道)　染汚せられた尋思を除くこと
kliṣṭasānukrośa(184 染汚諸衆生悲者)　染汚せられた者に對して悲有るものよ
kliṣṭahetutaḥ(154 染汚因故)　染汚の因の故に
kliṣṭā satkāyadṛṣṭiḥ(95)　染汚せれた有身見である，染汚せられたる身見
kleśa(3 煩惱)　〃
kleśakarmajanmasaṁkleśa(34)　雜染の煩惱と業と生，惑業生の染汚
kleśakarmajanmasvabhāvaiḥ(19)　煩惱業生を自性とするによつて
kleśajñeyavṛtīnāṁ satatam anugataṁ bījam utkṛṣṭakālaṁ, yasminn astaṁ prayātaṁ bhavati(35 二障種子恆隨，彼滅)　いつにても至極の長時間常に隨逐せる煩惱所知の二障の種子が滅沒に至り已つたときに
kleśata eva kleśaniḥsaraṇa(87 煩惱出煩惱)　煩惱から煩惱の出離すること
kleśanairmalyaprāptyāśraya(12 一切煩惱障智障得淸淨依止)　煩惱の無垢たるに達するの所依
kleśaparidāhaśāntyā(104 能止息一切煩惱火熱)　煩惱の燃燒の寂靜したことによりて
kleśaprahāraka(184 能害彼惑)　煩惱を除くものよ
kaleśaprācurya(55 煩惱疾利)　煩惱の夥多
kleśavinayasaṁyuktasya tayoḥ prativedhāt(54 由勤方便煩惱滅故)　煩惱の調伏に精勤したるものは此二に通達するが故に
kleśavinodanāya(28 離惡？)　煩惱滅除の爲に
kleśavyādhipraśamana(75 滅煩惱病)　煩惱病の息滅
kleśātura(89 煩惱病)　煩惱といふ病，煩惱卽病
kleśānukūladharmaprayogatas(132 勤行)　煩惱に隨順する法に於て加行することから
kleśabāhulya(12 煩惱多行)　煩惱の夥多
kleśābhyāsa(11 習惑)　煩惱の串習，惑の修習
kleśāvaraṇasuviśuddha(58 惑障極淸淨)　〃
kleśāvaśagatva(98 惑不染？)　煩惱の支配下に在らざること
kleśāsv avaśasya jagataḥ svavaśe sthāpanāt(27)　諸の煩惱に於て不自在な世人を自らの自在に住せしめるから
kleśena ca susaṁkliṣṭā(82 爲煩惱所惱)　煩惱によりて善く雜染せられたる
kleśair bhavitavyam(160)　諸煩惱があらねばならぬ，…起るに相違ない
kvacid api vicitrām janacarīṁ(43)　或場合には又種々なる生の行を
kvacid eva(10)　何れかの，或る一定の
kvacid dharmyaṁ cakraṁ bahumukhaśatair darśayati(43)　或場合には百の多門によつて法の輪を示す
kvāthyamāna(150 kvath 煎)　沸騰されつつある
kṣaṇa(86 無難)　akṣaṇa が八無暇又は八難處をいふの反對を kṣaṇa となす，然し kṣaṇa としては八はあまり明確にはいはれない，佛世に生れるをいふ程のみ．暇は發心や修行の機會を指すのであらう
kṣaṇarahita(133)　暇處を離れたる，暇處を捨てたる
kṣaṇabhaṅgārtha(149 刹那刹那壞)　刹那滅の義
kṣaṇikatva(149 刹那壞義)　刹那滅たること
kṣaṇopapatti(86 無難)　暇處に生れること
kṣati(8 大過)　罪過，損害，滅亡
kṣama(20 忍，能忍)　忍耐，忍辱
-kṣama(13 忍)　適する，堪へる
kṣamaṇa(118)　忍ぶこと，耐へること
kṣamā(29 忍)　〃，忍辱
kṣamā vipratipattiṣu(163 忍害)　諸の違逆に於て忍ぶこと
kṣamin(105)　忍，忍する
kṣayaḥ kruddher iti kṣāntis tayā krodhakṣayāt(101 能破瞋恚故名忍，忍破瞋恚能令盡故)　それによつて瞋が滅するので瞋の忍，瞋の滅とはその忍によつて瞋が滅するからである

欲界の人々
kāmin (52 習欲人)　有欲者
kāmiṣu satveṣu (122 欲界)　有欲界の衆生の中に
kāyaprahlādanakarin (80 身猗)　適身，身を悅ばしめることをなす
kāyabheda (45)　身の差別，身の各別
kāyavākcittanirmāṇaprayogopāyakarmakaḥ (44 發起身口心，三業恆時化)　身口意の變化身の加行方便の業は
kāyavākcittamaya (98 身口心自性)　身口心所成の
kāyajīvitāpekṣayā (110 戀身命故)　身と命とを顧みることによつて
kāyācintye (135 置彼佛身？)　不可思議な身に於て
kāyaduṣcarita (110 身三惡行)　身邪行
kāyasya ca bhedāt (105 身壞)　そして身の壞して後，死後
kārakāṅkṣikin (95 不求報)　報恩を作すを望むもの
kāraṇa (3)　因
kāraṇatva (6)　因たること，因たるもの
kāraṇe sati (6)　因があるときに
kāritra (152)　用，作，作用，働き
kāruṇika (124 大悲)　悲あるもの，悲者
kāruṇikatva (124)　悲を有すること
kāruṇya (11 大悲)　悲
kāruṇyatas (1 慈悲爲性)　悲から，悲の故に
kāruṇyād dharmasaṁśrayāt (105 大悲及法依)　悲からと，法に依ることとからと(大悲は嚴格にいへば佛に限る，菩薩のは悲)
kāryakāraṇayukti (168 因果道理)　〃，果因道理
kāla (4 時節)　時間
kālajñātā (120 知時)　時を知ること
kālaṁ karoti (105 臨終)　死する
kālāntara (82 別時)　〃
kālāntaraprayojya (119 欲後時供養)　他の時に勤修すべき
kālāntareṇa (5 有時，83 此由別時得生)　他時には，後時には，別時によつてである
kāluṣya (88 垢)　塵垢
kālena kālaṁ (86 應時)　常に，引續いて
kāleno'ttamakalpayānamahatā (33 一切時已度者，由具足經長時大劫阿僧祇故？)　最後の劫と最上の乘との爲に大なる時期を經過して
kāṣṭhaloṣṭādika (59 木石等)　木片土塊等のもの
kiṁ kāraṇaṁ (149)　何の因で，何で，何故に，何の故ぞ
kiṁcit (3)　少分，幾分，少しく，少しも
kiṁcitka (110)　僅かな，少物の
kiṁcitkālam (150 少時)　少時間，僅かの時間
kiṁcit sāmarthyaṁ (157 少力)　何等かの能力
kiṁ punar (112 何況)　況んや…をや
kinnarasaṁgītighoṣa (80 緊那羅聲)　キンナラの歌ふ聲音の如き (gandharvasaṁgītighoṣa となすもある，gandharva は天上で音樂を奏する天人)
kiyantaṁ kālaṁ (6 kiyat)　幾何の長い時間か，幾何の時間か
kiraṇa (111 光)　〃，光線
kīrṇa (86 kṛ)　投散らされた，滿たされた，人の集まつた
kīrṇā vipakṣair (50 kṝ 間)　對治と混ぜらるべき，對治に散ぜられたる

kukṛta (72 邪作)　惡しく作された
kukṣi (175)　子宮，胎
kuceṣṭita (162 ceṣṭ 惡行)　〃，惡いたくらみ，惡い動き
kutaḥ (126 云何，何況)　〃，何から
kutaḥ kāraṇāt (8)　何の因から，何の因の故に
kudṛṣṭi (124 僻見)　惡見
kupita (105 kup 瞋)　〃，怒つた
kumati (180 惡慧)　惡智，惡慧
kumitratva (11 惡友)　〃，惡友たること
kulodaya (20 生家)　家に生れること
kulodayādipratipattiḥ, na hy adūragatayā prapattyā kulodayādayaḥ pareṣāṁ kartuṁ śakyāḥ (20 隨順生家等，非不遠去令他能作故)　家族に生れる等の行で，不遠去の行によりては家族中に生れること等は他人に對しては作すを得ないから
kuśala (11 善根)　善
kuśala iti tadanyakṛtyotsāhavyudāsārthaṁ (105 遮餘業中勇猛故言善)　善といふはそれより他の所作の努力を排除する意味
kuśaladharma (14)　善法
kuśaladharmayojanāt (102 建立善法由此力故)　善法と結合するから
kuśaladharmasaṁgrāhakaśīla (108 律善法戒)　〃(三聚淨戒の第二)
kuśalapratiṣṭhāpana (31 安立善根)　善に住せしめること
kuśalamūla (11 善根)　〃
kuśalamūlopacaya (30 善根聚)　善根の積集
kuśalasyārthe (32)　善の爲に
kuśalācaya (33)　善の積集
kuśīda (131)　怠慢
kuhanā (165 詐相)　譌詐
kūrma (52 龜)　〃
kṛcchra (77 難)　困難な，難い，苦しい
kṛcchralabdhān asarān (77 難得復不堅)　諸の得難きものを，不堅なるものを，諸の得難く不堅なるものを
kṛcchrāvāpyāṁ (42 難得)　達し難きを
kṛtajñatā (164 知作卽報恩)　報恩
kṛtapuṇyatā (86 宿植善根)　功德の作されたこと，作された功德
kṛtasmitamukha (137 舒顏)　笑顏を作し
kṛti (106 ＝kṛtya)　所作
kṛtya (39)　作事
kṛtyakriyābhedataḥ (47)　種々なる所作を作すことから，所作を作す差別の故に
kṛtyaniṣpattibhir bhedair (47)　所作の完成により，差別により
kṛtyanidarśana (37)　所作の現はれ
kṛtyānūṣṭhāna＝kṛtyānuṣṭhānajñāna (46 作事智)　〃，成所作智
kṛtyānuṣṭhānatājñāna (47 事智)　成所作智
kṛtyapṛthaktvakārya (49 用少)　水の所作も各別に作され
kṛtyasiddhi (166 定業)　所作の成立，所作の成就
kṛtrima (76 作客)　假作
kṛtsna (83)　完全な，全體の
kṛtsnadauṣṭhulyakāya (92 諸習)　全體の麁重身
kṛtsnāṁ bodhiṁ (43)　一切の菩提を，全體の菩提を
kṛtsnāyatana (27 遍，遍入)　遍處，遍入，一切入
kṛpaṇa (122)　貧者
kṛpaṇakṛpā (130 慳！)　貧賤に對する悲愍
kṛpayā hīnopapattiḥ śritaḥ (108 下處生)

ものなるが故に
aurabhrikādayo duścaritaikāntika (124) 屠羊者等一向惡行のもの
auṣadha (2 藥) 〃
auṣadhopamatva (2) 藥の譬

K

kaccid (154) か，どうか
kaṭuka (2 苦) 辛い
katividham (1 以幾義) 幾種の
kathaṁ (2) 如何に
kathaṁ kṛtvā (154) 如何になして(恐らくかく譯すのであらう)
kathaṁcit (87) 少しも
kathaṁ nāma (23 云何) どうして
kathaṁ nopalabdho bhavati (155) 如何にして可得が無いか
kathāyāṁ (81) 說話に於ける，語ることに於て
kathita (84 kath) 說いた，說話
kathyate (6 kath) 說かれる，語られる
kathamiva (127 云何) 云何ぞ
kampate (136 kamp 動，退) 動搖する
kampana (26 動地) 地の震動
kampanajvalanādiprakāra (26 動地放光等事) 震動，光明等の種類又は方法
kampanā (26 動) 震動
kampanodvejana (26 動…驚怖) 震動驚怖
karuṇātmakatva (18 以大悲爲體) 悲を本質となすこと，悲を性となすもの
karuṇāpāragamanāt (35 度大悲海岸) 悲の彼岸に到れるが故に
karuṇāmūla (14 以大悲爲根) 悲を根となすもの
karuṇāyate (35 karuṇa) 悲愍する，悲を起す，悲を垂れる
karuṇāyanāt (131 起悲故) 悲を起すから(karunāya nom. verb のもとを名詞として -na を附した形を abl. とした)
karuṇāyamāna (12 哀愍) 悲愍しつつ
karuṇāvṛddhigamana (22/增悲) 悲が增長するに至ること
karṇasukha (80 悅目) 耳に樂しい，耳を悅ばす
karma (132 作業) 業
karmakṛta (153 業力所作) 業の所作，業によつて作されたるもの
karmajanmottamanirmitair (26) 業と生と最上との變化によつて
karmaṇya (12 調柔) 〃，堪任性
karmaṇyatā (57 調柔，92 輭心) 堪任性，柔輭性，或事をなすに適して居ること，又は，堪へること
karmaṇy abhijñākarmaṇām avyāghātāt (66 有業自在，由諸通業無障礙故) 業に於ての自在がある，通慧の業の無障礙の故に，業に於ての自在，神通の諸業の無障礙の故に
karmapatha (31 業道) 〃
karma prathamavastuni pratipattiḥ parebhyaś ca tatsamākhyānaṁ (136 爲自修及爲他說) 業とは第一の事に於ては自ら行ずること，及び他の人々にそれを說述することである(第五まで續く)
karmabhedena (114) prakārabhedena の前に補ふ
karmavipākasaṁmūḍhatva (124 不識業報) 業の異熟に無知なること
karṣa (186 攝) 引攝，引くこと
kalaviṅkasvararutaravita (80 迦陵頻伽聲) カラビンカ鳥の鳴く聲の如き
kalā (80) 和雅，巧みな
kalpa (9) 劫，劫波，(無限の年數の一

單位)
kalpa (59 分別＝abhūtaparikalpa, 144 分別) 〃，(思)思惟(非實の分別)
kalpanāmātra (24 念唯分別) 唯分別のみ
kalpayat (103 kḷp 起) 〃しつつ，行ひつつ
kalpayati (145 kḷp) 營む
kalpayitvā (91 kḷp) 考へて，決定して
kalpasahasrakoṭibhiḥ (32 於億百千劫) 千コーティの劫の間(koṭi が億，又は億百と譯さる．百萬をいふが，甚だ多いの意味)
kalpāsaṁkhyeyaniryāta (90 行盡一僧祇) 不可數量の劫を出でたる，第一の一阿僧祇劫を出て終つたる
kalpikavastu (130 如法財) 許されたる事物
kalpita (169 分別性) 〃，分別
kalpair ameyagair (92 欲經無量劫數) 無量に及ぶ劫の間
kalpair vikalpair hata (180) 分別妄分別を無くしたる
kalyacitta (90 軟心) ことに應ずる心，身構ひせる心，準備せる心
kalyāṇamitrajanitāyāṁ avipraṇāśaḥ (51～52 不壞者讚友力信) 不失壞は善友から生じたものに關してである
kalyāṇamitrasevā (119 親近善知識) 善友に親近すること(善知識は友のこと)
kalyāṇamitrānurodhāt (15 得善友隨順故) 善友に從ふから
kalyāṇasuvarṇasaṁnibha (16 如淨金) 美しい金に相似し
kalyāṇāśayena (102 善淨心) 善意樂によりて
kaścit (4) 少分の
kaṣāya (39 濁) 〃
kaṣṭha (156 可燒木) 木片(kāṣṭa は誤植)
kasyacit (3) 何人かに，或人に
kasyacit syāt (as 3) 或人に考へられるかも知れぬ，或人がいふであらう
kasyacid asthānam (150) 或ものに不適當なこと，或ものに非理は，或ものに非處は(處はコトハリ)
kā kathā (36 況，何況) 言ふまでもない，況んや—をや
kāṅkṣāchida (188 諸所疑能除) 疑を斷ずるものよ
kāṇḍa (63 箭) 矢竹
kā draviṇe 'vare kathā (113 何泥餘財物) 下劣な物に關して何をか言はんや
kāpotī (88 鴿，〃鳥) 鳩，牝鳩
kāma (69 欲界，欲塵) 欲，欲塵
kāmacārataḥ (170 以得自在故) 欲のままの行であるから
kāmacārin (59 依自在行) 思ひのままに行ずるもの
kāmatas (59 自在) 欲するがままに，自由に
kāmatā (94 欲) 欲すること，欲性
kāmaparibhoga (175 受欲) 欲の受用，五欲の受用
kāmaṁ (130) 欲する如くに，喜んで，自由に
kāmaṁ…tu (7) たとひ…然し，ともかく…然し
kamarāga (123 欲貪) 〃
kāmasukhabhokta (124 樂著欲染) 欲樂に耽つた，耽るもの
kāmasukhallikā (53 樂行) 欲樂(-llikā は -likā ともあるが，解釋されない，俗語に suhellī, suhallī とあり，sukha と同じともいふ
kāmijana (21 習欲) 欲を有する人々，

ekatābhirāma (27 一向樂)　唯一の愛樂
ekatvapṛthaktvābhyām asthitatvāt (40 一多不住故)　一性と異性との二に於て住しないから，一と異とに住しないから，一たると異たるとに住しないから
ekatvānyatvatas (154 一異)　一性と異性とから，一性として，又，異性として
ekatvābhāvāt (22 無一實體故)　一性が無いからである
ekaputrakeṣv api guṇavatsv api (123)　有德の一子に對してすらも
ekamukta (39 muc)　一回放たれた
ekaṁ yamasvabhāvaṁ, dve udyamasvabhāve (108 初戒以禁防爲體，後二戒以勤勇爲體)　初一は制御を自性となすもの，後二は精勤を自性となすものである
ekayānatā (68 一乘)　〃，一乘たること，一乘性
ekarasa (9 一味)　〃，同一味である
ekasvaranaikaśabdavijñaptipratyupasthāpanatva (80 一音無量聲說法)　一音によつて多音の詮はす所を現前せしめること
ekāṁśa (146 一分)　〃，一向
ekāntāt sādhitam (153)　一向に成立させられた
ekāyana (17)　一乘道，一道
ekāyanapathaśliṣṭha (177)　一乘道に結合したる，一乘道を執つたる
ekāyanapathaśleṣa (182 雜道隣一道？)　一乘道に雜はること
ekāyanamārgatva (117)　唯一の進む道たるもの
ekāyanākaraṇa (35)　唯一道となさしめる，唯一道となすこと，唯一の目的に導く (ayana は道であるが，元來は行くことを指し，又 ekāyana の次に mārga が用ひられるから，然らば唯一目的に到る道となる)
ekārāmatva (27 一向樂)　唯一の愛樂
eka vīryapāramitā veditavyā (100)　一とは精進波羅蜜であると知るべし
ekībhāva (166 一體同如)　同一性
ekībhāvagamatvāc ca sarvabuddhajinātmajaiḥ (166 諸佛及佛子，一體同如故)　又，一切諸佛と勝者の諸子とによつて同一性に達せるが故に
ekaikasya dharmasya rūpyarūpisanidarśanādiprabhedena bahulanirdeśāt (54 於一一，法色小色可見不可見等差別無量說故)　一一の法の有色，無色，有見等の差別によりて屢〻細說するから
ekaikasyārthasya yāvanto nāmaparyāyāḥ (138 於義中所有名門差別？)　一一の義のあらゆる名の異門である
ekotīkaroti (92 kṛ 性住)　心集注する (ekotī は解釋に異說があるeka-ūti, パーリは ekodi, ūti は布の一片，凡て一片であらうとなす，一趣，一體とシナ譯にはある，web となす說もある，全體は ekāgratā と同じ)
eti (7 i)　行く，陷る，成る
eti vyayam ataḥ (43)　これが爲に，消滅に至る，この故に消滅する
eta eva pañca nirlikhitavipakṣamanaskarā baleṣu (57 如是五修能治五障卽名爲力)　此同じ五種が又所對治の削消せられたる作意の五力に於けるものである
etena yathā tatvaṁ parijñāya mokṣāya saṁvartate yathābhūtaṁ parijñānaṁ/tat paridīpitaṁ (169)　これによつて，眞實を遍知する爲に，解脫の爲に，如何に如實の遍智が生ずるかのそれが明かにせられて居る
ete visaṁyoganiṣyandaphale (134)　此二は離繫と等流との二の果である
evaṁ (3)　此の如く
evaṁjātīyaka (10)　此の如き種類の
evaṁ nirvāṇe pratiṣṭhito bhavati na saṁsāre yathākramaṁ (125 是故菩薩得不住涅槃，亦不住生死)　此の如くに，順次に涅槃に於ても輪廻に於ても住して居ない (これが無住處涅槃と稱せられるもので，涅槃を得ても，衆生濟度の爲に輪廻界に入りて涅槃にのみは住まらず，勿論輪廻界のみに住まつては悟に入らないから，輪廻には住しない，かく住まる處がない點で無住處涅槃といはれる，これが大乘菩薩の涅槃である)
evaṁ parijñāya (104 jñā)　此の如く遍知して
evaṁ bhavati (43 gen. evaṁ bhavati · iti)　(其人に) といふ此の如き念が起る，(其人に) 此の如くに考が起る，(其人が) かく考へる，思ひ出す
eṣa triṣu gotrastheṣu (20)　これが三種の種性住に於ける
eṣaṇā (72 勸請)　求めること，請ふこと
eṣaṇābhimatā (75)　求めることと考へられる
eṣika (50 求義)　求むるもの
eṣu ṣaṭsv artheṣu sarvatra lokadhātau saprabhedeṣu padāparokam avyāhatam jñānaṁ (25 如此六智於諸世界六義差別遍知無礙勇猛自在)　これ等の六義に關する智は一切處の世界に於て區別を有するものについて，特質に對する明晰で無障礙である
eṣeta (91 eṣ 有求)　求める

AI

aikāntika (12 一向)　一向的，絕對的，-ṁ (150 一向決定) 一向である
aikāntikatva (60 一向定說)　一向，一向たること，絕對なこと
aikyatas (131 和合)　合一から
aiśvarya (75 自在)　〃

AU

autsukya (72 勇猛)　愛勤，勤，喜，熱心に努めること
audārakaṁ hi dānaṁ supraveśatvāt sukaratvāc ca (101 麁易入易作故)　麁なる施は入り易いから，又作し易いから
audārika (121 麁)　〃の，麁大な
audārikasūkṣumaprabheda (9 麁細差別)　廣大と微細との差別
audārikī (119 麁)　〃的
audārya (5 廣大)　廣勝
audārya (15 願位？)　高貴
audāryānāmiṣatvaṁ ca mahārthākṣayatāpi ca (109 廣大及無求，最勝與無盡)　廣大なと，無求と，また大義と，無盡たるとが
auddhatya (57 掉動)　掉擧，輕擧緩慢
auddhatya (142 掉)　掉擧
audbilya (80 -vil- とも -bil- ともなす，心了？)　烈しい喜び，喜び
aupanibandhika (143 繫縛)　〃，(シナ譯では，捨に當る)
aupamya (10 譬)　譬喩
aupamyatas (33 譬喩)　〃から
aupayika (79)　目的に適うた，有用な
aupalambhikatvāt (49)　所得心がある

ひられ終つた因たるもの
upabhoga(141 受)　受用
upabhogaviśeṣa(130 受用差別)　〃，勝れた受用
upabhogya(49 bhuj)　受用せらるべき，受用せられる物，食物
upabhojya(98 bhuj)　所受用，受用せらるべきもの
-upama(12 如)　〃，似ている，譬がある
upama(12 譬)　譬喩
upamātrayeṇa(136)　三の譬喩によつて
upamiśra(119)　和合
uparipāta(16)　落ちかかる
uparyupari(92)　益〻，繰返し，引續いて
upalabdher dvayeva(155 有二可得故)　二として可得の故に，二によつて可得であるから
upalabdhir hi nāma buddhyā pratipattiḥ (155)　何となれば，可得といふのは覺によつて確認することであるから
upalabhate(155 可得)　感覺する
upalabhyate(10 labh, 可得)　得る，認められる，可得である
upalabhyamāna(155)　可得でありながら，感覺せられつつ
upalambha(66 得)　可得
upalambhānupalambha(58 不可得不可得，始めの不は衍字か)　可得の不可得
upayāti(43 yā)　至る，達する
upaśamana(119 斷？)　寂滅
upaśānta(119 śam 除)　和平なる，寂靜せる
upaśāmyati(105 śam 息)　靜まる
upaśliṣṭatva(182)　相雜はること
upasarpanti(129 sṛp 來)　近寄る，近く來る
upasaṁvitti(12 vid)　感ずること，知ること
upasaṁharati(163 hṛ)　持ち來す
upasaṁhāra(72 現前？)　引攝，引くこと，持來すこと，合，供給
upasaṁhita(119 dhā 說)　關說した，伴うた，關係した，結合した
upasaṁpādayati(164 pad 與其受戒)　受戒せしめる，具足戒を受けしめる，upasaṁpada 卽ち，出家の戒を授け受ける儀，を受けしめる
upastambha(4 住持)　支持
upastambhatā(102 因)　〃，支へ，支持
upastambhikatva(80 持攝)　持すること，支へるもの
upasthāpayati(92 sthā 轉住)　〃せしめる，現住せしめる
upahanti(132 han 惱)　惱ます，害する
upāttatvādhipatvāc(149 執持與增上)　執受性と增上性との故に
upādāna(19 攝)　取ること
upādāya(17 dā)　基づいて，關して，と考へて，となして，として，よりて
upādhyāya(164 和尙)　〃，和上，親敎師，先生
upāyacitta(32)　方便心
upāyajñas tair apakāramarṣaṇair āvarjyāpakāriṇāṁ kuśale samādāpanāt(32)　方便智がその作害忘却によつて導かれる作害者を善に於て勸導するからである
upāyajñāna(15)　方便智
upāyatvayoga(5)　方便たるに適當なこと
upāyasahitakarma(97 業伴，以方便爲伴)　方便を伴ふ業，方便を助伴とする業
upāye kauśalyasya(171 巧)　方便に於ける善巧の大性
upāyo'padeśa(4)　方便の敎
upāyopasaṁhitakarma(72 業伴方便？)　方便に會した業，方便に屬した業
upālambha(15 labh)　得ること，非難
upāśritya(146 śri)　依止して
upāsana(92)　近事，承事，親近
upāsita(15 ās 親近)　〃せられた，禮拜せられた
upāsya(52 as 歷事)　近事して，承事して，親近して
upekṣate(91 īkṣ)　捨てる
upekṣayā(134)　關して，對して，觀るから
upekṣā(3 捨)　〃，無關心
upekṣātas(3)　捨の故に，捨から，無關心の故に
upekṣānimitta(92 捨相)　〃
upekṣāsahagata(106 捨俱)　捨俱行の
upekṣāsu vedanāsu teṣāṁ satvānāṁ niḥkleśatopasaṁhārākārā(121 捨者於諸受煩惱衆生聚，起令離行)　捨の受に於ては彼等衆生に無煩惱性を持來す行相
upekṣyate(133 īkṣ)　顧みられない，看過される，棄てられる
upekṣocyate nirvikalpaṁ jñānaṁ(145)　無分別智が捨といはれる
upeta(105, 106 i 具)　具したる，具足したる，具足する
upaiti(8 i)　至る，近づく
ubhayapakṣa(62)　兩側，兩品
uśanti(30 vaś)　願ふ，望む
uṣita(18 vas)　住した，住する，住はれた
uṣmagatāvasthā(93 或は，ūṣma-，煖位)　〃

Ū

ūnutva(65 減)　〃，＝nyūna 減
ūrdhvaṁ(151)　以後のこと，上方に
ūrdhvaṁ jvalanam(153 上去)　上方に登る炎

Ṛ

ṛju(63 直)　〃
ṛjukaraṇa(90 作正直)　正しくすること，眞直にすること
ṛte(88 離)　離れては
ṛddhipāda(57 四神足)　〃，神通足
ṛddhiprātihārya(20)　神變示導，神通神變
ṛddhivikurvita(18)　神通變化したる，神通によつて變化したる
ṛddhiviṣaya(25)　神境，神通境，如意，神足，神足は ṛddhipāda であらう（通常は ṛddhividhyabhijña 如意通，もと寫本に ṛddhiviṣṭhayā- とあつたのを出版者が viṣṭhayā を viṣaya と改めたもの，故に vidhyā- なりと見るも可能，他に viṣaya となすもある）
ṛddhiviṣayābhijñā(25 或は ṛddhyabhijñā)　如意通慧
ṛddhyādiprabhāvāvarjana (99 以神通力令歸向)　神通等の威力によつて引發すること

E

ekakārya(35 同事)　同一所作
ekakṣaṇa(102 一刹那)　〃
ekakṣaṇalabdhabuddhi(177)　一刹那に得られた覺
ekacittakṣaṇalabdhabuddhi(178)　一心の刹那に得られた覺
ekatā(27 一向)　唯一，一たること

udārabhogasaṁpattilābha(166 得大財成就)　廣大な受用の成就を得ること
udāramāhātmyāśaya(58 高大心)　廣大な偉大性の意樂
udārayuktavīrya(89 勤大精進)　廣大な精進に努めること，廣大努力せる精進を有し
udārasaṁjñā(73 大想)　廣大なりとの想，廣大想
udāsīna(119 疲倦)　無關心，中立的
udāharati(89 hṛ)　例とする，實例を擧げる
udāharaṇa(44)　譬，例
udāhṛta(61 hṛ 說)　いはれた
udita(40 vad)　說かれた，說かれて居る，いはれた
udgṛhīta(57 grah)　受せられた，受持せられた
udgraha(41 受，受持)　受(卽ち五識)，取
udgrahaṇa(I5 受持)　〃
udghaṭita(81 ghaṭ 開演)　開說，開けたる
-jña 開說で曉る，開智，略開智，開說で理解し
uddāna(148 憂陀那，印)　攝頌，印(uddāna は必ずしも頌ではないが，頌となつて居ることが多い，現今の書物にある目次の如きもの)
uddānaśloka(177)　攝頌
uddeśa(139 擧法)　總說，總擧
uddeśanirdeśataḥ(36 直說，釋說)　總說と細說とから
uddeśāt(79 擧名)　總說から
uddhata(51 hā, dhā 掉)　高まつた，掉擧せる
uddhartuṁ(127 dhṛ 扳濟)　救出すべく
udbhavanti(11 bhū)　生ずる，達する
udbhāvana(27)　告げること，明かにすること，示すこと，考へること
udbhāvanā(72 稱說)　顯示
udbhāvita(33 bhū)　顯はされた，明かにせられた，生じた
udbheda(17)　泉
udyata(70 yam)　勤めた，熱心に勤めた，精勤した
udyatātman(98 能行)　精勤より成る，精勤を主とする，努力を本質とする，精勤せる
udyama(163 勤，勤勇，意勇)　勤勉，勤勇，努力
udyānabhūmi(17 園地)　〃
udyānayātrā(18 入苑，入園苑)　園に入ること
udyukta(163 yuj)　努力したる，熱心に勤めた
udyogavat(18 極勤)　精勤を有する
udvijate(60 vij)　厭離する
udvṛtti(36 無上，無上轉)　特勝，特殊
ubvega(51 有厭)　厭離，厭意，災難，不幸，苦痛
udvegam āyāti(124 yā 厭)　厭離に行く，厭離に至る
udvejana(26 驚怖)　〃，恐怖
udvoḍhum(95 vah)　取去るべく，取去るを得る
udvoḍhum ihāsamartho lokaḥ(95)　此世で苦を取去るを得ない世人は
unmārgapratipanna(158 僻行邪行)　邪道を行ずるもの
upakara(113 饒益)　〃
upakaraṇa(99 受用)　〃，食物と同じ
upakaraṇavighāta(12 所須器具皆乏少)　器具缺乏
upakarasaṁjñāmoda(110 得益相…喜想)　饒益想と喜
upakaroti(102 kṛ)　恩を施す，饒益する

upakāra(113 饒益)　〃
upakāratayā(74 饒益)　饒益することによりて，饒益を以て
upakāratara(102)　一層有恩なる，一層饒益ある
upakārāśayena(102 勝利心)　恩惠意樂によりて
upakāritva(161 饒益衆生事)　饒益すること
upakārin(32 益，饒益)　恩者，饒益者
upakāriṇi parahite sadā duḥkhe(110 損者…苦事，於彼不饒益者…苦事)　常に不饒益者に對し，他人を利益する苦に於て(後半は寫本に據る)
upakārekṣanāt(108 無能？)　饒益を望むから
upakramakṛta(153 人功所作)　起業の所作，起業によつて作された
upakleśa(181 纏垢？)　隨煩惱
upagama(145)　近づくこと
upagamana(79)　得ること，達すること，到ること
upagamayati(145 gam)　近づかしめる
upaguhya(88)　抱いて，覆うて，隱して，掩護して
upaghātamarṣaṇa(99 忍彼惱)　損惱を忍ぶこと
upacakita(52 cak)　怖れた，をののいた，落付かない
upacaya(30 聚)　積集
upacaya(73 聚集)　積み重ね
upacāra(87 施設？)　譬喩的の言說
upacitakuśalamūlānām(42)　善根の積集せられたものの，已に積集せられた善根を有するものの
upacīyate(140)　聚められる
upacchedana(165 斷)　〃
upataptacetasa(18)　心が熱せられたもの，熱せられた心を有するもの
upatiṣṭhante(129 sthā 來)　近くに立つ，來る，集まる
upadiśyamāna(4 diś)　敎へられつつ
upadiṣṭa(4 diś 敎授)　敎へられた
upadeśa(1)　論，敎示
upadeśaka(80)　敎誡するもの，敎誡すること
upadeśapratipattyadhigamaviśeṣa(15)　優れた指示と實行と證得と
upadrava(4)　災患，災横
upadhāya(24 dhā 安)　安じて，置きて
upadhi(102 物)　〃，依，物質的の物
upadhisaṁniśraya(102 物依止)　依の依止
upadher(118 物)　物から
upanikṣipati(162 kṣip 付)　委ねる，間に置く
upanividhāya(24 dhā 安)　置いて，安住して，安じて
upaniṣat(56)　因，(146)因，依止
upaniṣattva(148 依止)　因たること
upaniṣadbhāva(149 依止)　因たること
upanetavya(145 nī)　率ゐねばならぬ
upapatti(166 生勝)　生，生起，受生
upapattim prapadyate(69 受生)　生に至る，生を受ける，生に入る
upapattisādhānayukti(168 成就道理)　〃，證成道理
upapatsyante(83 pad 得往生)　生ずるであらう
upapadyate(105 pad 生)　生ずる，適合する
upapanna(25 pad 所起)　生れたる，生れたもの
upapāda(25)　生
upapādya(52 pad)　證示して
upabhuktahetukatva(149)　既に受用し盡くされた因たるもの，既に用

ること
indhanādhīnavṛttitvāt(153 薪力)　薪に據つて存するが故に
iyatas(iyat)(83)　それだけの
iyam ādhāravṛttiḥ(106)　これが含まれて存すること
iyaṁ darśanamārgāvasthā(25)　これが見道位である
iva(2 譬如)　如し
iṣu(152 箭)　矢
iṣṭa(19 iṣ)　愛らしい
iṣṭa(14 iṣ)　いはれた，いはれて居る
iṣṭanikāmalabdha(113)　願はれて望みのままに得られたる，願ひ望むものの得られたる
iṣṭahetu(124 可愛果？)　可愛の因，願はれた因
iha(2)　此論に於て，今，此處にて，此世に於て

Ī

īkśaṇa(17 觀)　觀ずること，考へること，見做すこと，(108)望むこと
īkṣaṇā(74)　觀察，考察
īkṣika(50 觀察)　〃
īryāpatha(103 威儀路)　〃(行住坐臥をいふ)
īryāpathavyāpāracāre vartamānas(21 作種々威儀路業)　威儀路のことを爲す動作中に在る
ītayaḥ(35 īti＝病)　諸の病者
ītayaḥ śāmyanti(35)　病者は治癒する
īśvara(174 自在行)　自在者，最高神

U

ukta(5 vac)　いはれた
ukti(14)　いはれたこと，話，說くこと
ugra(28)　烈しい，强い，恐ろしい
ugravīryatā(28 勝勇)　烈しい精進，强い精進
ucita(157 uc 恆習)　相當した
uccadānaprakāra(77)　高貴な布施の種類
uccaraṇatā(77)　發聲
ucyamāna(3 vac)　言はれつつ
ucchrāya(16)　高まること，增すこと，强くなること
utkarṣa(40)　增勝，優れて居ること
utkarṣasthāna(101 上)　〃，上處，優れて居る處，多い處
utkṛṣṭa(7 kṛṣ 無上法)　優れたる，殊勝の，至極の，勝れた，最も，過度
utkṛṣṭakālaṁ(35)　至極の長時の間
utkṛṣṭakālam ity anādikālaṁ(36)　至極の長時の間とは無始時以來といふ意味
utkṛṣṭā vṛttiḥ(96)　特勝なる轉である
uttanti(11 tṛ 出生)　生ずる，度る
uttamakalpayānamahatā(33)　大なる最後劫と最上乘とによりて，最後の劫と最上の乘との爲に大なる時期を經て
uttamadyuti(174 上成就？)　最上光明，最上威嚴
uttamadharmasaṁgraha(28 攝法)　最上法の攝
uttamanirmāṇa(26 上化)　最上變化
uttamabodhibīja(124 覺因)　最上菩提の種子
uttamayāna(1 最上乘)　大乘と同じ
uttara(112)　順次に後のもの
uttaracchandayāna(14 勝欲，以勝欲爲所乘)　一層高い樂欲を乘となすもの
uttaraṇa(1 扳濟)　脫出すること
uttaratra(8 後)　後部に於て，後の所で，後の場合，後に，第二に
uttarasyotpatteḥ(101)　後のものの生があるから
uttarottara(31 次第)　高く又高く，向上，常に增して，漸次の，更に又更に
uttarottaraniśrayāt(67 前爲後依止)　後のものがその後のものの依止となるから(前の無性に由るが故に，次第に後の無生等を成立するなり，と釋せられて居る)
uttānīkaraṇa(81)　顯了にすること，明白にすること
uttānīkaroti(81 kṛ)　明白に說く
uttāpanatā(78 明淨)　淸淨にすること，熱せしめること，刺激すること
uttāraṇatā, uttāraṇa(11 度)　起ること，度すること，救ふこと
uttrāsapada(7 諸怖？)　驚畏處，怖畏處(pada＝padasthāna)，驚畏句，驚畏足處
utthāna(54 起)　起ること，(163 極)努力，勤勉
utthāpana(14)　起らしめること
utpatti(18 生，25 起滅)　生れること，生，起
utpathaprasthita(124 有非道住)　誤つた道に行つた，誤つた道に住した，誤道に出發した
utpanne parārthaṁ karaṇīye(19)　他の爲に作すべきことが起つたときに
utpannamātra(150 起已)　生じたのみで
utpācana(30 漸成熟)　〃
utpāṭana(33)　破り去つたこと，除去
utpāda(16)　發心
utpādana(2)　生ずること，生ぜしめる
utpādita(3 pad)　現はされたる，生ぜしめられたる，生じたる，生ぜられたる
utpāditacitta(166)　已發心のもの
utpādya(70 pad)　生じて
utsa(153)　泉
utsahante(9 sah 能)　堪へる，出來る
utsaham arhati prakartuṁ(19 精進應百倍)　精勤を爲すを要する，精勤をなすべし，努力を爲すに價する
utsāha(15 猛，勇，勇猛)　精勤，努力，精進，勤
utsāhaḥ kuśale samyak(105 於善於正勇)　善に於て正しく努力すること
utsāhin(115 勇猛)　努力を作し
utsṛjanti(77 sṛj)　與へる，施す
utsṛjet(170 sṛj 捨)　捨つべし
udaka(17)　水
udakacandrabimba(62 水月)　〃，水月像，水中の月の影
udakadhāraṇākṣayodbhedasādharmyena(17)　水を持して盡きない泉に似て
udagragotra(13)　最上の種性
udagratva(11 明淨)　最勝たること，最勝の
udabhājane bhinne(36 水器壞)　水の容器が壞れたときには，壞れた水器に於ては
udaya＝utpatti(41)　生ずること，起，起ること，發起，生
udayavyaya(37 生滅)　生じ又滅する，生と滅と
udāgama(136)　至得，逮得，證得 samudāgama と同じ
udāgamamahatva(171 果)　證得の大性，至得の大性
udāra(50 有多)　高大な，高勝な，廣大な
udārataratva(129 大，廣)　一層廣大なる
udāradharma(77 法)　廣大な法

き，率ゐて，引奪して
āvāra＝āvaraṇa(44 障)　〃
āvaha(130)　持來す，引く，生ずる
āvāhakatva(80 引)　導くこと，運ぶこと
āvāhana(85 引)　引くこと，持來たすこと
āviṣṭa(126 viś)　滿たされた，有する
āvṛta(50 vṛ 有覆)　有障な，覆はれたる
āvṛti(33 162 後障)　障
āvṛti＝āvaraṇa(8)　障
āvṛtti(36 轉廣大，廣大轉)　〃，轉依
āveṇikaguṇa(187 不共勝功德)　不共功德
āvedha(39 vyadh 行願？)　力，勢力，過去から繼續して居る力，滲透
āśaṁsana(74 願)　〃
āśanaviṣākrānta(124 食毒)　食毒を有するもの
āśaya(4 發心，15 依)　意樂
āśayaparāvṛtti(35 轉依)　〃，所依を變へること
āśayaśuddhi(15)　意樂の淸淨
āśayasahagata(16 依相應)　意樂と俱行する
āśā(164 希望)　〃，願，欲，期待
āśāsti(74)　希願
āśāsticitta(91 希望心)　〃，希求心
āśu(28 速)　速かな，速かに
āśumokṣa(12 速出)　速かな解脫，速かに解脫すること
āśusamādhilābhitā(28 速受定智果)　速かに三昧を得ること，三昧を速かに得ること
āścarya(160 功德)　希有
āścaryam etat paramaṁ bhaveṣu(95)　これは生に於て最高の希有である
āśraya(11 所依)　〃，依止
āśrayatva(3)　依止すること
āśrayaparāvṛttilakṣaṇaḥ(45 由轉依爲相故)　轉依を特質となすものである
āsrayaparivartana(24 轉依)　〃，依を轉ずること，依を替へること
āśrayaparivṛtti(35 轉依)　〃，所依の轉變
āśrayaparivṛtti(114 究竟轉依)　〃(梵文寫本は antasyāśraya- とあつたのを，出版者は antasya を消して，tasya とした，シナ譯に究竟とあるから，或は antyasya なりしか)
āśrayapariśuddhi(186 身淸淨)　所依の完全淸淨
āśrayabhāvataḥ(151 依起)　所依が有なるが故に
āśrayabhāvenotpattāv āśritatvāsaṁbhavāt(152)　所依性によつては，生起に於て能依たることは不可能であるから
āśrayayatnayogyatā(30 依勤能發起？)　所依の努力に適して居ること
āśrayayogyatā parā(28 依最上)　所依に最上に適して居ること，最上の所依適合性
āśrayalakṣaṇadharmārthasūcanāt sūtraṁ(54)　經とは所依と特質と法と義とを穿貫するが故である
āśrayavibhakta(56 依止)　所依の分別せられたもの，所依の分類せられたもの
āśrayasya nidarśane ca śaktaḥ(178)　所依身を示現するに於て有能なるもの
āśrayasya parāvṛttir(170 轉依)　〃，所依の轉である
āśrayasya vīryārambhakṣamatvaṁ(30 能發起上精進，依勤能發起)　所依が精進を企てるに堪へること
āśrayasvabhāva(11 所依自性)　〃
āśrayād vastuto dānaṁ nimittāt pariṇāmanāt(111 依，類，緣，廻向)　施は，所依の故に，事の故に，因緣の故に，廻向の故に
āśrayasyānyathāpti(35 依轉)　所依の異に達すること，所依の轉變に達したこと
āśraye 'thāśrite deśye vākye jñāne ca deśike(185 所依及能依，於言及於智)　所依に於て，又能依に於て，所說に於て，能說の言說と智とに於て
āśrita(11 śri 能依)　〃，依止したる
āśritasvabhāva(11 能依自性)　〃
āsanna(15 sad)　近き
āsannabodhijñāna(15 知自近菩提)　近き菩提の智，近き菩提を知ること，菩提の近きを知ること
āsannabodhibodhāt(15)　近き菩提を覺するから
āsevana(99)　奉仕，奉事
āsevya(97 sev)　奉じて
āsthita(93 sthā)　住したる，爲したる，認める
āsthitakriyā(93)　所作を爲した，所作が爲された
āsyapuṭa(77)　口孔，口腔
āsravakṣaya(25 漏盡)　漏の滅盡
āsvādana(118 味)　〃
āsvādayat(102 svad 味)　味はひつつ
āsvādita(122 svad)　味ははれた，食せられた
āsvādanā(102 味)　〃，享樂
āhāra(140 資)　持來すこと，得ること
āhārasvapnabrahmacaryāsamāpattyupacayena(151 眠，食，梵行，正受長養故生)　食と眠と梵行と等至との長養によつてである

I

icchati(154 iṣ 欲)　認める，許す，欲す
icchāparipūraṇa(31)　欲求を滿たすこと
itara(60)　他の，他のもの
itarathā(154 若不爾)　然らざれば
iti(1 如是)　と，といふ，故に，以上
iti kṛtvā(11 kṛ)　と考へてと，決定して
iti cittaṁ citrabhāsaṁ citrākāraṁ pravartate /, tatrābhāso bhāvābhāvo na tu dharmābhāsaṁ tataḥ //(63 種々心光起，如是種種相，光體非體故，不得彼法實)　此の如くに，心は種々なる顯現，種々なる行相を起す，此中，顯現は有と非とである，然し，それ故に，法の顯現は無い
iti prathamaḥ(99)　といふのが第一(以下第六まで一頌一頌を費す)
iti vistaraḥ(1)　と廣說する，乃至廣說，と云々
ity ameyaparāvṛttau ameyavibhutā(42 如是無量轉，如是無量化)　此の如く，無量の轉依に於ける無量の威力は
ity arthaḥ(1)　といふ意味
ity evam ādi(146)　と此の如き等がいはれた
itvarapratyupasthāyin(150 刹那不住)　僅かに現前するもの(itvara 僅かな，短い，暫時の，pratyupasthāyin 對面に住すること)
idaṁ(asau)…apara(14)　—は…他は
idānīm(2)　今や，偖
indhanākaraviśeṣeṇevāgnis tasyottarottaraviśesādhigama (16 益薪積行依極？)　優れた薪の積重によるかの如くに，その火が漸次の殊勝を得

故）　財の受用を以て無量の衆生を滿足せしめるから，又無盡であるから

āmodate (110 mud 喜施)　喜ぶ，喜び施す

āmoṣa (111 觸)　〃，觸，摸索

āmoṣais tamasi yathā dīpais channe tathā trayajñānaṁ (111 闇觸及二燈，如是三人智)　例へば闇に於て觸を以て知り，室に於て諸の燈によつて知るが如く，三智も此の如くである

āyata (95 yam 廣)　廣大な，大なる，擴がつた，長い

āyatatvasaṁjñā (73 廣想)　廣博なりとの想，廣博想

āyati (74 當來)　未來

āyatyāṁ darśanād vṛtticetanā samatekṣaṇā (74 定作未來行？，常觀他行滿？)　未來に於ての見の故に働く心，平等性の觀察，未來に於て見るから，働く心，平等性の觀察

āyatyāṁ darśanād vṛttimanaskāra (74 定作作意？)　未來に於て見るから働くの作意

āyatyāṁ vipākaphalaniṣyandaphaladānatā (71 與依報二果)　未來に於て異熟果と等流果とを與へること

āyurādisaṁgṛhītā (104 言身成就者具攝命等五事)　壽命等を含めたる

āyuṣpramāṇa (103)　壽命の量，壽の分量

ārabhate (57 rabh)　始める，企てる，持する，起る，始まる，に入る

ārakṣa (134 擁護)　〃，守護

ārakṣasmṛtyupasthāna (186 不護念處)　四不護と三念住

ārabdhavīrya (48〜49)　精進を發勤せるもの，已に發勤せる精進を有するもの

ārabhate (142 rabh 起)　發する，起す

ārabhya (1 rabh)　關して，ついて，始めて

ārambh (19 大行，發起)　發勤，發行，企て，始めること

ārādhana (120 生歡喜)　喜ぶこと

ārādhita (2 rādh 因事)　仕へ得たる

ārūḍh (152 ruh 乘)　乘つたる

ārūpya (21 無色界)　〃

ārogya (75 病愈)　無病，健康 (a-roga の派生語，roga が病)

ārogyabhūmitva (86 調和無疫癘)　無病地たること，健康な土地

ārogyahetu (75 滅煩惱病因)　無病の因

ārocita (55 ruc)　告白した，語つた，宣言した

ārta (121 ār)　苦しめられたる，苦しめる，惱める，惱んだ，惱まされたる，陷つたる

ārya (29 聖人)　聖者

āryakāntaṁ śīlaṁ (167 聖人所愛無流戒)　聖者所愛の戒 (無流は無漏)

āryakāntaśīlapraviṣṭa (57 聖所愛三戒能持)　聖者所愛の戒に入れる

āryagotra (65 聖性)　聖種性

āryadivyabrāhmyavihāravaśavartanāc ca (106 聖住天住梵住)　聖と天と梵のと三住の自在を得るから

āryadharmā asya na vyavadāyante (158 聖法不得清淨)　聖法は彼について清淨にしない，彼の心を清淨にせず

āryabhūmi (162 聖地)

āryabhūmir āryadharmā veditavyāḥ (162)　聖地とは聖法であると知るべし

āryaṁ prajñācakṣuḥ (143 慧眼)　聖なる慧眼

āryavihāra (25)　聖住

āryākṣayamatisūtra (17 聖者無盡慧經)　聖無盡意經 (聖者は無盡意にのみかかる，經にはかからない)

āryātmabhāvapratilambhasya bijaṁ (162 爲聖體種)　聖體を得る種子

āryādisukhavihāra (25)　聖住等の樂住

ārṣa (138)　聖者，仙

ālamba＝ālambana (44 緣，所緣)　所緣

ālambana (132 境界)　所緣

alambanapratibhāsa (91)　所緣の影像

ālambanapratyaya (131 緣緣)　所緣緣

ālambanaṁ dharma upadiṣṭaḥ, kāyādikaṁ cādhyātmikaṁ bāhyam ādhyātmikabāhyañ ca (55)　法が所緣であると示された，そして身等であつて，內的のものと，外的のものと，內的外的のものとである

ālambanamahatva (171 緣)　所緣の大性

ālambanaṁ mato dharmaḥ adhyātmaṁ bāhyaṁ dvayaṁ /, lābho dvayādvayārthena dvayoś cānupalambhataḥ // (55 佛說所緣法，應知內外俱，得二無二義，二亦不可得)　法は所緣であると考へられる，內的と外的と兩者とである，二が不二なるの義によつて得られる，また兩者の不可得からも，得られる

ālambanalābhaparyeṣṭa (55 求緣)　所緣を得るを求めること

ālambanaviśeṣāptiḥ svadhātusthānayogataḥ (63)　殊勝な所緣に達することは，自界處に於ける精勤からである

ālambanāsaṁpramoṣe sati vīryaṁ niśritya samāpatty abhinirhārāt (106 於緣不忘依進故禪定得起)　所緣の不忘のあるとき精進に依止して等至を引發するから

ālambanīkṛta (169)　所緣となされたもの

ālambita (91 ā-lamb)　所緣となした

ālambya (65 lamb)　所緣として，緣じて

ālayavijñāna (169 阿梨耶識)　〃，阿賴耶識

ālayavijñānabhāvanā (7 阿梨耶識熏習)　阿梨耶識の修習

ālasya (132 不勤)　怠惰

āloka (65 明，明悟)　明，光明

āloka iti dharmanidhyānakṣānter etad adhivacanam iti (93 此明名見法忍)　明といふはこれは法を禪思しての忍の異名である

ālokayanti (39 luk 照)　〃，見る

ā lokāt (35 盡於未來際)　世界の盡るまで

āvaraṇakṣaya (33)　障の滅盡

āvaraṇaprahāṇahetutva (2 斷障因)　障を斷ずる因たること

āvaraṇam ṛṇasthānaṁ (162)　障は負債に當るものである

āvaraṇavarjita (14 vṛj 無障)　障を離脫したるもの

āvaraṇaviśodhana (100 淨惑及智障)　惑と所知との障を清淨にすること

āvarjaka (16 教化)　誘引するもの

āvarjana (161 入，歸向，令歸向)　歸向せしめること，引發，導引，引攝

āvarjanatā (20 令歸向)　〃，引攝すること，引付けること，

āvarjanā śāsane 'smiṁś chedanā saṁśayasya ca (161 入法亦斷疑)　教說に歸向せしめること，此教說に於て疑を斷ずること

āvarjayanti (162 vṛj)　引發する，歸向せしめる

āvarjya (32 vṛj)　導かれる，導かるべ

ātmano 'nyārthaviśiṣṭasaṁjñinaḥ (19) 自己よりも他人の利益の優れて居るとの想を有するものに
ātmaparasamatopagama (15) 自他の平等に達すること，自他の平等に入ること
ātmaparinirvāṇāya (4 爲自得涅槃) 自己の般涅槃の爲に
ātmabhāva (98 身) 〃，身體
ātmabhāvasaṁpattibalena (102 依自身成就力，而修習故) 身體の成就の力によりてである
ātmabhāvābhinirvṛttiḥ (151 自體生) 身の現はれること，身體の生ずること
ātmalakṣaṇa (22) 我の特質
ātmavatsala (31) 自己に對する親愛
ātmasaṁskāra (94 諸行) 諸の自行(此語はあまり例がないやうであるが，かく見てよいであらう)
ātmasamacittatāṁ (94 他自心平等) 自と平等な心たることを，自と平等であるとの心性を
ātmasamyakpradhānatā (86 自正輪) 自己の正しい精勤(釋に ātmanaḥ samyakpraṇidhānatām darśayati がある，pradhāna は praṇidhāna かと思はれる，然らば正願)
ātmahetor (110 爲自利) 自己の爲に
ātmānubodhāt (174 隨我) 我の隨覺の故に
ātmārthaṁ (18 爲自，爲自利) 自己の爲に，自己の利益の爲に
ātmāsadgrāha (73 爲我非有取) 我有りとなす無の執
-ātmika (19) 成るもの，性となすもの
ātyantika (10 無齊限) 無限な，畢竟，窮盡するもの
ātyantikatva (77 畢竟) 究竟たること
ātyantikatvād āyatā vṛttir ity āvṛttiḥ (36) 畢竟性のものであるが故に廣大の轉であるので廣轉である
ādara (2 恭敬信受) 恭敬，尊重
ādarśa (65 鏡像) 鏡
ādarśajñāna (46 鏡智) 〃，大圓鏡智
ādānalabdha (176 受得) 戒を受け得したる，ādāna は samādāna，シナ譯の護は律儀の異譯と見る
ādānasthānasaṁtyāganirmāṇapariṇāmane (185 取，捨，住，變化) 執持と，處と，捨離と，變化と，轉變とに於て
ādāvavyākaraṇa (3 不記) 初めに豫言しない，初めに記別しない
-ādi=-ādika (1) 等，始とする，始まる
āditas (71) 最初に，最初から
ādiprayogatas (11) 最初の加行から
ādibuddha (48 最初一佛) 本始佛，最初佛，本來の佛
ādibhūmi (85 初地) 〃，最初の地
ādiśuddha (90 最初淨) 〃，本初から清淨な
ādīnava (123 過失) 過患，障難
ādeya (78 dā 令信) 信ずべき，信
ādeyavākya (27 發語無不信) 信頼すべき言あり，信用せられる言，語の信用せられるもの
ādeśasāprātihārya (20 記心) 記心示導，說法神變
ādau (3) 初めに，初めに於て，本初に於て
ādyā tisro dvedhā antyadvayas tiṛṣv ekaḥ (100 初三二初一，後二二一三) 初めは三，二種は終りの二からであり，一は三に於てある
ādyena (116) 初一によりて
ādhāna (9, 65 所持) 受入れ，支持，所持，持，場所

ādhāya (21 dhā 成) 成じて，作して，持して，與へて
ādhāra (105) 物を容れて居るもの，また能持，容つて居るものからいへば含まれて存するといへよう，直譯ではないが
ādhi (21 煩惱) 苦痛，執心，場所，置き場所
ādhikya (109) 過多の，夥多の
ādhikyayogena (109) 過多の具足によりて
ādhipatya (114=adhipa) 增上
ādhipatya (62 增上) 〃
ādhipateya (73 成) 增上となす，增上する
ādhimokṣika (14 信行) 信解のもの
ādhīna, adhīna (151) 依る
ādhīnatva, *or* adhīnatva (67 屬) 依ること
ānantaryasamādhi (93 無間三摩提) 無間三昧
ānandaśabda (16 喜聲) 〃，慶喜の聲
ānayate (25 nī) 導く，持來す
āniṅkṣya (tva) (188 無動) 〃の
ānimitta (148 無相三昧) 〃(Edgerton は之を causeless (-ness) と譯す，甚だしき誤譯，nimitta を cause の意味となすすら佛教語には甚だ多いとはいへない)
ānukūlya (140 隨順) 〃
ānukūlya (32) 順，順ふこと
ānubhāva (68 加) 威力，威神力，力
ā niṣadanād iti (102) …坐するに至るまで
ānupūrvī (98 次第) 〃，順序
ānuśaṁsa (134) 功德
āhita (108 dhā) 置かれた
āpatti (54 罪) 犯罪
āpatti (116 堪？) 成ること，或狀態に入ること
āpattipāta (71) 違犯に陷る，違犯の起る
āpāyayati (162 pā) 乳を與へる，飲ましめる
āpāyika (26) 惡趣にあるもの
āpāyika (150 壞滅法) 壞滅，滅壞のもの (apāya が apa-i から派生して滅の意味で，それから āpāyika となる)
āpūryate (144 pṛ 遍身) 滿たされる
āpti (35) 達すること，至ること，得ること
āpyāyana (126) 太らせること
āpyāyita (97 pyai) 元氣のある，滿足したる，喜んだ，滿たされた心のもの
ā bodher (147) 菩提に至るまで
-ābha (34 相似) 如し，似たる
ābhā (61 如) 〃
ābhāsa (24 光) 似現
ābhāsatā (60 光，光體) 顯現，顯現たるもの
ābhiprāyikārtha (138 正思？) 意趣義
ābhimukhya (182 現在前) 現在前すること
ābhair (39) 光によつて
ābhoga (166) 功用
āmiṣa (164 財) 〃
āmiṣakiṁcitkahetor (110 有所須故) 僅かな財の爲に
āmiṣadāyāda (120 以財利具足) 財の相續
āmiṣasaṁgraheṇa prathamaṁ (117 財攝攝初一攝) 財による攝は初一を (-thame は -thamaṁ であらう，下の avaśiṣṭāni 參照)
āmiṣasaṁbhogenāprameyasatvasaṁtarpaṇād akṣayatvāc ca (16 以財周給亦無盡

asarvajñaceṣṭita (186 非一切智)　〃の動
asādhāraṇa (157 不共)　〃
asādhāraṇayogakevala (81 不共他相應) 共通相應しない單獨な
asāre sāramatayaḥ (82 不堅堅固解)　不堅固に於て堅固の思がある
astaṁgama (137 滅)　〃
astaṁgāmin (137)　滅
astaṁ prayāta (35 yā 滅)　滅に行ける，滅沒に至つた，滅した
asti cittavaśena yathā caṅkramaṇādy-avasthāsu (152 有心力自在如威儀等去)　心の自在力によつてあり，經行等の位に於けるが如し
asati tasmim (7)　それが無いときに
astitva (10 有體)　有ること，存在
astitvanāstitva (59 有體無)　有ることと無いこと，有ることの無いこと
astināstitva (60 有體即無體？)　有と無との性，有無性，有と無
astimat (113 有財)　所有物ある者
asthāna (6)　非處，所以の無い，故なくしての
asthānatrasādīnave (6 有於中恐怖過失) 非處に於ける怖畏の過患に對して
asthirasthira (98)　不動と動
asya paripūraṇam ity anantapāram (24) それを充たすといふので無邊涯である
asraṁsana (45 無間)　不斷
asvatantrīkṛtacetana (21 心不自在)　其心が自主とならないもの
asvatantrīdoṣacetana (21 不自在？)　自主とならずに心が過失を有する，自主とならず過失を有する心のもの
ahaṁkāra (160)　我執，我慢
ahaṁ na boddhā (7 不解)　私は覺つたものではない
aharahar (180)　毎日，日日
aho bata (72 今)　嗚呼，實に
ahorātraṁ (187 晝夜)　〃，日夜
ahārya (11 不退)　〃，奪はれざる
ahāryatā (29 堅)　不可引奪，取去るべからざること

Ā

ākara (16 益，39 藏)　藏，鑛脉，寶藏，事物の源，寶の貯へられた所
ākarṣāmi (128 kṛṣ 牽來)　私は牽引する
ākṛṣta (77 kṛṣ 引)　引接せられた
ākarṣaṇa (69 引攝)　引くこと，引寄せること
ākasmika (157 自然)　偶然の，因無きの，自然の
ākāṅkṣaṇa (15)　望むこと，願ふこと
ākāṅkṣed (146 kāṅkṣ)　願ふであらう，望むであらうならば
ākāra (64 行相，種)　〃，種類
ākāśasaṁjñāvyāvṛttau (42 如是空想轉) 虛空想の轉依に於て
ākāśasuvarṇavārisadṛśī (58)　虛空，金，水と相似な
ākāśasthālīyasya (183)　一部の(？)虛空の，虛空の一部の(？)，-sthālīya が明確でない，今は -sthalīya, belonging to a place, local かと見た，又は sthālīya は -ka の誤植か
ākāśīkaraṇa (42 得虛空解)　虛空となること
ākṛti (59 相貌)　形相，姿
ākrānta (124 kram 逼)　逼られた，近寄られた，有する
ākruṣṭa (100 kruś 打罵)　罵られた，罵詈
ākṣayatā (109 無盡)　〃，〃たること

ākṣipta (78 kṣip 瞋罵)　罵られた，放たれた，投げられた(—asya 罵られた人に對して)
-ākhya (4)　稱せられるもの
ākhyāti (81 khyā 開演)　開說する
ākhyāna (6 說)　說くこと
ākhyāyate (6 khyā 說)　說かれる
ākhyāṁ labhate (87 得…名)　名を得る，名づけられる
āgantuka (22 客塵)　〃の，偶然の
āgantukatva (141 客，互爲客，客謂纏垢) 客塵たること，客塵性，偶然性
āgantukair upakleśaiḥ (65 由客煩惱故) 客塵の隨煩惱によりてである
āgantukopakleśavigamāt (22 客塵去故) 客塵の隨煩惱が去るが故である
āganturajodhūmābhranīhāropakleśavat (141 煙雲塵霧？)　客塵の塵，煙，雲，霧の隨煩惱の如し
āgamatas (77 阿含說)　阿含から
āgamaniśrita (5 依敎)　傳敎に依るもの，阿含に依るもの，聖敎に依りたる
āgamāḍhya (119 阿含富)　阿含に富める
āgamitakālaprayuktatva (80 應時量說) 言傳へられた時の通りに相應して居ること
āgamya (96 gam)　來て，到りて，よつて，關して，に隨つて，に基づいて，(161 得)得て，達して
āgāra (16)　部屋，家
āgrahatas (115 極悋)　執拗であるから
āghrāyamāṇa (2 ghrā 飲)　嗅ぎつつ，嗅いで
ācaya (30 聚)　積集，積，豐富
ācārya (18 闍梨)　敎へる人，阿闍梨，阿遮利耶，規範師
ācita (6 ci)　積まれた
ājñā (70 解)　智，知解(ājñā はここでは命令ではない)
ājñāya (54 了)　知りて
ājñātukāmatā (120 願樂)　知らんと欲すること
ājñāpanīya (80 敎勅，使他如敎令)　了知せしめる
ājñāviṣaya (52)　命令する領域
ājñeya (80 能持智，善了知，如敎令) 了知せらるべきもの
āḍhya (119 富)　富める(ṛdh が ārdhya となつたものから，又は ārthya から，來ると異說がある)
ātiṣṭhati (26 sthā)　爲す，作す
ātura (89 病)　〃
ātulya (25 無比)　〃の，無等の
ātta (108 dā)　取られた
-ātmaka (17)　本質とする，性とする，所成の，成るもの
ātmaklamatha (53 苦行)　自己を苦しめること，自ら疲れること，苦行
ātmagrāhasya cāśrayaḥ (148 及以二我依) 及び我執の所依とが
ātmaja (16)　子
ātmatṛṣnā (160 我愛)　〃
ātmadṛṣṭir evātmalakṣaṇā (23)　我見其ものは我の特質(ではない)
ātmadṛṣṭiviparyāsa (22)　我見の顚倒
ātmana iva parataḥ pratikārānabhinandanāt (94 於自他所作不求反報) 自に於けるが如くに他人から報恩を願はないから
ātmanaḥ parārthe viśiṣṭasaṁjñino bodhisatvasya (19～20)　利他に於て自己よりも優れて居るといふ想を有する菩薩には
ātmanas (4 自)　自らの
ātmanaḥ prajñottāpanatayā (78 自慧明淨) 自己の智慧を淸淨にすることによりて

(23)　感受しないものはかれの苦の自性の智によりて

avedako vedaka eva duḥkhito na duḥkhito dharmamayo na tanmayaḥ (23 迷苦，及苦者，法性，與無性)　感受しないものも，感受するものも，苦しむものも，苦しまないものも，法所成のものも，その所成でないものも

avaiyarthya (48 不虛)　無用ではないもの

avyakta (111 añj 不明了)　〃，明瞭でなく

avyaya (77 無盡)　減しない

avyavakiraṇa (181)　雜へないこと

avyavakīrṇa (106 kṛ 不雜)　〃，混ぜられざる

avyavakīrṇaḥ pāpakair akuśaladharmair (106 不雜諸惡不善法)　諸の惡不善法を混じない

avyavaccheda (32 無絕)　斷絕しないこと，不斷絕

avyākaraṇa (3 不記)　豫言しない，記別しないこと

avyākṛtanaya (38 無記法)　無記の理趣

avyākṛtalakṣaṇa (40 無記相)　無記の特質

avyāghāta (104 han 無礙，無障礙，無滯礙)　〃，無障礙

avyāghāte sadākālaṁ sarveṣāṁ jñānakarmāṇāṁ (41 諸智所作業，恆時無礙行)　常時に一切の智と業との無障礙なるに關して

avyāpī (5 -pin 不普)　普遍でない，非普遍の

avyābādhopapatti (106)　病の生じないこと

avyābādhopapattiphalatva (106)　病の生じないのを果となすこと(離退方便離果不虛故，又は離退離方便果不虛故とシナ譯四本によつて異なるが何れも梵文とは一致しない，シナ譯はよくは判らない，果不虛とあれば，abandhyā とあつたか，かく見たかであらう，離退方便は不明瞭)

avyāvakīrṇā vipakṣair (50 無間)　對治と相混ぜられざるべき

avyāhatajñāna (4)　無礙なる智

avyutpanna (116 pad 無知)　未經驗の

avyutpanna (6 pad 少)　完成せざる，完成して居ない，熟達しない

avyutpanna (171 未學義者)　未啓發者

avyutpannamati (6 少慧)　完成せる慧無く，其慧が完成して居ない

avyutpannasaṁdigdhārthagrahaṇāt (116 由無知疑惑者令受義故)　未經驗の疑惑者に義を取らしめるから

aśaraṇānām ca śaraṇaṁ (42)　また歸依處の無いものに對する歸依に

aśāntaśāntā 'kalpā ca (65 非寂靜寂靜，以無分別故)　非寂靜と寂靜と，そして無分別なるといふのが

aśāntāsadgrāha (73 非滅非有取)　不寂靜となす無の執

aśubhākārabhāvana (57 不淨…種修)　不淨行相の修習，不淨の種類の修習

aśeṣabodhāya (144 無餘覺)　〃の爲に，完全に覺する爲に

aśrānta (163 śram)　疲れない

aśrāntabuddhayaḥ (163)　諸の覺の疲れないものは

aśrutasūtrāntapratikṣepa (7 謗毀大乘？)　未聞の經を誹謗すること，未聞の經を拒否すること

aśrutvā (8)　聞かずして

aśva (59 馬)　〃

aṣṭau vimokṣā (27 八解)　八の解脫

asakāya (75 無身)　〃，身を有せざる，無身と有身(註釋は akāya と sakāya とに分つ，他に nāruci を aruci と ruci とに分つたのがあるを參照)

asakṛt (43)　一度ならず，屢〻の，繰返して

asaktatva (107 不著)　〃，不執著，無執著

asakti＝anāsakti (164 不著)　不執著

asaktitas (108)　無執著から

asaṁkalpanimitta (63 非眞分別)　〃相，無思惟の相

asaṁkliṣṭa (62 kliś 不染，無染)　雜染せられない，無染汚の

asaṁkliṣṭasaṁsṛti (139 不汙)　不染汚の輪廻，無雜染輪廻，asaṁkliṣṭasaṁsaraṇa も同じ，智慧資糧が不雜染の輪廻に於て增進を得る又は增進に導くといふ中，不雜染の輪廻の增進といふのがよくは判らない，變易生死を指すのであらう，輪廻が不雜染なるは無漏界に於ける生死で，卽ち變易生死である，通常の輪廻は雜染で，不雜染たり得ない，然し雜染は有漏であるから，術語決定以前として，單に染汚とあるのがよいであらう

asaṁkleśadarśana (41, 42 示現妻無染)　無染汚の見，又は示現

asaṁkhyeya (24 無數)　不可數量の，阿僧祇の

asaṁkhyeyaprabhedakālaṁ pāram (24)　涯とは不可數量の差別の時間である

asat (22 無)　〃，存しないこと

asati sadgrāha (73 非有爲有取)　〃，無に對して有の執

asatkalpa (59)　非有の分別

asadartha (149 無義)　非有の義，無の義

asadgrāha (73 非有取)　〃，無の執，有を無となす執著，顚倒の執著

asanmitra (6 非法朋)　不善友

asama (96)　無等の

asamakṣa (166 不現前)　不現前の，眼前に居るでない

asamāhita (99 dhā 不定)　三昧に入らざる，定心でない

asamāhitasvabhāva (122)　その自性の三昧に入らないもの，三昧に入らない自性のもの

asamudācāra (170 不起，不行)　不現行，現行しないこと，現はれないこと

asamudghāta (107 ghaṭ 不斷)　斷じない，不斷，不滅(ghaṭ と ghat との混雜あるが如し，然し同じ)

asamudghātana (107)　斷じないこと，不斷

asaṁpramoṣa (57 不忘)　忘失しないこと

asaṁpramoṣa (106 不忘)　〃

asaṁpraviṣṭa (49 viś 未入)　未だ入らない

asaṁbādhapravrajitāśraya (56)　逼迫を有せざる出家者の所依となるもの

asaṁbhṛta (50 bhṛ 無聚)　〃

asaṁbhṛti (51 無聚)　二聚の無いこと

asaṁmukhībhūta (123 不現前)　不現前である

asaṁmukhībhūte 'pi pratipakṣe (123 能治不現前時)　能對治が不現前であつても

asaṁmūḍha (64 muh 不愚)　愚でなく

asammoṣa (186)　無忘失のものよ

asamyak (106)　正しくなく，不正な

avatīrṇānāṁ saṁśayacchedana (20 入已斷其疑)　已に趣入したるものの疑惑の斷捨
avadya (105 罪)　〃
avadhāraṇa (149)　强語勢，決定(それのみを指して，他を雜へないこと，emphasis)
avadhāraṇacitta (91 實解心)　〃，決定心
avadhṛtya (90 dhṛ)　決定して
avabodha (83 解)　覺，覺悟，開覺
avabhāsa (181)　光明，顯現
avamāna (32)　輕賤，輕蔑
avaropaṇa (162)　植ゑること
avaropayati (162 ruh 下)　植ゑる，地に置く，蒔く
avarjana (100 不捨)　捨てないこと
avalokana (91)　見ること，觀
avavāda (143 能授)　教授
avavādaṁ ca yacchanti (162 與教授)　又教授を與へる
avavādasthitibuddhimukti (20 令住，令覺，令解脫)　教授と安住と覺解脫と
avavādādipratipatti (20 隨順教授？)　教授等の行
avavādānuśāsanī (90 教授)　教授教誡
avavādānuśāsanyāṁ yojayitavyāḥ (72 於教授中當分別？)　教授教誡に於て精勤せらるべきものである
avaśa (27 不自在)　〃
avaśaga (98)　支配下に在らざる，力の下に在らざる
avaśiṣṭa (8)　餘りの，餘されたる
avaśyakaraṇīya (167 必應作)　必然的の爲さるべきこと，必ず爲すべきこと，決定して爲さるべきこと
avaśyakaraṇīyatā (74)　必然に作さるべきこと
avaśyam (149 必)　必然的に
avasanna (128 sad)　弱くなつて居る
avasāna (13)　終
avasānagata (96)　究竟に在る，終りに在る
avasanaiva (11 -na-eva 盡)　終盡すること，盡きることのみ
avasṛjatām (77 sṛj)　與ふべし
avasṛjanti (77 施)　與へる，放つ
avasthatvāt (22 如是住故)　住するが故である
avasthā (125 位)　〃
avasthātrayastha (70)　三位に住する，三位に立つ
avasthāna (67)　固住，安止，位
avasthāpana (73 住)　住せしめること
avasthāpayati (92 sthā 解住)　〃 せしめる，止住せしめる
avasthita (153 sthā 住)　住した，住して居るもの
avahīyate (22 hā 減)　〃
avāpti (33)　得，到達
avāpnute (70 āp 得)　達する，得る，到る
avāpya (42 得)　得らるべき，達せらるべき
avikalā (80 應時)　〃，無缺減，無破壞
avikalpana (5 無分別)　〃
avikalpanakarma (40 無分別業)　〃
avikalpanayā (15)　無分別によつて
avikalpārtha (189 分別義)　無分別の義
avikalpika (161 無分別)　〃
avikalpitāni cāsya viśuddhibhāgīyāni nimittāni samudācaranti (181)　そしてこの無分別の清淨の相が現行する
avikalpe (73 無分別)　〃に於ける
avikārita (63 不轉)　不變異
avikṛtigamana (123 無異)　變化に至らないこと

avikopana (114 kup 不能動)　動亂無き
avikṣepa (16 不亂)　不散亂
avighāta (31 han 不乏，不令…有乏少)　妨げられない，妨缺の無い，苦しめなかつた，苦しめない，破棄しない，斷じない，無障の，無害の，斷の無い，滅の無い
avicalana (182 動無)　不動
avicitra (39)　多種でないこと
aviccheda (45 無斷絕)　不斷絕
avijānatas (8 jñā)　知らないものの
avitarkāvicāra (57)　無尋無伺
avitarko vicāramātraḥ (91 無覺有觀)　〃，無尋唯伺
avitarko 'vicāraḥ (91 無覺無觀)　〃，無尋無伺
avitṛpta (52 tṛp 無厭)　飽くこと無き，知足なき
avidyā ca bodhiś caikam iti (87 無明與菩提同一)　無明と菩提とは一である，と
avidyābodhāt (174)　無知の覺の故に，無明の覺の故に
avidyamānatā (48)　非有なること
avinivartanīyabhūmi (27 不退)　不退轉地
avinivartanīyabhūmiprāpta (176)　不退轉地に達したもの
aviparīta (74 i)　無顚倒の
aviparītakṛtyārambha (99)　不顚倒の所作の發勤
aviparītārthagrahaṇa (90 不顚倒受義)　不顚倒な義を取ること，顚倒した義を取らないこと
aviparītārthena (30 令不倒解故)　義の顚倒せられないことによる
avipaśyat (23 paś 不見)　見ずして
avipaśyan sad asan nirīkṣate (23 不見有，亦復不有見)　有を見ずして非有を見る
avipraṇāśa (16 正道不壞，51 不壞，不散)　不失壞，失壞の因でないもの
avipratisāra (51)　(不追變)後悔が無いこと
avipratisārādikrameṇa (104 不悔等次第)　〃，無追等の次第によりて，無後悔等の次第によりて
aviyoga (184 不離)　〃
avirahita (122 rah 不離)　離れない
avirahitatva (181)　離れないこと
aviruddha (5 不違)　矛盾しない
avivāsa (75 無障)　排斥なき
aviśeṣa (60 無二)　無異
aviśeṣeṇa (7 無簡別)　無差別に，差異なく，差別無く，特別の區別無く
aviṣamadāna (31 平等施)　〃，無不平等施
aviṣāda (172 無有退屈心)　退縮しないもの
avisaṁvādaka (163 不欺誑)　約束を破らざるもの
avisāra (143 不離)　離れないこと，散らないこと
avihetha (99 heṭh 不惱)　惱害しなかつた，惱害しないこと
avīci (18 無間)　阿鼻地獄，無間地獄
avītarāga (69 未離欲)　〃，未だ離れざる
avṛttir āśrayaḥ (36 不轉，不轉轉)　所依が不轉變である
avṛddhi (44 不增長)　〃
avekṣamāṇa (125 īkṣ 見)　觀じつつ
avetya (139 i 得解)　理解して
avetyaprasāda (28 不壞淨)　證淨
avetyaprasādalābha (28 得不壞淨)　證淨を得ること
avedaka (23)　感受しないもの，非受者
avedako jñānena tasyā duḥkhaprakṛteḥ

ayatnato-jñāna-pravṛtti(4 無功用智恆起) 無努力からの智が起ること，自然に智が起ること
ayatnaṁ(43 自然) 〃に，努力なくして，無功用に
ayathāvata(8) 不正にも
ayathārutārthatvāt(83) 文字通りの義でないこと
ayam īdṛśa(23) 此のかくの如き
ayaśasvī(123 惡名) 不名譽なる
ayas(153 鐵) 〃
ayaskānta(153 磁石) 〃，鐵を愛するもの
ayācamāna(130 無心求) 求めざるも
ayukta(50 yuj 不相應) 不精勤な
ayuktarūpa(8) 不適當なもの，不如理のもの
ayutasaukhya(129 樂不別) 不相離の樂(ayuta は yu の過分に a のついた語，別れて居ない，離れることの無いといふ意味，結合したことの無いといふ意味に譯すこともある，元來，本より離れて居ることの無いのを指すから，又合したこともないので，不別，不相離，不相合ともなる，勝論の和合句義が ayutasiddha といはれて居る)
ayoga(3) 不正當，不合理，不適當
ayogāt(149 不然，由起？) 不合理であるから，不合理の故に
ayogād dhetutotpatter virodhāt svayam asthiteḥ(149 因起及從因，相違亦不住) 不合理の故に，因より生ずるが故に，相違の故に，自らは住せざるが故に
ayoniśatas(132) 非如理から，ayoniśomanaskāratas と同じ，頗なる爲に無理がある，-śatas は奇，-śas か -tas のみでよいもの，釋に正しきものがある
ayoniśaś(8) 不如理で
ayoniśomanasikārādīnava(8 邪思) 不如理作意の過患
arakṣa(186 不護) 〃
araṇye(167) 森林に於て(āraṇye 森林に於て，の方ならば，普通は -ka がつく)
arihat(127 阿羅漢) 〃(阿羅漢を殺賊 ari-han と解するのと同じ語)
arihatāṁ loke pratyekabodhibuddhānāṁ(127 羅漢及緣覺…世間) 諸の阿羅漢にも，諸の獨覺にも…世間に於て
arṇava(97 海) 〃
arati(92 不樂) 〃，不喜
arativyāpāda(123 憂) 瞋を樂はないこと，不樂瞋，不愛喜に對する瞋
aranā(184 無諍) 〃
arabdha(150 rabh 起) 起つた，始まつた
arucimanaskāra(74 不欲修作意) 非愛喜作意
arka(43 日) 太陽，光
arci(156 火) 〃
arcibhūta(182) 焰となつたる，焰
arciṣmat(182 焰慧) 〃地，焰を有するもの
arṇava(24 海) 〃，浪立つ海，浪
arūpiṇī vijñaptiḥ(61 非色識) 〃
arūpin(54 非色) 無色
artha(1 義) 〃，境，意味內容，物，利益，實利
arthakriyāguṇa(14 作大義功德) 利行の功德
arthakhyāna(55 義光) 義の顯現するもの
artha-gati(1 義類) 義趣
arthacaryā(116 利行) 〃

arthacittanatas(136 -cintana の誤？)義を思惟することから
artha-jña(1 義智，知義已) 知義者，義を知るもの
arthataḥ(49) 眞實に，實際に，目的の故に？
arthaparyeṣin(8 求義) 義を求めるもの
arthapratipādana(104) 義を與へること
-arthaṁ(1) 爲に
arthavibhāvanā(1 開作，作諸義) 義を明かにすること
arthavyutpatti(171 得學義) 義の啓發
arthasaṁjñā(76 如財物想) 〃，事物の想
arthasaṁpatti(81 義成就) 義の成就
arthasiddhyadhikārataḥ(143 成就利益故) 義の成立を主題とするから
arthādibhedena(118) 義等の區別によりて
arthāntara(82 別義) 〃
arthābhīkṣṇyād(54 數故) 義の繰返しの故に
arthijana(113 乞者) 〃，乞ふ人々
arthitva(130) 求めること，願ふこと
arthe vinītipratipatti(20) 義に關する調伏の行
arthopagamanāt(79 得義易故) 義を得るから，目的に達するから
ardhapañcama(116) 四つ半，半分を第五とする數
arvāg(74) 此方に
arha(17) 尊き，價する，適切な
arhati(4 arh) 得る，能ふ，價する
alaṁkaroti(1 kṛ 莊嚴) 莊嚴する
alaṁkāra(1 莊嚴) 〃
alaṁkriyate(2 kṛ 須莊嚴爲) 莊嚴せられる
alakṣaṇa(61 無相) 無特質
alābhin(175 不得) 得ないこと
alāsa(190 懈) 怠墮
alīna(114 lī 無下，無著) 無退，無染
alīnatva(180 無劣) 無下劣
alobhādiguṇopeta(105 具德) 無貪等の功德を具したる
alobhādisahajā cetanā(104 無貪善根與思俱生) 無貪等と俱生する心
alpa(4 小，少) 〃，〃
alpataratama(150 至極少位) 一層少なく，極少なく
alpamātradāna(115 於少施) 僅かばかりの布施
alpaśrutatva(51 少聞) 少しく聞くこと
alpānā mupabhogya(49) 少量の食物
alpāvaramātra(188 少有所得) 唯少しく下劣のみなる
alpenādhigamena(114 以少得) 僅かな證得によりて
alpodaka(49 水少) 〃，水も少なく
avakāśa(81) 機會，餘地
avakāśadāna(44 爲容受) 餘地を與へること
avakāśasyākṛti(81 拒請) 請問の機會を與へないこと，質問の餘地をなさないこと
avakramaṇa(61 入) 〃，降下
avagama(24 解，通達) 〃，理解
avagamya(92 gam 見) 知りて，考へて，達して，見て，到つて
avagamyāśu vikṣepaṁ(92) 速かに散亂を知つて
avajñā(7) 輕蔑，輕視
avatarati(4 tṛ 入) 入る，悟入する
avatāra(5 入，入諦) 〃，悟入，趣入
avatāraṇa(82 令入) 入らしめること，趣入せしめること
avatārita(20 tṛ) 趣入せしめられた

abhimata (108 man)　願はれた
abhimānika (124 增上慢者)　〃
abhimukhataḥ (54 對故)　對向の義の故に，對觀對向の故に
abhimukhatvād (54)　＝abhimukhatas
abhimukhī (182 現前)　〃
abhimukho dharmaḥ (54 向涅槃法)　對向する法，對向の法
abhiyoga (89)　精勤
abhirata (129 ram 樂)　愛樂した，喜んだ，滿足した
abhiratatva (69 樂)　樂うたこと
abhiratimāhātmya (27 歡樂大)　愛樂の偉大性
abhiramate (86 ram)　愛樂する
abhirāma (27)　愛樂
abhirūḍha (58 ruh)　出來上つた，昇つた
abhilapitum (58 說)　言說することを
abhilāpaka (86 喧)　喧躁，喧しく喋ること
abhilāpaṁ ca śikṣayati (162 教語)　言語を學ばしめる，語ることを學ばしめる
abhilāṣa (73 樂求，求)　欲，願，欲望，貪欲
abhivṛddhi (114 增)　增進
abhiṣikta (178 受職)　灌頂せられたる（字義はそそがれた，灌頂，之を受けるのは太子位，王位を得ることであるから，受職）
abhiṣiktaka (96 受職)　灌頂せられた者（灌頂は阿闍梨の職位を受くるを示すから受職といはれる）
abhiṣekasya prāptir bodheś ca (160 受職及以得菩提)　灌頂と菩提とを得ること
abhiṣekāya (140 受職)　受職の爲に，灌頂の爲に
abhisaṁdhi (82 旨趣，節)　〃，祕密，意趣
abhisaṁskaroti (21 kṛ)　行ずる
abhisaṁkaraṇa (71)　爲すこと
abhisaṁbandha (168)　結合
abhisaṁbuddha (48)　現等覺した，正覺した
abhisaṁbuddhā abhisaṁbhotsyante 'bhisaṁbudhyante ca (71 budh 曾解，當解，今解)　正覺せられた，正覺せられるであらう，また正覺せられる
abhisaṁbudhyate (103 budh)　正覺する
abhisaṁbhotsyate (4 budh)　正覺するであらう
abhisaṁbudhya (3 budh 得菩提)　正覺して
abhisaṁbodha (157 菩提)　三菩提
abhisaṁbodhataḥ (70 得菩提)　現覺するから，正等覺の故に
abhisaṁbodhi (61 成正覺)　〃，正等覺
abhisṁbodhi (175 成道)　現等覺
abhisamaya (94 得)　現觀，直觀，證得
abhisamita (94 i 所得)　現觀された
abhīkṣṇa (130 恆)　しばしば，絕えずに
abhīkṣṇa (54 相續法)　繰返し，常恆の（梵文に abhīkṣṇaṁ dharmo 'bhidharmaḥ とあるが，數者是相續法とシナ譯にある，abhīkṣṇaṁ は數者に當ると見れば，dharmo が相續法に當ることになるか，さうではなからう，然し繰返す法とつゞくのでもないから，結局，論は法が繰返しのものであるとでも譯すべきか）
abhīkṣṇaṁ (6)　繰返し繰返し，數〻
abhīkṣṇatvād (54)　＝arthābhīkṣṇyād

abhūmipraviṣṭa (147 未入地)　未だ地に入らざる
abheda (48 無別)　別異が無いもの
abhedena (70 總意)　差別無く
abhedya (96)　破られない，破れざる，不壞の
abhedyacittatā (28)　分破しない心
abhedyatā (16 不可壞)　不可分破，破壞すべからざるもの
abhyāsa (98 修習，勤習)　〃，數習，數〻行ふこと，串習
abhyudaya (139 增進，勝報)　增進，上進，繁榮，成功
abhyudaya＝udaya (37)　生
abhyudīkṣate (36 īkṣ)　眺める，見る
abhyupagata (21 gam)　利せんと誓つた，企てた，利せんとして近づいた
abhyupagatasatvākṣayatvād ato 'pi saṁpannā veditavyā　(21) 利せんと誓つた衆生は無盡であるから．此故に成就も亦無盡であると知るべきである
abhyupagantum (153 gam 勇猛？)　近づくこと，認容すべく，承認すべく
abhyupagama (128 忍)　耐へること，忍ぶこと，許すこと，認めること
abhyupagamaḥ śikṣādattakādīnāṁ daṇḍakarmaṇāṁ (55 二者順教，謂與學羯磨治罰)　認容と，卽ち學に隨つて與へられた者等に對する治罰に關して
abhyupagamana (20 信受)　〃，近よること，認容，認受
abhyupāya (125 方便)　〃
abhyupeta (173 i 欲)　近づいた
abhyeti (18 i)　赴く，行く
abhra (181 雲)　〃
abhrānta (59 bhram 無迷)　迷亂の無い
amatsariṣu vartate (104)　不慳貪の中に存する，不慳貪に於て働く
amanaskārabāhulya (51 多忘)　不作意の多いこと
amama (20 無執)　無我執
amamāparicchinna (46 無分，相續恆不斷)　無我所無分割な
amala (1 無垢)　〃な
amalāśraye (48 依無漏界)　無垢の所依に於ては
amātsaryayuta (104 具住不慳故)　不慳貪を修せる
amānusasaṁgha (133)　非人衆（諸天をいふ）
amukha (46 諸相不現前)　無方面な，不現前な
ameya (33)　無量の
ameya (120)　不可量の＝aprameya
ameyaśubhāśraya (12)　無量の善性の依止
ameyā raśmayo yadvad vyāmiśrā bhānumaṇḍale (39)　如何なる仕方で，日輪の中に於て，無量の光線が混じて居ても，如何なる仕方で日輪の中に無量の種々なる光線があつても
amaitrīkarunāśaya (180)　無慈悲の意樂
amokṣabhāgīyakuśalamūla (12 無解脫分善根)　解脫分の善根の無いもの
amokṣabhāgīyaśubha (12 無有解脫分)　解脫分の善なきもの
ambara (36 空)　虛空
amoṣatā (29)　失はないこと，奪はれないこと
ambu (44 衆流)　水
ayatnatas (4)　無努力から，無努力の故に

dhya はウマズメ，石女，功果無い）

abandhyakālakaraṇa(74)　無益でない一定時に作すこと

abandhyaprayoga(164 不空果)　不空果の加行

abandhyabuddhajanmatve(118)　佛の出世の虚しからざることに於て

abuddha(70 無佛世)　無佛世，無佛の

abuddhanāma(26 無佛)　無佛名，佛名の無い所

abuddhanāmeṣu ca buddhanāmasaṁśrāvaṇāt(26 無佛令聞佛)　そして佛名の無い所に於て佛名を聞かしめるから，そして無佛名に於て佛名を聞かしめるから

abuddhabimbadarśana(36)　佛の影の見られないこと，佛の影の現はれないこと

abuddhavacanatva(3 非佛說)　佛說でないこと

abudha(2, budh 不覺)　覺知せられない

abodhabodhapratibodhatas(174)　無覺によつて覺の別々覺の故に

abodhabodhād(174)　無覺の覺の故に

abhajana(16)　與らないこと，親近せざること

abhayadānasyāpāyasaṁsārabhītebhyas tu abhayaṁ(111～112 畏施以救濟惡道生死畏故)　然し無畏施の中では惡趣と輪廻との怖畏からの無畏が最上である

abhayapradāna(115 無畏施)　〃

abhaviṣyat(6 bhū)　あらうに

abhājanatva(39)　非器たること

abhājanabhūta(37)　非器たる

abhāva(3, 無體，無法)　無，非有

abhāvabodhāt(174)　非有の覺の故に

abhāvabhāvatā yā ca bhāvābhāvasamānatā(65 無體體無二)　非有と有たるとまた有非有の等しいことと

abhāvaśūnyatā(95 無體空)　〃，非有空性

abhāvāl lakṣaikāntyād anuvṛtter nirodhataḥ(149 無體與相定，隨轉並滅盡)　無の故に，相が一定して居るが故に，隨起するが故に，滅の故に

abhikāma(83 所欲 yathā-)　欲

abhigama(77 得果)　到達，達すること

abhigamanāt(54)＝gatitas

abhigamyate sūtrārtha etenety abhidharmaḥ(54 解者釋義法，由阿毗曇修多義易可解故？)　論はこれによつて經の義を通ずるからである，經の義が之によつて解せられるから論である

abhighātavaśa(152 手力自在)　打擊の自在

abhijñāvihāravaśavartaka(106 通住)　通慧に住するに自在を得るもの

abhijñā(25)　通慧，神通

abhijñāguṇa(181)　神通の功德

abhijñādibhir viśeṣakair guṇair samudagamaḥ(20 由得神通等諸勝功德故)　神通等の殊勝の諸功德によりての證得

abhijñārthaṁ(92 爲通故)　通慧の爲に，通慧を得んが爲に，神通の爲に

abhijñādiprabhāvāśraya(12 一切神通變化依止)　通慧，又は神通，等の威力の所依

abhidyotana(53 能示)　明かにすること

abhidyotayati(89 dyut)　明かにする

abhidhānagāmbhīrya (82 依諸深語由廻語)　詮表の甚深

abhidhyādaurmanasyādi(92 貪憂等)　貪と憂と等

abhidhyā vyāpado mithādṛṣṭiḥ(110 貪欲，瞋恚，邪見)　〃，貪瞋邪見

abhinanda(72 希望)　歡喜

abhinandana(118 希望)　〃，歡喜

abhinandanā(102 希望)　喜悅

abhinandamāna(102 nand 起希望)　喜悅しつつ

abhinandanīya(80 渴仰)　令生歡喜，歡喜せしめる

abhinandayati(127 nand 生極欣樂？)　歡喜せしめる

abhinirvartana(73)　生ずること

abhinirhāra(130 增長)　〃，引發すること，引出すること，生ずること，完成すること

abhinirhṛti(142 成就)　〃，引發

abhiniviṣṭa(157 viś 著處，執)　執著したる，執著せられた，執著したるもの

abhiniviśate(76 viś 著)　執著する

abhiniṣkramaṇa(61 踰城出家)　出家

abhinna(55 bhid 無別，不離散)　別異でない，無區別

abhinnakārya(17)　無區別の所作

abhinnakāryakriyātva(17)　無區別の所作が作されること

abhinnatva(59 無差別)　無別異性，異なる無きこと，無別たること

abhinnasaṁtānādhimokṣalābhatas(68)　別異の無い相續について信解を得て居るから(相續は身心，身心何れをも指す)

abhipūjin(131)　尊崇しつつ

abhiprāya(82 意)　意趣の

abhiprāyārthanaya(32)　意趣の義の道理

abhiprāyika(6)　趣意の

abhiprāyikārthavibodha(17 解了大乘意)　趣意とする義を覺知すること

abhiprāyika(138 義意)　意趣

abhiprāyikenānene bhavitavitavyam(6 應解此意？)　此趣意がなければならぬ，此趣意があるべきである

abhipreta(12 i)　意趣せられた，意味せられた

abhipretasthānopapattiḥ(177 隨所欲處而受生故)　願はれた處に於ての生

abhipretārthasiddhyarthaṁ(148)　願はれた利益の成就の爲に

abhibhavagatitaḥ(54 伏故反解故)　制伏と通ずるとの故に

abhibhavati(109 bhū)　打勝つ，優る

abhibhavatīty abhidharmaḥ(54 伏者是勝上法？)　論は制伏するのである，制伏するから論である

abhibhavanād(54)　＝abhibhavatas

abhibhavamāhātmya(22 勝出大)　超出の偉大性

abhibhavārtha(9 不及義)　打勝つといふ義

abhibhāsin(137 話)　語りつつ

abhibhuvas tathā 'stau(27 八勝處)　〃，勝處もまた八である

abhibhūti(8 不及？)　打勝つこと，優れて居ること

abhibhūyagantrī(22 勝出)　超出に至る

abhibhūyate(40 bhū 退)　打勝たれる

abhibhūyagamana(22 勝出)　超出に至ること，超出を得ること

abhibhvāyatana(27 勝處)　〃

abhūta(59 虛)　非實の，不眞の

abhūtakalpa(62 不眞)　非實の分別

abhūtatvāya(165)　不眞實性の爲に

abhūtaparikalpa(65 妄分別，不眞分別)　非實の妄分別

abhūtaparikalpanāmātra(94 唯不眞分別)　唯非實の妄分別のみ

abhibhūya sarvathā(96)　何處にても征服して

aparāparatva (154 別別起)　別々たること
aparārthatva (11 無他利)　利他でないこと，利他ならざること
aparicchinna (46 chid 不斷)　無分割な，不斷絶な
aparicchinnam ābhāsam (92 圓明)　斷絶の無い顯現を
aparicchinnākāra (181 不作分段？)　不斷割の行相
aparijaya (51)　無勝利
aparityāga (52 不捨)　〃
aparityāga (98 不捨)　〃
aparinirvāṇadharmāṇaḥ saṁsāravartmātyantānupacchedāt (124 不樂涅槃者，由生死險道不斷絶故)　不般涅槃法のもので，輪廻の道を畢竟して斷じないからである (法は -dharman, 性質のもの，pl. nom. が -dharmāṇaḥ)
aparinirvāṇadharmaka (2 無般涅槃法)　〃　…のもの
aparipūrṇabodhisaṁbhāra (124 於二聚未滿者)　菩提の資糧の未だ圓滿しないもの
aparimāṇa (10 無量)　〃の
aparimārgaṇa (130 不簡？)　求めないこと
aparokṣa (25)　明晰，不可見でない
apavadate (123 vad 呵責)　〃する，非難する，誹る
apavadana (133 呵責)　〃，非難されること
apavāda (60 謗)　損減 (有を無と執著すること)
apaśabda (80 不正聲)　不正な聲
apaśabdavigata (80 離不正)　無缺減，不正な聲の除かれたる
apaśyantaḥ (170 不見)　見ないから
aparipūrṇasaṁbhāra (13)　資糧の圓滿しないもの，不圓滿の資糧のもの
aparihāṇīya (53 hā)　退失せられざるべき，省かれざるべき
aparihaṇīyatva (122 不可退)　退くべきものでない，捨つべきものでない
aparihāṇīyārthena (31 令永不退故)　義の捨離せられないことによる
aparihīṇasya (177 不退)　退かないものの
aparīkṣaka-jana (2, 不別)　觀察し得ない人々
aparuṣa (80 不澁)　粗惡でない，無惡な，惡口でない
aparuṣavacanāt (78 不惡報故)　惡口が無いから，惡口をしかへさないから
aparocchrāya (16)　他の勢を增すこと
aparyātta (79 dā 不可窮)　終無き
apaha (124 斷)　〃，除くこと
apāya (6 極熱惡道)　惡趣，惡道，地獄
apāyagamana (12 墮於惡道)　〃，惡趣に往くこと
apāyād rakṣate (162 防害)　不幸から護る，害から護る
apāyopapanna (26)　惡趣に生れたもの
apārthika (77 無理)　無義のもの
apāsya (170 as)　捨てられて
api khalu (157)　若し實に…ならば
api ca (17)　更に
apuṇyaprabhāvāt (8 緣比非福)　非福の力から
apuṇyaskandha (6 非福聚，非福)　非福德蘊，非功德蘊
apunaruktatva (78 不重說)　重複して說くことの無いこと
apūrvaprakāra (68)　先の種類でないもの
apūrvācitaśubhaḥ (6)　過去世に積まれた善なきもの

apūrvotpattau (150)　前に生じなかったものに於て，…に關して
apṛthaktva = bahutva (48 不多)　不異たること，異にあらざること
apekṣatva (185 假)　期すること，待つこと
apekṣya (122 īkṣ 觀)　待して，對して，關して
apoha (173 除)　除く，離した，離
apraṇāśa (138 不可壞)　不壞失
apratikāṅkṣin (165 不求)　期待せざるもの，報を願はざるもの
apratikūla (79)　隨順でない
apratiprasrabdha (37)　不休息
apratima (9)　無比の
apratiṣṭhanirvāṇa (22 無住處涅槃)　〃
apratiṣṭhasamāviṣṭa (47)　無住處涅槃に入つたる
apratiṣṭhasaṁsāranirvāṇatva (124)　不住輪廻涅槃たるもの
apratiṣṭhita (36)　住しないこと，無住處の
apratiṣṭhitanirvāṇa (147 無住處涅槃)　〃
apratiṣṭhitanirvāṇaṁ buddhānām acale pade (41 住佛不動句，不住於涅槃)　不動の立場に於て諸佛の不住涅槃といふ最高威力が得られる
apratiṣṭhāna (182 不住)　〃
apratiṣṭhāpanād (48)　住せしめないから，住せしめることが無いから
apratisaṁkhyānakaraṇīya (135 任運現前？)　無簡擇に爲さるべきこと
apratisaṁkhyāya (130)　簡擇せずして
apratisaṁkhyāyopekṣa (187 不知已捨)　不簡擇の捨
apratihanayoga (72 不生誹謗？)　誹謗しない精勤，無敵對の精勤，誹謗を伴うて居ないこと
apratyakṣa (111)　非現量，眼で直接見るのでなく
apratyākrośana (100)　罵り返すことをしない，罵り返さないこと
apratyātmavedanīya (138)　自內證でないもの
aprapañcātmaka (58 無戲論)　無戲論を性とするもの
aprapācya (43)　成熟されない
aprabhāsa (39 不照)　照らさないこと
apramattatā (31)　不放逸たること，不放逸
apramāṇavistīrṇasūtrādidharmayogāt (171 由無量修多羅等廣大法爲緣故)　無量の詳細な經等の法と結合せるが故に，…具足するが故に
apramāda (167 離誼)　不放逸
apramādakriyā (86)　不放逸の所作
aprameya (7 無量)　〃の
aprameyakuśalamūlāśraya (12 無量善根依止)　無量の善根の所依
aprameyatā (39)　無量性
aprameyatva (10 無有量)　無量なること
aprameyasaṁkhyāgata (92)　無數劫に及んだ
aprayukta (124 yuj)　精勤しない，離れた
aprasava (105)　生じないこと
aprahīṇatva (23)　捨離せられないこと
aprāptaparihāṇitas (6 應得不得)　未だ退失に到らないから
aprāptiparihānitas (8 未得退故)　未得の退の故に，未到達が去るから
abandhya (117 有益)　無益でない，有益，無效果で無い
abandhya sarvathā (117 純？)　すべての場合に有益なるは
abandhya (74)　無益の，不虛の (ban-

作す

anaikāntika(150 非一向)　不定な，非一向な，非一定

anta(60 邊)　二邊，二極端

antadvaya(53 二邊)　〃

antadvayānuyogapratipakṣeṇa vinayaḥ (53 立毗尼者爲對治受用二邊)　律は二邊に耽著するを對治することによりて立てらる

antarābhava(152 中陰)　〃，中有

antarāya(30 障礙)　〃，妨礙，障

antarāyakara(170 障，爲障礙)　障を爲すもの

antarāyin(3)　障，阻止，消失，隱

antareṇa(149 若無)　無くんば，無くしては，除いては，後に

antardhāya(46 dhā 滅)　隱沒して，隱れて，死して

antardhi(43 沒，滅盡)　沒，隱沒，滅盡

antarbhūta(128 入…中)　含まれた

antikād(187)　よりも

ante(150)　後に，最後に於て

antyā sakaruṇā sthitiḥ(167 定悲)　悲と共なる究竟の住，悲を有する究竟の住

andhās cakṣūṁṣi pratilabhante(35 盲者得視)　諸の盲者は諸の眼を得る

anyakārita(23)　他によつて爲される，他によつて爲されたる

anyakāritaṁ darśanādikaṁ na pratītyasamutpannam iti(23 謂眼等諸根體非緣起耶)　見等のものは他によつて爲されたもので，緣起したのでないといふ

anyatīrthya(124 外道)　〃，他の外道にても，單に外道にても可

anyatīrthyamokṣasaṁprasthitā nānākudṛṣṭigāḍhabandhanabaddhatvāt(124 外道僻見者，由欲向解脫爲種々僻見堅縛所縛故)　他の外道の認める解脫に發趣して，種々なる惡見の堅い繫縛に縛せられたが故に

anyatra(158 唯)　〃(＝nānyatra)

anyatra…anyatra(37 或…或)　或處では…或處では，一所では…他處では

anyatra rāgād(87 有異貪之法？)　貪より以外の處に，貪を除いて，貪以外に

anyatva(3, 異)　〃，他のもの

anyatvābhāvāt(22 無異體故)　異性が無いからである

anyatve(68 異相)　異たるに於て，異たるに關して

anyathā(5 異)　異なつた，他のもの，然らざるもの，然らざれば

anyathāpi(4)　然らずして…も

anyathāpti(35)　異に達すること，轉變に至れること

anyathāpratyavagama(5 異智生)　異なつた確知

anyathābhāve(68 無異)　別異の無なるに於て，無別異に關して，變異の無なるに於て

anyathā vā mābhūdity abhisaṁskaraṇāt (71)　或は其他であること勿れと考へて爲すから

anyadeśotpādanirodhe(152 此處死，彼處生)　或處に生れて滅した時に

anyadhātu(26)　他界

anyabhūmigata(15 進餘地)　他の地に行く，他の地に在る

anyayānacitta(14 異乘心)　〃

anyayānamanasikāramala(182 起異乘心垢)　他の乘を作意するの垢

anyānyakriyā(37)　次次の所作

anyāśrayaparāvṛttibhyas tadviśeṣa(36) 他の轉依よりもそれの優つて居ること

anyūna(65 不減)　〃，缺かない，劣らない，卑しくない

anyeṣāṁ bodhisatvānām anabhisaṁbodhān na ca yuktaṁ vaiyarthyaṁ (48則應餘菩薩不得菩提，由二聚不虛故，是義不然)　他の諸菩薩には不正覺あるが故に，而も無用なことは正しくない

anyonyanairantarya(86)　相互無間斷の

anyonyaṁ(168 互)　相互に

anyonyaṁ saṁgrahataḥ(115 相攝)　相互に攝するから

anyonyaviniścaya(98 互顯)　相互決定

anyonyavirodha(4 相違義)　相互相違

anyonyānukūlya(32)　相互隨順

anyonyaikakāryatva(49)(-nyanaik- の an が多い)　相互の同一所作たること

anyair bhāṣito na yujyate(3)　他の敎徒によつて說かれたことは必ず適當ではない

anvaya(23 i)　隨順する

anvaya(75)　隨ふもの

anvarthanāma(174 名皆依義立)　義に順じた名

anvīkṣita(136 īkṣ 思得)　觀察した，研究した

anvīkṣati(112 īkṣ 見)　考へる，見做す

anveti(113 i 見)　見る，見做す

apakarṣa(80 拔)　拔除，損減

apakarṣaṇa(57 拔除)　除，排除

apakāra(83 惡，加損，不饒益事)　〃，作害

apakāramarṣaṇa(32)　作害を忘れること

apakāramarṣaṇakṣānti(105 他毀忍) 作害を忍耐する忍(卽ち忍辱)

apakāriṇyupakāribuddhimat (32 不益得益想)　作害者に對して恩者であるとの覺を有する

apakārin(32 不益，不饒益)　作害者

apakva(42)　未だ成熟せざるもの

apakvasaṁpakvamati(175 未熟亦已熟)　未熟と已熟との慧のもの

apakṣapāta(161 無偏)　無偏頗

apekṣāyukti(168 相對道理)　〃，觀待道理

apagama(111 斷)　除かれること，消失，去ること

apajalpa *or* ajalpa(56)　無言のもの

apatya(89)　子，子孫

apatyasnehādhimātratā(89)　子に對する親愛の增上，子に對する增上の親愛，子に對する過度の親愛

apadeṣṭṛ(163)　指示者

apanaya(101 除)　〃

apanayati(101 nī 除)　〃く，取去る，棄てる

apanayābhiprāya(110 欲拔除)　除くことを願ふこと

apanetavya(145 nī)　取去らねばならぬ，棄てねばならぬ

apara(6)　最上ならざる，劣つた

aparaparyāyaḥ(64 aparaḥ paryāyaḥ)　他の說明門，他の異門

aparyasta(59 無倒)　顚倒の無い

apayāna(35)　離れること，去ること，退くこと

aparaḥ pratipattiviśeṣaḥ(21)　他の行の差別

aparapratyayātmatā(180 無待)　その內心が他に緣つて居ないこと

aparādha(101 過失)　罪，罪過

aparādhamarṣaṇa(101)　罪を許すこと，罪を忍ぶこと

しむる

anutpattikadharmakṣāntilābhe ekāyanatvaṁ (17)　無生法忍を得るに於て一道たるものがある，一道たることは無生法忍を得た所に存する

anutpattikadharmakṣāntilābhāvasthāyam (49 得入無生忍)　無生法忍を得る位に於て(忍はほぼ智の意味)

anutpattikadharmeṣu kṣāntiṁ prāptas (163 得無生忍)　諸の無生の法に於て忍智に達したもの

anutpāda (3)　出世が無いこと，生が無いこと

anutpattidharmakṣānti (68 無生法忍)　〃(忍は智の直接の前程，廣くは智と同じ)

anudāracitta (122 無大心)　廣大でない心の，心の廣大でないもの

anudeśanīprātihārya (20 隨教)　教誡神變，教誡示導

anudeśa (81)　教示

anudvega (51 不厭)　無厭離

anudvega (100 不生厭)　厭はないこと

anudharmacāritva (85 隨行)　隨法行，隨法を行ずること

anudharmacārin (84)　隨法行者

anudharmaṁ carati (85 說隨行)　隨法を行ずる

anudharmaṁ pratipadyate (*or* prapadyate) (85 如所說隨順修行)　隨法を行ずる

anunayapratighābhāvāt (186 無喜憂故？)　隨貪と瞋恚とが無きが故に

anunaya (ananunaya とも 180 離著)　無貪，無著

anunnata (80 離慢)　不高，高ぶらない，無慢な

anupakṛtya (130 kṛ 不奪他物)　侮辱せずして(不奪とあるから，もとのanupahṛtya がよいであらう)

anupaghāta (99 不惱)　他を損惱しないこと

anupaghātadṛṣṭi (172 無惱)　無惱害見，惱害でない見のもの

anupacitaśubha (6)　其善が未だ積まれて居ないもの

anupaccheda (75)　斷絕無きこと

anupadeśāt (4 非教授)　教無きが故に

anupadhiśeṣanirvāṇa (11 涅槃)　無餘涅槃，無餘依涅槃

anupadhiśeṣanirvāṇāvasānatva (11 涅槃時盡)　無餘涅槃に於て終盡すること，無餘依涅槃に於て盡きること

anupama (35 無比)　〃な

anupamaśreṣṭha (35)　無比最勝の

anuparivarti (188 隨…行)　隨つて働くこと

anupalambha (3 不可得)　見られないこと，得られないこと

anupalambhataḥ (55 不可得)　不可得から

anupahṛtya (130 hṛ 不奪)　取去らずして，破壞せずして(anupakṛtya と改めたのを却つてもとのままとなすがよからう)

anupācana (30 隨成熟)　〃

anupāyataḥ (34)　非方便から，無方便から

anupāyatva (5 非佛菩提方便)　非方便であること，方便でないこと

anupāyatvāt (4 非行)　非方便たるが故に

anupekṣaka (16 不捨)　無關心でない

anupraviṣṭa (7)　悟入せる

anupraveṣṭa (80 viś 入)　隨入した

anuprāptasvakārthānāṁ premakarāt (80 令得自利果故)　諸の自利に逮得せるものを樂しましめるから

anubodhabodhād (274)　隨覺の覺の故に

anubhava (23)　領納

anubhāva (71 術力)　力，勢力，威力

anubhāvadarśanaprīyaṇā (71)　威力を見ての喜

anubhūti (28)　領納，感受，經驗

anumodana (118 隨喜)　〃

anumodanā (71 隨喜)　〃

anuyāta (24 yā 行)　隨行する，隨行した

anuyoga (53 受用)　耽著，專念，勤めること，努力，精勤

anuyogato'pi (154 由此難問)　非難することからも，難詰からも，檢察からも

anurūpa (11 相似，逗機宜)　隨應の，一致の，等しい，應ずる，適合の，適切な，隨順する

anurūpatva (79)　隨順すること

anurodha (15 隨順)　從ふこと，順ずること，考慮すること，餘儀なくせられること

anulābha (114)　得

anulomaḥ pratilomaḥ pratītyasamutpādaḥ (179 謂逆順觀十二因緣)　順觀と逆觀との緣起である

anulomaḥ pratītyasamutpādaḥ (179 謂逆順觀十二因緣)　順觀の緣起である(逆順觀の逆觀はシナ譯には文句の上では明瞭にさう擧名せられては居ない，それの智等の働きが明等であるといふのが逆觀に當る，然しチベット譯には anulomaḥ の次に pratilomaḥ があるといはれるから，然らば梵文のみが逆の字を脫したのである)

anuvartaka (116 隨轉)　〃，隨ひ行ふこと

anuvidhāyitva (151)　隨順するもの

anuviśet (77 vis)　入るであらう，從ふであらう

anuvṛtti (140 隨轉)　〃，隨起，隨ひ行ふこと，隨ふこと

anuśaṁsa (2 功德)　〃

anuśaṁsa (82 功德)　〃

or ānuśaṁsa (〃 〃)　〃

anuśaṁsā (92 稱揚)　〃，稱讚，功德

anuśaya (80)　隨眠

anuśāsanī (97)　教授，教誡

anuśāsti (129 śās)　教へる，教へられる

anuśiṣṭa (120)　教へられた

anuṣṭhāna (40)　成ずること，爲すこと，實踐，實行

anusaṁdhi (54 釋所以？)　相合，相續結合

anusaṁbaddhacārin (86)　相屬した行，連結した行，繼續した行

anusara (3 隨)　隨，隨順

anusāra (7 隨，隨順)　隨順すること

anusāreṇa (17) 隨つて，順じて

anusmaraṇe (73)　憶念

aneka (5 無量)　非一の，多くの

anekaśatakṛtva (78 無量無數？)　幾百回も，多百回も

anekāṁśavādaparigraha (155 墮一向執)　非一向說を取ること

anena paryāyeṇa (102 以此門)　此方法で

anenābhisaṁdhinā (38 由此義意)　此趣意によりて

aneya (180 離偏)　無動，他に引かれない

anela (80 不絕？　無劣？)　無害な，無過失な，淸純な

anṛṇaṁ karoti (162 絕外債)　無負債と

無邊の惡作
anantasatvādhiṣṭhānāt (17〜18 依無邊衆生)　無邊の衆生の依止の故に，無邊の衆生に及ぶから
anapekṣa (18 忘)　顧みないこと
anargha (2)　無價の
anasvādana (89 不味)　味著しないこと
anākāratva (46 離行相)　行相の無いもの，無行相なこと
anāgata (3)　未來の
anāgatabhayavat (3)　未來に於ける怖畏の如く，未來の怖畏の如く
anāgāmitā (69 阿那含)　〃，不還たること，不還
anāgāmitāyoga (69)　不還たるの精勤
anācāryamuṣṭidharmavihitatva (80 不慳法而說)　師拳の無い法を說敎すること，無師拳法を與へること
anātmya (91)　無我
anādara (55 無恭敬心)　尊重することの無き，無尊重
anādikālika (159 無始)　無始以來のもの，無始時のもの
anādhāya (128 dhā)　與へずして
anānākāra (169 無異相)　無異の行相
anānākārabhāvita (169 觀察無異相)　無異の行相のものと考へられる
anānuṣaṅgikaṁ (72 深？)　急に
anāpravṛtti (134 不行)　〃，行じない
anābhoga (3 無功用心)　無功用，無努力
anābhoganirvikalpajñānavihāra (167 由智得無生忍，無分別智自然住)　無功用の無分別智が住すること
anābhogāpratiprasrabdhabuddhakārya (37 如來事業恆無功用)　無功用不休息の佛の所作
anābhogāya (140 入無功用)　無功用の爲に
anāmiṣatva (109 無求)　〃，欲望のないこと，āmiṣa は貨，肉，財など譯さる，從つて欲望
anāmukha (50 不現前)　現前でないもの
anāmoda (74 不喜)　〃
anārabdhvā (42 rabh)　企てずして，始めずして
anālambanībhāva (169 非所緣)　所緣たらざること
anāvaraṇika (14 無障)　無障のもの
anāvṛta (50 vṛ 無覆)　無障な，覆はれざる
anāvṛtajñāna (3 智無礙)　無覆の智
anāścarya (160 非希有)　〃
anāsakti＝asakti (164 不著)　不執著
anāsrave dhātau (37)　無漏界に於て
anāsvāda (160 不味)　味はないこと，味著しないこと
anikṣipta (115 kṣip 不捨)　捨てざる
anikṣiptadhura (115 不捨佛道)　重擔を捨てない
anigūḍhavaira (172 忘怨)　怨を隱さないもの
anityanityaviparyāsa (154 無常常倒)　無常を常となす顚倒
anityādike viparyāse susthitā aparihānitaḥ (82)　無常等の顚倒に於て，捨てないから，善住したる
anityārtho yāvac chāntārthaḥ (145 是無常義，乃至，是寂靜義)　〃
anindita (80 不毀訾)　無譏毀，譏謗の無い，譏謗せられなかつた
animittapada (95 無相)　無相處 (pada＝ālambana)
animittavihāra (141 住寂)　無相住
animittasthityāśrayaparivṛtti (57 無相心住轉依)　無相住の轉依
animittāya (140 入無相)　無相の爲に

animittaikāntika (177)　一向的の無相
aniyata (11 yam 不定)　不決定な，不定な
aniyatagotra (95 不定衆生)　不定種性のもの
aniyatabheda (83 不定)　不定の差別，種々なる不定性のもの
aniyataśrāvakagotra (68 不定三乘性人？)　不定の聲聞種性；gotraniyata (śrāvaka) (68)　決定種性 (聲聞) と對する
anirvartitā (181)　不退轉
aniṣṭa (16 iṣ 違逆)　非可愛，願はしくない
aniṣpanna (89 未成)　未だ完成しない
aniṣpannaś ca niṣpannaḥ suniṣpannaś ca bhūmiṣu (131 未成，成，極成，差別諸地顯)　そして諸地に於て未成就と，已成就と，極成就とである
aniḥśritā lābhasatkāraśloke (79 不依名利說)　利養恭敬賞讃に依らないこと
anītatva (81 不開義)　未了義，了義でないこと
anītārthatva (81 不開義)　不了義たること
anukampakatva (184)　憐愍者たること
anukampana (118)　悲愍，慈愍
anukampanā (27 悲，憐愍)　哀愍，悲愍，慈愍
anukūla (62 隨順)　〃
anukūlatvāt (79 隨順故)　隨順するから
anukrama (71 次第)　次第，次第に隨つて
anukrośa (184 悲)　〃
anuga (67 遍)　隨順する
anugacchati (40 gam)　及ぶ，達する，隨ふ
anugata (35 gam 隨)　隨逐したる
anugatatva (22 隨向)　隨順したこと
anugantavya (17 gam)　理解すべき，隨ふべき
anugama (6 無譬？)　隨行，從ふこと，近寄ること，模倣すること
anugṛhyamāṇa (102)　攝受せられつつある
anugraha (31 隨攝)　攝受，隨攝
anugrahakara (116 隨攝)　〃
anugrahātmaka (142 隨攝)　〃より成るもの
anugrahārthaṁ satvānāṁ (64 爲攝利衆生)　諸の衆生を攝受する爲に
anugrahecchā (172 隨攝)　攝受の願ふもの
anugrāhaka (116 隨攝)　〃
anucara (41 隨順)　隨行する，隨ふ，伴ふ
anucaracitta (91 隨行心)　〃
anucita (157 uc 不習)　不相當，不適當な，知られない，普通でない (ucita 相當，Edgerton は ucita は merit と譯し，durita を sin と譯して，此の如き用法はどこにも見出せないといふも，Monier-Williams の辭典に durita に sin の譯語あり，anucita に improper, wrong の譯語がある)
anucchavika (79)　適切な (これパーリ語，skt. は ānucchavika，相合，淸亮)
anujñā (53 聽)　許すこと
anujñāna (55 開許)　〃，許 (開は開除，許す，廢すなどで，遮の反對)
anuttara (4)　無上の
anuttaraṁ padaṁ (20)　無上の句，無上のもの，無上處
anuttrāsa (82 不怖)　怖無き，怖なから

adhimātro vīryārambhaḥ (28 上大精進) 過分の精進の企て，過分の精進の發勤
adhimātratva (29) 過分なこと
adhimukti (3 大信) 信解，勝解，信
adhimukticaryābhūmi (14 信行地) 信解行地
adhimukticaryābhūmau (75) 信解行地に於てある
adhimuktiniveśin (56 信安) 信解に住するもの
adhimuktiparipanthatā (51) 信解の妨げ
adhimuktibalādhānatā (72 起深心力，持) 信解の力を持すること
adhimukter bahulatā dharmaparyeṣṭideśane | pratipattis tathā samyagavavādānuśāsanaṁ || (97) 信解の多いことと，法を求めると教示するとに於ける｜實行と，又正しい教授と教誡とがある｜｜（此は菩薩地種性品鬱柁南の引用，ここには適切ではない）
adhimuktyāptav akhede dvayasaṁgrahe (175) 信解に達することに於て，不疲倦に於て，二の攝に於て
adhimucyana (116 令信) 信解せられること
adhimucyanā (71 信解) 〃
adhimucye (71 muc 正信) 私は信解する
adhimokṣa (4 信行) 信解のもの
adhivāsana (167 耐) 耐へること，忍ぶこと
adhivāsanā (29 受，耐) 忍ぶこと，忍耐，受，忍受
adhivāsanāpravṛtti (134 不行) 忍不行，耐へ又行ぜず
adhivāsayet (54 vas 耐) 忍ぶ，忍受する，耐へる，承認する
adhiśīlaṁ (100) 增上戒，戒に關して
adhiśīlādhicittasaṁpādanatā (54 成戒學心學) 增上戒と增上心との完成
adhiśīle 'nuśikṣaṇā (178) 增上戒に於ての隨學
adhiṣṭhāna (17～18 依) 依止，及ぶこと，達すること
adhīna (17) 依止する
adhīnatva, *or* ādhīnatva (67 屬) 依ること
adhunā (117) 今
adhyapavāda (76 增減) 增益と損減
adhyabhedatā (28) 分裂しないこと，分破しないこと
adhyavihiṁsaka (3) 增上不殺生のもの
adhyātma (172) 內心的のもの
adhyātmaṁ cetaḥśamathena (119 由內攝故) 內的に心の止によりてである，內的に心を止となすによりてである
adhyātmavidyā (70 內明) 〃 (adhyātma は字義としては最高我を指し，同時に，自己の，自己に屬するなどの意味，一般的には最高我の學であるが，自己の，自己に屬するといふ意味が佛教の方でいふから佛教自らの學卽ち內明となる)
adhyātmasaṁstha (172 內住) 內心に住するもの
adhyātmasthiti (67 安心住於內) 內心に住すること
adhyāśaya (75 上意) 增上意樂
adhyeṣaṇa (162 勸請) 〃，教を請ふこと
adhyeṣaṇā (147 請) 勸請
adhvani (3) 三世に關して，三時について，三世に於て

anatikramaṇīyatva (80 無敢違) 違越すべからざること，避けられないこと，超えられないこと
anadhika (65 不增) 〃，過ぎざる，多からず，優れざる，增上でない，優る所が無い，加へる所が無い
anadhikatva (44) 不增上
anadhimuktitas (7 以不信) 不信解から
anadhivāsanāmanaskāra (74 不隨作意) 〃，不同意作意
anadhiṣṭhitatva (86 不得住) 住しないこと
ananugamana (78) 隨はないこと，隨ひ起らないこと
anantapāra (23 無邊際) 無邊涯
anantabodhisatvasamādhisaṁgrhītaṁ (109) 無邊の菩薩三昧が攝せられて居る，無邊の菩薩三昧を攝して居る
anantasvasaṁketādilakṣaṇabhedabhinnaṁ yaj jñeyaṁ (109) 凡て所知である無邊なる自の表示等の特質（相）の種々なる差別である
anantā hi buddhagotraḥ (48 由無邊諸佛性別故) 何となれば佛種性の衆生は無邊であるから
anapekṣin (163 不求) 〃，期待しない
anabhinandana (94 不求) 希求しないこと，願はないこと
anabhilāpyatva (138) 言說されないもの
anabhilāpyam (58 無說) 無言說である
anabhisaṁskāra (92 無作) 〃，作爲の無い，無爲
anabhisaṁskāra (66 無功用) 無行，無造作
anabhisaṁskāranirvikalpatvāt (66 由無功用無分別故) 無行無分別の故に
anabhisaṁskāreṇa (43 自然) 無造作によつて，無作にて，自然に
anabhisaṁskṛtatvād dharmadhātor (22 無爲故) 法界の無爲たることの故である，法界が無爲であるからである
anarthabodhāt (174 無境) 無境の覺の故に，無義の覺の故に
anarthamayātmadṛṣṭi (95 無義自我) 無義所成の我見
anarthamayyātmadṛṣṭir mahārthā (95) 無義所成の我見は大義である
anarha (162) 價しないもの，價値なきもの，敎ふるに價しないもの
anarhadeśanā (162 深？) 價しない者への敎示，價しない者から敎示
anarhebhyo gambhīradharmadeśanāvinigūhanāt (163) 價しない者から甚深なる法の敎示を隱すが故に
anavadya (53 無過) 〃，罪なき
anavadyakarmatvād (78 不依名利故？) 非難なき業であるから
anavadyaparibhogānujñāta ātmaklamathānuyogāntasya (53 爲離苦行邊聽無過受用) 自身を苦しめる行に耽著する一邊に對して罪なき受用を許すから
anavadyotkṛṣṭākṣayasukhākaratva (49) 無過失で殊勝な無盡の安樂の藏であること
anavanata (80) 不下，自卑でない
anavabodha (81 不解) 〃，不覺
anavamṛdya (114 mṛd 不能礙) 打摧かれざる
anavasaṁbodha (81 不解義) 〃，不覺
anavasthāna (152 不住) 住しないこと
avavādamāhātmya (96) 敎授の偉大性
anadhimukti (3) 信解せられないこと，不信解
anantaduṣkṛta (17 無邊惡) 無邊の惡行，

ataḥ paraṁ (2)　更に，此後
ataḥ pareṇa (94)　それより後は
atikrama (181 出)　超出
atikrānta (127 Kram 過)　超越せる，超過せる
atigahana (6 甚深)　甚隱密
atinirdaya (20)　極無慈悲な
atibaddha (19 bandh)　深く縛せられたる，强く縛せられたる
atibhīru (110 懼)　極恐怖
atimātrāṁ (27)　非常に
atimātrām ādeyavākyo bhavati prajānām (27 發語無不信)　諸の衆生に非常に言の信用せられるものとなる，諸の衆生に非常に信用せられる言のものとなる
atimāndyād (150 至極少位)　極少から
atilajjanā (18 深慙羞)　甚大な羞恥
atilaukikī (163)　超世間的の
ativartase (187 vṛt 不過時)　汝は過ごす
atītapuṣṭi (15)　過去のものの增長
atīva (132 極)　强く，烈しく，過度に，非常に
atuṣṭa (114 tuṣ 無厭)　不知足
atuṣṭim api samāśāstiṁ (109 并求合三喜)　不知足，願ふこと
atuṣṭiś cādarśanād aparipūraṇāc ca (109 由不見不遂時不生喜故)　然るに見ないから，また滿たないから，不知足がある
atṛpta (44 無有厭足，不滿足)　飽足せざること
atṛptāśayena (102 無厭心)　無厭足意樂によつて，無滿足意樂によりて
atṛptavipulamuditopakaranirlepakalyāṇāśayaiś ca (119 四，無厭心，五，廣大心，六，勝喜心，七，勝利心，八，無染心，九，善淨心)　又，不滿足，廣大，歡喜，饒益，無染，善淨の意樂によりて
atṛpti (136)　不知足
atṛptidāna (31 無厭施)　〃，知足しない施
ato yāval laukikḥ samudāgamāḥ (93 於此時中，於世間法皆得具足)　これから，乃至，世間的の證得がある
atyanta (12 畢竟無涅槃法)　畢竟的のもの
atyantam (58 畢竟)　〃して
atyartham (19 極)　過剩に，過度に，非常に
atyutsadatā (39 多)　過多
atyudārataḥ (96)　遙かから，高くから
atrāsakāraṇa (6 不應怖畏因)　不怖畏の因
atrāsapadasthānatva (7)　怖畏の依處でないこと
atvaramāṇavihitatva (80 不疾疾說)　疾がずに說くこと，急がずに爲すから
atha (3)　若し…ならば，そこで，又，今，更に，然し
athāpi syāt pratikṣaṇam apūrvotpattau tad evedam iti pratyabhijñānaṁ na syād iti (150)　又，若し恐らく，剎那毎に，前に生じなかつたのに對して，此が卽ちそれであるであらうといふ再認識は無いであらう，……此がそれに外ならないといふ再認識はないであらうといふならば
atho (36)　また，今，偖，同じく
adarṣana (29)　見へないこと
adīna (78 dī 不細，不怖)　弱くなく，怯でなく，貧弱でなく
adīnatva (180 無怯)　〃，憐れでないこと

adīnava (6 過失)　過患
aduṣkara (111 不難)　不難行の，難行でなく
adṛḍha (14 不堅)　不堅固の
adṛḍhodaya (15 不堅發)　不堅固の發起
adṛṣṭasatyāśraya (5)　眞理を體驗したことに依るのでない，未見諦に依るもの
adeya (31)　與へられない，施與せられない
adehatvāt (38 非身…故)　無身なるが故に，非身なるが故に
adoṣa (8)　無過惡
adbhuta (33)　未曾有の，希有の
adbhutavatīṁ mahābodhiṁ (42)　未曾有を有する大菩提を
advayārthavibhāvaka (90)　不二の義を明かにする
advayārtho hi paramārthaḥ (22 無二義是第一義)　第一義は實に無二を義とする，第一義は無二の義のものである
adhana (113 無財)　財無き
adharāraṇi (88)　低い方の鑽木(二の木片を鑽木として摩して火を出す，其下方の木片)
adhi (19)　よりも，越えて，一層 (abl.)
adhi (76 增)　增益 (adhyāropa を綴字の制限の關係で adhi とのみなしたのであらう)
adhika (15)　夥多の，上，上品の
adhikatara (111)　一層過ぎたる
adhikaraṇa (54)　論諍
adhikāṁ saṁpattiṁ (83 最勝成就)　增上の成就を(佛土とある土は衍字)
adhikāra (13 作品)　主とすること，主題，關係，關說，章，品，節，奉納，勤めること，奉仕，助け，處理
adhikārāt (53)　盡すから，主とするから
adhikāreṇa karmaṇā (136 知法業)　知自利利他，以此爲業(かくシナ譯は二字をつづけて譯す，梵文は別として釋する)
adhikṛta (105 kṛ. 說)　關說したる，主題となしたる(adhikṛtya がよく用ひられる，關して，について，に參照して)
adhikṛtya (2, kṛ)　關して，ついて，主題となして，主となして
adhigamajñāna (138 證智)　證得の智
adhigama (2 證得，得果)　〃，得ること，完成すること，近づくこと
adhigamaṁ praty āśrayayogyatā (29)　證得に對して所依の適して居ること，證得に對して所依の適合性
adhigamayogya (50～51 由能得大菩提)　證得に適して居る
adhigamaśīla (31 自樂尸羅)　證得の持戒
adhigamāyāvavādāt (163)　證得の爲に敎授するから
adhicitta (85)　增上心，增上定
adhipatipratyaya (131 增上緣)　〃
adhipatiphala (123 增上果)　〃
adhipateya (72)　增上的，增上する(ādhipateya が普通)
adhipācana (30 得成熟)　〃
adhiprajñāsaṁpādanābhidharmeṇāvipariītārthapravicayāt (54 立阿毗曇者爲成慧學，不顚倒義此能擇故)　論によつて增上慧の完成がある，無顚倒の義を簡擇するからである
adhiprāyena (69)　意趣によつて
adhimātra (50 上品)　上品，過度の，尺度を超へたる
adhimātradīrghakālākhede (32)　過度の長時間の無疲倦に於ての